2005年12月1日発行 偶数月1回1日発行 第14巻第6号
平成12年9月12日／第3種郵便物認可

戦略・戦術・戦史Magazine

Rekishi Gunzou

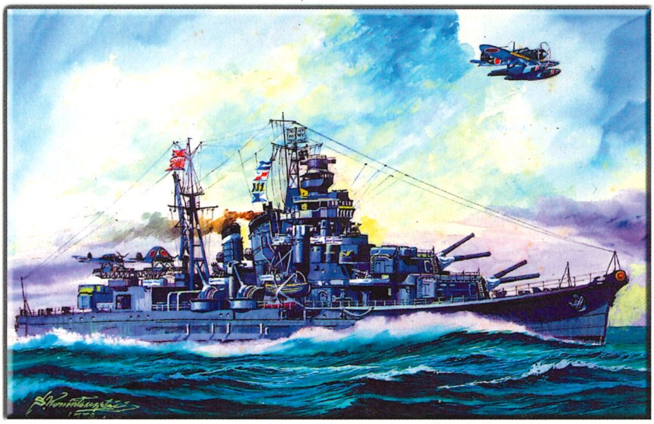
歴史群像

戦史分析

第1次ソロモン海戦

精鋭日本巡洋艦部隊の栄光と限界

THE FATE OF JAPANESE CRUISER



Illustrated by SHIGERU KOMATSUZAKI

戦史検証 上

瀬戸内に君臨した海の戦国大名

村上水軍興亡史

ティーガー vs. 米英戦車部隊

鋼鉄の虎を狩れ!

実物大 1/1 SCALE BATTLESHIP YAMATO

戦艦大和を体感せよ

●'天才'を凌駕したプロイセンの戦争システム
ナポレオン帝国の崩壊

●スターリンの強圧をはねつけた小国の矜持
ソフィン戦争

●空前の大型艦建造に挑んだ明治日本
装甲巡洋艦『筑波』への道

Motofumi Kobayashi presents
小林源文 アフリカ軍団 Act.4

DEC.2005
No.74
12
定価 930円(税込)

2005年12月1日発行 偶数月1回1日発行 第14巻第6号
平成12年9月12日／第3種郵便物認可

戦略・戦術・戦史 Magazine

Rekishi Gunzou

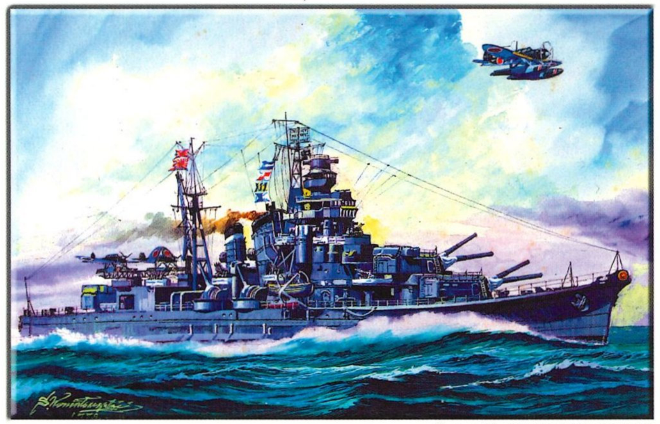
歴史群像

戦史分析

第1次ソロモン海戦

精鋭日本巡洋艦部隊の栄光と限界

THE FATE OF JAPANESE CRUISER



Illustrated by SHIGERU KOMATSUZAKI

戦史検証

瀬戸内に君臨した海の戦国大名

村上水軍興亡史

ティーガー vs. 米英戦車部隊

鋼鉄の虎を狩れ！

実物大 1/1 SCALE BATTLESHIP YAMATO

戦艦大和を体感せよ

●「天才」を凌駕したプロイセンの戦争システム

ナポレオン帝国の崩壊

●スターリンの強圧をはねつけた小国の矜持

ソフィン戦争

●空前の大型艦建造に挑んだ明治日本

装甲巡洋艦『筑波』への道

Motofumi Kobayashi presents

小林源文 アフリカ軍団 Act.4

DEC.2005 No.74 12

定価 930円（税込）

歴史群像 2005 DEC. 12 No.74

第1次ソロモン海戦 ●実物大 戦艦大和を体感せよ

Gakken

歴史群像 2005 DEC. 12 No.74

2005年12月1日発行 平成12年9月12日／第3種郵便物認可

発行／株式会社 学習研究社

定価930円 本体886円

雑誌 09677-12
512-17170
4910096771257
00886

戦略・戦術・戦史Magazine Rekishi Gunzou

歴史群像

DEC.2005 No.74 12

Cover Illustration
by SHIGERU KOMATSUZAKI
Cover Design
by SHOZO TSUCHIDA
[Little Elephant Co.]

C O N T E N T S







INFORMATION

WW SELECTION WWセレクション最新刊

U-BOAT ACE
The Story of Wolfgang Lüth



Uボートエース

異色の撃沈王 その生涯と死闘の記録

ヴォルフガング・リュート伝

ジョーダン・ヴォース［著］
秋山信雄［訳］

第二次大戦で連合軍船舶23万トンを撃沈して第2位のエースとなり、若干30歳で海軍兵学校校長に就任した伝説のUボート艦長ヴォルフガング・リュート。独特の乗員統率法で傑出した戦果を挙げるも、悲劇的な最期を遂げたこの異色の撃沈王の死闘の軌跡を描く。

絶賛発売中!!

四六判／384頁／定価:2940円（5%税込）

［歴史群像］太平洋戦史シリーズ 《最新刊!!》

一式戦闘機「隼」

［歴史群像］太平洋戦史シリーズ Vol. 52



航続力と格闘戦性能に秀でた対戦闘機戦のスペシャリスト

●COLOR SPECIAL 「隼」一型・二型・三型の細部
●PHOTO DOCUMENT 残存写真で読み解く「隼」各型の特徴
●COLOR REPORT 「隼」に見る陸軍機の塗装の変遷
●総力特集 全４章「隼」開発ドキュメント
●ワイド折込み 「隼」一型・二型精密図面 ●検証 ①マスメディアに見る戦中・戦後の「隼」像／②連合軍側から見た「隼」の実力 ●図解 ①「一式戦闘機説明書」付図抜粋／②統一型落下タンク各型の諸元と構造

●B5判／190頁／定価:2100円（5%税込）

学研［歴史群像］シリーズ ―大好評!!『［図説］世界の銃パーフェクトバイブル』の第2弾!!―

Modern Warfare MW

［図説］世界の銃 パーフェクトバイブル2 中級編



●徹底図説 知っているようで知らなかった 銃と弾薬のQ＆A
●カラー現地徹底取材 スイス・アームズ社のアサルト・ライフル製造現場とブルッガー＆トーメ社のサイレンサー製造現場を徹底取材!!
●特大付録 一目でわかる［主要８か国の軍隊］制式拳銃・ライフル変遷チャート
●カラー特別企画 M16ライフルの光と影／世界の名銃アクセサリー・カタログ／知られざる警察の「銃」事情 ●検証 GUNとアメリカ社会～「銃社会アメリカ」その軌跡と素顔／銃器の天才発明家ブローニングの生涯／H&K社はいかにしてトップメーカーになったか ほか企画満載!!

●B5判／190頁／定価:2100円（5%税込） **絶賛発売中!!**



好評発売中

［図説］世界の銃 パーフェクトバイブル

銃の歴史・分類・メカニズムを徹底詳解!! ●B5判／182頁／定価:2100円（5%税込）

戦国の城　前方後円墳を利用した臨時築城

河内 岡ミサンザイ古墳城郭

KAWACHI OKA MISANZAI KOFUN JYOKAKU

織田信長の来寇に備えるため
三好氏が河内平野に築いた名も無き城
しかしそれは、古墳を利用した城郭であった
なぜ古墳に城を築いたのか、その技術的合理性と
戦国の人々のメンタリティーを探る

文＝遠藤啓輔
イラストレーション＝香川元太郎



◆岡ミサンザイ古墳城郭鳥瞰図（推定復元）

イラストは東側から見た岡ミサンザイ古墳城郭（宮内庁指定陵墓：伝仲哀天皇陵）である。この城は新堀城と三好党の拠点である高屋城の繋ぎの城として築かれたが、当時の記録に残らず、普請を終了した段階で放棄された可能性が高い。イラストも、それを再現するために建物は描かず、慌ただしく撤退する三好勢を描いた。①主郭 ②副郭 ③段築を利用した横堀と土塁 ④通路となる竪堀 ⑤前方部のコーナーを利用した櫓台 ⑥畝状竪堀群 ⑦周濠、当時は空堀だった ⑧江戸時代に「新シ池」という農業用水池となった馬出状の郭を形成する堀。

※復元案は編集部による。

河内 岡ミサンザイ古墳城郭



⬆上空から見た古市古墳群。手前の巨大な古墳が誉田山古墳（伝応神天皇陵）。矢印が岡ミサンザイ古墳である。

古墳と城郭

古墳、とりわけ前方後円墳の形は城郭に似ている。古墳には段築があることが多く、その姿は主郭の周囲に帯曲輪を配しているかのように見える。また、墳丘を二つ結合した前方後円墳の形態は、主郭と副郭からなる大規模な城郭を髣髴とさせる。実は、古墳と城郭の共通点は形態だけではない。

まず、その立地に共通点がある。城郭は戦略・戦術的に優位に立つために高所に築かれる。古墳も同様に高所に築かれることが多い。古墳が築かれる場所は、平野を見下ろす山麓や台地などの高台である。例えば、巨大古墳が集中する河内平野の古市古墳群（大阪府羽曳野市・藤井寺市）は、宅地開発が進んだ現在においてさえ、現地を歩いてみると古墳が立地する場所が高台であることを実感できる。

つぎに、城郭は交通を押さえるために主要街道の近傍に築かれることが多いが、古墳も同様のパターンが多い。古市古墳群の南北には、河内平野を東西に貫く古代の幹線道路、丹比道（後の竹内街道）と大津道（後の長尾街道）が走っている。

このように古墳の立地が城郭と同様の指向を示す理由は、古墳が単に墓であるだけでなく、城郭と同様に権力者の政治的意図に基づいて築かれた構築物だからである。古墳は被葬者の権勢を示すために高台から平野を見下ろし、往来する人々にも被葬者の威光を示すように交通路からの眺望を意識して立地する。政略（古墳）と戦略・戦術という違いはあるが、古墳も城郭も、その立地条件は共通することが多いのである。

以上のように、築城するのに絶好の地に、城郭に似た段状の構築物があるのだから、城郭を築く際、古墳を利用することは極めて合理的だと思われる。そして、実際に古墳を利用した城郭は存在するのである。

例えば河内の守護所・高屋城（大阪府羽曳野市）は高屋築山古墳（宮内庁指定、伝安閑天皇陵）を城郭の一部に取り込んでいる。河内平野を南北に貫通する東高野街道を見下ろす台地上に立地し、この台地全体を土塁で囲った巨大な城郭である。また、長尾街道に近い津堂城山古墳（大阪府藤井寺市）は、三好氏によって小山城が築かれたとされている。

このように、河内平野には前方後円墳を利用して築かれた城郭が残っている。しかし、これらはいずれも後世の開発のため、実態がわかりにくくなっている。そうしたなか、前方後円墳を城郭利用した実態を今に残す可能性があるのが岡ミサンザイ古墳（大阪府藤井寺市）である。

岡ミサンザイ古墳に築かれた城郭

岡ミサンザイ古墳は、前方部を南に向ける全長約二四〇メートルの前方後円墳である。現在、仲哀天皇陵に比定され、立ち入りができないが、測量図を使ってこの城郭を復元することは可能である。



⬆南西側から見た岡ミサンザイ古墳。城郭ファンから見れば、まず、中世城郭の址と判断するような景観だ。手前の突角は前方部のコーナーで、ここに櫓台状の遺構が存在すると思われる。



➡岡ミサンザイ古墳は、古墳の密集地である古市古墳群の西に築かれていた。各古墳が道路近傍に存在することに注意。岡ミサンザイ古墳は海岸に向かう平行した道路を管制できる位置にあることがわかる。

当古墳は南から延びる羽曳野丘陵の北端の中位段丘上に立地し、約一〇〇メートル東方には、低位段丘との境界線が南北に通り、比高差三メートル前後の崖となっている。また、当古墳の約二五〇メートル南方には、段丘を東西に横切る古代の運河・古市大溝が近代まで残っていた。これらを東と南の防御ラインに見立てたと思われる。

墳丘は前方部・後円部ともに四段築成であったと思われ、段築を活用して曲輪や横堀・土塁が築かれている。段築のテラス面に横堀を掘り、その掘削土を横堀の外側に積んで土塁とすれば、最小限の土木事業によって深い横堀と土塁を造成できる。一見すると巨大に見えるこの城郭は、意外と少ない労力で築かれたと考えられる。

墳丘斜面は切岸と畝状空堀群で防御され、城内への侵入は西側に四本、東側に一本ある竪堀に限定される。西側の竪堀には、いずれも櫓台状の小曲輪から横矢を掛けられる。前方部と後円部の連結部分は、細い土橋状に加工され、防御効果をさらに高めている。

一方、築城当時の古墳の周濠は、同じ藤井寺市内の仲津山古墳等と同様に空堀であったと思われる。現在の姿は、近世以降に農業用の溜池として水濠に改変された以後のものであろう。

また、古墳の堀の西側には「新シ池」と呼ばれる池があり（宅地開発で消滅）、築城に際して掘削された堀の可能性がある。この「新シ池」によって馬出状の曲輪が形成され、長尾街道と竹内街道とを繋ぐ道を城内に取り込んでいる。さらに、古墳東側の段差に沿って長尾街道と竹内街道とを繋ぐ南北道が通る。これらのことから、長尾街道と竹内街道を意識した城郭といえる。

この二つの街道は、竹内街道を東に進むと高屋城に、長尾街道を西に進むと堺に出る。この地理的条件から、この城郭を、織田信長が高屋城の三好康長（笑岩）と堺の新堀城とを攻撃した、天正三年（一五七五）四月の第三次石山戦争に際して築かれた城と想定できる。

『信長公記』によれば、信長は四月八日、高屋城の南東にある駒ヶ谷山に陣を敷き、大坂本願寺に与する高屋城の三好康長と交戦する。織田勢は、誉田八幡宮・道明寺河原に段々に陣取り、放火や農作物の薙ぎ捨てを行いながら進軍し、十七日に堺の新堀城を攻撃。十九日夜には新堀城を火矢や埋草で攻撃し、香西越後、十河因幡守はじめ一七〇人余りを討ち取り、三好勢を降伏させている。

このように高屋城と堺の新堀城は連動しており、その間を繋ぐ三好勢の繋ぎの城として、岡ミサンザイ古墳や津堂城山古墳に築城されたことが想定される。ただし、『信長公記』には岡ミサンザイ古墳近辺の地名は登場しない。信長襲来に備えて岡ミサンザイ古墳に城郭を築いたものの、結局利用せずに終わったのかもしれない。

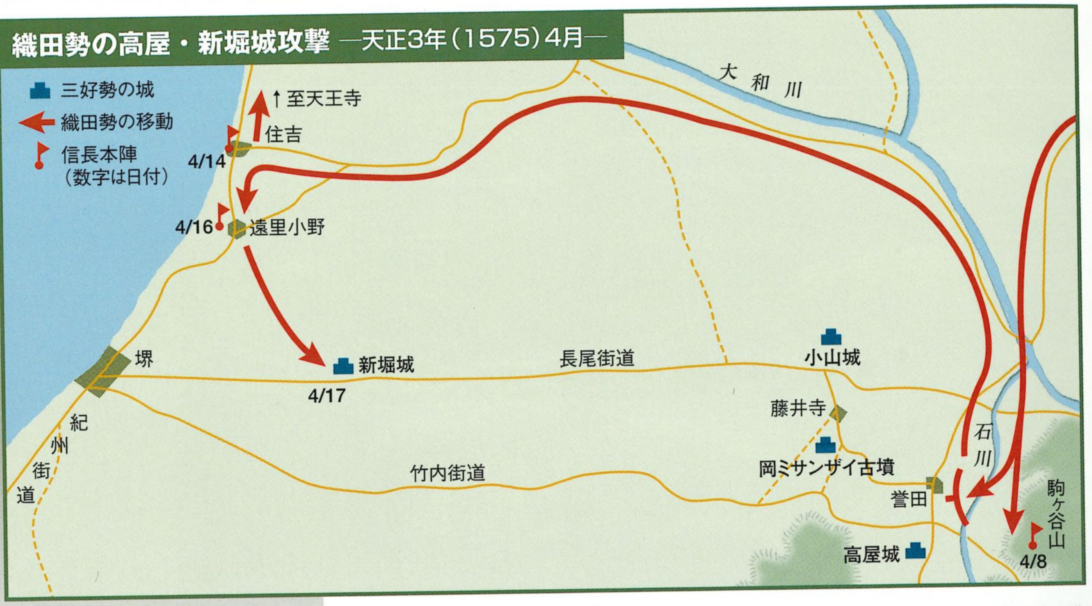
この岡ミサンザイ古墳に築かれた城郭は、古墳を利用した城郭の理想形というべき特

河内 岡ミサンザイ古墳城郭

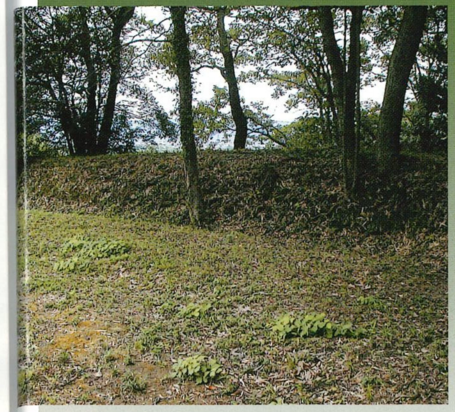
古墳を利用した主要な城郭

遠藤啓輔作成

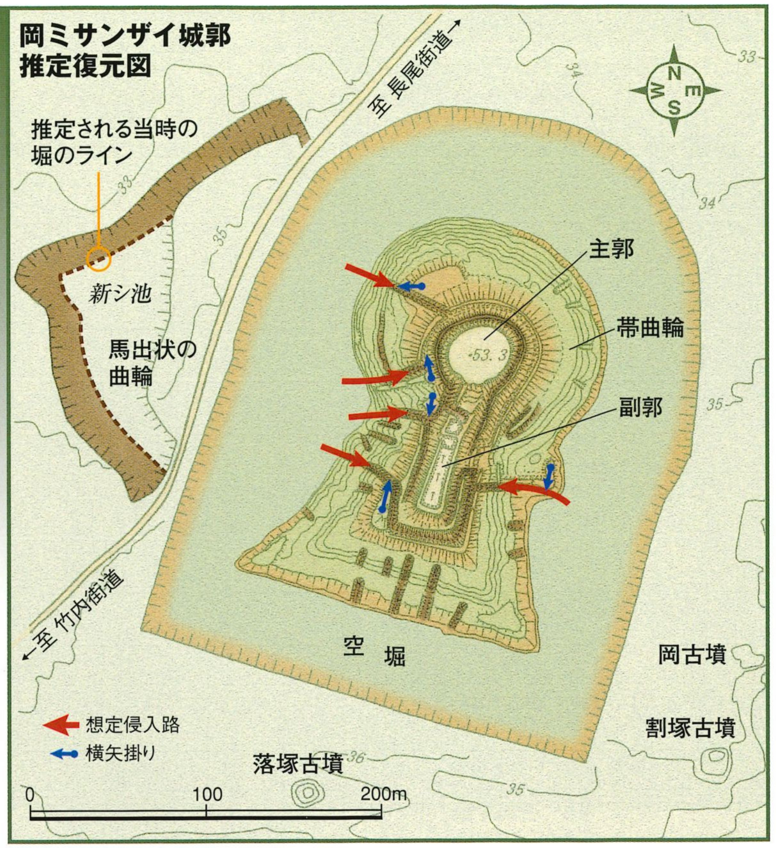
古墳名	城郭名	所在地	墳形	立地の特徴	城郭利用の概要	備考
高屋築山古墳	高屋城	大阪府羽曳野市	前方後円墳	台地上・街道を取り込む	古墳の立地する台地を土塁で囲む	古墳は陵墓指定のため立ち入り禁止、土塁は都市開発で消滅
津堂城山古墳	小山城	大阪府藤井寺市	前方後円墳	街道に近い	不明	土取りにより改変、三好氏の城の伝承
河内大塚古墳	丹下城	大阪府松原市	前方後円墳	街道に近い	不明	陵墓指定のため立ち入り禁止、前方部は近世に集落として利用
今城塚古墳	—	大阪府高槻市	前方後円墳	街道に近い	不明	地震により崩壊
久米田貝吹山古墳	—	大阪府岸和田市	前方後円墳	台地端・街道に近い	複郭構造、堀切、横堀、土塁	発掘調査による確認、三好実休の陣城
屋敷山古墳	布施氏の「里の館」	奈良県葛城市	前方後円墳	丘陵端	不明	近世に桑山氏の新庄陣屋に利用
伝聖武天皇陵	多聞城	奈良県奈良市	方墳	台地上	城郭の一部に取り込む	陵墓指定のため立ち入り禁止、学校建設により改変
中山大塚古墳	—	奈良県天理市	前方後円墳	丘陵端・街道に近い	後円部に横堀、くびれ部に堀切	発掘調査による確認
黒塚古墳	—	奈良県天理市	前方後円墳	街道に面する	くびれ部に堀切	発掘調査による確認
箸墓古墳	—	奈良県桜井市	前方後円墳	街道に面する	なし	壬申の乱「箸陵の戦」での大海人軍の陣所か?
雪野山古墳	—	滋賀県東近江市	前方後円墳	丘陵頂部	複郭構造、竪堀、土塁	発掘調査による確認
横山古墳群	龍ヶ鼻陣所	滋賀県長浜市	前方後円墳など	丘陵上	曲輪、堀切	姉川合戦の際の織田軍陣所
造山古墳	—	岡山県岡山市	前方後円墳	街道に近い	後円部頂に土塁	
丸墓山古墳	—	埼玉県行田市	円墳	自然堤防上	周辺に水攻めのための堤を建設	忍城水攻めの際の石田三成陣所



↑信長は、大坂の本願寺を攻撃するにあたり、その後背地である河内北部の三好勢を攻撃した。織田勢は三好党の根拠地高屋城を直接攻撃、ついで新堀城を攻め落とした。このため繋ぎの城である岡ミサンザイ城郭はなんら戦局に寄与することはなかった。おそらくその守備兵は、織田勢が直接高屋城を衝く態勢を見せた段階で高屋城に撤退したと思われる。



↑岡ミサンザイ古墳は立ち入り禁止なので、ここでは造山古墳後円部の頂きにある土塁を掲載した。城郭であることがわかるパーツだ。



↑岡ミサンザイ城郭は、横堀を巡らし、斜面での攻城兵の展開を妨げる竪堀を要所に設け、かつ侵入路になり易い竪堀の上部に横矢を掛けられるようになっている。高度なテクニックを用いた城だといえよう。
測量図をもとに遠藤啓輔作図(新シ池の推定堀ラインは編集部による)。

徴を備えている。整理すると、

①前方後円墳の形態を生かした複郭構造

②段築のテラス面を帯曲輪とし、最小限の土木事業で横堀と土塁を形成する合理的な造成

③主要交通路を見下ろす高台に立地するという古墳の特徴を生かした、交通路を押さえる戦略的価値

と、評価することができる。

古墳に築城する意味

では、「墓」である古墳に築城することに対し、当時の人々はどのような心理を持っていたのだろうか。築城は古墳の破壊であるから、単純に考えれば被葬者に対する冒瀆のように思われる。そのため、古墳への築城の背景には伝統的権威を否定する下克上の発想があったと思われがちである。

しかし、古墳の破壊や再利用の歴史を見ていくと、古墳の城郭化を、下克上の発想を背景にした古墳の破壊、と単純に考えることはできない。

古墳の破壊の歴史は、実に古墳時代から始まる。例えば石舞台古墳の築造の際に、先に築かれていた群集墳が削平された。さらに平城京の建設に際しても、複数の前方後円墳が削平・改変されている。

ただし、右記の事例は開発に伴うやむを得ぬ古墳の破壊・改変であり、いずれも改葬し霊魂を鎮める祭祀がなされたと考えられる。だが、次に挙げるのは積極的に古墳を活用しようとして改変した事例である。

奈良県桜井市のホケノ山古墳の墳丘には、築造時(三世紀中葉)の主体部である石囲い木槨と主軸を揃えて六世紀末の横穴式石室が構築されている。これは、横穴式石室の被葬者が当古墳の被葬者を始祖と仰ぎ、自らの墓をそこに築いた可能性も考えられる。また中世においては、横穴式石室は仏教施設として再利用された事例が数多く見られ、現在もなお仏殿や信仰対象として機能し続けている石室も多い。古墳が聖域と見なされていたのであろう。

これらはいずれも、古墳被葬者に対する尊崇の念や、古墳に対する神聖視が古墳再利用の動機になっている。このように、古墳と認識していることが逆に古墳再利用の動機となっている事例が、古墳時代から中世まで見られることから、古墳の城郭利用にも、古墳であることが逆に築城の動機となった可能性を認めてもよいだろう。

ここで、古墳に限定せずに墓と城との関わりという点に着目してみよう。

例えば、墓石や葬式に使われた物を吉祥を呼ぶものとして尊ぶ「けがれの逆転現象」とされる民俗事例と関連付けて、墓石等の石塔類の城石垣への転用が、まじない的な要素のある積極的な意味合いを持った行為であるとする説[*1]があり注目される。

また、中世では、先祖の墓が鳴動して子孫に危機を知らせたとする話[*2]がある。十五~十六世紀の城郭で、城内や城の隣接地に城主一族のものとみられる墓所が形成された事例[*3]があるが、これは、被葬者による加護を期待して先祖の墓を城内で維持していたとも取れる。

これらのことを踏まえてもう一度古墳の城郭利用を考えてみたい。

中世人にとって、貴人の墓である古墳は、死地にふさわしい聖地であり、「けがれの逆転」によって吉祥を呼ぶものであった可能性がある。さらに大胆な発想をすれば、城内に取り込んだ古墳の被葬者を擬制的に城主一族の祖先と見なしたことも想像できる。巨大古墳の被葬者を祖先に戴くのだから一族の士気は高まったであろう。

墓である古墳からの加護への期待もあったと考えられる。この点に関連して注目される記録に、高屋城について記した『足利季世記』巻三・高国記の記述が挙げられる。ここには「此城ニ一ノ不思議アリ安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用ラレシ故ニヤ大和路ノ水越ト云道ヨリ城エ入ル者生テ皈ル事ナシ」と、天皇陵を城郭化しているがために水越道から攻撃してきた者は生きて帰ることはない、と思われていたことが記されている。

そこには、古墳の城郭利用が、祟りではなく武運を呼びこむとする発想があったと思われる。『足利季世記』の史料的信憑性には問題があろうが、古墳からの加護という発想が人々に共有されていたということはできる。

古墳への築城は、前述した形態や立地の特徴を生かしている合理性とともに、思想や信仰の面からも特別な意味があったことが考えられる。これに関連して、古墳に築かれた城郭の近傍に重要な宗教施設が存在することも注目される。岡ミサンザイ古墳の南北には葛井寺と野中寺があるように、宗教施設と城郭の古墳利用との間には、信仰を紐帯とした一体的な関わりがありそうな印象を受ける。

これら古墳に築かれた城郭からは、軍事施設としての合理性とともに、戦国期の思想や信仰をも垣間見ることができる。当時の人々がどのような思いを持って戦乱の中を生きていたのかを考える上で重要なヒントを与えてくれるのである。

〈参考文献〉中村博司「城郭として利用された摂河泉の古墳について」『日本城郭大系 12大阪・兵庫』(新人物往来社1981)/村田修三『「陵墓」と築城』日本史研究会・京都民科歴史部会『「陵墓」からみた日本史』青木書店1995/遠藤啓輔「古墳の城郭利用に関する一考察」城館史料学　第3号 城館史料学会2005/『宮内庁書陵部陵墓地形図集成』学生社1999

＊1小和田哲男『「石塔類の石垣転用に関する一考察」城郭史研究15』1995
＊2水藤真『中世の葬送・墓制　—石塔を造立すること—』1991
＊3柴田龍司『堀跡や曲輪から出土する石塔 中世城郭研究6』1992

帝国海軍、最後の主力艦

海防艦丙型 丁型

ESCORTSHIP TYPE "HEI (No.1 Class)" and TYPE "TEI (No.2 Class)"

文＝瀬戸利春
イラストレーション＝上田毅八郎

戦争末期の日本海軍の主力艦艇といったら読者諸兄は何を思い浮かべるだろうか。

いうまでもなく航空機の時代になっているから戦艦や巡洋艦ではない。さりとて空母も搭載可能な母艦航空隊がなく、日本海軍にとっては主力たり得ない。戦争中盤には大活躍した駆逐艦でさえ、もはや出番らしい出番がなかったのが実情だ。

実はレイテ沖海戦から終戦までの間で、最も活躍した水上艦艇は海防艦なのである。海防艦はほぼ終戦まで毎日のように日本周辺のどこかで、地味ながらも活動を続けていた。排水量は一〇〇〇トンに足らず、主砲も一二センチ高角砲にすぎない海防艦が主力というのが末期の日本海軍の実情だったのである。とはいえ海防艦は日本最強の対潜艦艇であり、その意味でも海上護衛戦が重要となった大戦末期の主力に相応しいのである。

戦争前、日本海軍は将来戦では通商路保護のために大量の護衛艦艇を必要とすると



荒天下の東シナ海で船団を護衛する海防艦。手前が『丙型』、奥が『丁型』。

いう一応の結論を得ていた。しかし日本の国力では、戦艦などの水上決戦向けの戦力整備で精一杯で、通商保護用の艦艇をわざわざ整備する余裕はない。そこで通商保護に任じる艦艇には旧式駆逐艦や、掃海艇などの小艦艇を使い回すこととし、護衛用の対潜艦艇は建造を控えてきた。そして、戦争直前になって、ようやく北方警備を目的に『占守』型海防艦四隻が建造された。

『占守』型には通商保護に任じる対潜艦艇のプロトタイプとしての意味合いがあったといわれるが、しかし対潜艦艇としての要件を欠いていた。『占守』型は小型ながら凝った造りで量産向きではなく、対潜艦艇として必要なソナーさえ装備していなかった。

ところが戦争が始まってしばらくすると、船団護衛のためには大量の護衛艦艇が必要なことが改めて判明し、他の艦種の使い回しなどでは到底間に合わないことが明確となった。(戦)計画（戦時補充計画）では実に三三〇隻の護衛艦が必要とされたのである。

すでに昭和十六年（一九四二）度計画で『国後』型を簡易化した量産型航洋海防艦である『御蔵』型、『鵜来』型の建造に乗り出していたが、必要数を満たすことは到底不可能であった。特に『鵜来』型はディーゼル主機製造能力の不足がネックとなっており、その打開策が必要であった。

そこでその問題をクリアーするために速力の低下を忍び、供給能力の高い二三号八型乙ディーゼルを搭載する『丙』型海防艦が計画された。それでも所要隻数を満たすことができそうにないので、『丙』型とほぼ同型で主機には生産体制の整っていたA型戦標船の蒸気タービンを搭載した海防艦も計画された。これが『丁』型である。

燃料消費量の多い蒸気タービンを搭載する関係上、航続距離は『丙』型の六五〇〇浬から四五〇〇浬へと低下した。艦名は番号で命名され『丙』型が一から始まる奇数、『丁』型は二から始まる偶数とした。そのため『丙』型は『第一号』型、『丁』型は『第二号』型とも呼ばれ、同時並行で量産された。

両型とも基本的に『鵜来』型の簡易縮小版だが、徹底した簡易化が図られ、形状も加工の手間のかかる曲線は極力廃し、煙突も六角形の断面とし、船内の隔壁の数も減らされた程であった。

排水量七五〇トン未満、全長も七〇メートルに満たない小型艦で速力は『丙』型が一六・五一ノット、『丁』型は一七・五ノットで駆逐艦の半分しか出せない。従来の基準では低速弱体な艦に過ぎない。

主砲は対空戦闘メインの一二センチ高角砲で、対空、対水上見張用レーダーを持ち、対潜任務において重要なパッシブソナー（九三式水中聴音機）と、アクティブソナー（九三式、後に三式水中探信儀）も装備していた。特に水中探信儀は日本海軍においては戦争直前の昭和十五年にようやく一部の駆逐艦と駆潜艇に装備していたに過ぎず、これを建造当初から組み込んでいたことは画期的なことであった。

対潜攻撃兵器も戦訓を取り入れて、爆雷投下軌条一基と三式爆雷投射機一二基、爆雷を爆雷庫から機械的に送り出す電動揚爆雷装置を装備し、時間当たりの爆雷投射数を大幅に増大させた。爆雷搭載数も戦前の対潜艦艇は三六個搭載が標準であったのに、一二〇個と大幅に増量した。

ちなみに『御蔵』型は当初爆雷投射機二基、投下軌条二基を装備するだけで電動揚爆雷装置は持っていなかった。さらに、これは『丙』、『丁』型海防艦に限らないが、爆雷自体も調整深度を増し、またドラム缶型から沈下速度の速い涙滴型に近い三式爆雷へとバージョンアップしている。

加えて艦橋前部に対潜前投兵器として八センチ迫撃砲を装備し、対潜弾を発射できた。八センチ迫撃砲は対潜前投兵器として艦首方向に弾丸を投射できるので、ソナーで探知しながら即座に攻撃できるメリットがある。ソナーは艦首方向しか捜索できないので、艦尾に設けた爆雷兵装では攻撃時には敵潜へのコンタクトが失われるという欠点があったからだ。

ちなみにこの欠点に対処するため英海軍で編み出され、各国海軍で使用された戦術が、二隻が一組となって、一隻が捜索（ハンター）、別の一隻が爆雷攻撃（キラー）を行うというハンター・キラー戦術である。

様々な対潜装備を搭載した『丙』、『丁』型海防艦は戦争の実相にマッチした、日本海軍中では最も有力な対潜艦艇のひとつだったが、これはあくまでも日本海軍のなかでの最強に過ぎなかった。

というのも日本海軍の対潜能力は様々な欠点を抱え、米英海軍にはとても及ばなかったからだ。唯一の前方投射兵器八センチ迫撃砲の対潜弾は発音弾のみで威嚇の効果しかなく、ハンター・キラー戦術は戦争末期になるまで編み出せず、無線通信能力が低いために、その実施も困難だった。

いうまでもなくレーダーやソナーはエレクトロニクス分野の工業技術レベルが低いため、不安定で低性能のものしか量産できなかった。

加えて建造隻数に見合う乗員を養成することもネックとなった。やむなく速成教育の士官、下士官兵を集め、乗艦後二週間の短期教育で実戦に投入したが、ハンター・キラー戦術の実施はおろか、捜索兵器を使いこなすことさえ望めなかった。その他、OR（オペレーションズ・リサーチ）の失敗、米軍による暗号解読など不利な条件が重なった結果、日本海軍は米潜水艦の活動を封殺することに失敗、海上交通は壊滅状態に陥ったのである。

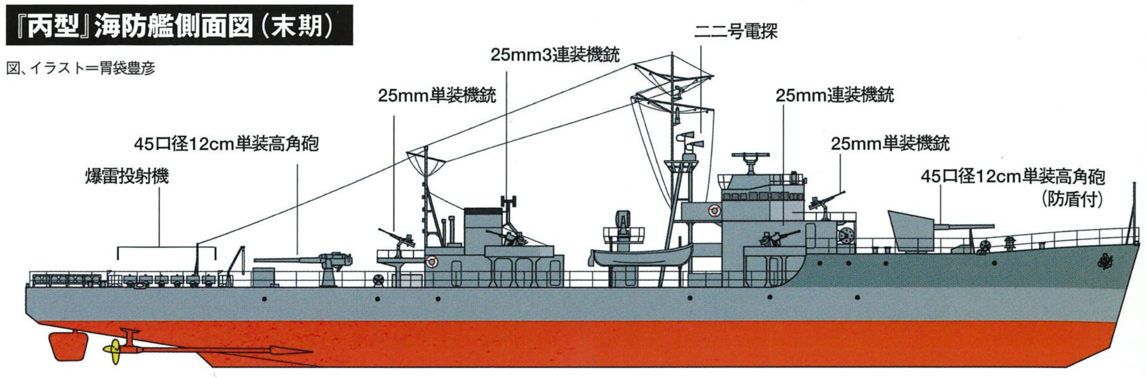
さらにそればかりか海防艦の犠牲も多く、潜水艦を狩るべき艦が逆に狩られてしまった。これが日本の通商保護戦の実相だった。

『丙』型五三隻のうち二七隻、『丁』型六三隻のうち二六隻と半数近くが戦没した。この数字は護衛艦艇の必要に気づき一応の量産には成功したものの、対潜戦闘という越えられない壁に突き当たった日本海軍の断末魔の叫びだったのかもしれない。

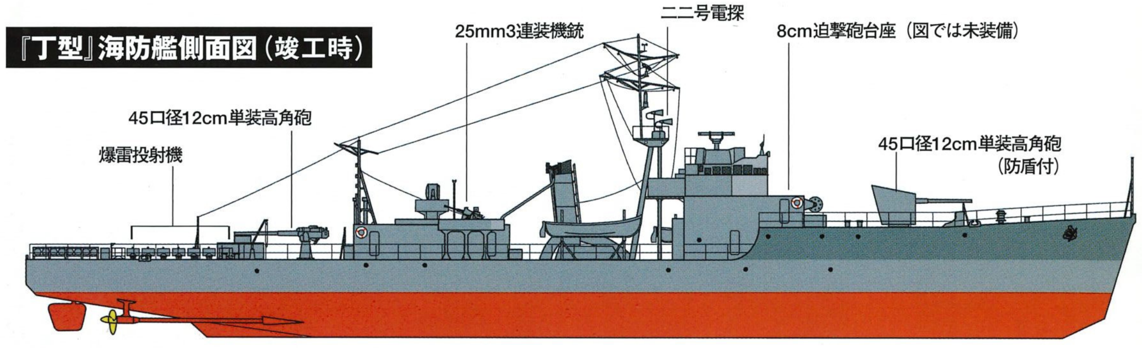
ESCORTSHIP TYPE "HEI (No.1 Class)" and TYPE "TEI(No.2 Class)"

『丙型』海防艦側面図（末期）

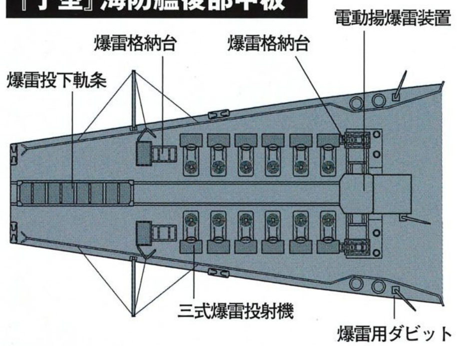
図、イラスト＝胃袋豊彦



『丁型』海防艦側面図（竣工時）

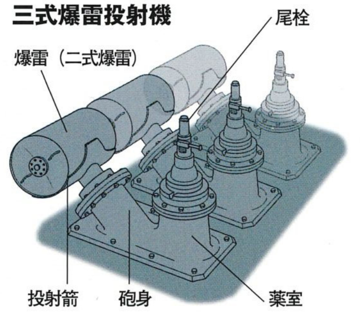


『丁型』海防艦後部甲板



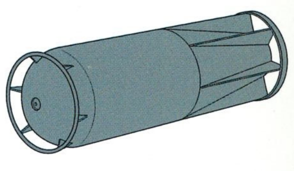
『丙、丁型』の両艦とも後部甲板は爆雷関係の諸装置に占有されていた。

三式爆雷投射機



海防艦の三式爆雷投射機は、量産を考慮した甲板埋め込み式になっていた。

三式一型爆雷



性能諸元：外径450mm
全長1400mm　炸薬量100kg
重量180kg　爆発調定深度（m）
40、80、120、160、200　沈降速度5.0m/秒

Specification

『丙型』（計画時）

基準排水量：745t
全　　長：67.50m
最大水線幅：8.40m
吃水（公試状態）：2.90m
主機／軸数：艦本式二三号乙八型ディーゼル2基、2軸
出　　力：1,900馬力
速　　力：16.5ノット
燃料搭載量：重油106 t
航 続 力：14ノットで6,500浬
兵　　装：45口径12cm単装高角砲×2、
25mm3連装機銃×2
：三式爆雷投射機×12、爆雷投下軌条×1、
爆雷×120
：二二号電探×1、九三式水中聴音機×1、
九三式水中探信儀×1
乗　　員：125名

『丁型』（計画時）

基準排水量：740t
全　　長：69.50m
最大水線幅：8.60m
吃水（公試状態）：3.05m
主機／軸数：艦本式甲25型オール・ギヤード蒸気タービン1基、1軸
主　　缶：艦本式ホ号水管缶（重油専焼）2基
出　　力：2,500馬力
速　　力：17.5ノット
燃料搭載量：重油106 t
航 続 力：14ノットで4,500浬
兵　　装：45口径12cm単装高角砲×2、25mm3連装機銃×2
：三式爆雷投射機×12、爆雷投下軌条×1、爆雷×120
：二二号電探×1、九三式水中聴音機×1、
九三式水中探信儀×1
乗　　員：141名

※両艦とも水中探信儀を三式に換装し、8cm迫撃砲を増備。機銃兵装は各艦により相違がある。

〈参考文献〉世界の艦船編集部編『世界の艦船 320号　日本の海防艦』、『世界の艦船 507号　日本海軍護衛艦艇史』（海人社）／市来俊男『研究資料78RO-3H　日本海軍の海面防備（対潜・機雷戦）に関する一考察』、『研究資料79RO-9H　海上交通保護に関する一考察』（非売品）／呉鎮守府『昭和19年10月12日　対潜兵器懇談会摘録』（非売品）

強固な堡塁砲台を備えた海峡の守護神

下関要塞

SHIMONOSEKI FORTRESS

東京湾、由良両要塞とならび、本土防衛の要と位置づけられたその要塞は、多数の砲台群・堡塁群によって狭き海峡に睨みをきかせた

文／監修＝原　剛
イラストレーション＝伊藤展安



国土防衛の西の拠点——日露戦争まで

西南戦争という一大危機を乗り切った明治政府は、国内の安定化を推し進めるとともに、本来の対外防衛にも力を入れることになった。このため陸軍は、海岸防御取調委員を設置し、全国的見地から防衛地点の調査研究を実施。その結果、明治十三年（一八八〇）に首都防衛の観点から東京湾口への砲台建設に着手した。続いて、明治二十年には対馬および下関海峡、二十二年には紀伊半島と淡路島の間の紀淡海峡への砲台建設（由良要塞）を開始することになった。

ここで取り上げる下関要塞は、本州と九州との連絡路を防護するとともに、敵艦船が下関海峡を通過して瀬戸内海に入り、大阪湾に侵入するのを阻止するために建設されたものだった。前述のように東京湾・対馬に次いで日本で三番目に着工された、本土防衛のための西側の拠点として極めて重要な地位を占めていたのである。

下関要塞の砲台の建設は、まず明治二十年九月、関門海峡に面した下関側の田の首砲台と、門司側の田向山砲台から始まり、翌十月には響灘側の老の山、門司側の笹尾山砲台の工事が開始された。続いて翌二十一年（一八八八）には、火ノ山、古城山、筋山の各砲台が着手され、二十三年（一八九〇）に金比羅山堡塁砲台が、そして明治二十四年には戦場が野堡塁、二十六年には

イラストは、下関要塞に設置された金比羅山堡塁砲台を、一部推定も交えて描いている。堡塁砲台は、敵艦艇を攻撃する砲台と、内陸から砲台を攻撃しようとする敵を防ぐ堡塁の、両方の機能を併せ持った施設であるが、金比羅山堡塁砲台は、イラストのように、城郭を彷彿とさせるほどの防御施設を持った堡塁砲台であった。また施設の多くは地下・半地下とされており、構造的に非常にユニークなものだった。①第１砲座 ②第２砲座 ③第３砲座 ④第４砲座 ⑤棲息掩蔽壕 ⑥側防砲座（有事には各横墻間に12糎加農砲を据えた）⑦側防窖室（機関銃配備）⑧空壕 ⑨六連島

海峡を守る砲塔群

➡下関要塞は、関門海峡の入り口と出口を抑えるように砲台が設置された。下の図は各砲台・堡塁の位置と、砲台の射線を示す。火ノ山砲台には第1～第4砲台があり、図では各々の射線を❶～❹で表している。響灘方面に向けて設置された各砲台の射線は、海峡に侵入してくる艦艇に対して、海峡の出口の砲台は、周防灘方面から艦艇や、海峡を突破した艦艇に対し砲撃できるように射線が定められている。



下関要塞の砲台



明治期における主要要塞

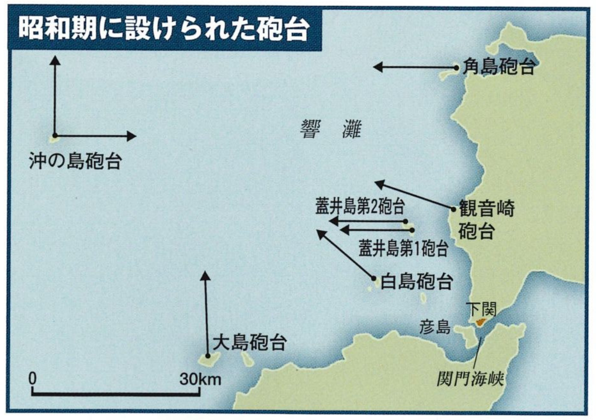


⬆本土防衛を重視した陸軍は、首都・東京の防衛として東京湾要塞を、経済の中心ともいえる大阪および瀬戸内海の防衛として由良要塞を設置した。下関要塞は対馬要塞と共に大陸からの脅威に対するもので、本州と九州の連絡を確保すると共に、敵艦艇が関門海峡を通って瀬戸内海に侵入するのを防ぐ任務を持っていた。

⬇明治末頃の下関要塞司令部。現在は下関税務署がある。当初、下関には明治23年に要塞砲大隊が置かれ、やがて火ノ山砲台、金比羅山堡塁砲台などが造られて規模が拡大、明治28年4月、下関要塞司令部が現在の下関税務署の地に設置された。



昭和期に設けられた砲台



⬅昭和期になると、陸軍の作戦方針の転換によって、下関要塞の位置づけが変更された。すなわち図のように、本土にではなく沖合いの島々に砲台が設置されるようになり、壱岐、対馬要塞と共に朝鮮半島との連絡確保に任ずることになった。ここにいたって、下関要塞は単なる海峡防衛ではなく、その周辺の「シー・コントロール（制海）」をも担う存在となったといえよう。

富野堡塁および門司砲台の工事がそれぞれ開始された。これらのうち、日清戦争勃発以前に田の首、田向山、筋山、笹尾山、老の山、古城山、戦場が野、金比羅山などの砲台・堡塁が完成し、日清戦争の頃には守備に就いたのである。

そして明治二十七年（一八九四）に日清戦争が始まると、砲台の背面を防護するための古城山堡塁の工事が開始されたが、戦争終結以後も引き続き背面防御のため、矢筈山、一里山、龍司山、高蔵山の各堡塁の工事が行われ、これらの堡塁は、日露戦争開始までに完成した。

このようにして建設された下関要塞は、東京湾要塞および由良要塞とともに一等要塞と位置づけられ、日本の三大要塞の一つとして本土の防衛に任じていたが、要塞としての防衛機能は以下のようであった。

下関海峡の西側入口は、彦島によって南の大瀬戸と北の小瀬戸に二分され、一方東側は早鞆瀬戸を経て周防灘に通じている。このため筋山、田の首、田向山、笹尾山の各砲台は、響灘から大瀬戸に侵入する敵艦船を、老の山砲台は小瀬戸から侵入する敵艦船を阻止する砲台として建設された。また、周防灘を経て早鞆瀬戸に侵入する敵艦船を阻止する砲台として、火ノ山第一～第四、門司、古城山の各砲台が建設された。

さらに、これらの砲台の背面防御のため、下関側に龍司山、一里山堡塁、戦場が野堡塁、金比羅山堡塁砲台が、そして門司・小倉側に古城山、矢筈山、富野、高蔵山の各



⬅田向山砲台跡（現田向山公園）にある展望台から関門海峡を見たもので、赤い矢印は田向山、田の首、筋山の各砲台の射線を表す。正面にあるのが彦島。関門海峡がいかに狭いかが理解できよう。写真上には描いていないが、この他に写真上部から響灘方面に向けて笹尾山砲台の射撃が加わることになる。一見して、濃密な火網であることがわかる。

➡こちらは火ノ山砲台跡（現火の山公園）から関門海峡を見たもので、写真左側が周防灘方面、中央の橋は関門橋である。左側にある太い赤矢印は、火ノ山砲台の第3および第4砲台の射線。筋山、田の首、対岸の田向山、笹尾山各砲台の砲撃をくぐり抜けてきた艦艇は、今度は海峡出口にある門司、火ノ山、古城山の各砲台による射撃を受けることになる。



下関要塞の砲台（日露戦争まで）

下関・彦島地区

火ノ山砲台
- 第1砲台:28cm榴弾砲×4
- 第2砲台:28cm榴弾砲×4
- 第3砲台:24cm加農（カノン）砲×8
- 第4砲台:28cm榴弾砲×2、12cm加農砲×4、15cm臼砲×4

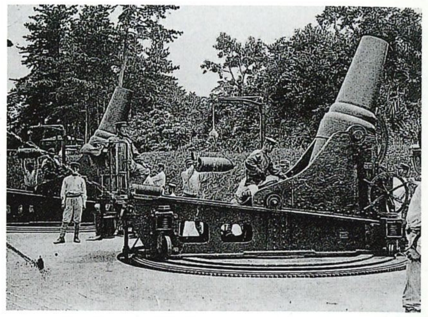
老の山砲台:28cm榴弾砲×10
田の首砲台:27cm加農砲×4
筋山砲台:24cm加農砲×6
金比羅山堡塁砲台:28cm榴弾砲×8、12cm加農砲×4
一里山堡塁:12cm速射加農砲×4、15cm臼砲×4
龍司山堡塁:12cm速射加農砲×6、15cm臼砲×2、9cm臼砲×4
戦場が野堡塁:15cm臼砲×4、12cm加農砲×8

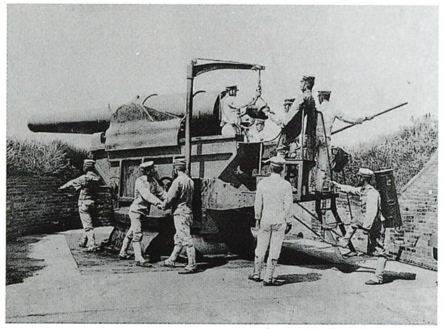
門司地区

田向山砲台:24cm臼砲×12
笹尾山砲台:28cm榴弾砲×10
古城山砲台:24cm臼砲×12
門司砲台:24cm加農砲×2
高蔵山堡塁:12cm加農砲×4、15cm臼砲×6
富野堡塁:12cm加農砲×8、15cm臼砲×2
矢筈山堡塁:9cm加農砲×4、15cm臼砲×4

堡塁に配備されていた火砲は、砲台の火砲よりも小口径であった。古城山砲台には隣接する形で古城山堡塁が設置されていたが、この堡塁には備砲はなく、戦時に小口径砲が配備される小規模なものだった。

➡28cm榴弾砲。イタリア製28cm榴弾砲をベースに、海岸砲として開発された同砲は明治25年に制定された。高低射界：－10～＋68度、方向射界：360度、最大射程：7800m、使用弾種：堅鉄破甲榴弾／堅鉄弾





⬅火ノ山第3砲台などに配備された23口径24cm加農砲。高低射界：－8～＋32度（高架）・－10～＋16度（低架）、砲口初速：435m／s、最大射程：9000m、使用弾種：堅鉄弾／榴弾

堡塁が建設された。このように背面防御のための堡塁が数多く建設された背景には、地形的問題もあるが、下関海峡地区がそれだけ戦略的に重要視されていたからでもあった。当時の下関要塞砲台および堡塁の配置は、14ページの図のとおりである。

そして前述の砲台のうち、金比羅山堡塁砲台は、施設のほとんどが地下構造物として最も堅固に構築され、全国の砲台を代表する模範的砲台であった。

日本の模範砲台 ——金比羅山堡塁砲台

一般に砲台とは、侵攻して来る敵を防ぐため、海岸や丘、山などの要所に大砲を据えた構築物をいうが、その役割により、海正面の敵艦船を砲撃する海岸砲台（単に砲台ともいう）、砲台の背面から上陸して攻撃してくる敵から砲台を防御する堡塁、海正面と背面の陸正面両方に対処する堡塁砲台（単に堡塁ともいう）に分類される。

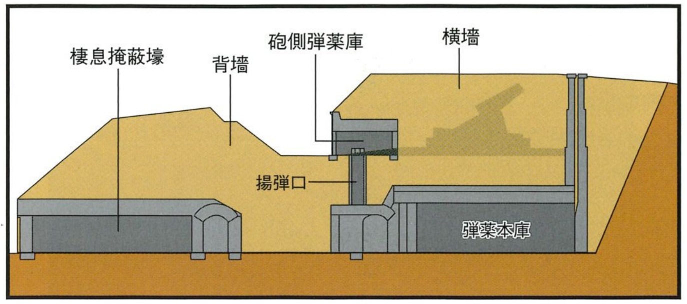
海岸砲台は、敵艦船を砲撃するので、大口径の砲を据え、堡塁は海岸砲台の背面から攻撃してくる敵上陸部隊を砲撃するので、一般に小口径の砲を備えている。一方、堡塁砲台は海・陸両正面に対処する必要から、大口径砲と小口径砲を備えていた。

明治期に構築された砲台は全て露天砲台で、関連施設のうち砲側

堡塁と堡塁砲台

金比羅山堡塁砲台の砲座周辺の構造

➡金比羅山堡塁砲台は、複雑な地下施設が施された強固な堡塁砲台であった。(12〜13ページのイラスト参照)。図では横墻の陰に隠れている砲も示す。砲弾は地下の弾薬本庫から砲側弾薬庫に揚げられ、そこから砲座に移送される。棲息掩蔽壕も弾薬庫も、横一列、通路によって結ばれていた。

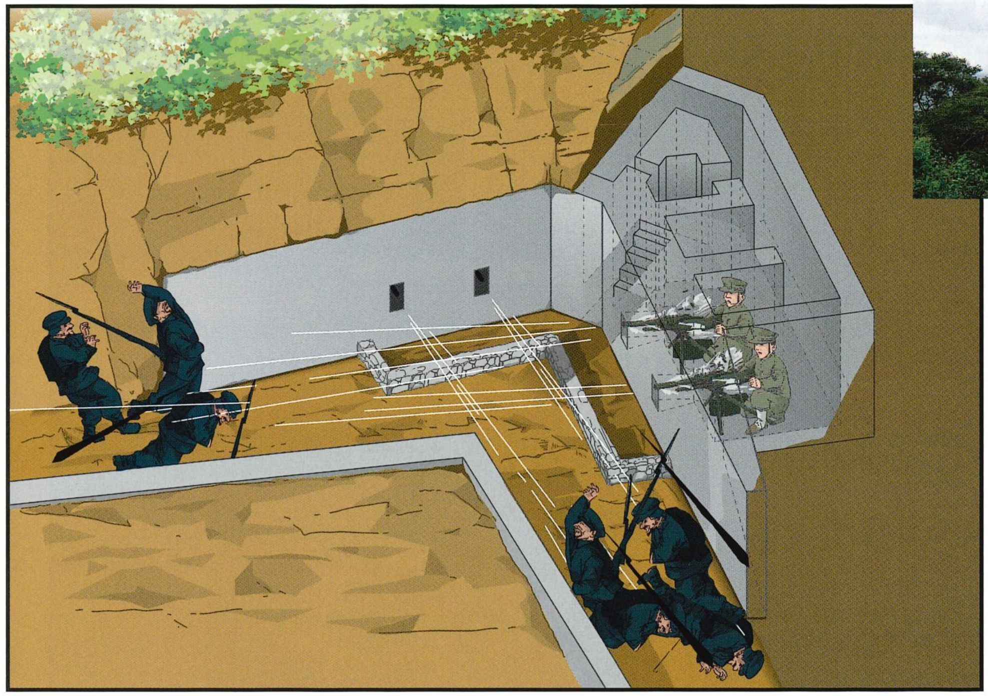


砲台を守る背面堡塁



➡図は砲台の背後を守る各堡塁の配置と射線を表している。砲台の射程から離れた場所に上陸した敵は、山口県の内陸や福岡県の内陸から接近する可能性が高いが、各堡塁がこれに対応した配置や射線になっていることがわかる。周防灘方面からの上陸は可能性が低いが、無防備にすることなくカバーされている。

イラスト＝堀口順一朗





➡金比羅山堡塁砲台跡から射線方向を見たもの。中央に写っているのは六連島だが、かなり至近であることが理解できよう。現在、金比羅山堡塁砲台跡は公園となっており、遺構は全く残されていない。

➡金比羅山堡塁砲台の側防窖室。土堤を越えてきた敵は空壕にはまり、射撃を受けることになる。側防窖室が壕の角にあるため、左右を射撃できる仕組みである。堡塁砲台内に向かう壁面はコンクリートの垂直面で、乗り越えることはできない。

弾薬庫や掩蔽部以外は地上構築物であったが、金比羅山堡塁砲台は砲具庫や厠、砲座などの他は地下構造物とし、周囲が土塁で囲まれた、当時においては最も堅固に構築された日本を代表する砲台であった。

金比羅山堡塁砲台は、響灘方面の海正面と綾羅木・幡生方面の陸正面に対する防御が主任務であり、海正面用として二八糎榴弾砲八門、陸正面用として一二糎加農（カノン）砲四門、機関砲四門が据えられていた。二八糎榴弾砲は、二門を一砲座として四砲座編成とし、砲座の間に高さ五メートルの横墻（隣の砲座まで被害を及ぼさないための防護用土塁）を築き、砲座前面には同じ高さの五メートルの胸墻を築いて擂り鉢状の砲座とした。さらに砲座の後方に、三メートルの背墻を設けた。

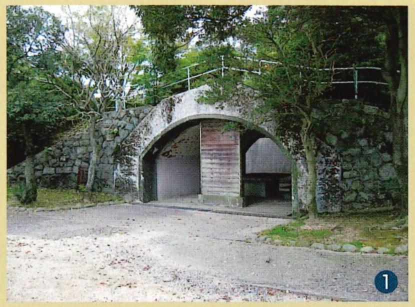
周囲は堡塁全体を囲む斜堤（堡塁の前面に射撃の死角をなくすために設けられた堤）が築かれたが、胸墻と斜堤の間は空壕とし、この空壕に沿って側防窖室が斜堤の左右前方の角に設けられた。敵が接近してこの空壕に入った時に、機関銃で縦射するためである。

地下構造物は、ほぼ左右対称に、砲側弾薬庫、弾薬本庫、棲息掩蔽部などが配置され、棲息掩蔽部の左端には病室、右端には炊事場が設けられた。そしてこれら地下施設は、地下道で連絡されていた。

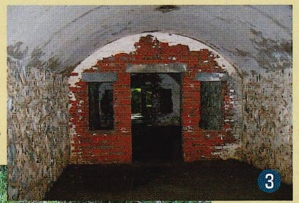
金比羅山堡塁砲台は、このような模範砲台だったが、残念なことに戦後に破壊され埋め立てられて、現在は公園となっている。

下関方面の遺跡

火ノ山砲台

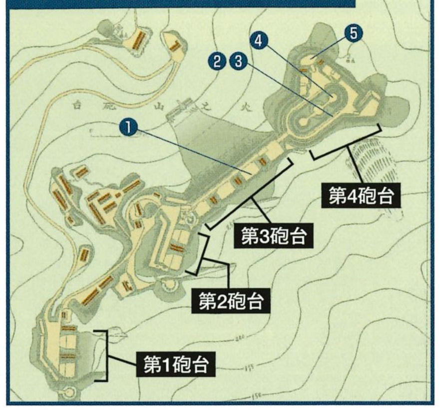


➡砲座があったところにある壕の跡。この壕の上に砲座が置かれていた。現在はベンチが置かれ、休憩所となっている。トンネル状となっているが、これは戦後、くり抜かれたものと思われる。



➡棲息掩蔽壕の内部。長い壕内部が、煉瓦の壁で２つで区切られているが、この他、奥行きがそれほどない壕や、いっさい区切られていない壕もあり、これらは倉庫として使われていたのかもしれない。

火ノ山砲台と現存する遺物



⬆火ノ山砲台には第１〜第４までの砲台が存在し、榴弾砲、加農砲合わせて18門の砲が展開していた。現在は火の山公園となっているが、数々の遺構が残されている。(図にある番号は写真の番号と対応)



⬆棲息掩蔽壕。きれいに保存されており、中に入ることもできる。それぞれの内部は用途別に構造が異なっている。中央の壕には煉瓦で作られたカマドが二つあることから、調理場あるいは食堂だったと思われる。

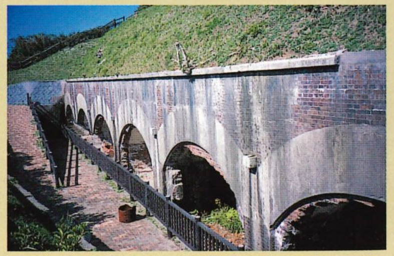


⬅第４砲台の観測所および28㎝榴弾砲の砲座。手前が砲座で、砲座から通路で繋がっている施設が観測所である。周辺は鬱蒼としているが、当時は樹木もなく開けた視界だったはずである。



⬅これも砲座跡だが、海側ではなく、内陸に面した場所にある。恐らく、有事の際に榴弾砲あるいは臼砲を置き、陸地側から侵攻してくる敵に対して砲撃を加えるための、防御的な砲座だったのだろう。

龍司山堡塁



➡霊鷲山に置かれた龍司山堡塁の掩蔽部。龍司山堡塁は、一里山堡塁、戦場が野堡塁とともに、下関側にある砲台の背面を守るものとして設置された。龍司山堡塁の遺構の中では、最も保存がよい状態にある。

朝鮮半島との連絡確保
——日露戦争以後

日露戦争（明治三十七〜三十八年）の勝利により、日本は朝鮮における優越権を獲得し、樺太の南半分の割譲、南満州鉄道の譲渡、さらに遼東半島を租借することとなり、こうして大陸進出の基盤を得た。これら獲得した利権を守り、さらに拡張して海外に進出するため、陸海軍は基本戦略を変更することとなった。陸軍は、租借した遼東半島、保護国とした朝鮮半島を基盤に、大陸での積極的な攻勢作戦を採ることとし、海軍も、最大の脅威であったロシア艦隊を撃滅したため、新たにアメリカ海軍を仮想敵として、東洋に進出するアメリカに対して攻勢策を推進したのである。

この結果、陸軍はこれまでの守勢作戦に基づく要塞を、攻勢作戦に適合するよう整理改善する決定を行った。これを受けて、下関要塞は、まず陸正面の背面防御堡塁と瀬戸内海側の砲台が廃止されることになる一方、朝鮮海峡系要塞（鎮海湾、対馬、壱岐、下関）の一環として朝鮮半島との連絡を強化する必要から、関門海峡西方の響灘に浮かぶ島々に砲台が建設されることになった。

このため明治期に建設された砲台は、金比羅山堡塁砲台を除き全てが廃止され、新たに昭和八年（一九三三）に蓋井島第一砲台、同十年（一九三五）に大島砲台、同十一年に白島砲台、同十二年に観音崎砲台と

小倉・門司方面の遺跡



田向山砲台

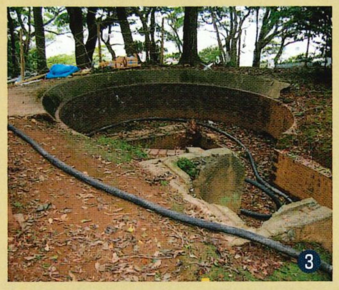


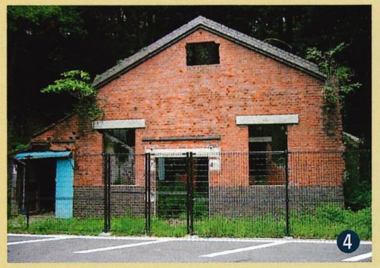
⬆田向山砲台跡は、現在田向山公園となっているが、いくつかの遺構が残されている。これはかつて砲座があった場所にある倉庫群の一つで、その上部に砲座が設置されていた。ちょうど、この向こう側が関門海峡となっている。

➡砲座から少し下ったところにある観測所の跡。半ば崩れている箇所もあるが、保存状態はよい。煉瓦で作られた観測員の待機所の両脇に階段があり、その上が観測所となっている。方向としては、やはり関門海峡を睨んでいる。



➡夜間に目標を照射するための照明所跡。探照灯は可搬式で、通常は地下に納められているが、使用する時は電灯井と呼ばれる縦穴から引き上げて配置される。写真でも、中央に四角い電灯井が確認できる。





⬅田向山の麓近くにある発電施設。煉瓦造りの頑丈な建物だが、屋根の一部などが崩れている。ここで供給された電力は、探照灯やその他の砲台施設の動力として使用された。現在、柵に囲まれていて入ることはできない。

笹尾山砲台

➡田向山砲台のすぐ近くにある笹尾山砲台の倉庫。周辺は雑木が茂っており、充分な保存がされているとは言い難い。この他にも、笹尾山砲台の遺構はあるが、やはり保存状態は悪く、情報無しで発見することは難しい。



沖の島砲台、同十三年には蓋井島第二砲台、そして同十四年に角島(つのしま)砲台の建設が次々と開始され、これら新設砲台は、同十五年(一九四〇)までに全てが完成した。その配置は、14ページの図のとおりである。

これらの砲台の火砲は、ウラジオストックのソ連潜水艦への対応と対空防護を任務としたが、特に潜水艦への対策から、蓋井島第一、大島、沖の島、角島の各砲台には一五糎加農砲が、白島、観音崎、蓋井島第二砲台には七糎加農砲が配備された。一五糎加農砲と七糎加農砲は、潜水艦の完全制圧はできないが、少なくともこれらの火力圏内では、潜水艦の浮上航行を不可能にすることができたし、同時に我が駆潜艇を掩護してその行動を容易にすることも可能であった。さらにこれらの砲台による対空防護能力によって、我が輸送船の航行を安全ならしめることもできたのである。

また、下関要塞のこれらの砲台の弾薬と朝鮮海峡系要塞の総予備弾薬を貯蔵するため、小倉市富野の谷間に洞窟式弾薬庫が一〇本構築されることになり、昭和九年に着工、同十六年に完成した。この弾薬庫は、コンクリートの洞窟(外庫)の中に、さらに鉄筋コンクリートの弾薬庫(内庫)を構築した二重構造になっていた。火薬の性能を維持するために、内庫の内側の壁および天井は銅板張りにして気密性を保持し、年間の気温および湿度を一定に保つ工夫がされていた。この洞窟式弾薬庫は、現在も陸上自衛隊が使用している。

矢筈山堡塁



⬆矢筈山堡塁にある施設跡。倉庫だったと思われるが、今はトンネルになっている。矢筈山堡塁は現在キャンプ場となっており、風師登山道から行くことができる。矢筈山堡塁は周防灘方面からの脅威に対する背面堡塁であった。



⬆棲息掩蔽壕と思われる施設群。現在、キャンプ場の資材置き場となっており、扉は新しいものに替えられているが、それ以外はほとんど当時のままである。通路の反対側にも壕が並んでおり、遺構としての保存状態は非常に良好だ。

⬇矢筈山堡塁は砲台の背面防御を任務としていたため、大口径砲は配備されていなかった。写真は有事の際に設置される、陸上から攻撃をかけてくる敵に対して砲撃を行う小口径の加農砲あるいは臼砲などの胸墻。

古城山砲台



⬆古城山砲台の観測所跡。この北側には小規模な古城山堡塁が、南側には古城山砲台の砲座が設置されていた。コンクリートで固められているが、明治期の観測所にはコンクリートは使用されておらず、これは昭和期に施されたものである。





⬆古城山堡塁に設けられた掩蔽部。この掩蔽部の周りはぐるりと馬蹄形の土塁になっている。古城山堡塁は、下関要塞の他の堡塁よりも小規模であり、特別な砲座などは設けられず、機関銃が配備された。

このように、朝鮮半島との連絡を確保するために生まれ変わった下関要塞であったが、太平洋戦争末期には、B—29爆撃機による機雷封鎖作戦により、日本本土と半島との連絡は途絶えてしまった。B—29は、昭和二十年(一九四五)三月から、下関海峡を中心に機雷を投下し始め、七月になると朝鮮半島の釜山などにも機雷の投下を開始したためである。陸軍が大陸との連絡路防護のため鋭意、整理改善を行った下関要塞は、その役目を果たすことができず、戦局の圏外に取り残されてしまったのである。

日清・日露戦争では、敵艦船の攻撃に対する抑止力として本土防衛のため働いた要塞も、太平洋戦争では空からの攻撃に対抗できず、悄然と終戦を迎えたのであった。

二次大戦を代表する二つの対戦車兵器

バズーカ VS. パンツァーファウスト

BAZOOKA VS. PANZERFAUST



Panzerfaust 60

パンツァーファウスト60（1944）

1943年に量産が始まった使い捨ての無反動砲「パンツァーファウスト」。イラストは射程や精度を改良した60型。未訓練の一般市民でも、簡単に使えるのが最大の特徴であった。発射管に弾頭を装着した形で支給され、使用者はまず弾頭固定用のピンを抜き、照準器を引き起こし、安全装置を発射位置にする。そして抱えるか担ぐかして目標に狙いを定め、引き金を深く押し込めば発射できた。ただ、単純な照準器しか付いていないので、確実に戦果を挙げるには目標に極力近づくか、熟練が必要であった。



M9A1 BAZOOKA

M9A1バズーカ（1943）

1942年に初登場した携帯ロケットランチャー「バズーカ」。イラストのM9は折畳み機能などを備えた改造型である。1チーム2名で、射手がランチャーを肩に担いで目標を狙い、装填手が尾部からロケット弾を装填する。その際、ロケット弾の通電用コードをランチャー側のマグネット・ターミナルに接続する必要がある。作業を終えたら射手に知らせ、射手が引き金を引くと、拳銃型の握りの内部にある磁石発電機（初期型では棒状乾電池）が瞬間的に電流を流し、ロケット弾は内部の発射火薬に点火され、目標に向け飛翔する。

20世紀に出現した、陸戦の王者＝戦車
分厚い装甲を纏ったその進撃は、歩兵には阻止できないと思われた
しかし「ノイマン効果」の発見と応用によって
個人で携帯できる、恐るべきタンク・キラーが誕生した

文＝松代守弘
イラストレーション＝上田　信

CARRYING ANTI-TANK WEAPON

ノイマン（モンロー）効果の発見

戦車は第一次大戦に登場して大きな威力を発揮し、後には戦争の終結を早めた兵器ともいわれた。

大戦終結後も、戦争のあり方を変える新兵器として、戦車は各国で研究が進められたが、同時に対抗手段、特に歩兵が戦車に対抗する手段の研究も重視されていた。というのも、一九二〇～三〇年代までの戦車は、敵歩兵が立て籠もる陣地を攻撃し、突破するための兵器とされていたため、当然ながら歩兵の側も戦車への対抗手段を講じざるを得なかったからである。

しかし、三〇年代の終わり頃まで、戦車の装甲を貫徹し破壊するためには、大きなエネルギーを持つ弾丸をぶつけるしか方法がなかった。そこで、各国は小口径の対戦車砲で歩兵を援護しつつ、対戦車銃を開発して歩兵部隊へ配備した。

対戦車銃とは、高初速の徹甲弾を発射する口径約八～二〇ミリの大型ライフル銃で、一五～三〇ミリ程度の装甲板を貫通する能力があった。ところが、第二次大戦の開始直後は装甲の薄い戦車が多数存在していたため、対戦車銃も多少は役立ったものの、間もなく各国が装甲を強化した戦車を投入すると、その戦力的な価値を喪失していった。

また、四一年にソビエトへ進攻したドイツ軍は、Ｔ34やＫＶといった重装甲の戦車と遭遇し、小口径の対戦車砲でさえも戦力価値を失っていることを思い知らされた。

そのため、四一年後半から翌四二年にかけて、ドイツをはじめ、アメリカやイギリスで、火薬の爆発エネルギーを利用して戦車を撃破する弾薬の開発が進められた。これは、三〇年代の半ばから終わりにかけて、ドイツのノイマン博士やアメリカのモンロー博士が発見した、先端に漏斗（ろうと）状の空洞を持った爆薬が爆発したとき、エネルギーが一点に集中されるという性質を利用したものである。

この効果は発見者の名前からノイマン、あるいはモンロー効果と呼ばれ、爆発エネルギーによって大きな装甲貫徹力を発揮する成形炸薬弾を生み出した。成形炸薬弾は、小さなエネルギーで発射しても装甲貫徹力にほとんど変化がないため、初速の遅い砲弾にも大きな貫徹力を持たせることができた。

そして、この成形炸薬弾を利用すれば、歩兵一人でも持ち運びが可能な携帯対戦車兵器にも、大きな装甲貫徹能力を与えられるため、歩兵が戦車を撃破することが可能となったのだ。ドイツのパンツァーファウストとアメリカのバズーカ[*1]、そしてイギリスのＰＩＡＴ[*2]が代表的な携帯対戦車兵器で、実用射程はわずかに百数十メートル（パンツァーファウストの初期型やＰＩＡＴは数十メートル）だったが、視界が狭い戦車にとってはかなりいやらしい兵器であった。

これら三種の火器の基本構造は、それぞれ全く異なり、各国の戦術思想が色濃く反映されている。

大戦を代表する米独二大兵器

まず、アメリカでは弾頭そのものがロケット推進で飛翔する対戦車兵器を開発し、四二年六月からＭ1ロケットランチャー、いわゆるバズーカとして量産した。四二年十一月には北アフリカで実戦に投入して有効性を実証したものの、一部がドイツ軍に捕獲され、コピー兵器のパンツァーシュレック[*3]を開発されるという失態を招いている。

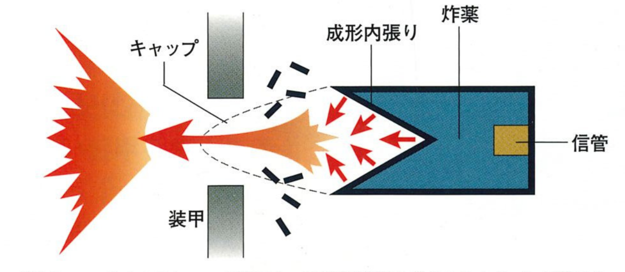
ともあれ、有効射程一五〇メートルで、装甲貫通力も八〇ミリに達しており、発煙弾や焼夷弾なども発射可能など、兵器としての能力には全く問題がなかった。その後、四三年十月には折畳み機能を備えて携帯性を増し、照準器などの細部を改良したＭ9型が投入され、ヨーロッパと太平洋の全戦線で多用された。

バズーカの生産には多くのメーカーが参加して大量生産が行われ、その他の改良型も合わせて戦争終結までに四八万門の発射器と一五六〇万発ものロケットが製造されている。また、口径を大きくして、より強力なロケットを発射可能としたＭ20（スーパーバズーカ）も開発されたが、第二次大戦中には実戦投入されなかった。

他方、ドイツのパンツァーファウストだが、名称は「戦車への鉄拳」という意味で、四二年から開発が始まったとされる。開発を担当したのはヒューゴー・シュナイダー社（ＨＡＳＡＧ）のランクヴェイラー博士で、夏には試作品が完成し、翌四三年十月には量産が始まっている。最初に量産された「パンツァーファウスト30」は射程三〇メートルで、装甲貫通力は小型弾頭でも一四〇ミリ（傾斜三〇度の場合）に達しており（大型弾頭は二〇〇ミリ）、当時存在していたほとんどの戦車の装甲を、正面から貫徹することが出来た。

パンツァーファウストは使い捨ての対戦車兵器で、各型を合計して一三〇万発も製造された。ごく簡単な使用説明を受ければ誰にでも（文字通り老人や子供、女性にさえも）使える、極めて優れた兵器であったため、ドイツ軍が戦ったすべての戦場で使用されている。

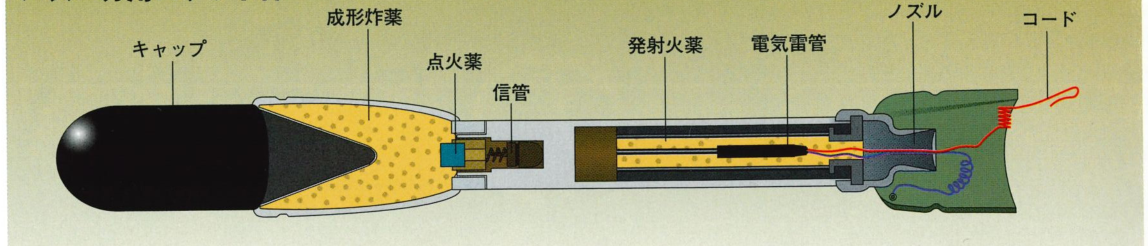
ノイマン（モンロー）効果



19世紀にアメリカのモンローが発見し、20世紀前半にドイツのノイマンが発展させた原理による、成形炸薬弾の一例の模式図。先端に漏斗状の空洞を持つように炸薬を成形した砲弾が命中すると、弾頭部分が砕け散り、衝撃で信管が作動、炸薬が爆発するそのエネルギーが中心軸に集中し、強大な装甲貫徹力を発揮する。

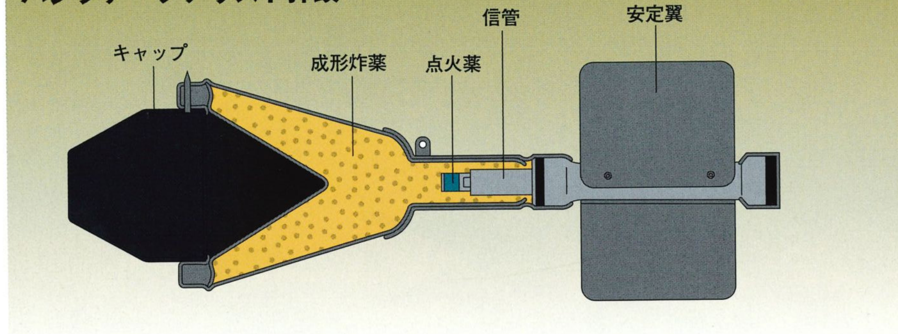
*1 バズーカ＝当時人気のあった喜劇俳優ボブ・バーンズが使っていた巨大なトロンボーンをイメージさせる外見だったため、この愛称が広まった。
*2 PIAT＝「Projector Infantry Anti Tank」の略で、歩兵用対戦車投射機の意味。

バズーカ用ロケット弾



バズーカのロケット弾は、電気雷管の作動で発射火薬を燃焼させ、自力で飛翔する。図は後期型のM6A3の構造を模式的に描いたもの。初期型では尾部の安定翼が変形し易いため改良された。コードは電気雷管への通電用。

パンツァーファウスト弾頭



パンツァーファウスト60の弾頭の模式図。それ自体に飛翔能力はなく、尾部の金属製安定板を折畳んだ状態で発射筒にセットされ、発射筒内に装填されている発射火薬の力で撃ち出される。弾頭は放物線を描いて目標に飛んでゆく。

だが、あまりにも射程が短いため、射程を八〇メートルに伸ばして安全装置と照準器を改良した「パンツァーファウスト60」や、射程一〇〇メートルの「パンツァーファウスト１００」が実戦投入された。戦争末期には、さらに射程を延長して再発射が可能な１５０型や２００型も開発されていたが、使用されたのはごく一部の１５０型だけだった。

パンツァーファウストはバズーカとは全く異なり、そもそもロケット兵器ではなく、発射筒に装填された発射火薬が弾頭を飛ばす無反動砲の一種、正確には対戦車擲弾筒と言うべき兵器だった。そのため、弾頭を強化したり射程を延長すると、必然的に発射火薬を装填した発射筒が大きく、重くなってしまい、性能強化には自ずと限界があった。また弾頭にバリエーションを持たせることも困難だった。

だが、ドイツ軍はアメリカ軍のバズーカを捕獲した後もパンツァーファウストの開発を続け、量産開始後は敗戦まで全戦線で大規模に使用し続けている。その理由は明らかにされていないものの、ドイツ軍はバズーカの発射時に後方へ激しく噴出する爆炎を非常に嫌い、改良型パンツァーシュレックには爆炎よけのシールドを備えている。

一方、パンツァーファウストの後方爆炎は小さく、歩兵が対戦車手榴弾代わりに扱える、非常に操作が簡単な兵器だった。

当時、東部戦線のドイツ軍は少数の歩兵が立て籠もるハリネズミ陣地がソビエト軍の第一撃を受け止め、時間を稼いでいる間に火消し部隊を投入して攻勢を頓挫させるという戦術を用いた。これはあくまでも筆者の推測だが、ソビエト軍の戦車集団へ対抗するには、まとまった数量がどうしても必要であり、狭い塹壕やトーチカでの運用には危険が伴い、かつ専門の射撃チームも必要なパンツァーシュレックでは、必要な数を満たすことができないと判断されたのではないだろうか。

その他、イギリス軍の開発したＰＩＡＴも成型炸薬弾頭を発射する兵器で、迫撃砲のような構造をしていた。しかし、発射器自体が重い上に事実上の有効射程も五〇～九〇メートル程度に留まっており、兵器としては明らかな失敗に終わった。

ドイツ軍のパンツァーファウストとアメリカ軍のバズーカは、ともに第二次大戦を代表する歩兵用対戦車兵器だが、兵器としての発展性や汎用性はバズーカが勝り、装甲貫徹力と操作性はパンツァーファウストの方が優れていた。

大戦後の歩兵用対戦車兵器は、バズーカのようなロケット兵器が主流となるのだが、戦時のドイツ軍はパンツァーファウストを好んだ。事実、四五年一月には個人携帯対戦車兵器をパンツァーファウストに統一して、パンツァーシュレックの生産を終えている。

訓練が不要で誰でも使えるパンツァーファウストに固執したところに、戦争末期のドイツ軍が直面した、過酷な状況が表れているといえるだろう。

*3 パンツァーシュレック＝「戦車の恐怖」という意味だが、正式名称はラケーテンパンツァービュクセで、ロケット対戦車銃の意味。パンツァーファウストと同じＨＡＳＡＧ社が開発を担当し、実戦参加は1943年末とされる。

〈参考〉Ian V.Hogg『The Encyclopedia of Infantry Weapons of World War II』（The Military Press）／http://www.wk2ammo.com

ブラックプリンス、フランス国土を蹂躙

ポワティエの戦い

THE CAPTURE OF A KING

文＝佐藤俊之

14世紀前半、英仏百年戦争が勃発──
フランスはクレシーの地で、英軍長弓兵の前に一敗地に塗れた
そして10年後、イングランドの英雄黒太子エドワードの侵攻を
フランス国王ジャン二世は、ポワティエの地に迎え撃った！



フランス・ロマン主義の巨匠、ドラクロワの描いたポワティエの戦い。絵は戦いの最終段階で、画面左手に、乗馬を倒されながらも、四方から押し寄せるイングランド兵と勇敢に渡りあうフランス国王ジャン二世。その傍らには王に寄り添い、左右の敵への注意を促す当時14歳の王子フィリップ（後の大胆公）が描かれている。この作品が制作された1830年頃は、過去のフランス王たちの勇気や善行を思い起こさせるべく、時の王権政府や王族関係者が注文した歴史画が多い。ベリー公爵夫人の依頼によるこの作品も、躍動感溢れる戦場描写の中に、フランスの敗北よりむしろ国王の勇気を謳いあげている（ルーブル美術館蔵/The Bridgeman Art Library/ユニフォトプレス）。

百年戦争の勃発

十四世紀、イングランド王エドワード三世がフランスの王位継承権を主張して、フランス王フィリップ六世に戦いを挑んだのが、世にいう「英仏百年戦争」の始まりといわれている。

一三三七年にフランス侵攻を決意したエドワード三世は、まず翌一三三八年および一三四〇年の二度にわたり、フランス艦隊を撃破して英仏海峡の海上優勢を確保したうえで、今日のベルギーとオランダにまたがるフランドル地方に上陸した。加えて一三四三年、イングランド王はフランス北西部のブルターニュ伯とフランス王の争いにつけ込み、ブルターニュ支援の名目で同地にも足場を築いた。

こうして戦前から所有していたビスケー湾を臨むアキテーヌとともに大陸の拠点を手に入れたエドワード三世は、一三四六年および一三五五～五六年に、大規模な対仏軍事遠征を実施、クレシーおよびポワティエという二つの戦いでフランス軍を撃ち破ったのであった。

騎行戦術とクレシーの戦い

当時エドワードが行った軍事遠征は「騎行（chevauchée）」と呼ばれるもので、ひと塊になった軍勢を率いて敵地を渡り歩き、農地を荒らし、町や都市を略奪し破壊するという、いわゆる焦土戦術だった。

当時の戦争は、それを行う王侯にとってコストの高い事業だった。王は報酬を与える約束で配下の諸侯あるいは傭兵を集め、糧食や武器、矢玉を調達し、それを馬匹やイングランド王の場合は大陸へ送るために船舶を利用して輸送しなければならない。

そして国家イコール王家であった当時は、こうした出費はすべて国王のポケットマネーで賄わねばならず、戦争による莫大な出費は即座にそれを行う王たちの懐に甚大な打撃を与えたのである。

騎行戦術の目的のひとつは、軍勢が敵地で徴発や略奪を行うことによって、自腹での出費を軽減することだった。さらに敵地の荒廃は相手陣営の戦費捻出を妨害し、また同地の人々に対する敵王侯の威信を失墜させることにもなる。

当然、侵略を受けた側は領地の忠誠を維持するためにも、この遠征を受けて立たねばならない。フランス王フィリップ六世はフランス各地およびイタリアやドイツから四万とも七万ともいわれる軍勢を集め、一万強のイングランド軍に戦いを挑んだ。これが一三四六年八月二十六日に行われた「クレシーの戦い」である。

この戦いでは、数で圧倒するフランス軍が統制の取れぬままに騎兵突撃を繰り返した末に、一丸となって抵抗するイングランド軍の長弓兵、下馬騎兵、槍歩兵の巧みな連携に翻弄され大敗を喫した。

フランス王の寄せ集めの軍は華々しい武勲と功名争いしか眼中になく、エドワード王のもとに一致団結していたイングランド軍に圧倒されたのだった。

この戦いの翌年、エドワードはフランドルやアキテーヌで領土を拡張した末にフランス王と休戦、次なる戦いは一三五五年まで持ち越されることとなったのである。

エドワード黒太子の遠征

休戦から数年、ヨーロッパではペストが流行し人口が激減、一三五〇年にはフランス王フィリップの崩御によってフランス王家も王位の継承手続きに忙しかった。

だが一三五四年、こうした混乱に乗じて己の力を増強しようと考えたエドワード三世は、新フランス王ジャン二世にとって屈辱的な和平案を提案、ジャンがこれを拒絶したことで、両王は再び戦端を開くこととなった。

エドワードは自身の領地であるフランドル、ブルターニュ、そしてアキテーヌにそれぞれ配下の部隊を送り、大規模な騎行戦術を実施するつもりだった。ここで登場するのが王の長子、ウェールズ王子エドワードである。

一三三〇年生まれのエドワード王子は、弱冠十六歳で迎えたクレシーの戦いに翼部隊の名目上の指揮官として参加し、その後、馬上槍試合で名を馳せ「騎士道の華」と呼ばれるようになっていた。

彼はクレシーの戦いを勝利に導いた王の側近たち、ソールズベリ、ウォーウィック、サフォーク、オックスフォードの各伯爵を率いて、三〇〇〇名をやや下回る戦力で一三五五年秋にアキテーヌに上陸、ボルドーから南フランスの地中海沿岸の町ナルボンヌに向けて騎行戦術を実施した。

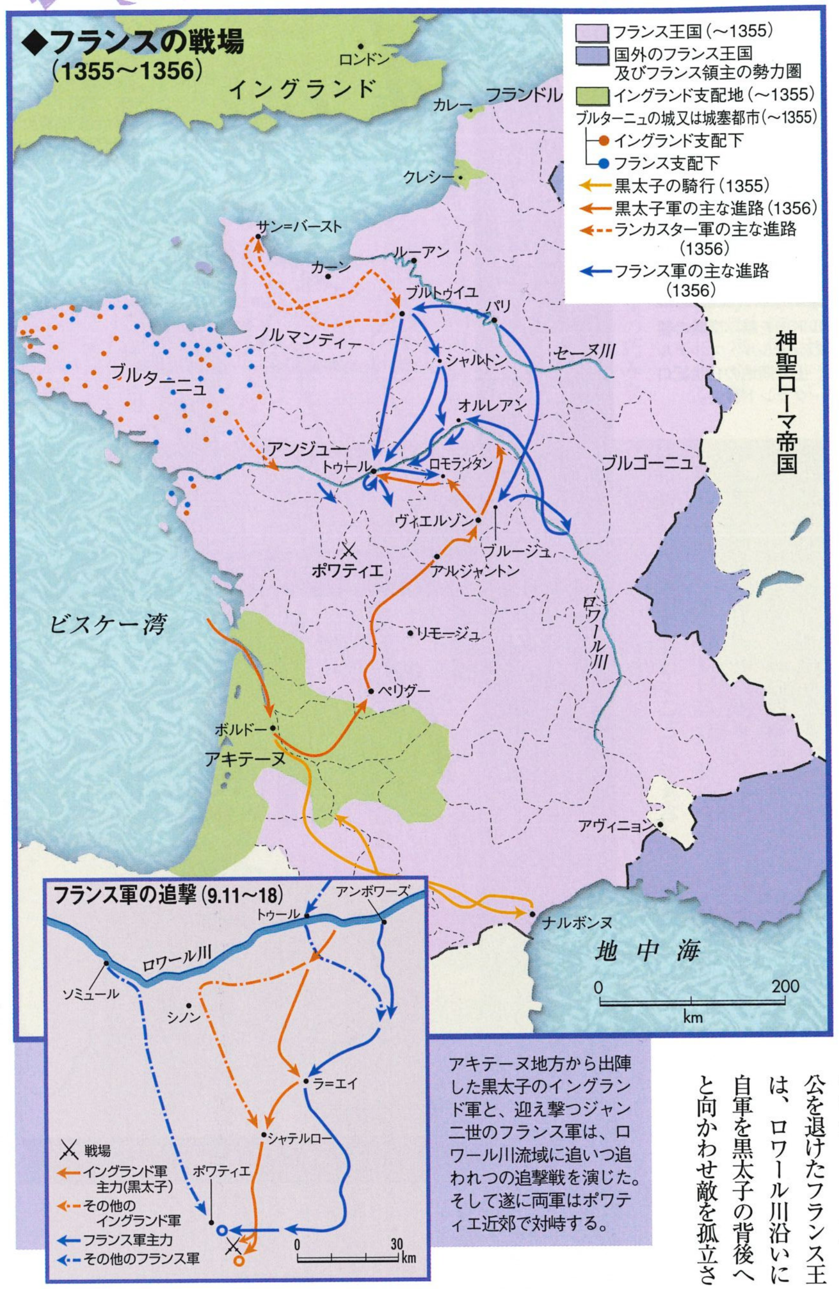
エドワード王子は、秋から冬にかけての季候の悪い時期に往復一一〇〇キロを走破して、通過した地方に破壊と略奪をもたらした。この大破壊によって彼はフランスの人々に激しい恐怖と憎悪をもたらし、愛用していた黒い甲冑と相まって「黒太子（ブラックプリンス）」と呼ばれるようになったのである。

だが、こうしてエドワード黒太子が南仏で騎行戦術を成功させていたころ、フランドルとブルターニュから行われたイングランド王とランカスター公の遠征はさしたる効果をあげないまま、退却または停止を強いられていた。

イングランド王はそのため、翌一三五六年にも前年と同様の遠征を実施しようと考えた。だが王自身は本国の北方で繰り広げられるスコットランドとの争いに対処せねばならず、フランス遠征で陣頭指揮を執ることが困難だった。

そこでイングランド王は黒太子を王の代理として総大将に任命し、アキテーヌに増援を送ったうえで、ブルターニュのランカスター公とともに遠征へと向かわせた。王は攻撃目標をフランス西部のアンジューと定め、北からランカスター公、南から黒太子によってこれを挟撃するとともに、遠征途上で両軍を合流させ、フランス軍の反撃に対処させようと考えていた。

こうして一三五六年の七月から八月にかけて、黒太子とランカスター公の部隊は遠征を開始。対するフランス王はこれに呼応して七月に新たな軍を編成、ロワール川の線に沿って二つのイングランド軍の間に割って入ろうとした。



アキテーヌ地方から出陣した黒太子のイングランド軍と、迎え撃つジャン二世のフランス軍は、ロワール川流域に追いつ追われつの追撃戦を演じた。そして遂に両軍はポワティエ近郊で対峙する。

ランカスター公の戦力は一〇〇〇名強、黒太子は八〇〇〇から一万程の部隊で遠征を開始した。これに対するフランス軍は三万を超えるともいわれる兵力を集めていたが、主力からいくつかの分遣隊を出したうえ、歩兵の多くを足手まといだとして後方に残していたため、実際の反撃戦力は騎兵八〇〇〇、弩弓兵二〇〇〇、歩兵一〇〇〇程度だったようだ。

それでも、優勢なフランス軍が正面に出現したことでランカスター公は「必要な場合にはエドワード王子を支援すること」というイングランド王との約束にもかかわらず軍を下げてしまった。フランス王はイングランド軍の分断にまんまと成功したのである。

このときまでに黒太子は、八月いっぱいをかけて内陸部へ向けて四〇〇キロの進撃を果たし、前年同様の破壊活動を成功させていた。ランカスター公を退けたフランス王は、ロワール川沿いに自軍を黒太子の背後へと向かわせ敵を孤立させようと図った。

八月の終わりから九月初旬にかけて、ランカスター公との合流に失敗したことを悟った黒太子は、あわてて自軍を西へ、ついで南へと反転させ、フランス軍の追撃をかわそうとした。

しかし歩兵を置き去りにしてまで速度を重視していたジャン二世の軍は、急速に黒太子のイングランド軍の背後に迫っていた。イングランド軍の後衛部隊は、度重なるフランス軍前衛との接触で、じわじわと損害を出し続けていた。

そして九月十六日、黒太子は自ら戦いに適した地点を選んで踏みとどまってフランス軍を迎え撃たない限り、このままずるずると敗走させられるということに気づいた。彼は翌日、フランス軍がすでに彼らを追い越してポワティエの町へ向かっていることを知り、その南方に位置する森の背後に部隊を布陣させた。

ポワティエの戦い

九月十八日、黒太子は決戦に備えて部隊を展開した。中央の本隊を率いる彼は、ソールズベリ伯とウォーウィック伯の部隊を前衛として左右に並べて展開させ、さらにその外側に長弓兵を置き、オックスフォード伯とサフォーク伯に後衛を担当させた。

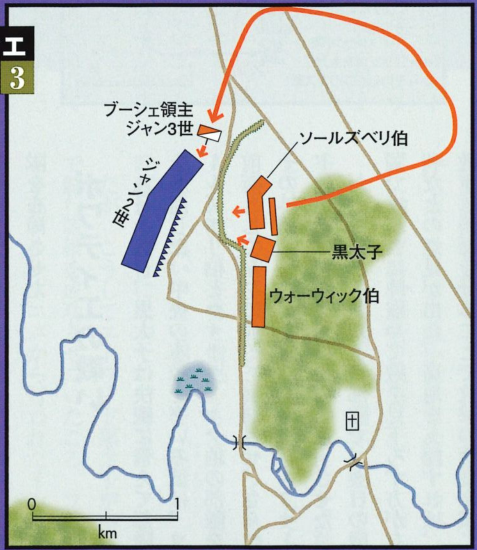
だがこのとき黒太子の部隊で、翌日の戦闘では高台に陣取って敵を見下ろす方が有利だとの意見が出た。高地を支配すれば、敵軍は斜面を登ることで攻撃の速度を減じ、



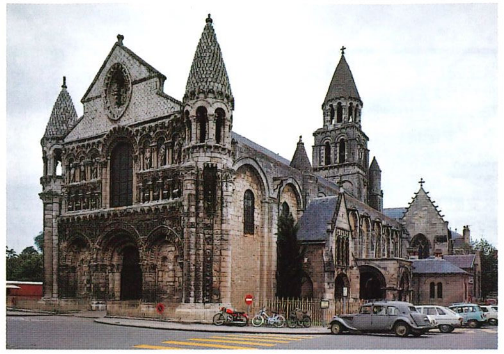
ヌアイエの森を背に布陣したイングランド軍に対し、フランス軍はその陣形を崩すべく、両翼の騎兵を突撃させた。しかし、イングランド軍はこれを長弓兵の待ち受ける罠に誘い込み撃退した。



フランス軍は王太子の軍を先頭に、徒歩部隊の攻撃をイングランド軍右翼に集中するが、黒太子は自軍と左翼から援兵を送ってこれを支えた。ジャン二世は攻撃中止命令を出すが、フランス軍の戦列は混乱状態となる。



黒太子はここが勝機と判断し、後衛の予備に乗馬突撃を命じた。戦場を大きく迂回し、側背を衝いたこの攻撃と、正面からのイングランド軍の反撃で、フランス軍は総崩れとなり、国王ジャン二世は捕虜となった。


ポワティエは古代から続く街で、パリとボルドーを結ぶ交通の要衝として発展した。8世紀にフランク王国のシャルル・マルテルが、イスラム軍を破った地としても名高い。上は同地の12世紀ロマネスク様式の傑作、ノートル・ダム・ラ・グランド教会。

友軍は弓兵の射程を伸ばすことができる。

黒太子はその進言を受け容れ、部隊をそのままの隊形で前進させ、両軍の間を流れるモワソン川を渡り、森の西側に布陣した。彼は父王がクレシーで行ったように騎兵を下馬させ、騎馬はいつでも騎乗戦闘が可能なように待機させておいた。

これに対してイングランド軍の北方に集結していたフランス軍は、いよいよイングランド軍を捕捉殲滅するときが来たと判断、イングランド軍の西方に部隊を展開させた。このときはフランス軍もクレシーでの失敗を繰り返すまいと騎兵の多くを下馬させ三重の戦列を形成、約五〇〇騎の精鋭だけを騎乗させたまま両翼に配した。

そして翌十九日、ついに戦いの火蓋は切られた。フランス軍は両翼の騎兵の突撃でイングランド軍の陣形を崩し、その後に徒歩部隊でこれを粉砕しようと試みた。黒太子はイングランド軍前衛に、敗走の危険がある敵前での後退を命じたが、ソールズベリ伯、ウォーウィック伯の両部隊は見事な規律と統率でこれを成功させ、フランス軍騎兵を長弓兵の罠へと誘い込んだ。

騎兵突撃はイングランド軍徒歩部隊に接触する前に頓挫した。フランス軍は続いて徒歩部隊からなる主力をイングランド軍右翼に集中させ、再び攻撃を実施した。黒太子は自身の本隊と左翼部隊から戦力を引き抜いてソールズベリ伯の右翼に増強、これを支える。

イングランドの騎士や兵士たちは、黒太子から戦闘中の捕虜の身柄拘束および略奪を禁止されていた。当時の戦闘は戦いのさなかであっても一騎打ちや捕虜との身代金交渉、死んだ兵士の身ぐるみを剥ぐなどの行為が日常的に行われていたが、黒太子のイングランド軍は勝利が確実となるまでは、戦いそのものに集中するよう命じられていたのである。

それゆえ、彼らのフランス軍の攻撃に対する守りは堅かった。戦況を観察していた

＊後衛＝後衛部隊は、オクスフォードが左翼部隊の背後に、サフォークが右翼部隊の背後に陣取り、ブーシェ領主の騎兵予備は、サフォーク隊と共に、右翼ソールズベリ隊の背後で待機していたと思われる。

フランス王ジャン二世は勝利は遠のいたと判断し、後続部隊の進撃を中止させようとした。ところがこれでフランス軍の戦列は命令に従って後退するもの、戦闘を続けるもの、あらたに戦場へ向かうものが混ざり合い、混乱に陥ってしまった。

黒太子は反撃の機が熟したと察し、まだ戦闘に参加していない後衛*の予備部隊に騎乗を命じ、フランス軍の側面に回り込んでその背後を突かせた。アキテーヌにおいて黒太子の側近でもあったブーシェ領主ジャン三世が率いる、このイングランド軍の騎兵突撃は、混乱していたフランス軍にとどめを刺すこととなった。

フランス軍は弓兵、歩兵、騎兵の巧みな連携に撃破され、騎兵の攻撃をもろに受けた本隊ではフランス王自身が捕虜になってしまった。こうして「ポワティエの戦い」は一〇年前のクレシーに続き、またしてもイングランド軍の大勝利に終わったのである。

黒太子の退場と歴史の行方

イングランドの王子エドワード黒太子は、ポワティエの勝利によって百年戦争の歴史に燦然とその名を残した。だがこれはまた、彼の栄光の頂点でもあった。

イングランド軍の騎行戦術は敵に大きなダメージを与えはしたが、それは自身をも消耗させるものだった。イングランド王家は一度の遠征で、略奪によって得た戦利品の二～三倍もの軍資金を費やしていたのである。

黒太子はその後、一三六七年にフランスとカスティリャ地方の君主との争いに介入し、戦いには勝利したものの財政をさらに悪化させて、その埋め合わせにアキテーヌでの租税を上げるとともに略奪はさらに酷くなり、その名声に傷をつけることとなった。

そして父であるエドワード三世よりも一年早い一三七六年、戦場で病に倒れた彼はイギリスへと帰り、ついにイングランド王となることなく、故郷で四六年の短い生涯を閉じたのである。

一方、捕虜となったジャン二世は黒太子から伝説として語り継がれるほどの厚遇を受けたが、王としてフランスに帰ることなくイギリスで客死した。

こうして「百年戦争」は主役たちが入れ替わり、ゲクラン元帥やジャンヌ・ダルク、そしてブルゴーニュ公シャルルらが登場することになる、別の戦いへと向かっていったのであった。



イギリスのケント州カンタベリー大聖堂にあるエドワード黒太子の墓所。棺の上部には真鍮金メッキの甲冑姿の太子の彫像が横たわっている。副葬品として獅子の飾りのついた大兜や篭手、陣羽織などが今日に伝わるが、痛みの激しいそれらに代わり、現在では複製が吊り下げられている。英国騎士道最大の英雄はこの地で静かに眠り続けている。

〈参考文献〉David Nicolle『Poitiers 1356』(Osprey)／David Green『The Battle of Poitiers 1356』(Tempus Publishing)
〈図版参考〉P27の地図は前記David Nicolleを、P28の地図はDavid Greenを主に参考に作成。

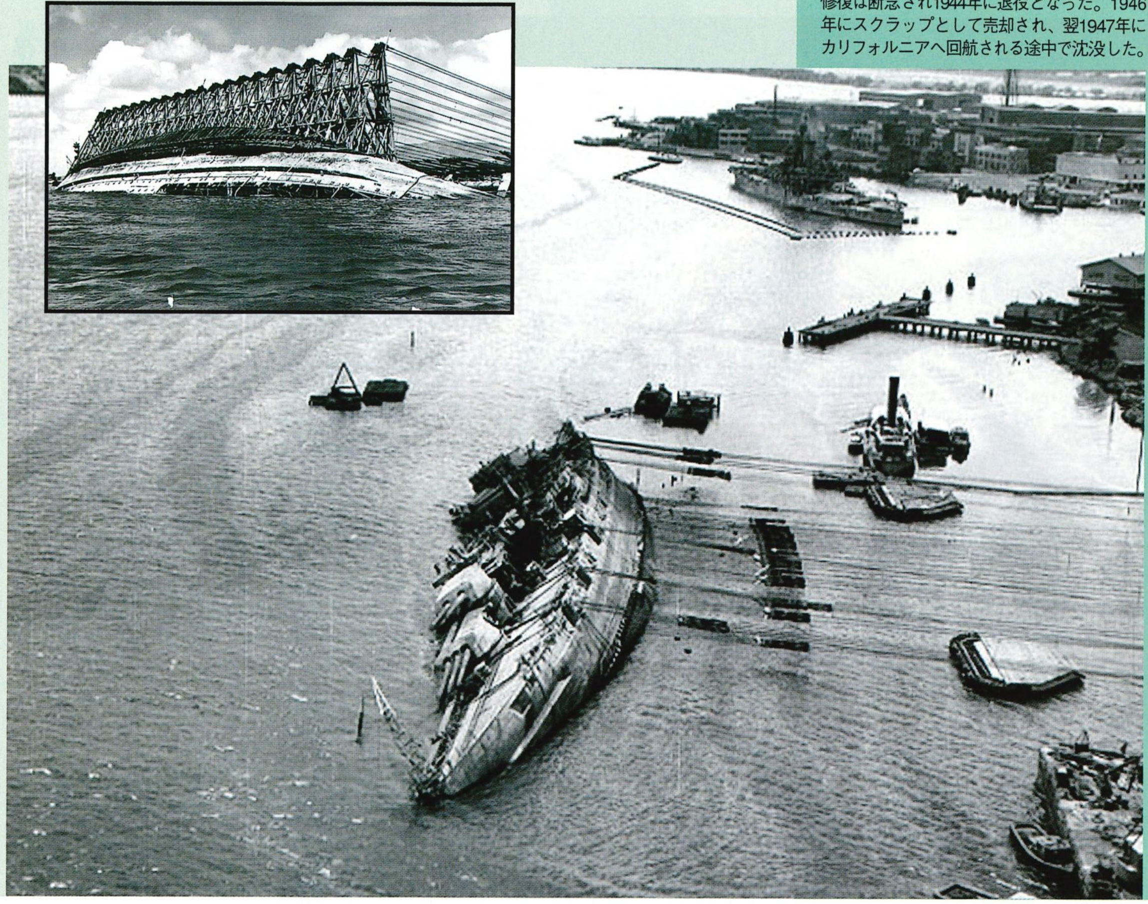
米太平洋艦隊を蘇らせた

真珠湾復旧作業

**日本軍の真珠湾攻撃で米艦隊は壊滅したはずだった
しかし米軍の驚異的な能力と努力により
大部分の艦艇は引き揚げられ
大改修された後に次々と戦列へと復帰していった**

文＝時實雅信

❶1943年3月、完全に転覆した戦艦『オクラホマ』の引き揚げ。同艦の船底に設置された櫓にワイヤーを取り付け、フォード島からウィンチで巻き上げて引き起こすという大掛かりな作業だった。❷右舷に30度傾いた状態にまで引き起こされた『オクラホマ』の様子。同艦は損傷が激しい上に旧式艦だったため、修復は断念され1944年に退役となった。1946年にスクラップとして売却され、翌1947年にカリフォルニアへ回航される途中で沈没した。



日本海軍は真珠湾攻撃で米太平洋艦隊に壊滅的な打撃を与えたが、実際には真珠湾で損傷した艦艇のほとんどが、その後戦線に復帰している。

米軍は太平洋戦争後半には毎週のように護衛空母や輸送船を建造、物量で日本軍を圧倒した。その一方で損傷した艦艇を迅速に修復、相次いで前線に送り出していた。消耗戦を勝ち抜く上で、建造に長期間を必要とする戦艦や空母といった大型艦はもちろん、小艦艇をもその喪失をいかに最小限にとどめるかに米軍は腐心した。そして、その一端はすでに真珠湾攻撃後の復旧作業で見て取れるのである。

昭和十六年（一九四二）十二月七日（日本では八日）当時、真珠湾には空母を除く米太平洋艦隊の主力が停泊していた。特に日本軍機の標的となった八隻の戦艦の被害は甚大で、小破だった『ペンシルヴァニア』と『メリーランド』を除いて、いずれも大損害を被った。

もしこれが外洋だったら戦艦以下、半数近くが喪失されていたかもしれないが、幸い湾内の水深が浅く着底しても船体が完全に水没しなかったため、引き揚げて修理が可能だった。それでもこれだけの数の艦艇を修理し、戦線に復帰させるのは容易ではない。

真珠湾攻撃のモデルとなったタラント港攻撃で英軍機の襲撃を受けたイタリア艦隊が、その後、戦力を大幅に減じたまま大戦を戦ったことを考えれば、米軍は前例のない驚異的な復旧を実現したといえる。それはまさに国家の威信をかけた一大プロジェクトであった。

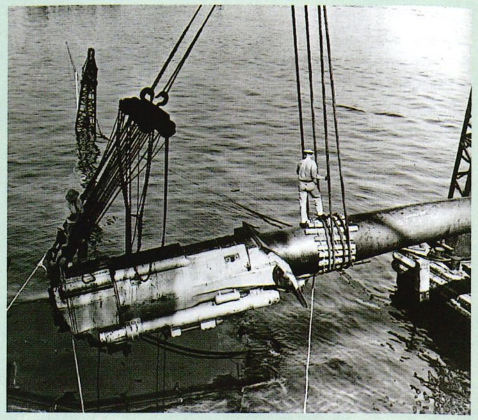
真珠湾復旧作業の過程は流れ作業のように効率的だ。まずは損傷が少ない艦からドックでの修理が始まっている。たとえば撃墜された日本軍機が衝突し、さらに爆弾も命中した水上機母艦『カーチス』のように、わずか四日で修理を終えた例もある。

ただし、半数以上が大破着底または転覆沈没した戦艦群は、サルベージが必要だった。中でも完全に転覆した『オクラホマ』は、最も困難な引き揚げ作業となった。それは船体に取り付けたワイヤーをウィンチで巻き上げて引き起こすというものだった。

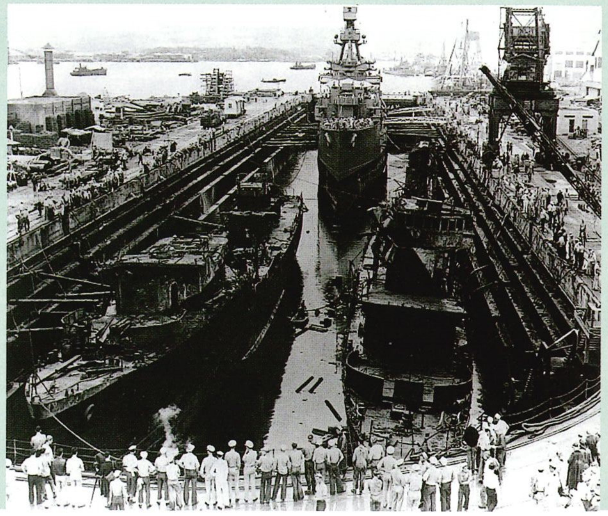
また、いずれの艦も引き揚げ前には潜水夫が水没した艦内に入り、利用可能な備品や装置を回収、さらに魚雷などによって損傷した部分の補修を行っている。損傷のひどい『アリゾナ』などは廃棄が決まったが、解体の過程でその主砲はオアフ島の沿岸砲台に転用されている。米軍の姿勢は徹底しており、使えるものは極力再利用された。

それでも、真珠湾の海軍工廠は本来は補修用の施設であり、大規模な修理には適さなかった。さらに損傷艦の数が多いこともあって、本格的な修理には米本土の海軍工廠が充てられた。

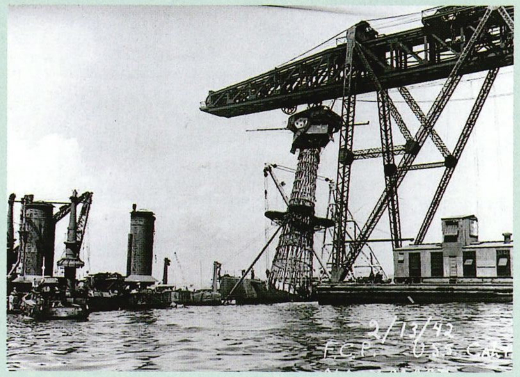




⬅魚雷２本と爆弾を受けて大破着底した戦艦『カリフォルニア』は、1942年3月24日に引き揚げられた。これは3月30日の姿。⬆同年1月初旬、上甲板まで水没した同艦の三番主砲塔から取り外された砲身（50口径14インチ砲）をクレーンで引き揚げている様子。



⬇ドック内で被弾し大破した駆逐艦『キャシン』（右）と『ダウンズ』。1942年1月5日の撮影。2隻とも被弾とその後の火災で損傷が著しく、いったんは廃棄が決まったが、損傷した船体の大部分を新しいものに取り替えた後に米本土へ回航し、大改装されて再就役した。奥に見えるのは修理中の軽巡『ラーリー』。



⬆引き揚げに先立つ、浮きクレーンによる戦艦『カリフォルニア』の損傷した後部籠マストの撤去作業。1942年1月13日の撮影。12月7日の真珠湾攻撃後、損傷艦の引き揚げと修復作業が、驚くべき速さで行われたのは、港湾施設の被害が軽微だったことが大いに影響している。

戦史分析



米重巡の輪型陣を破り、
水雷戦隊を突入させる……
夜戦のスペシャリストとして
猛訓練を続けてきた
帝国海軍の巡洋艦部隊は、ついに
ソロモンの海で宿敵である
連合軍重巡部隊と邂逅した！

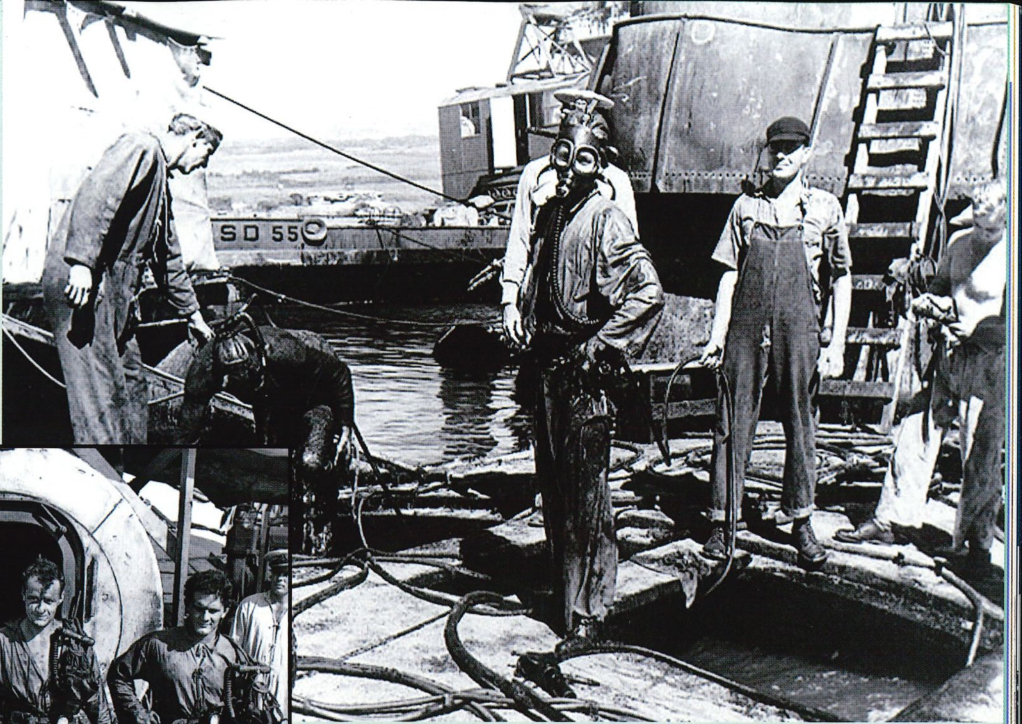
精鋭日本巡洋艦部隊の栄光と限界

第1次ソロモン海戦

THE FATE OF JAPANESE CRUISER

戦技訓練中の『加古』を『古鷹』から見る。日本の巡洋艦は駆逐艦と協同して行う大規模な夜戦の訓練に力を入れていた。昭和15年の撮影。

文＝荒川佳夫　図＝石橋孝夫



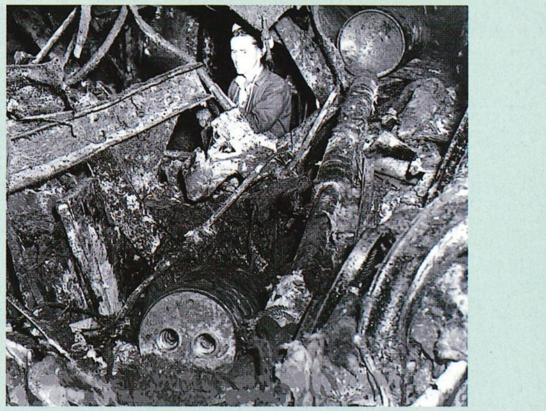


➡戦艦『アリゾナ』から利用可能な部品を回収する潜水夫。1943年5月25日の撮影。
⬇高圧酸素室の前に立つ3人の潜水夫たち。真珠湾の水深は浅いとはいえ、破壊されて水没した船体内では有毒ガスも発生し作業は危険が伴った。海軍だけでなく民間の潜水夫も動員され、のべ2万時間、約5000回の潜水作業が行われた。

THE PACIFIC WAR 太平洋戦争 PHOTO GALLERY

米艦艇被害・修復状況

艦名	被害	修理状況
戦艦『ペンシルヴァニア』	小破	1942年3月大改装完了
戦艦『メリーランド』	小破	1942年2月修理完了
戦艦『テネシー』	大破	1943年5月大改装完了
戦艦『ネヴァダ』	中破擱座	1942年12月大改装完了
戦艦『カリフォルニア』	大破着底	1944年1月大改装完了
戦艦『ウェスト・ヴァージニア』	大破着底	1944年6月大改装完了
戦艦『オクラホマ』	転覆沈没	1944年9月除籍
戦艦『アリゾナ』	沈没	廃棄、後に記念艦
軽巡『ホノルル』	小破	1942年1月修理完了
軽巡『ヘレナ』	中破	1942年6月修理完了
軽巡『ラーリー』	中破	1942年7月修理完了
駆逐艦『ヘルム』	軽微	1942年3月復帰
駆逐艦『ショー』	大破	1942年6月修理完了
駆逐艦『キャシン』	大破	1944年2月修理・改装後再就役
駆逐艦『ダウンズ』	大破	1943年11月修理・改装後再就役
水上機母艦『カーチス』	小破	1942年1月修理後復帰
工作艦『ヴェスタル』	大破	1942年8月修理後復帰
機雷敷設艦『オグララ』	転覆沈没	1944年2月大改装後再就役
標的艦『ユタ』	転覆沈没	引き揚げ後に廃棄



⬆戦艦『ウェスト・ヴァージニア』の引き揚げ作業中に見つかった日本軍の不発弾の撤去作業。不発弾は画面中央下に見え、汚泥の中に半分埋まっている。大破着底した同艦の引き揚げにあたっては、潜水夫が艦内に補修材を設置し、650トンものコンクリートが充填された。同艦は『アリゾナ』『オクラホマ』に次いで被害が大きかったが見事に再生した。

損傷の大きい艦はまず真珠湾のドックで航行可能なまでに修復され、その後、ロサンゼルスのメア島海軍工廠と、ワシントン州ブレマートンのピュージェット・サウンド海軍工廠に順次回航、そこで大改装が行われたのである。

注目すべきは、米本土で単なる修理が行われただけではない点だ。米太平洋艦隊の戦艦は主力艦ではあったが、開戦当初すでに旧式化していた。そのためこれを機に、対空兵装の強化や艦橋部の改造、籠マストの撤去など、艦形が一新するほどの大規模な近代化改装が施されている。八隻の戦艦のうち五隻がこの大改装を受け、事実上新鋭艦として生まれ変わったのである。

こうした改装は小艦艇も同様で、ドック内で爆撃を受け大破した駆逐艦『キャシン』と『ダウンズ』は、通常なら廃棄処分となるところだが、主機関など主要部が利用可能だと判明したため、損傷した船体部分を廃棄、そこに新しい船体を取り付けて航行可能にした上で、米本土に戻し完全に修理・改装してから再就役させている。

喪失となったのは戦艦『オクラホマ』『アリゾナ』、標的艦『ユタ』の三隻であり、太平洋戦争を通じて米海軍が失った戦艦は、この二隻のみだった。

復帰したこれらの米艦艇が、その後、米軍の反攻に加わっていた事実は、当時の日本軍には知る由もなかった。

〈参考文献〉Naval historical center Home Page, Photographic Section, Online Library Selected Images, Event, Pearl Harbor Raid 7 December 1941, Post-Attack Ship Salvage／『写真 太平洋戦争〈第１巻〉ハワイ作戦、南方攻略作戦』光人社ＮＦ文庫

近代巡洋艦の誕生

一九三七年（昭和十二）五月、イギリス国王ジョージ六世の即位にあたり、スピアヘッドにおいて記念の観艦式が執り行われた。式には各国海軍艦艇が招かれ、我が国からは『妙高（みょうこう）』型重巡洋艦の『足柄（あしがら）』が参加していた。

その際、低い乾舷のスマートな船体に二〇・三センチ砲を一〇門も備える『妙高』型を、詰めかけた外国人記者が「飢えた狼」と評したのは、あまりにも有名な話である。

この外国人記者の発言は、他国の同クラスの巡洋艦に比して重武装であった日本製巡洋艦に驚嘆したのはもちろんであるが、そこには多少の皮肉も込められていたらしい。彼らは日本の巡洋艦に瞠目すると同時に、「我々なら巡洋艦をこんな風には造らない」という感想を抱いていたのだ。

まさしく巡洋艦という艦種は、各々の海軍の設計思想や運用方針、有事の際の戦略戦術などを色濃く映し出しているのである。

巡洋艦のルーツをたどれば、帆走軍艦時代のフリゲートに行き着くという。フリゲートは当時の主力艦である戦列艦よりも幾分小型で砲戦力では劣るが、耐航性と耐波性に優れ、艦隊前衛での索敵や船団護衛、通商破壊を主任務としていた。

甲鉄艦と蒸気機関が登場した十九世紀後半以降、フリゲートをはじめとする従来の帆走軍艦は時代遅れとなり、新式の軍艦が求められる中でフリゲートの任務を引き継いだ新艦種「クルーザー」――巡洋艦も登場し、舷側に装甲帯を持つ甲帯巡洋艦、装甲帯を廃した代わりに中甲板に装甲を施した防護巡洋艦、舷側と甲板の両方に装甲を持つ装甲巡洋艦、舷側・甲板ともに装甲を持つが装甲巡洋艦よりは軽微にとどめた軽巡洋艦（ロンドン条約以後の軽巡洋艦とは別種であることに注意）などが建造されてゆく（99ページの図を参照）。

このうち装甲巡洋艦は本来の巡洋艦の任務の他に、艦隊の準主力艦としても期待されるようになり（日露戦争での活躍はつとに有名である）、やがて戦艦の高速化と合一するかたちで巡洋戦艦へと発展することになる。

一方の防護巡洋艦や、スカウトと呼ばれた快速の偵察巡洋艦などは、軽巡洋艦の形態に統一されてゆき、一九一四年に勃発した第一次世界大戦では、この軽巡洋艦が巡洋艦戦力の主流を占めるようになった。

この軽巡洋艦はフリゲート時代からの任務に加え、魚雷および水雷艇の発達に伴って水雷艇部隊の旗艦としても利用されるようになる。これらの任務に堪えうる航洋性と高速性、相応の武装と防御力を備えた巡洋艦の始祖は、一九一四年に竣工したイギリス海軍の『アリシューザ』級であるといわれている。

この『アリシューザ』級の登場をもって、多種多様な形態の巡洋艦が混在した時代は終わりを告げ、近代巡洋艦の時代が始まるのである。

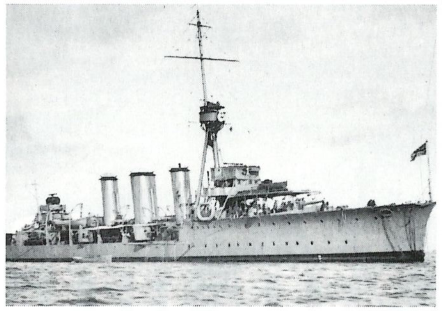
日本近代巡洋艦の系譜

八八艦隊計画

第一次世界大戦勃発当時、我が帝国海軍は日露戦争で活躍した装甲巡洋艦と防護巡洋艦からなる巡洋艦戦力を有していたが、近代巡洋艦の主役である軽巡洋艦は一隻も保有していなかった。

そこで一九一四年（大正五）、イギリス海軍の『アリシューザ』級を手本とし、新たに軽巡洋艦の建造に乗り出した。これが日本初の近代巡洋艦となる『天龍（てんりゅう）』型である。

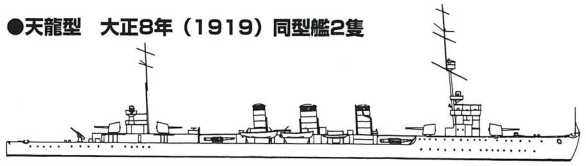
当時の帝国海軍は七〇〇〇トン以上の巡洋艦を一等、それ未満を二等と分類していたため、基準排水量三二三〇トンの『天龍』型は竣工後、二等巡洋艦に類別された。



装甲巡洋艦が重装甲、大火力化して戦艦に近づいていったのに対し、偵察巡洋艦は軽装甲、軽武装で高速化の方向に進化した。この『アリシューザ』級は従来の重油、石炭混焼方式から重油専焼方式に変更され、28ノット以上の速力を実現したが、これは英国海軍がドイツの小型巡洋艦の高性能化に対抗する意味もあった。重油専焼方式は急激な速力の変更への対応が早く、燃料の補給も簡単で、なにより排煙が薄いために敵から発見されにくいというメリットがあったが、当時は燃料補給のためのインフラが十分に整っていないというデメリットもあった。写真は同型艦の『オーロラ』。

日本巡洋艦発達史① 天龍型／5500トン型／夕張

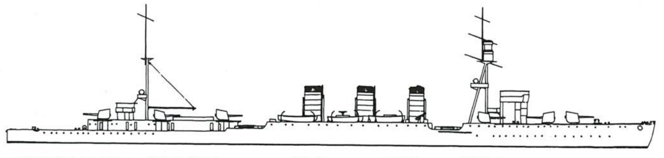
●天龍型　大正8年（1919）同型艦2隻



基準排水量 3230t／吃水線長 138.45m／速力 33.0kt／兵装 14cm単装砲×4、53.3cm3連装魚雷発射管×2

英海軍の『アリシューザ』に遅れること5年、大正8年に完成した日本初の軽巡洋艦である『天龍』型は、単艦での偵察任務はもとより、高速の駆逐艦の嚮導艦としての役割を担い、33ノットという高速力を実現しているが、重油／石炭混焼缶の採用は、重油の安定供給に不安のあった日本の事情を反映したものだ。

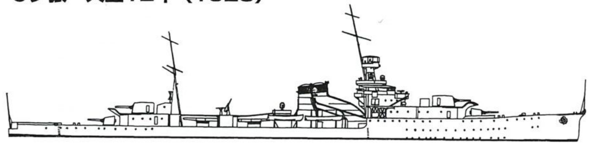
●5500トン型　大正9年(1920) 同型艦14隻



基準排水量 5100t／吃水線長 157.59m／速力 36.0kt／兵装 14cm単装砲×7、53.3cm連装魚雷発射管×4（球磨）

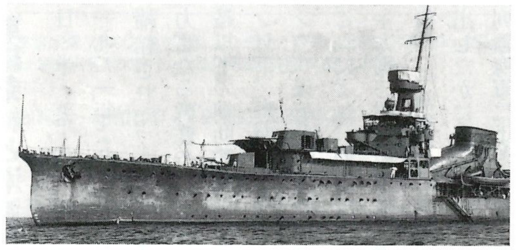
『天龍』型では速力、火力ともに不足を感じた日本海軍は、八八艦隊の標準的な軽巡洋艦として、『天龍』型を拡大した5500トン型軽巡洋艦を計画し、3タイプ、14隻を大正9年から14年にかけて完成させた。速力は36ノットを超え、火力も14センチ砲7門と同時期の英軽巡よりも強力であった。第2グループの『長良』型より魚雷発射管を61センチ連装4基に強化している。

●夕張　大正12年（1923）



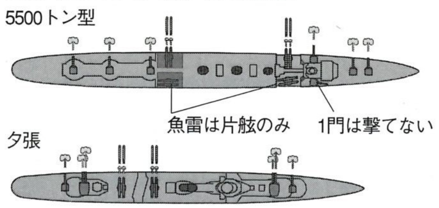
基準排水量 2890t／吃水線長 136.35m／速力 35.5kt／兵装 14cm連装砲×2、同単装×2、61cm連装魚雷発射管×2

『夕張』は5500トン型軽巡洋艦と同等の能力を持つ艦をできるだけ小さな艦型で実現し、建艦費用を抑えるための実験艦として建造された。完成した『夕張』は確かに5500トン型に互する性能を発揮し、日本の設計能力の優秀さを示した。その反面、艦型が小さいためにその後の改装の余地が少なく、艦載機の搭載が見送られたり、太平洋戦争中の対空兵器の増備にも限りがあったが、その設計手法は続く『古鷹』型以降の巡洋艦や駆逐艦に生かされた。



『夕張』の艦型がコンパクトにまとまった秘密のひとつに、主砲を連装化して背負い式配置にした点にある。大砲を立体的に積み上げる背負い式配置は建造に手間がかかるが、その分限られたスペースを有効に使うことができた。

画期的だった『夕張』の兵装配置



『夕張』はすべての兵装を中心線に配置することにより両舷に指向することが可能となり、さらに主砲の連装化、背負い式配置によりスペースを最大限に生かしている。

イラスト＝胃袋豊彦

一九一九年（大正八）に竣工したこの『天龍』型は、日本の巡洋艦として初めて、水雷戦隊旗艦としての役割を期待された艦でもあった。以後、日本の巡洋艦と水雷戦隊は切り離せぬ組み合わせとなってゆくが、その理由は当時の国防方針に求めることができる。

日露戦争終結後の一九〇七年（明治四十）、我が国初の国防方針が策定されたが、そこでは仮想敵国としてロシアに次いでアメリカの名が浮上しており、帝国海軍は増強著しいアメリカ海軍に対する戦備として、戦艦八隻、装甲巡洋艦八隻（のち巡洋戦艦八隻に変更）を主力とする、いわゆる「八八艦隊」の整備を達成目標として定めた。

また、いざ戦争となった場合には、アメリカ海軍に対して帝国海軍が採りうる戦略は日本近海での迎撃決戦しかないと判断された。この決戦思想は海軍の基本戦略として、太平洋戦争時まで受け継がれてゆくことになるが、当然のことながら巡洋艦をはじめとする艦艇群の整備も、その基本をふまえて展開してゆくことになる。

日本近海での迎撃決戦において巡洋

艦に与えられた役割は、広大な太平洋を侵攻してくる敵艦隊を持ち前の航洋性と高速性によっていち早く発見し、決戦ともなれば水雷戦隊旗艦としてその砲力および魚雷兵装をもって水雷艇を支援することであった。

そしてその任務を全うすべく建造された初の巡洋艦が、一四センチ砲四門、三連装魚雷発射管二基を備えた『天龍』型なのである。しかし排水量四〇〇〇トン弱の『天龍』型は武装・防御ともに充分ではなかったため、帝国海軍は『天龍』型を発展大型化し、一四センチ砲を七門、連装魚雷発射管を四基搭載する五五〇〇トン級軽巡洋艦の建造に着手する。通称五五〇〇トン型と呼ばれたこの型は、一九一七年（大正六）から一九二〇年（大正九）までの数次の艦隊拡張計画において、改良を続けながら『球磨（くま）』型五隻、『長良（ながら）』型六隻、さらに『川内（せんだい）』型三隻と建造されることになる。

また、この五五〇〇トン型のうち、大正六年度計画艦の中の一隻は、五五〇〇トン型と同等の戦力を持ちながら建造費を節減できる小型巡洋艦の試作艦として完成している。それが『夕張（ゆうばり）』で、二八九〇トンのコンパクトな船体に、一四センチ砲六門、連装魚雷発射管二基を備えていた。

このように帝国海軍が軽巡洋艦の拡充に努めていた時期、諸外国も同様に巡洋艦戦力の整備を推し進めていた。

イギリスは排水量七五五〇トン、一五・二センチ砲七門のE級や、常備排水量九七五〇トン、一九・一センチ砲七門の『ホーキンズ』級などを建造、アメリカは常備排水量七〇〇〇トン、一五・二センチ砲一二門の『オマハ』級一〇隻の整備を開始していた。これらはいずれも『天龍』型を凌駕し、五五〇〇トン型と同等か、それ以上の性能を持つ艦であった。特に『オマハ』級の重武装は大きな脅威として認識された。

それに加え、将来的にはさらなる重武装・重装甲の艦が登場することも十分に予想された。そこで帝国海軍は、一九二〇年（大正九）に予算の全てが成立した八八艦隊計画において、新鋭艦にも対抗可能な八〇〇〇トン型大型巡洋艦四隻の建造を検討し始める。

しかしこの大型巡洋艦は、ついに建造されることなく建艦史の闇に沈む。その原因となったのは、一九二一年に締結されたワシントン海軍軍縮条約であった。

軍縮条約と漸減作戦

日・米・英・仏・伊の各国が参加して一九二一年より開催され、翌年二月に締結されたワシントン軍縮条約では、主力艦たる戦艦の新造が禁止され、巡洋艦以下の補助艦艇は基準排水量一万トン以下、備砲口径八インチ（二〇・三センチ）以下との制限が加えられた。

これにより、かねてから過熱していた主力艦の建造競争はひとまず終わりを告げ、「海軍休日（ネイバル・ホリデー）」と呼ばれる期間が現出したかに思えたが、この条約締結は列強海軍による新たな建艦競争の幕開けでもあった。

ワシントン軍縮条約によって八八艦隊計画を放棄せざるを得なくなった帝国海軍は、艦艇の整備計画の見直しを迫られた。巡洋艦も例外ではなく、すでに建造に取りかかっていた数隻の五五〇〇トン型と『夕張』を除く未着手艦は建造が中止され、八八艦隊計画の予算を整理して新たに七一〇〇トン型四隻と一万トン型四隻の建造が承認された。

このうち七一〇〇トン型は、もともと八〇〇〇トン型大型巡洋艦として計画が進められていたものである。その設計が開始された矢先の大正十年、平賀譲（ひらがゆずる）造船大佐（当時）によって軍令部に提出された試案が採用され、八〇〇〇トン型は七一〇〇トン型へと計画変更されたのである。

この新しい大型巡洋艦『古鷹（ふるたか）』型は、『夕張』の設計経験を生かして徹底的な重量軽減と武装強化が行われていた。乾舷の低い平甲板型船体で船殻重量を低く抑え、舷側甲鈑を船体構造の一部に利用することで鋼材の節約と船体強度の確保を同時に成し遂げた。そして、それによって余剰となった分の重量は、兵装にまわすという手法が採られたのである。

その結果『古鷹』型は、七一〇〇トンという比較的小型の船体に六門の単装二〇センチ砲と連装魚雷発射管六基を備える重武装艦として誕生した。当時の造船技術では二〇センチ砲を六門装備するには一万トン近い排水量が必要とされていたが、日本の造船技術者たちはその常識を覆したのである。

この『古鷹』型は対抗目標とされた『オマハ』級を上回り、『ホーキンズ』級をも凌駕する性能を発揮した。そのため諸外国からも「『古鷹』型は今後登場するであろう一万トンクラスの巡洋艦にも匹敵する」との評価が与えられ、驚異の眼差しを向けられたのだった。

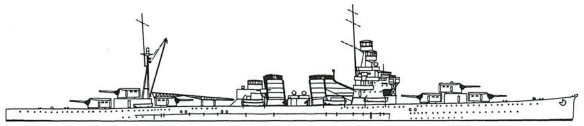
『古鷹』型は全部で四隻が建造されたが、三番艦の『青葉（あおば）』からは、軽量化のために間接揚弾方式を採用したため発射速度に問題のあった単装砲塔を、新設計の連装砲塔（三基六門）に換装したことで艦型が変化している。このため四番艦の『衣笠（きぬがさ）』とともに『青葉』型と称されるが、基本設計は『古鷹』型と同じである。

これら『古鷹』『青葉』型に続いて、一万トン型四隻の建造が開始された。これが『妙高』型である。この型は『古鷹』『青葉』型の拡大発展型ともいうべき巡洋艦で、ワシントン条約の制限いっぱいの一万トンの船体に連装二〇センチ砲塔五基と三連装魚雷発射管四基を備え、三五・五ノットの高速を誇る艦として誕生した。

当初、軍令部は技術的な観点から一万トンの船体に五基の連装砲塔を搭載することに懐疑的であったが、日本の造船官たちは『古鷹』型と同様の船体軽量化およびピラミッド型の砲塔配置によって懸念を払拭してみせた。加えて舷側に一〇二ミリ、中甲板には三五ミリ厚の甲鈑を装着しており、砲塔が

日本巡洋艦発達史② 古鷹型／青葉型／妙高型

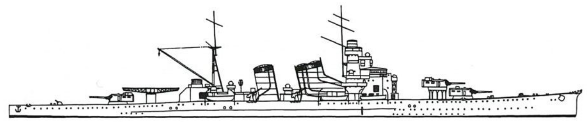
●古鷹型　大正15年（1926）同型艦2隻



基準排水量 7100t／吃水線長 183.53m／速力 34.5kt／兵装 20cm単装砲×6、7.6cm単装高角砲×4、61cm連装魚雷発射管×6、水偵×1

米海軍が初の偵察用の軽巡洋艦として整備を始めた『オマハ』級は、5インチ（15.2センチ）砲10門という強力な兵装をもち、日本の5500トン型の14センチ砲7門では対抗できないため、それを凌駕する20センチ砲搭載巡洋艦として建造された。砲配置は単装砲を艦の前後の中心線上に3門ずつピラミッド状の背負い式にしたものだが、砲弾薬の運搬や装填に人力による部分が多く、安定した発射速度を維持できないというのが用兵側の不満であった。

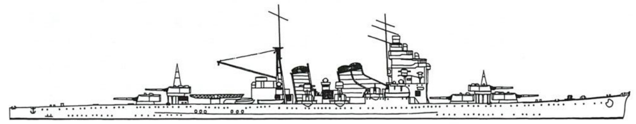
●青葉型　昭和2年（1927）同型艦2隻



基準排水量 7100t／吃水線長 183.58m／速力 34.5kt／兵装 20cm連装砲×3、12cm単装高角砲×4、61cm連装魚雷発射管×6、水偵×1

『古鷹』型の主砲配置は設計側の強硬な主張によるものといわれているが、発射速度の維持と防御の強化には砲塔砲の方が有利であるため、すでに設計の終わって建造準備の進んでいた『妙高』型の連装砲塔を『古鷹』型3番艦、4番艦に搭載したのが『青葉』型である。主砲の連装化により艦上スペースに余裕ができたため、偵察機の搭載（当初はクレーンで積み降ろした）や射出機の装備も可能であった。

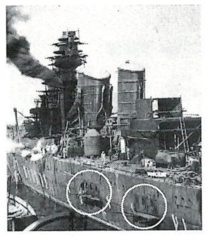
●妙高型　昭和3年（1928）同型艦4隻



基準排水量 10000t／吃水線長 201.50m／速力 35.5kt／兵装 20cm連装砲×5、12cm単装高角砲×6、61cm3連装魚雷発射管×4、水偵×2

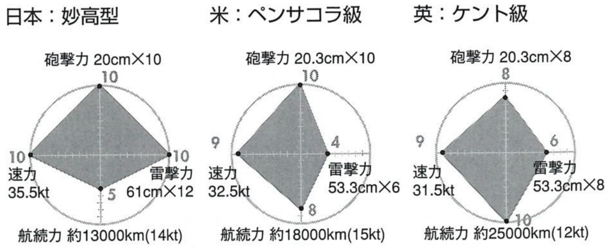
『古鷹』『青葉』型を拡大強化した偵察用の軽巡洋艦として、ワシントン軍縮条約の制限にあわせて建造された。20センチ連装砲塔5基に61センチ魚雷発射管3連装4基という強力な兵装は他国の条約型巡洋艦ではついに実現できなかったが、その裏では航続力や居住スペースが犠牲になっており、さらには排水量が新造時にすでに条約の制限を1000トン以上オーバーしていたという秘密があった。

巡洋艦の魚雷兵装



砲撃力の弱い巡洋艦にとって魚雷は大きな攻撃力だが、砲撃力を強化した20センチ砲搭載巡洋艦にも魚雷を搭載した。新造時の『古鷹』『青葉』『妙高』型は、魚雷兵装を中甲板の舷側に装備していた（写真○部分）が、これは大型巡洋艦は乾舷が高く、上甲板からの発射に不安があったためだ。だが、実際には波浪の影響により射入角度が乱れるなどこの方式も適しておらず、改装時に旋回式発射管を上甲板に装備し直している。

各国の条約型巡洋艦の比較



英米に比べて日本の巡洋艦の速力と攻撃力の高さは航続力の犠牲の上に成り立っている。漸減邀撃戦術を採用した日本海軍は、巡洋艦が長期間にわたって活動する可能性は低いと考えていた。

装甲化されていないことを除けば、初期の条約型巡洋艦（後述）の中で最も重防御の艦となっている。

その反面、他国の同級艦と比べて航続距離と居住性が犠牲にされていることは、日本の条約型巡洋艦の特徴といえる。『妙高』型三番艦『那智』の艦内を見学したイギリス海軍士官は、「これこそ本物の軍艦であり、これに比べたら我々の巡洋艦は贅沢な客船だ」と驚嘆したという。

そこに皮肉の意味が込められていたとしても、日本製巡洋艦が諸外国の度肝を抜いたことは確かであり、『妙高』型建造の情報が伝わると、これに対する有効な対抗艦を持たない米英は、ただちに同クラスの巡洋艦建造に乗り出した。『妙高』型の登場が、新たな建艦競争の幕を切って落としたのである。

この競争により、ワシントン条約の制限枠内で誕生した巡洋艦を、条約型巡洋艦と呼ぶ。各国共に制限範囲の上限ぎりぎりで最高性能の艦を造りあげようと邁進したが、それら全ての艦が同一目的のために建造されたわけではなかった。

アメリカ海軍巡洋艦の主任務は、艦隊の前衛や戦艦を中心とする主隊の周囲に展開し、索敵を行うと同時に接近してくる敵の巡洋艦や水雷艇を撃破することであった。一九二五年度計画の『ペンサコラ』級（二隻）に始まり、以降の『ノーザンプトン』級（六隻）、『ポートランド』級（二隻）、『ニューオーリンズ』級（七隻）、一九三四年度計画の『ウィチタ』にいたるまで条約型巡洋艦のすべてが、敵を寄せ付けない砲撃力と、敵を早期発見するための艦載水上偵察機の搭載数を重要視していた。水雷戦隊旗艦としての役割は期待されておらず、『ポートランド』級からは雷装が全廃され、またそれ以前のクラスについても、のちに全魚雷発射管を撤去している。

アフリカやアジアに多数の植民地を有するイギリスは、植民地警備と通商保護の任務に巡洋艦を用いており、広大な通商路をカバーするのに必要な航続力と航洋性、居住性を重視していた。そのためそれらの性能要求を満たすため、防御力と最高速力を犠牲にしているのがイギリス巡洋艦の特徴となっている。条約型巡洋艦の第一陣として一九二八年に竣工した七隻の『ケント』級などはその典型である。

一方、巡洋艦建造競争のきっかけを作った帝国海軍は、『妙高』型に続いて新たな一万トン型の建造に取りかかった。それが『高雄』型である。一九二七年（昭和二）成立の艦艇補充計画によって誕生した『高雄』型は、高い評価を得た『妙高』型を発展させたものであった。

前型からの大きな変更点はいくつかあるが、一つは主砲口径を条約制限上限の二〇・三センチ（八インチ）としたことである。さらにその最大仰角を七〇度として対空射撃も可能ならしめた（実際は砲塔旋回速度や発射速度の問題で有効な対空射撃は不可能だったが）。

防御の面でも改良がある。『高雄』型は前後主砲間のヴァイタル・パートの長さを短縮した集中防御方式をさらに突き詰め、舷側装甲の最厚部は『妙高』型をしのぐ一二七ミリとなっていた。また『妙高』型以前の型では中甲板に設置されていた魚雷発射管を上甲板へと移設し、魚雷誘爆の際の被害拡大を防止している。なお、発射管の上甲板への移設と、主砲口径の二〇・三センチへの拡大は、『妙高』型以前の型も近代化改装の際に行われている。

その他、『妙高』型から大きく変更されたのは、『高雄』型の最たる特徴となったのが、巨大な艦橋構造物である。『高雄』型は艦隊旗艦としての役割が期待されており、それに必要な設備や各兵科の指揮所を詰めこんだがための艦橋巨大化であった。

『高雄』型が計画された当時、帝国海軍はワシントン軍縮条約締結によって主力艦たる戦艦の保有比率を対米六割に制限されていた。迎撃決戦に必要な八八艦隊の整備が不可能となったのち、帝国海軍は渡洋してくる米艦隊に航空機、潜水艦、そして水雷戦隊による段階的な奇襲を加え、主力艦同士の戦闘の前に敵兵力を漸次減少させる作戦――いわゆる漸減作戦を基本戦略に据えた。

『高雄』型建造中の昭和五年、それまで『金剛』型戦艦を中心に編制されていた連合艦隊第2艦隊は、『妙高』型と『古鷹』型、『青葉』型を基幹戦力とし、これに水雷戦隊を加えた編制に改められた。この新たな第2艦隊の任務は、戦艦を中心とした主力部隊の前衛に進出して来寇する敵艦隊を捜索すると共に、これに夜襲を加えて敵戦力の漸減をはかることであった。

夜襲艦隊とも言うべき集団へと第2艦隊は生まれ変わったわけだが、この艦隊の旗艦としての役割を期待され、その機能を持って誕生したのが『高雄』型なのである。諸外国からは「カバのようだ」と揶揄された巨大な艦橋も、漸減作戦という帝国海軍独自の戦略によって形作られたものだといっていい。

また、同時代の条約型巡洋艦が雷装をそれほど重要視していなかった中で、『妙高』型や『高雄』型が強力な雷装を施されていたのも、一〇門もの二〇・三センチ砲を装備したのも、漸減作戦の基幹戦力として巡洋艦が期待されていたことの現れである。主力艦同士の戦闘に先駆けて行われる第2艦隊の夜襲において、その砲雷撃力によって敵巡洋艦の防御線を突破し、水雷戦隊の突入を支援することが、帝国海軍の条約型巡洋艦に与えられた使命であったのだ。

だが、この漸減作戦案は、八八艦隊計画と同様に、またしても軍縮条約に弄ばれたあげく、新たな戦術の登場によって葬り去られてしまう運命にあった。

重巡の誕生と戦争勃発

一九三〇年（昭和五）、激しさを増す補助艦艇の建艦競争に歯止めをかけよ

日本巡洋艦発達史③ 高雄型と夜戦戦術

●高雄型　昭和7年（1932）同型艦4隻



基準排水量 10000t／吃水線長 201.67m／速力 35.5kt／兵装 20.3cm連装砲×5、12cm単装高角砲×4、61cm連装魚雷発射管×4、水偵×3

『妙高』型に引き続いて建造された条約型巡洋艦だが、水雷戦隊による夜襲戦術の確立により、艦隊旗艦としての能力が求められたため、艦橋構造は巨大なものとなった。巨大な艦橋は砲戦時の目標となるために不利になるといわれているが、『高雄』型の想定する戦場は夜間なので問題とされなかった。主砲は『妙高』型の20センチから条約制限いっぱいの20.3センチに拡大され、魚雷も連装発射管4基が上甲板に装備された。

漸減作戦と夜戦戦術の変化

ワシントン軍縮条約により主力艦の建造を抑えられた日本海軍は、太平洋をわたってくる米艦隊を迎え撃つため、主力艦同士の決戦に先立って潜水艦や飛行機、水雷戦隊の攻撃によって敵主力艦の数を減らして、同等の戦力として決戦を行おうという漸減作戦を採用した。そのなかでも夜戦がもっとも重要視され、水雷戦隊だけではなく巡洋艦部隊や主力艦までも投入して夜戦での勝利が求められていた。

初期の夜戦戦術

夜間は大部隊の統一指揮は難しいとされ、軽巡洋艦が率いる水雷戦隊単位での襲撃が考えられていた。当時の53センチ魚雷の駛走距離は36ノットで7000メートル程度だったため、敵部隊に対する肉薄攻撃が水雷戦隊の基本戦術であった。

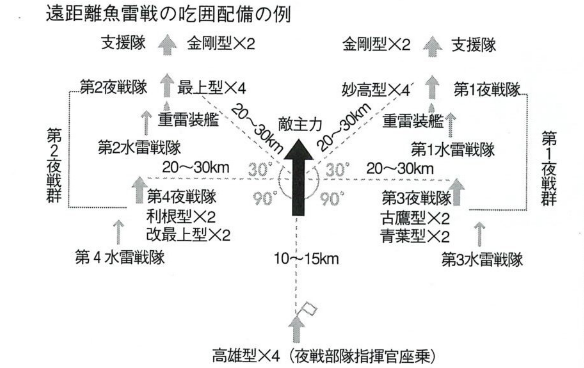
ロンドン条約以後の夜戦戦術

米重巡部隊が充実し、主力艦を中心にして周囲に重巡などが配置されると、水雷戦隊のみでは突入が難しい。そこで一つの水雷戦隊に対して一つの大型巡洋艦戦隊がペアとなって水雷戦隊の突入を助けるという戦術が確立しつつあった。ロンドン条約以降は米重巡の数が圧倒的に多くなるため『金剛』型戦艦を高速戦艦に改装し、夜戦時には主力の第1艦隊から夜戦部隊である第2艦隊に編入して、水雷戦隊の突入を助けるものとした。そのため、水雷戦隊4個と大型巡洋艦戦隊5個の整備が目標とされた。大型巡洋艦戦隊のうち1個は『高雄』型で編制された第2艦隊司令長官直率の部隊として夜戦全般の指揮を執ると共に必要に応じて味方の援護を行う。そのため、第2艦隊の旗艦はあくまで『高雄』型巡洋艦であり、戦艦はあくまでも借りものである。それは昭和19年の比島沖海戦まで引き継がれている。

93式魚雷登場以降の夜戦戦術

従来の魚雷の駛走距離は短く、魚雷戦イコール肉薄攻撃であった。しかし、昭和10年に駛走距離が40キロ以上という画期的な酸素魚雷が93式魚雷として実用化されると、水平線以遠の見えない敵の攻撃が可能となった。これを受けて5500トン型の『大井』『北上』を4連装発射管10基をもつ重雷装艦に改装し、既存の巡洋艦の魚雷兵装も改装時に増強した。これにより、4個水雷戦隊は敵主力から20～30キロの距離に展開し、約130本の魚雷の隠密発射を行って敵艦隊を混乱させてから肉薄攻撃に移るという戦術が確立した。訓練では20キロ以上の夜間遠距離雷撃が繰り返されたが、ルンガ沖魚雷戦などわずかな海戦でしか成果をあげることができなかった。

遠距離魚雷戦の吃囲配備の例



うと、ロンドンにおいて軍縮会議が開催された。一説には日本の条約型巡洋艦に脅威を感じた列国が、これの建造を封じようと新たな軍縮条約をもくろんだ結果ともいわれている。

この会議では主力艦建造禁止期間の延長と、補助艦艇の保有総トン数の規定が議題となったが、それに関連して巡洋艦の類別についても定義付けがなされた。

主力艦（戦艦）と航空母艦以外で口径五・一インチ（一三センチ）以上の砲を装備する基準排水量一八五〇トン以上の艦艇を巡洋艦と規定し、そのうち口径六・一インチ（一五・五センチ）を超える砲を装備するものを「A」、口径六・一インチ以下の砲をもつものを「B」と類別したのである。

この規定では、八インチ砲を装備する条約型巡洋艦はすべて（日本は『古鷹』・『青葉』型も）、「A」に分類されることになる。

この「A」艦を日本は「甲巡」、「B」を「乙巡」と称したが、アメリカ海軍はそれぞれ「ヘビー・クルーザー（重巡洋艦）」、「ライト・クルーザー（軽巡洋艦）」と呼んだ。八インチ砲装備の条約型巡洋艦を一般的に「重巡」と呼ぶのは、このアメリカ式の類別がわかりやすさも手伝って浸透したためである。

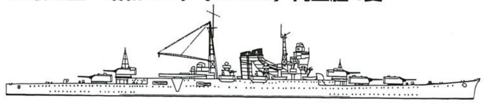
さて、このように類別された巡洋艦は主力艦と同様に、国ごとにその保有総トン数が制限されることになった。日本はここでまたしても、補助艦艇の保有総トン数を対米六九・七パーセントに抑えられ、「A」にあたる大型巡洋艦に至っては六〇パーセントに制限されてしまったのである。しかも建造中であった『高雄』型四隻が完成すれば、対米六割の制限総トン数を全て使い切ってしまうことは確実であった。漸減作戦の実質的な主力艦である「重巡洋艦」の保有数さえ、戦艦と同様に劣勢を強いられることになったのである。

この事態に直面した帝国海軍は、いまだ規定保有総トン数に余裕のあった軽巡洋艦枠（対米七割）を利用して、新たな巡洋艦を完成させる。それが一九三一年（昭和六）度計画の『最上』型である。この『最上』型は五基の三連装一五・五センチ砲を装備して完成したが、その砲塔は条約失効時には連装二〇・三センチ砲に換装可能であった。

また『最上』型の五番艦と六番艦は軍縮条約の破棄を念頭に置いて改設計されたため、はじめから二〇・三セン

日本巡洋艦発達史④　最上型／利根型／阿賀野型／大淀

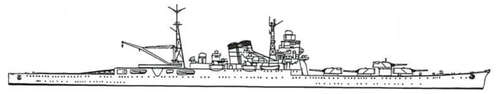
●最上型　昭和10年（1935）同型艦4隻



基準排水量 8500t／吃水線長 197.00m／速力 37.0kt／兵装 15.5cm3連装砲×5、12.7cm連装高角砲×4、61cm3連装魚雷発射管×4、水偵×3

ロンドン条約により、日本の20センチ砲搭載巡洋艦（重巡）の保有枠がいっぱいとなったため、1万トン巡洋艦の船体に15.5センチ砲3連装5基を搭載して条約型軽巡として完成した。条約失効により主砲を20.3センチ連装5基に換装して重巡に生まれ変わっている。新造時の15.5センチ砲を評価する声もあるが、日本の大型巡洋艦の相手はあくまでも米重巡であるため、20.3センチ砲の装備は絶対に必要だった。

●利根型　昭和13年（1938）同型艦2隻



基準排水量 8500t／吃水線長 197.00m／速力 35.0kt／兵装 20.3cm連装砲×4、12.7cm連装高角砲×4、61cm3連装魚雷発射管×4、水偵×5

ロンドン条約の軽巡の保有枠の残りを使って計画された大型巡洋艦だが、条約の失効を見越して建造中の早い時期に20.3センチ砲を搭載して重巡として完成した。主砲塔４基を前部に集中し、艦の後部を航空兵装とし砲撃力を犠牲にして５機の偵察機の運用を可能にしたのは、航空偵察力の強化要求によるもので、漸減作戦において潜水艦による雷撃を統制しようとしたものともいわれる。ただしこの艦型は2隻にとどまり、昭和16年度の㊥計画では『最上』型に準じた2隻が起工されたが未成に終わった。

●阿賀野型　昭和17年（1942）同型艦4隻



基準排水量 6625t／吃水線長 172.00m／速力 35.0kt／兵装 15.2cm連装砲×3、7.6cm連装高角砲×2、61cm4連装魚雷発射管×2、水偵×2

『利根』型までの巡洋艦は軍縮条約に縛られ、条約の制限ぎりぎりの性能を盛り込んでいたが、条約失効後に計画された本艦型は水雷戦隊旗艦として、従来の5500トン型に代わる軽巡洋艦として昭和14年度の㊃計画で4隻が建造された。

●大淀　昭和18年（1943）



基準排水量 8164t／吃水線長 189.00m／速力 35.0kt／兵装 15.5cm3連装砲×2、10cm連装高角砲×4、61cm3連装魚雷発射管×4、水偵×6

『阿賀野』型と同じく、昭和14年度の㊃計画で建造された潜水戦隊旗艦用の軽巡として同型2隻が計画されたが、太平洋戦争開戦により1隻はキャンセルされた。『利根』型でも触れたように潜水戦隊旗艦として洋上索敵能力と通信能力の強化により、潜水艦による統制雷撃を目的としていたといわれる。また『大淀』のために計画された高速偵察機『紫雲』も実用に至らなかった。

チ砲を搭載（船体前部に集中配置）し、さらに偵察能力強化のため船体後部に航空機搭載設備を設けた特異な艦型を持って完成した。これが『利根』型である。

この『利根』型以降、日本の巡洋艦建造はしばらく休止期に入る。無条約時代に突入し、戦艦や航空母艦といった大型艦船の建造が優先されたためでもあるが、一九三七年（昭和十二）に勃発した日中戦争の長期化が日本の台所事情を悪化させていたこととも無関係ではない。

そしてその大陸での戦火が、やがて太平洋へと飛び火して、アメリカとの衝突を招くことになるのである。漸減作戦での夜間襲撃部隊として研鑚を続けてきた巡洋艦戦隊の司令官や艦長、乗組員たちは、いよいよその技を発揮する時を覚悟したに違いない。

だが、よく知られているように、太平洋戦争は空母機動部隊の艦載機による真珠湾奇襲攻撃で火蓋が切られ、マレー沖海戦では陸上攻撃機がイギリスの二戦艦を撃沈した。山本五十六という男を連合艦隊司令長官に据えた帝国海軍は、伝統と化した漸減作戦を放棄し、自らの手で「航空主兵」という新しい戦争の手法を衝撃的に提示して見せたのだ。これ以後、太平洋の戦いは航空優勢を確立した側が勝利をつかむという、航空機を中心とした戦いへと様変わりしてゆくのである。

その戦いの中で巡洋艦戦隊に与えられた仕事は、空母機動部隊の直衛や船団護衛でしかなかった。むろん、それらも本来の巡洋艦の役割ではあるが、艦隊決戦用に特化された感のある日本重巡には、いささか不似合いな任務であることも確かだった。

一九四二年（昭和十七）二月には、『妙高』型重巡からなる第5戦隊がジャワ島沖で連合軍の巡洋艦・駆逐艦と遭遇し夜戦を展開（スラバヤ沖海戦）しているが、これも船団護衛中に偶発的に発生したもので、かねてから訓練を重ねてきた夜間奇襲攻撃とは別物だった。

そのような状況下で、まさに「髀肉の嘆」を託っていた重巡部隊に、スポットが当てられる事態が現出する。しかもそれは日本海軍の重巡が本来の目的とした夜間奇襲攻撃によってであった。

その戦いこそ、以後数年にわたって日米海軍の激戦が繰り広げられるソロモン海の戦いの端緒となった、第一次ソロモン海戦なのである。

第1次ソロモン海戦における両軍の参加兵力

		所属	艦種	艦名	主砲	魚雷
日本	第8艦隊	旗艦	重巡	鳥海	20.3×10	61×8
		第6戦隊	重巡	青葉	20.3×6	61×8
			重巡	古鷹	20.3×6	61×8
			重巡	衣笠	20.3×6	61×8
			重巡	加古	20.3×6	61×8
		第18戦隊	軽巡	天龍	14×4	53.3×6
	（第4艦隊）		軽巡	夕張	14×6	61×4
			駆	夕凪	12×4	53.3×6
連合軍		南方部隊	重巡	オーストラリア（豪）	20.3×8	53.3×8
			重巡	キャンベラ（豪）	20.3×8	53.3×8
			重巡	シカゴ	20.3×9	53.3×6
			駆	パターソン	12.7×4	53.3×16
			駆	バークレー	12.7×4	53.3×16
		北方部隊	重巡	ヴィンセンズ	20.3×9	
			重巡	クインシー	20.3×9	
			重巡	アストリア	20.3×9	
			駆	ヘルム	12.7×4	53.3×16
			駆	ウィルソン	12.7×4	53.3×16
		東方部隊	軽巡	サンファン	12.7×16	53.3×8
			軽巡	ホバート（豪）	15.2×8	53.3×8
			駆	モンセン	12.7×5	53.3×10
			駆	ブキャナン	12.7×5	53.3×10
		哨戒隊	駆	ラルフ・タルボット	12.7×4	53.3×16
			駆	ブルー	12.7×4	53.3×16

ソロモンに挙がる凱歌

ウォッチタワー

開戦初頭の奇襲攻撃で真珠湾のアメリカ海軍主力艦を無力化したのち、オランダ領インドシナなど南方の資源地帯を占領した日本は、第二段作戦としてその目をオーストラリア方面へと向けた。

大本営陸海軍部は協議の末、一九四二年（昭和十七）一月に占領したニューブリテン島ラバウルを拠点とし、東部ニューギニア、ソロモンおよびビスマルク諸島を支配下に収め、そこからさらにサモア・フィジー両諸島及びニューカレドニア島を攻略し、アメリカと英連邦オーストラリアとの連絡線を

遮断する作戦（FS作戦）に乗り出すことを決定した。

帝国陸海軍はオーストラリアに連合軍の兵力が集められ、反攻の拠点となることを恐れていたのであるが、連合軍の反攻作戦があるとしても、それは一九四三年（昭和十八）以降のことであろうと予測していた。

だがこの時期、アメリカ軍はすでに反攻作戦の準備を開始していたのである。アーネスト・キング合衆国艦隊司令長官の強い指導のもとで進められたこの作戦は「ウォッチタワー（見張り台）」と呼ばれ、一九四二年七月に実施が決定されたものだった。

折しもアメリカ軍は、二つの海戦で戦略的勝利をおさめ、戦争の潮目が変わりつつあることを実感していた。同年五月の珊瑚海海戦では空母『レキシントン』を失ったものの、空母『祥鳳』を撃沈し、日本軍による海上からのポートモレスビー攻略作戦を頓挫させていた。さらに六月のミッドウェー海戦では、日本の虎の子である空母四隻を一挙に葬り、真珠湾の恨みを晴らすことに成功していた。キングはこの勢いを緩めることなく、一気に反攻の拠点を確保しようと考えていたのだ。

キングが目をつけたのは、やはりオーストラリア方面であった。米豪の連絡線を確保すると同時に、その方面から漸進的に勢力圏を広げようというのである。この作戦の当初の攻略目標はサンタクルーズ方面であったが、その準備期間中、日本軍がガダルカナル島に飛行場を建設中との情報が舞い込み、急遽攻略目標が変更された。むろんガダルカナル島に、である。

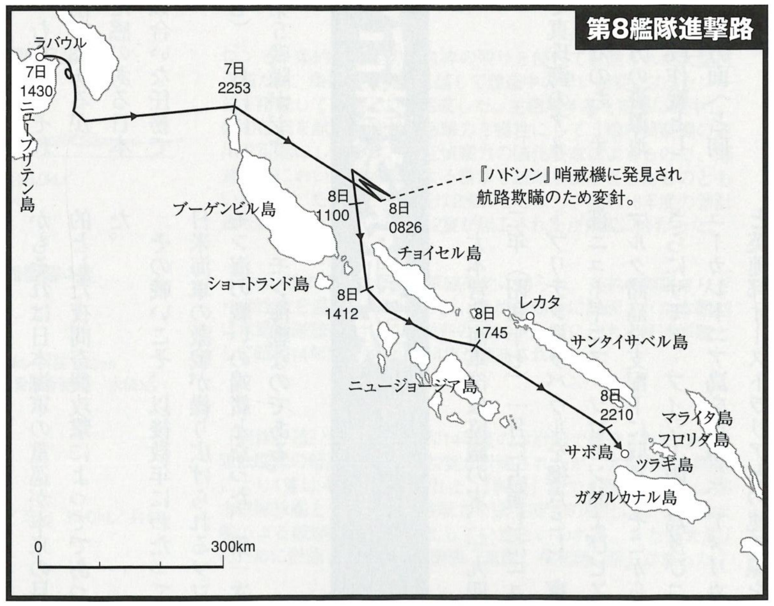
ミッドウェー海戦で四隻の空母を失った帝国海軍は、制空権確保を陸上基地に頼らざるを得なくなっており、オーストラリアからラバウルへ飛来する敵爆撃機を迎撃するためにも、前進基地となる飛行場を欲していた。しかしジャングルばかりのソロモン群島には適切な広い土地がなく、ようやく見つけた飛行場に適した島がガダルカナルであったのだ。

むろんアメリカが日本のこの行動を看過するはずもなく、ウォッチタワーはガダルカナル奪取作戦へと切り替えられ、米本土やハワイ、ニュージーランドなどから兵力がかき集められた。

わずかの期間で出撃準備を終えたウォッチタワー実行部隊は、七月三十一日の深夜、集結地のフィジーを進発した。実行部隊の最高指揮官は、『サラトガ』、『エンタープライズ』、『ワスプ』という空母三隻に加え新鋭戦艦『ノースカロライナ』を擁する第61任務部隊の司令官、フランク・フレッチャー中将である。実際にガダルカナル攻略を担当する水陸両用部隊の指揮官はリッチモンド・ターナー少将で、その配下には二三隻の輸送艦に分乗したヴァンデクリフト海兵少将の第1海兵師団（駆逐艦一一隻が直衛）、ならびに巡洋艦八隻、駆逐艦六隻からなるイギリス海軍ヴィクター・クラッチレー少将麾下の掩護部隊が組み入れられていた。

上陸部隊の兵力こそ少ないものの、艦艇群だけを見れば連合軍の反攻第一撃を飾るにふさわしい偉容であった。だが、急遽集められた艦隊は協同作戦のための打ち合わせが不十分で、上陸部隊の直接支援・護衛にあたる掩護部隊の司令官クラッチレーなどは、配下の艦艇の艦長と顔さえ合わせていなかった。

この打ち合わせの不徹底は、運命の夜に彼らの足をすくうことになるのである。





常に旗艦先頭を標榜していた日本海軍にとって、充分な攻撃力と旗艦設備を併せ持つ『高雄』型巡洋艦は欠かせない存在だった。写真は昭和17年11月頃の『鳥海』。

第8艦隊出撃

一九四二年（昭和十七）八月七日、早朝より開始された艦砲射撃と空母艦載機による爆撃ののち、アメリカ第1海兵師団はガダルカナルへの上陸を開始した。それと同時に、日本軍が水上機基地を設営していた対岸のツラギ、カブツ、タナンボコの三島への上陸も開始された。

ラバウルの日本軍がツラギ方面所在部隊からの緊急電信を受け取ったのは、午前四時一二分（日本標準時・以下同様）のことだった。「敵機動部隊来襲、救援求ム」で始まった電信は、「最後ノ一兵マデ守ル」とした六時一〇分を最後に途絶えた。

敵部隊来襲の報に接したラバウルの海軍部隊の反応は素早かった。第25航空戦隊はただちに陸上攻撃機と零戦からなる攻撃隊に発進を命じ、第8艦隊も麾下艦艇に出撃準備を下令した。

第8艦隊はニューギニア、ソロモン方面で活動する外南洋部隊として新編されたばかりの艦隊だった。『高雄』型重巡の『鳥海』を単独旗艦とし、その麾下には『古鷹』『青葉』型重巡からなる第6戦隊、『天龍』型軽巡の『天龍』と『龍田』からなる第18戦隊があり、その他にも潜水戦隊や根拠地隊も加えられていた。

この新編の艦隊を指揮する三川軍一中将は、連合艦隊司令部からの指示を待つことなく、麾下主要艦艇による敵船団攻撃を決断した。『鳥海』をはじめとする重巡は船団護衛などの任務でラバウルを離れていたが、ただちに集結が命じられた。殴り込みを敢行すべく、ただちに集結が命じられた。

新編の第8艦隊は各戦隊の合同訓練の経験がないばかりか、編隊航行に必要な各艦推進器の回転数調整も行われていなかった。そこで複雑な隊形や艦隊機動は避け、全艦を単縦陣に並べて一航過で戦闘を終え、ただちに敵航空機の行動半径外へ避退することが決められた。ガダルカナルに向かった攻撃隊からの敵情報告には、航空母艦発見との情報も含まれていたのだ。

作戦会議を終えた三川中将は旗艦『鳥海』に乗り込み、ラバウル港を後にした。一四時三〇分のことである。『鳥海』の後には、軽巡『天龍』と『夕張』*、駆逐艦『夕凪』が続く。さらに湾外へ出たところで第6戦隊の四隻の重巡、『古鷹』、『加古』、『青葉』、『衣笠』と合流、ソロモン海へとその針路を定めた。なお、ブナへの船団護衛の任についていた第18戦隊の軽巡『龍田』、駆逐艦『卯月』は集合時間に間に合わず、この作戦には参加していない。

三川艦隊が第6戦隊と合流した直後の一四時五〇分、アメリカ海軍の潜水艦『S38』がラバウルより出撃したこの艦隊を発見した。距離が近すぎたために魚雷は発射できなかったが、『S38』はすぐさま敵情を打電した。しかし、「駆逐艦二、艦種不明大型艦三隻、南東に航行中」というこの報告は正確性を欠いたうえに、通信系統の不備から水陸両用部隊司令官ターナーのもとへ届けられるのは翌八日の午前のことになる。しかも、その時点では古い情報となっていたため、ターナーはこれを重要視しなかった。

では、そのターナーたち連合軍はこの時、どのような行動をとっていたのか？　彼らは上陸作戦開始直後から、ラバウルより飛来する日本軍航空隊の激しい攻撃にさらされていた。目立った被害は駆逐艦『ジャービス』の中破と、輸送艦『ジョージ・F・エリオット』が炎上したくらいであったが、作戦が容易ではないことを悟るにはそれで充分だった。

＊『夕張』と『夕凪』＝両艦は第4艦隊所属だが、ラバウルに在泊していたため臨時に編入された。

特に空母機動部隊の司令官であるフレッチャー中将は、日本軍機による攻撃に誰よりも神経をとがらせていた。彼は事前の作戦会議において、「上陸作戦開始後四八時間以上は、我が機動部隊を作戦海域に留めておくことはできない」との判断を表明し、各部隊指揮官を唖然とさせていた。

フレッチャーは珊瑚海海戦とミッドウェー海戦の双方で空母部隊を率いており、『レキシントン』、『ヨークタウン』という大型空母が日本軍の攻撃で沈んでゆく有様を目の当たりにした男だった。日本人の手強さと、空母の脆弱性を痛感しているフレッチャーは、以後も攻撃が激化するであろう海域にこのまま留まり続けるつもりはなかったのである。

味方から思いもよらぬタイムリミットを押しつけられた水陸両用部隊は、早急な部隊の上陸と物資の荷揚げ完了を迫られた。その作業の間、輸送船団を護衛し、上陸を支援するのは、クラッチレーら掩護部隊の役目である。

作戦海域到着後、クラッチレーは部隊を三つに分け、ガ島周辺の警戒に当たっていた。水陸両用部隊の船団がひしめく泊地の西側には、ちょうどガ島とフロリダ島間の海峡を塞ぐかたちでサボ島という小島があり、その北と南は水路となっていた。クラッチレーは敵の侵攻があるならばこの水路方向からだと判断し、ここに巡洋艦部隊を配置した。

北方の水路には、『ヴィンセンズ』、『クインシー』、『アストリア』という米海軍重巡三隻と、米駆逐艦『ウィルソン』、『ヘルム』からなる部隊が置かれ、正方形を描く航路で警戒を続けている。さらにこの部隊の前方、水路の入口付近には駆逐艦『ラルフ・タルボット』がおり、水路を横断するかたちで往復運動を続けていた。

サボ島の南方水路は、オーストラリア海軍の重巡『オーストラリア』に座乗するクラッチレー自らが受け持ち、その直接指揮下には豪重巡『キャンベラ』、米重巡『シカゴ』、米駆逐艦『パターソン』、『バークレー』があった。そして北方部隊と同様に、こちらの前方にも水路の横断コースを往復する駆逐艦『ブルー』がいた。

前方警戒についた二隻の駆逐艦には、初期型ながらレーダーが搭載されていた。それは対空用であったが限定的に対水上目標にも使用可能で、実際に二隻は訓練中に一万二〇〇〇から一万八〇〇〇メートルの距離で巡洋艦を捉えることに成功していた。クラッチレーはこの二隻で接近する敵を早期発見しようと考えていたのである。

これらの部隊とは別に、泊地の東側水路にはノーマン・スコット少将指揮下の米軽巡『サンファン』、豪軽巡『ホバート』、米駆逐艦『モンセン』、『ブキャナン』が置かれ、東からの敵接近に備えていた。

この時、ターナーが最も恐れていたのは、忍び寄る潜水艦であった。よもや艦隊泊地への敵水上艦の侵入など、あろうはずもないと考えていた。もし敵がそれを企てても、配下の重巡部隊で阻止できると信じていたのである。

必勝ヲ期シ、突入セントス

八月七日夕刻、三川中将の第8艦隊は対潜水艦用の之字運動をとりながらセントジョージ海峡を南下、日没後は之字運動をやめて夜間警戒航行序列が発令された。

翌八月八日、ブーゲンビル島の北東に達した午前四時ごろ、旗艦『鳥海』と第6戦隊の重巡から四機の水上偵察機が発艦した。ガ島周辺の敵艦隊を偵察するためである。その後艦隊は南に進路を変えてブーゲンビル海峡を通過、一路ガダルカナル島を目指す。

その矢先の八時二六分、上空にロッキード『ハドソン』哨戒機が現れ、艦隊は二度にわたって触接を受けた。この『ハドソン』機は敵艦隊発見を打電するが、水偵搭載の巡洋艦を見誤ったものか「重巡三、駆逐艦三、水上機母艦もしくは砲艦二」と報告してしまう。そしてこの誤情報内の水上機母艦の存在に注目したターナーは、敵艦隊はサンタイサベル島のレカタに向かい、そこで水上機基地の設営にあたるのだろうと判断してしまうのである。

一方、運を味方につけた第8艦隊のもとには、偵察に送り出していた水偵からの報告が集まり始める。それによれば、ガ島水域には「戦艦一、巡洋艦三、駆逐艦七、輸送船一九」ほどが遊弋しているという。しかし、三川たちが最も気にかけていた敵空母の存在は、ついに確認できなかった。

情報を総合した結果、こちらを日没前に攻撃可能な敵空母はガ島周辺二五〇海里以内にはいないと判断されたため、三川長官は敵泊地への突入を決断した。



米巡洋艦は、主力艦部隊を襲撃から守る強力な盾として整備されていった。写真の『ヴィンセンズ』に魚雷が装備されていないのは、遠距離魚雷が開発できなかったため、主砲の方が確実に遠くまで攻撃を行うことができるからである。

九時一〇分、三川長官は南東方面部隊指揮官と連合艦隊司令長官、ならびに軍令部総長に宛て、偵察機を収容次第ガダルカナル泊地へ突入する旨を打電する。この暗号電信は連合軍によって傍受されたが、暗号の解読に成功し、それがターナーの元へ届けられるのは、運命の夜が明けた後のことになる。

一一時頃、第8艦隊は二六ノットに増速し、ソロモン諸島の島々が形作る幅四〇海里ほどの水路へと侵入した。日没を迎えた一六時四二分、旗艦『鳥海』のマストに司令長官訓辞の信号旗が掲げられた。

「帝国海軍ノ伝統タル夜戦ニ於イテ必勝ヲ期シ突入セントス。各自冷静沈着克クソノ全力ヲ尽クスベシ」

軍縮条約による主力艦兵力劣勢という状況の中で編み出され、研鑽を重ねてきた夜間襲撃作戦が、その実施のために整備されてきた重巡部隊によって敢行されようとしていた。

その時に備え、艦内からは戦闘に必要のない可燃物が海上に投棄され、火災防止のために弾火薬庫漲水基弁が開かれた。

二一時一〇分過ぎ、ほぼ一二〇〇メートルの間隔で単縦陣を描いた第8艦隊各艦のマストに、味方識別用の白い吹き流しが掲げられる。時を同じくして水偵三機が射出された。艦隊に先行した彼らは、砲撃開始と同時に敵艦隊上空に吊光弾（ちょうこうだん）を投下する手はずとなっていた。

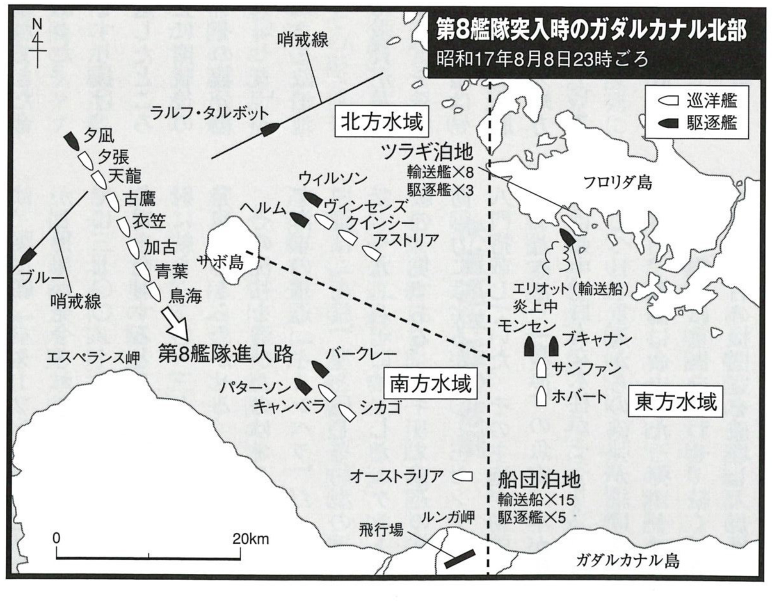
のちに第一次ソロモン海戦——連合軍側呼称「サボ島沖海戦」と呼ばれることになる戦いの火蓋は、今まさに切られようとしていた。

全軍突撃セヨ

その頃、ガ島泊地の連合軍は、恐れていた事態に直面していた。かねてから長期の戦闘水域滞在はあり得ないと宣言していたフレッチャーの機動部隊が、艦載機の損耗と艦隊の燃料不足を理由にガ島周辺海域からの避退を開始していたのだ。

上空掩護のなくなった艦隊と上陸部隊はいかに行動すべきか？ 二〇時三〇分頃、今後の対応を協議すべく、ターナーが旗艦としていた輸送艦『マコーレー』に各部隊の指揮官が集められた。重巡『オーストラリア』に将旗を掲げる掩護部隊司令官クラッチレーは、会議参加のために警戒航路を離れる際、僚艦『シカゴ』にその旨を発光信号にて伝達した。

しかし、この信号とその内容は北方



水路を警戒する米重巡部隊には伝わらなかった。クラッチレー不在の際に指揮権を受け継ぐべき先任は北方部隊の重巡『ヴィンセンズ』艦長リーフコール大佐だったのだが、彼は司令官が警戒水域から離れたことさえ知らなかった。連合軍重巡部隊は指揮系統を混乱させたまま、運命の瞬間を迎えることになったのである。

その原因の一端をつくったクラッチレーも参加した作戦会議では、緊急を要する物資を早急に陸揚げしたのちは、日本軍の航空攻撃が開始される前に輸送船団を泊地から退避させることが決まった。彼らが恐れていたのは航空機と潜水艦で、昼間に発見された艦隊はレカタ湾に向かっているものと判断していた。もしこの水域に現れたとしても、それはライオンの口の中に飛び込むようなものだと考えていた。

二一時四五分頃、水路を警戒していた部隊の各所で、「飛行機の音を聞いた」との報告が相次いだ。さらに前衛警戒艦の『ブルー』と『ラルフ・タルボット』のレーダーも飛行機らしきものを捉えた。しかしそれは味方の飛行機だと結論づけられた。敵であるなら、司令官のクラッチレーやターナーからなにか一報があるはずだ——。

だが、その飛行機は第8艦隊が放ったものだった。『鳥海』、『青葉』、『加古』、『衣笠』、『古鷹』、『天龍』、『夕張』、『夕凪』の順で単縦陣を組んだ第8艦隊では、二二時四〇分に総員戦闘配置が発令され、そのまま二六ノットで南方水路に向かっていった。前方ツラギ方向の夜空が赤く染まって見えたのは、昼間の爆撃で被弾した敵輸送艦がいまだに燃えているせいだった。

二二時四三分、『鳥海』は右舷二〇度、九〇〇〇メートルに駆逐艦らしきものを発見した。いつでも砲撃できる態勢を整えつつ左へ二〇度変針した『鳥海』だったが、敵はこちらに気づいた様子もなく、反転して遠ざかった。さらに七分後には左舷からも接近する駆逐艦があったが、こちらも何事もなかったように引き返していった。この二隻は前衛警戒についていた駆逐艦『ブルー』と『ラルフ・タルボット』であった。二隻のレーダーは島影に邪魔されて水上目標を捉えることができなかったのだ。

それとは反対に、第8艦隊の見張員は暗闇の中で九〇〇〇メートルの彼方に敵影を発見している。それもまた、夜間襲撃のために訓練を重ねてきた帝国海軍ならではの神業であった。

二隻の前衛警戒艦の間をすり抜け、艦隊がサボ島の南岸を通過したところで、三川長官は各艦の艦長に開戦後の独自戦闘指揮を許可した。その数分後の二三時三〇分、「全軍突撃セヨ」が下令され、艦隊は単縦陣のまま敵泊地への突入を開始した。

その直後、『鳥海』の見張員が左舷に敵影を発見、『鳥海』は魚雷を発射したが命中しなかった。この敵艦は昼間の爆撃で損傷し、破損した機関を騙し騙し運転しながらエスペランス岬方向へ避退していた駆逐艦『ジャービス』だった。

『ジャービス』をやり過ごした直後、今度は右舷見張員が九〇〇〇メートル先の暗闇に南東から北西に進む敵影を発見する。それは南方水路を警戒していた巡洋艦部隊であった。三川長官は躊躇なく、これの撃破を決断する。

『鳥海』は左へ変針、右砲戦に備えるとともに先行した水偵に吊光弾の投下を命じた。水偵はガ島の海岸寄りに吊光弾を投下、まばゆい光の中に敵艦のシルエットを浮かび上がらせた。

三川艦隊の突入に最初に気づいたのは、駆逐艦『パターソン』だった。しかし警報が発令された時、『鳥海』はすでに三七〇〇メートルにまで接近し、魚雷を発射するところだった。魚雷発射に続き、二〇・三センチ砲一〇門が発砲炎をきらめかせる。

その洗礼を浴びたのはオーストラリア海軍の重巡『キャンベラ』だった。同艦は『高雄』型と同じ条約型の重巡で、一九二八年に竣工した『ケント』級の一隻である。イギリス重巡の常で防御力には劣るが二〇・三センチ砲を八門搭載していた。その主砲が初弾を放った直後、『鳥海』の魚雷二本が艦首に命中、巨大な水柱がそそり立った。そこへ日本重巡からの砲弾が続けざまに落下、艦橋に命中した一弾がゲッティング艦長に重傷を負わせ、続く二斉射目が左右の機関室を破壊し大規模な火災を発生させた。

『鳥海』に後続する『青葉』、『加古』、『衣笠』は、『キャンベラ』の後ろから姿を現した重巡『シカゴ』に砲雷撃を加えた。『シカゴ』も条約型重巡『ノーザンプトン』級の一隻で、『古鷹』『青葉』型に勝る砲撃力を持っていたが、なす術もなく敵弾に叩かれ、魚雷一本の命中を喫した。



旗艦『鳥海』の探照灯に照射される北方部隊の『アストリア』または『クインシー』。夜戦にあたっては旗艦が率先して探照灯を照射して隷下部隊の攻撃を助けたが、それだけに敵の反撃も集中して受ける結果となった。

しかし『シカゴ』は『キャンベラ』ほどの損害を被らず、戦闘海域からの離脱に成功する。が、ボード艦長はここで重大なミスを犯してしまう。彼は北方部隊に対し何の警告も行わなかったのだ。そのツケを払わされるのは彼ではなく、何も知らない同僚たちであった。

五番艦の位置にいた第6戦隊の『古鷹』と、後続の『天龍』、『夕張』は敵駆逐艦と交戦しつつ、前方をゆく『鳥海』らを追っていた。しかしそこへ、炎に包まれた『キャンベラ』が隊列に割り込むコースで接近してきたため、『古鷹』は左に大きく転舵、前をゆく『衣笠』と離れてしまった。後続の『天龍』はジャイロコンパスが故障していたこともあり、『古鷹』を見失うまいと懸命に追いすがった。『夕張』もこれに合わせて転舵したが、その際、前をゆく二隻の航路からはずれてしまう。この三隻は回頭によって若干の混乱を来し、そのおかげで南方部隊の駆逐艦は難を逃れて離脱することができたのだった。

この時、艦隊の最後尾にいた駆逐艦『夕凪』は、電源故障で羅針儀のランプが消えるというトラブルに遭遇し、味方との衝突を避けるために大きく反転していた。混乱した戦闘海域に突入して衝突や同士討ちになることを恐れた『夕凪』は、単独での南方水路からの離脱を決意し、進路を西に定めた。『夕凪』は敵駆逐艦（『ジャービス』と思われる）と交戦しつつ離脱に成功、翌朝、第8艦隊主力と合流を果たすことになる。

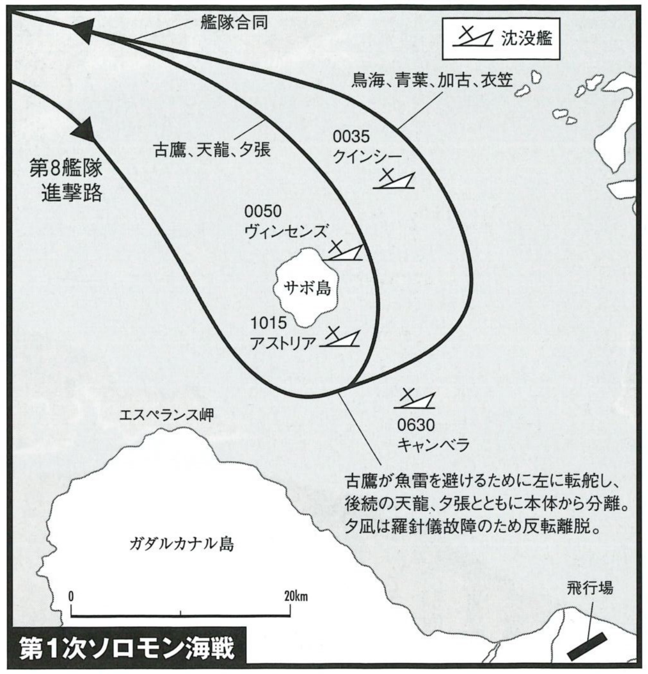
その頃、第8艦隊の巡洋艦群は予定通り一航過で戦闘を打ち切り、二列に分離しながらも北へ向けての離脱を開始していた。敵砲弾による損傷艦なし。『鳥海』が初弾を放ってからわずか六分の戦闘であった。

米重巡洋艦の悲劇

北東に艦首を向け、反時計回りにサボ島沖を通過していた『鳥海』は、二三時五〇分頃、左舷艦首方向に三隻の巡洋艦を発見した。

その三隻は北方部隊の米重巡であった。彼らは『ヴィンセンズ』、『クインシー』、『アストリア』の順で単縦陣を描き、二隻の駆逐艦を前方左右に先行させ、北西に向けて航行していた。

彼らは南方水路方向に炎を認め、砲声が響くのを確認していたが、味方が



第1次ソロモン海戦

ガ島を砲撃しているのだろうと解釈していた。敵艦隊であるわけがない。そうであるなら、クラッチレーから報告があるはずなのだから——。

探照灯の光が海原を走り、それが自分たちに向けられた時になっても、味方が誤って照らしているのだと思っていた。『ヴィンセンズ』艦長リーフコール大佐も、「我ハ味方ナリ」と打電するよう命じたほどだった。

だが、それは第8艦隊から放たれる光の束であった。三〇〇〇メートルから七〇〇〇メートルの距離で敵艦を捉えた第8艦隊は、探照灯の光の中に浮かび上がる殿艦『アストリア』に対して砲撃を開始した。

この時、回頭の結果『鳥海』らの西側を分離航進していた『古鷹』、『天龍』、『夕張』は、探照灯に照らされる敵巡洋艦を右舷側に捉えていた。第8艦隊は図らずも、敵部隊を挟撃する態勢となっていたのだ。

たちまち米重巡は、左右から降り注ぐ砲弾に包まれた。戦闘は近距離での乱戦となり、主砲のみならず高角砲、機関銃までが使用された。

『アストリア』を夾叉した五斉射目の砲弾は、船体中央に命中して水上機用デッキに火災を生じさせた。その直後には一番砲塔に命中弾が飛び込み、さらに艦首、艦橋、第一缶室に被弾、『アストリア』は操舵不能になり、燃えさかりながら漂うだけとなった。

前をゆく『クインシー』にも容赦なく砲弾が降り注いだ。カタパルトに載ったままの水上機が炎上し、格好の目標となった。三基ある砲塔の全てが大口径弾によって破壊され、艦橋にも被弾し、艦尾には魚雷が命中した。艦橋への一弾で重傷を負ったムーア艦長は「浅瀬に乗り上げろ」と言い残して息を引き取った。

先頭をゆく『ヴィンセンズ』も見逃されはしなかった。ここでも無防備な艦載機が真っ先に燃え上がった。その直後、『鳥海』が放ったと思われる魚雷三本が命中、さらに『夕張』(『古鷹』とも)からの魚雷も命中し、『ヴィンセンズ』は傾斜し始めた。

北方部隊所属の三隻はいずれも一九三四年から竣工し始めた『ニューオーリンズ』級に属し、『ノーザンプトン』級などと比べ防御力が増していた。しかし数千メートルの近距離から撃ち込まれる二〇・三センチ砲弾の威力の前には、強化された装甲も無力だった。

およそ二〇分の戦闘の後、米重巡は大火災を起こして漂うスクラップと化していた。彼らの反撃の砲弾は『鳥海』の艦橋作戦室を破壊し、『青葉』の左舷魚雷発射管に小火災を発生させ、『衣笠』、『天龍』にも命中弾を与えた。だがそれはどれも軽微な被害で、彼らが被った厄災と釣り合うものではなかった。

大火災を起こしていた『クインシー』は九日零時三五分、沈没した。その一五分後、総員退艦命令が出ていた『ヴィンセンズ』も波間に消えた。南方部隊の重巡『キャンベラ』も、六時三〇分に味方駆逐艦の魚雷によって処分された。正午過ぎまで火災を鎮火させようと粘った『アストリア』も、傾斜を止められず水面下に没した。ソロモンの連合軍は、わずか三〇分弱の戦闘の結果、四隻の重巡を失うことになったのである。駆逐艦が軽微な損傷ですんだのは、日本側が重巡を優先目標としたからであった。

一方、九日零時二三分に「全軍引き揚げ」が発令された第8艦隊は、戦場からの急速離脱を開始していた。一時二〇分には分離していた『鳥海』隊と『古鷹』隊が合流、進路を北西に定めた。

「福井静夫著作集・日本巡洋艦物語」/佐藤和正「巡洋艦入門」「海戦事典」/石橋孝夫「艦艇学入門」/RFニューカム、田中至訳「サボ島沖海戦」
デニス・ウォーナー、ペギー・ウォーナー、妹尾作太男訳「掴めなかった勝機—サボ島海戦50年目の雪辱」 以上、光人社/「図解・海軍水雷戦隊」並木書房


20.3センチ砲搭載巡洋艦としてはもっとも古く、主砲数も6門と少ない『古鷹』型と『青葉』型だったが、巡洋艦の数が足らない日本海軍にとっては貴重な戦力だった。写真は昭和16年の開戦前に撮られた第6戦隊。『加古』から『古鷹』、『衣笠』を見る。

敵巡洋艦部隊は撃滅した。しかし本来の目標である輸送船団は無傷のまま残っていた。『鳥海』艦長の早川幹夫大佐などは反転再突入を進言したが、三川長官は黙したまま応えず、艦隊が反転することはついになかった。再突入すれば帰路は昼間の行動となる。そこを行方の判明していない敵空母からの艦載機に攻撃をされたら……。三川長官はそれを恐れ、反転を許可しなかったのだといわれている。

ラバウルへの帰投中、第8艦隊は完勝ともいうべきこの海戦で最大の損失を被ることになった。八月十日朝、第6戦隊の『加古』が敵潜水艦の雷撃によって沈没するのである。乗員の疲労もあって対潜警戒を緩めたことが原因であった。

作戦終盤でいくつかの禍根を残したものの、大規模夜襲戦のために整備され、訓練を重ねてきた日本巡洋艦部隊は、その能力を余すことなく発揮したのであった。

日本巡洋艦隊の終焉

第一次ソロモン海戦は、日本巡洋艦部隊が華々しい勝利を飾った最後の戦いとなった。

戦争遂行中も帝国海軍は、五五〇〇トン型の後継となる水雷戦隊旗艦用の『阿賀野』型四隻、潜水艦戦隊旗艦用の『大淀』を竣工させるが、それらが本来の任務を全うすることは遂になかった。

先に記したとおり、太平洋戦争の実態は日本巡洋艦がその建造過程で想定したものとはかけ離れた、航空機を主体とした戦いであった。対艦用の重武装を誇ったさしもの日本巡洋艦も、航空機が相手となると装備や戦術の面で後手にまわり、苦戦を強いられることになった。

さらに対水上レーダーの高性能化によって、得意とした夜戦においても日本巡洋艦部隊は活躍の場を奪われることになる。

第一次ソロモン海戦からおよそ二か月後の十月十一日に発生した「サボ島沖海戦」(米軍呼称「エスペランス岬沖海戦」)では、米軍の巡洋艦に搭載されたレーダーが最大二万五〇〇〇メートルで日本の第6戦隊を捕捉することに成功、有利な丁字態勢で待ち伏せし、重巡『古鷹』を撃沈している。

その二年後、ガ島殴り込み作戦の再現を狙ったレイテ突入・「捷号」作戦でも、レーダー搭載の米潜水艦に追跡・雷撃され、日本側は『愛宕』、『摩耶』を失い、その後の空母艦載機の攻撃によって重巡『鳥海』、『最上』、『鈴谷』、『筑摩』、軽巡『多摩』、『鬼怒』、『阿武隈』、『能代』を一挙に失ってしまう。

第一次ソロモン海戦以後、航空機やレーダーが幅を利かせる新しい時代に対応できなかった日本の巡洋艦は、本来の建造目的とは違った兵員輸送や船団護衛任務の中で、航空機や潜水艦との戦いによってすりつぶされてゆく。連合艦隊そのものが機能不全となった戦争末期には、港内に係留して防空浮き砲台となる艦も現れた。

終戦時に残存していた八隻も、そのほとんどが大破修理中か湾内に着底した状態であり、行動可能なものは練習巡洋艦『鹿島』と竣工したばかりの『阿賀野』型軽巡『酒匂』のみであった。

その終焉を眺めるに、第一次ソロモン海戦とは、日本巡洋艦部隊の最後の花道とも言うべき、一瞬のきらめきだったと思わずにはいられないのである。

〈参考資料〉歴史群像太平洋戦史シリーズ「ソロモン海戦」「『高雄』型重巡」「重巡『古鷹』・『青葉』型」「『妙高』型重巡」「日本軍艦発達史」
学習研究社/世界の艦船「日本巡洋艦史」「アメリカ巡洋艦史」「イギリス巡洋艦史」「近代巡洋艦史」海人社



厳島神社社頭に攻め込む村上水軍。厳島合戦は村上水軍の軍事力をみせつける戦いであった。

陸の大名たちを畏怖させた
水軍衆が瀬戸の海にいた
来島村上氏、因島村上氏、そして
不羈独立を目論んだ能島村上氏である
彼らはいかにして勃興し
衰微したのであろうか？

文＝桐野作人
イラストレーション＝谷井建三

瀬戸内に君臨した海の戦国大名

戦史検証 上 村上水軍興亡史

「海賊」とは？

瀬戸内の海域には、西は長門・周防国から東は摂津・和泉国まで、大小一〇〇〇近い島嶼が散在している。

古代からわが国海上交通の大動脈であり、多数の人や物資が往来した。とくに古代から中世にかけて、主に西国の公領や荘園から都の朝廷・公家や寺社本所（最上位の荘園領主）に貢納される金穀や、対外貿易で取り引きされる交易品などがこの海域を経由して都に求心的に集積されるようになった。

そうした莫大な富をめぐって、様々な利害や権益が発生し、それに群がるように、陸海の多様な諸勢力が入り組んで、合法的もしくは非合法的に争奪をくり返すようになった。そうした構造が「海賊」を絶えず再生産する社会経済的な基盤だったといえよう。有名な藤原純友による天慶の乱や源平争乱でも、隠れた主役は瀬戸内から熊野にかけての様々な「海賊」たちだった。

はじめは統制のない小規模で散発的な海賊行為だったものが、南北朝内乱ののち、次第に地域ごとに組織化されて強大な海上武力集団へと成長していく。それとともに、内海航路の要所に要害を構えて通航する船舶から警固料と呼ばれる通行税を徴収し、それを拒否すれば襲撃するという海賊活動を行うようになった。

とくに鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて貨幣流通や商品の海上輸送が著しく増えたことが「海賊」の警固料という名目の通行税収入を拡大させることになり、諸「海賊」集団の統合と強大化をもたらした。三島村上水軍などは同族意識を強くもって芸予諸島に勢力を張った典型例である。

ところで、「海賊」とあえて括弧付きで使っているのは、この言葉がいわゆる海のギャングとか盗賊という意味だけではとらえ切れない内容をもっているからである。

確かに朝廷が藤原純友の乱に対して海賊追捕の宣旨を発しているように、陸の諸権力からみれば、国家体制の外にある非合法な海上集団とその違法行為に対して刑罰的に使用されていた言葉だった。

しかし、「海賊」とは、もともと陸の諸権力に対抗し、相対的に自立した海の自由民であることをその本質とし、そうであるがゆえに、海民同士で、あるいは海と陸とで交易も行う海商的側面も有している。しかも、南北朝内乱以降、「海賊」は国家権力による取り締まりの対象から、陸の諸権力から認知された、ある種の合法的な存在に転化している点を忘れてはならない。王朝国家や鎌倉幕府は結局、「海賊」を根絶できず、室町幕府以降になると、むしろ、それを利用する方向に政策転換したのである。

たとえば、幕府・守護から地頭職を得たり、荘園領主から代官・所務職を得たり、戦国大名から所領を与えられたりしている。何よりこれら陸の諸権力から海関の設置による警固料の徴収を公認されたことが大きい。これは、「海賊」の海上支配権を陸の諸権力が無視できなくなり、体制内に取り込まざるをえなくなったことを示している。だから、南北朝内乱以降の「海賊」とは、海のアウトローでは決してないのである。

また「海賊」と似たような用語に「水軍」や「警固衆」があるが、その異同も考慮しておこう。

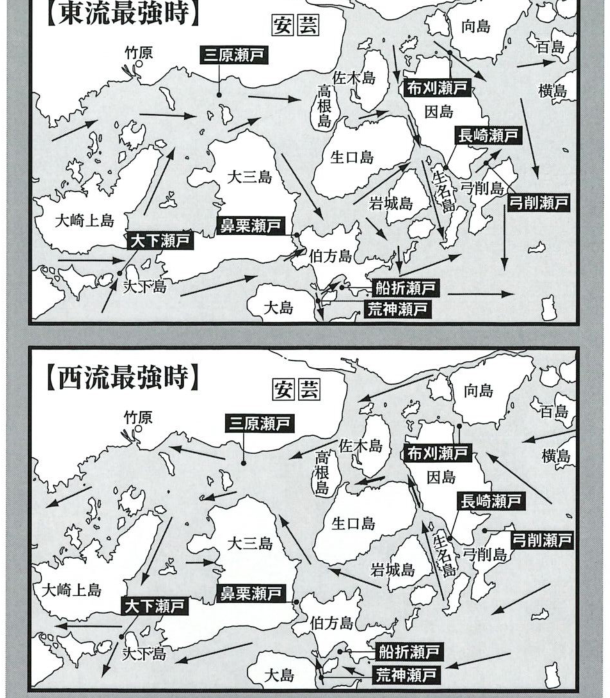
このうち、「水軍」はもともと江戸時代の軍学から生まれた言葉で、古代から戦国における瀬戸内の海の民を指す

用語としては適切とはいえない。ただ、海上武力の行使を重視する場合には、たとえば、村上水軍や毛利水軍という言葉も許容範囲だろう。

「警固衆」は本来、同時代の史料で実際に使われた用語だが、多分に陸の諸権力からの視点であり、「海賊」を客体的にとらえたものである。そして、それら陸の諸権力に属する船舶の内海航行を護衛させるために、「海賊」の海上武力を活用する意味合いで使われるのが本義だったと考えられる。

一方で、右のような史料上の用語としてではなく、研究用語として「警固衆」を使う場合もある。山内譲氏は、戦国大名が軍事的な必要から家臣の一部を割いて養成した水軍、つまり、戦国大名直属の水軍を「警固衆」と位置づけている。その用法でいえば、毛利元就の家臣の児玉就方・飯田義武率いる川之内水軍などがこれにあたることになる。その際、戦国大名からの自立度が高い三島村上水軍と差別化する意味合いも込められている。

芸予諸島潮流図



島嶼の多い瀬戸内の潮の流れは複雑である。水軍衆は潮の強弱、方向を巧みに読み、風の動き、天気の動きを知悉することによって、存在感を誇示できた。けっして戦闘能力だけに長じていたわけではない。『瀬戸内水軍』(広島県文化財協会)より作成。

内海の潮流と水路

——地乗りと沖乗り

因島・能島・来島——いわゆる三島村上水軍はどこから、どのようにして歴史の表舞台に登場してきたのだろうか。その歴史的背景や地理的な条件などをまず考えてみたい。

瀬戸内海の一千近くある島嶼のうち、その七割が芸予諸島周辺に散在している。西は周防灘・伊予灘、東は燧灘・備後灘によって画されたこの海域は島嶼の数が多いため、狭い島嶼間に瀬戸と呼ばれる、速くて複雑に変化する潮流が形成されている。その潮流に従って水路、航路も自然と開かれたが、瀬戸内海でもっとも危険な難所だったので、通航する船舶には潮流や暗礁などを知悉する地元の海の民の的確な誘導が不可欠だった。ここに「海賊」が発生する基盤があり、この海域は三島村上水軍の揺籃の地たりえたのである。

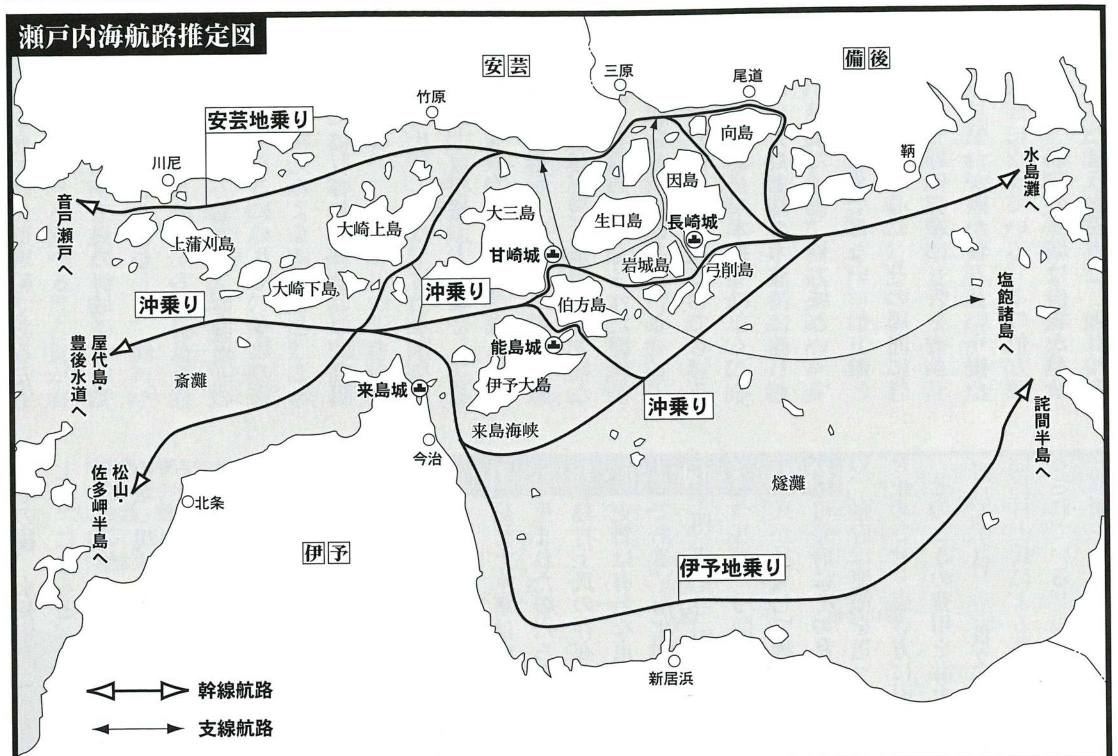
瀬戸内海の潮流は西の豊後水道から伊予灘を経て東に入る潮流と、東の紀伊水道から西に入る潮流の影響を受ける。この二つの潮流は瀬戸内のもっとも狭い海域である備讃瀬戸(現在の岡山県と香川県に挟まれる海域)あたりでぶつかり、それぞれ反転して、もと来た方向に流れる。そのため、備讃瀬戸の西にある芸予諸島一帯では、満潮時に潮流は東に流れ、干潮時には逆に西流する。

東から西に航行する船舶は干潮時の西流に乗っていくことになるが、そのルートとして、地乗りと沖乗りの二つがあった。

地乗りとは沿岸づたいに航行することを指し、備後から安芸の海域に入った船舶は因島北端の布刈瀬戸から三原瀬戸を経由して、大崎上島、豊島、上下の蒲刈島を左に見ながら、音戸瀬戸を抜けて広島湾に至る。

沖乗りとは中国・四国の両本土から離れた内海中央の海域を東西もしくは南北方向に通過することで、いくつかのルートがある。たとえば、三原瀬戸から大三島と大崎上島の間を通り、大下瀬戸を抜けて斎灘、安芸灘へと至るルート。あるいは、燧灘から伯方島と大三島の間の鼻栗瀬戸を抜けて来島北方を通過して斎灘に至ったり、能島と伊予大島の間の荒神瀬戸を抜けて斎灘に至るルートなどがある。

瀬戸内海航路推定図



『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書・埋蔵文化財編』(愛媛県教育委員会)より作成

地乗りルートに加え沖乗りルートが開かれたことは、芸予諸島を支配する村上三氏の棲み分けを可能とした。これは彼らにとって好都合だったようだ。また、57ページの図を参照すれば、数多くの城砦で航路上の重要地を押さえていたことが理解できるだろう。

このように地乗りでは因島を、沖乗りでは能島や来島付近を航行せざるをえない。とくに能島は、瀬戸内航路の東西と南北の交差点に位置しており、荒神瀬戸と鼻栗瀬戸という有数の水路を扼している。また来島海峡は内海随一といってよい難所で、八幡渦と呼ばれる渦潮が発生するなど、潮流が激しいことで知られる。満潮の上げ潮では一二ノット前後(時速約二二・二キロ)に達することもあり、鳴門海峡の渦潮に匹敵するという。この海峡を渡るには、地元の熟練した海民の先導なしでは困難なのである。

海賊の城

——海城と複合的城砦群

すでに見たように、三島村上水軍の根拠地が芸予諸島の要所に立地していたことが、「海賊衆」として成長する客観的条件となったことがわかる。とりわけ、沖乗りルートを扼する能島の立地は陸の諸権力から自立した「海賊」の勢力圏を築くのには好都合で、実際、村上武吉の行動形態は一貫してそうした自立性に根ざしたものだった。

そうした客観的条件を主体的条件に転化させる要素のひとつは「海賊衆」の拠点構築という問題である。三島村上氏のうち、因島は比較的大きな島嶼だが、能島は周囲八〇〇メートル、来島も同じく八五〇メートルと、天下にその名を知られた村上水軍の居城にしては極めて小さい。ここでは城郭の維持に不可欠である飲料水の確保も困難であろう。

だが、これらの島嶼全体を「海城」と命名した山内譲氏によれば、島は陸の山城における詰の部分で、海面が土塁であり、潮流が堀だと考えればよいと主張する。そうすれば、海城を中心とした周辺の海面全体が城郭だということになる。

これら海城の周囲の岩礁には現在も整然と並んだ多数のピット(柱穴)群が見られる。これらは桟橋跡か武者走りだと推定されている。とくに能島には直径一メートルもある巨大な柱穴も残っており、これは海に突き出た出丸を支える柱だったともいわれる。

急流に囲まれた海城には大きな船舶はあまり近づけないとする向きもあるが、そうとはいえない。伊予守護である河野氏一族の得居通幸が小早川隆景の家老だった乃美宗勝に宛てた書状には「来島に居え置き候安宅船の儀」云々

とあり、来島には大型軍船である安宅船も着船したことがわかる。

これまで能島や来島の海城について見てきたが、これらはむしろ、瀬戸や海峡の監視を主目的とする見張台や番城だとする考え方もある。「海賊衆」の規模が大きくなるにつれて、多数の家来や水夫を抱えるようになると、これらの小島には収容しきれないのは自明だからである。

村上和馬氏によれば、村上水軍などの「海賊衆」は根城（大根城とも）と呼ばれる本城の館を中心に、詰の城・見張台・遠見番所・出城・水場・船隠し・造船所（たで場）・狼煙台・寺社などの施設が有機的に結合された群郭複合式の形態をとっているという。

たとえば、能島村上氏にしても、その名を冠する能島が本拠ではなく、その東隣の伯方島南端の木浦湾に面した伯方城が根城だった。伯方城といっても、ひとつの城郭ではない。伯方館と呼ばれる本城を中心に、その周囲に砦をめぐらし、岬の突端にも砦を築き、高台には見張台が置かれるという複合的な城砦群になっている。この伯方城から見れば、能島の海城は出城か番城と位置づけたほうが妥当だと思われる。

その後、永禄年間（一五五八～一五七〇）になると、村上武吉は伯方城から伊予本土の高縄半島東側にある国分山城（現・今治市）に根城を移している。この地は来島海峡を南から扼する立地であるものの、典型的な山城である。能島村上氏が強大化した結果、陸の国人領主的な側面も持ちはじめたことの表れかもしれない。

芸予諸島の興亡——小早川氏も海賊だった

三島村上水軍はいつ頃、どのようにして生まれたのだろうか。

三島村上氏の存在を確認できる最も古い史料は有名な東寺の『東寺百合文書』である。南北朝内乱期の貞和五年（正平四年、一三四九）、東寺が弓削島にもつ荘園、弓削島荘に小早川一族の小泉氏が乱入して押領したとき、東寺が室町幕府にその乱暴狼藉を訴えたため、幕府は使節を送って小泉氏の押領を止めさせ、東寺方に引き渡した。

そのときの費用を計上した算用状に「野島酒肴料　三貫文」とある。これは能島村上氏による幕府使節の警固料だとされている。つまり、能島村上氏は荘園領主を警固する海上勢力として登場してくるのである。

また、荘園を侵略した小早川氏一族は土肥実平の流れを引く有力な鎌倉御家人で、安芸の沼田荘、竹原荘などを領していた。一族からは小泉・浦・生口・小坂などの庶家を出した。小泉氏をはじめとする庶家は芸予諸島に南下して急速に海の武士化していく。ちなみに、小早川隆景の家老で小早川水軍を統括した乃美宗勝は浦氏の出身である。

河合正治氏は南北朝内乱期以後の芸予諸島の興亡史を三つの段階に分けた。

①南北朝時代
　伊予衆の北上
②南北朝時代後半～室町時代前半期
　小早川氏勢力の南下
③室町時代末～戦国時代
　三島村上氏体制

①の時期には、鎌倉幕府が倒れて武家政権のタガが緩んだために、伊予の忽那衆や多賀谷氏などが安芸や防長の沿岸部にまで進出してくる。なかでも、忽那氏は南朝の懐良親王を九州に送り込む役目を果たしたことで有名である。

②は三島村上氏が登場する背景を知るうえで重要である。小早川氏は室町幕府奉公衆として幕府を後ろ盾にもっていたが、この時代、武家による荘園侵略は普遍的な行動形態である。小早川氏領に近い芸予諸島東半の因島・生口島・弓削島などにその庶家の小泉氏らが南下するのは自然の勢いだった。

このうち、因島と弓削島は東寺領だった。東寺は幕府に小早川氏勢力の侵略を排除するように訴えるが効果なく、小泉氏は居座りつづける。そこで、東寺は伊予守護の河野氏と結び、その実力を利用して小早川氏勢力を両島から駆逐しようとする。これが河野氏配下の三島村上氏が活躍するきっかけになった。つまり、三島村上氏の登場は、寺社荘園を舞台に、安芸の小早川氏と伊予の河野氏という武家同士の綱引きによってもたらされたという側面がある。むろん、それには三島村上氏の「海賊」としての実力が前提である。

三島村上氏の登場

では、伊予河野氏の配下として、三島村上氏はどのようにして芸予諸島に勢力を扶植していくのか、すなわち、③のプロセスを見てみよう。

能島村上氏の家譜によれば、三島村上氏の共通の始祖は南朝の北畠顕家の

子とされる式部大輔師清で、伊予に下向して能島務司城主の村上義弘を討ち、村上山城守と名乗ったという。この村上師清に三男があり、長男義顕が能島村上、二男顕忠が来島村上、三男顕長が因島村上と、三家の先祖になったとされる（『萩藩閥閲録』巻二二―二）。

三島村上氏が北畠氏の村上師清を共通の祖とするのは、よくある系譜の粉飾・誇張であろうが、三家が互いに同族意識をもっていたのはたしかである。

十四世紀半ばに能島村上氏の警固活動が始まっていることはすでに見たが、十五世紀に入ると、三家が小早川氏に代わって芸予諸島に進出し、陸の在地領主としての地位を獲得し始める。

まず来島村上氏を見てみよう。応永二十七年（一四二〇）、村上右衛門尉が小泉氏に代わって弓削島荘の所務代官職を得ている。この右衛門尉の出自はよくわからないが、来島村上氏ではないかと推定されている。その後、康正二年（一四五六）、右衛門尉の子と思われる村上治部進が東寺から同じように所務職を請け負っている。

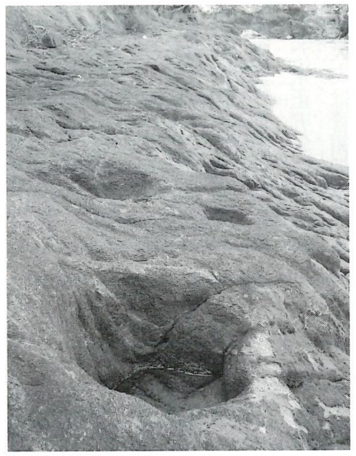
次に因島村上氏である。応永三十四年（一四二七）、村上備中入道吉資が将軍足利義持から御内書を与えられてい

能島村上氏の根城・伯方本城と城砦群



『愛媛県中世城館跡分布調査報告』（愛媛県教育委員会）、『伯方町誌』（伯方町誌編纂会）ほかより作成

能島氏は根城である伯方本城（伯方館）を中心に、周囲にいくつもの支城・砦・物見台・狼煙台を配置し、これらを有機的に連結した複合的城砦群を形成していた。



能島城跡の柱穴。この穿たれた穴に柱を立て、板を張り、桟橋あるいは武者走りを巡らせていた。（今治市村上水軍博物館蔵）



能島城の推定復元図。能島は激しく潮が流れる荒神瀬戸に浮かぶ小島である。最高所が本丸で、島の周囲を武者走り・桟橋で囲っていたと思われる。南のさらに小さい鯛崎島との間には橋がかけられていた。能島村上氏を象徴するこの城は、豊臣秀吉の四国平定戦後、廃城となった。（今治市村上水軍博物館蔵　イラスト・香川元太郎）

る。これは義持が赤松満祐の播磨守護職を没収した一件で、吉資が将軍方に馳せ参じたことに対する感状である。さらに翌正長元年（一四二八）、吉資は備後守護山名時熙から同国多島の地頭職に任ぜられている。永享六年（一四三四）、遣明船が帰国するとき、九州では少弐・大友の反幕軍と九州探題軍が戦争中だった。そのため、遣明船の警固について幕府に諮問された山名時熙が備後海賊の村上に命じたらよいと答えている。これは因島村上氏のことであろう。ここから因島村上氏が備後守護山名氏と緊密な関係にあったことがうかがわれる。

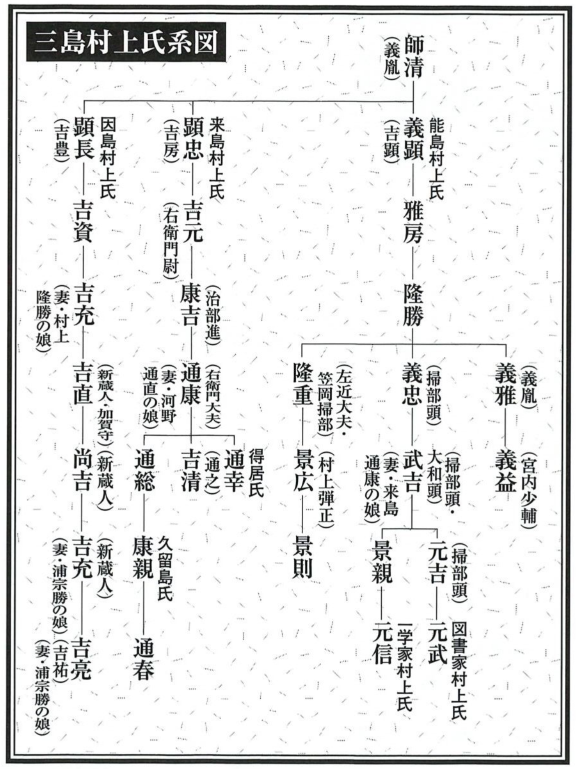
因島村上氏の出身地は河野氏と関係が深いことから、伊予か伊予寄りの島嶼だったと思われるが、北上して備後本土に近い因島に定着したのは十五世紀半ば頃だとされる。宝徳二年（一四五〇）、東寺の訴えをうけた幕府が小早川惣領家に対して因島地頭職を明け渡すよう命じている。これを機に、因島から小早川氏（小泉氏）が退場し、代わって因島村上氏が東寺領の代官という形で在地領主化していくことになった。

来島と因島の両村上氏は陸の領主として守護の河野氏や山名氏との関係が深い。とくに来島氏は通康の代になると、守護の河野通直の女婿となり、一時は河野氏の家督候補者にもなったほどである。

一方、能島村上氏は応永十二年（一四〇五）、伊予守護の河野通之から防予諸島の忽那島に地頭職に伴う知行地を与えられている。また永正五年（一五〇八）頃、村上宮内大夫は管領細川高国から讃岐国料所の塩飽島の代官職を与えられている。これは同年、高国と同盟を結んだ大内義興が足利義稙を奉じて上洛し、将軍に復職させた一件と関係があるといわれる。能島の宮内大夫はこの上洛に際し、大内氏の警固衆として協力したために、その恩賞として代官職を与えられたと思われる。それ以後、能島村上氏は塩飽本島の泊に代官を置いて津公事の徴収にあたる。その支配は織田政権時代まで継続する。

厳島合戦ののちのことになるが、永禄三年（一五六〇）三月、能島の村上武吉は将軍足利義輝から御内書を与えられている。それには「雲芸鉾楯」つまり、毛利氏と尼子氏の抗争を、将軍義輝が調停し和睦させるにあたって、伊予の河野通宣と武吉に証人として両者に働きかけるよう命じているのである（『寄組村上家文書』）。

中国有数の大名である毛利氏と尼子氏の和睦交渉で証人を務めるには、両者との関係が中立的であるだけでなく、両者が一目置くような実力をもっていることが条件であることは容易に推測がつく。逆にいえば、能島の村上武吉は伊予の河野氏と同等で、毛利と尼子に対抗するだけの実力者だと、将軍義輝はじめ当事者たちが認めていたことになる。三島村上氏のうち、能島村上氏の一頭地を抜きん出た地位のほどがうかがわれる。



後期村上氏の初代・師清から3代までは、じつはあまりわかっていない。しかし、能島・来島両家の間で船の貸し借りが行われたこともあることなどから、三家は緊密に連絡をとっていたと想像される。

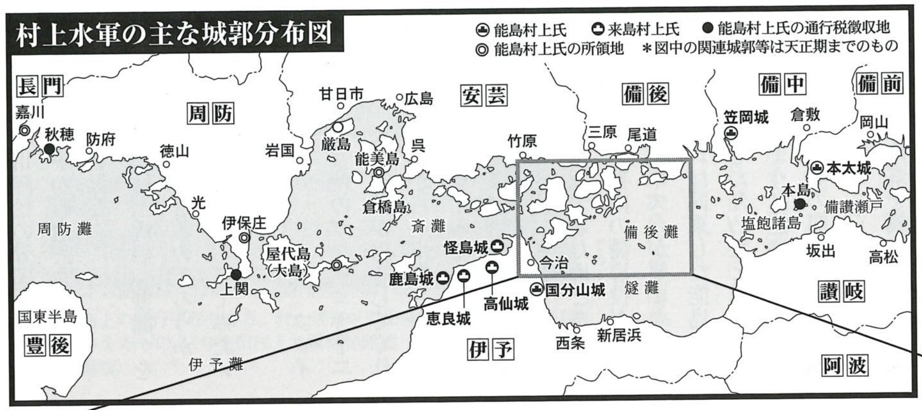
「警固」の実態

次に三島村上氏の日常的な海上活動である「警固」はどのようなものだったかをみてみよう。

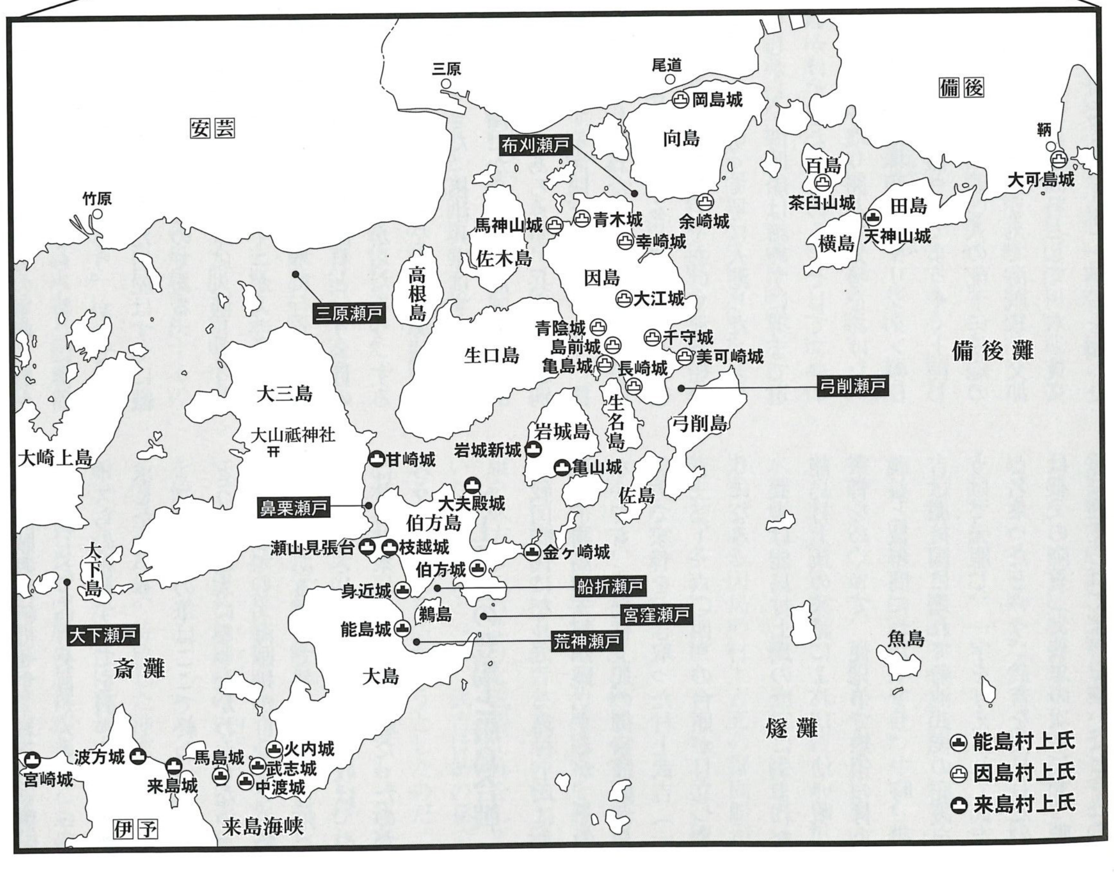
三島村上氏を含む海賊衆は瀬戸内海域に海関を設置して航行する船舶から警固料と称して通行税を半ば強制的に徴収したことはよく知られる。通行税には、船の大きさに応じた帆別銭、積荷の量に応じた駄別料があった。通行税は警固の海関か、積荷の揚陸港や中継港で徴収したという。

この通行税徴収の慣行は南北朝期の暦応三年（一三四〇）、熊野海賊衆が幕府から警固活動の見返りとして、周防竈戸関から摂津尼崎までの海域で西国からの廻船を警固し、兵庫島で警固料を受け取るのを認められたことに端を発するという。『武家万代記』によれば、能島村上氏も「三嶋の儀は、大御所尊氏御代より、代々御判を戴き、関守紛れ無き義に御座候」と称し、足利尊氏から代々の判物を与えられたとして、私的な警固料徴収を正当化している。この言い分はむろん史実ではないものの、幕府が熊野海賊衆に与えた特権を三島村上氏がその後も踏襲しているという認識だったのであろう。

「警固」の実態は外国人の記録からも見ることができる。たとえば、応永二十七年（一四二〇）、李氏朝鮮の文官宋希璟が来日して将軍足利義持に謁見したときの紀行文『老松堂日本行録』によれば、瀬戸内には「東西の海賊」がいて、東から来る船は「東賊」一人を乗せれば、「西賊」は害せず、逆に西から来る船は「西賊」一人を乗せれば、「東賊」は何もしないと記し、朝鮮使節一行を乗せた博多商人は芸予諸島の鎌苅島あたりで「東賊」一人を銭七貫文



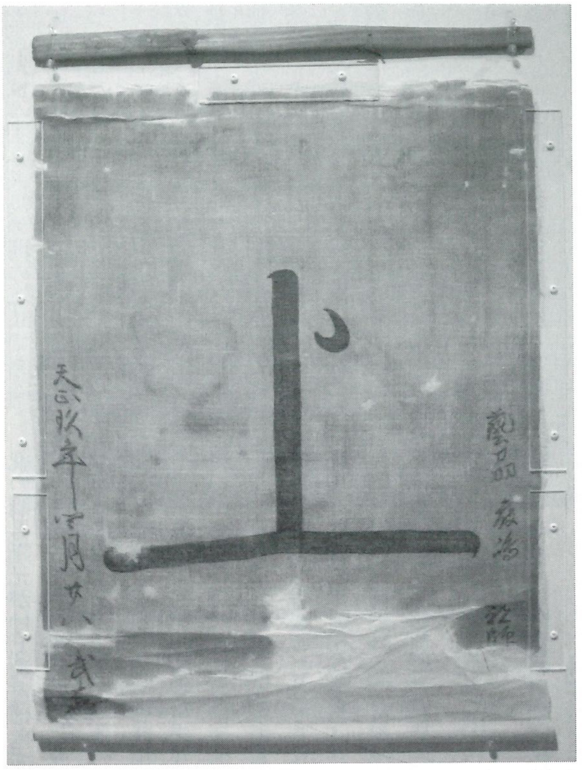
三氏の勢力は来島・波方を中心とする来島村上氏、来島海峡東から伯方島を中心とする能島村上氏、因島・向島を中心とする因島村上氏に大別される。なかでも伯方島を根拠地とした能島村上氏は、通行税の徴収権、運輸などの諸権益を保持し、周防から塩飽諸島までを支配していた。



の警固料で乗船させたという。
　またイエズス会の宣教師ルイス・フロイスは豊臣政権時代、能島の村上武吉に会ったことを『フロイス日本史』に書き留めている。フロイスは天正十四年（一五八六）、イエズス会日本副管区長ガスパル・コエリヨとともに、堺から豊後臼杵まで航海した。フロイスは武吉のことを「能島殿」と呼び、「日本最大の海賊」と述べている。
　フロイス一行は瀬戸内海を航行するのに、海賊の襲来に怯えて安全保証のために武吉から通行証を入手しようとし、日本人修道士に贈り物をもたせて武吉の城に向かわせた。武吉は「伴天連方が、天下の主、関白殿（秀吉）の好意を得て赴かれるところ、某ごとき者の好意など必要ではござらぬ」と謙遜したが、修道士がしきりに懇願したので、武吉は「怪しい船に出会った時に見せるがよいとて、自分の紋章が入った絹の旗と署名を渡した」という。この旗は丸に「上」の字を認めた村上水軍の旗だと推定されている。フロイス一行を乗せた船はこの旗を舳先に高く掲げたのであろう。
　もっとも、この頃、三島村上水軍は分裂し、村上武吉も落ち目になっていた。伊予は小早川隆景の分国となり、能島村上氏は伊予から退去するよう命じられていたのである。
　では逆に、三島村上氏の「警固」を拒絶した場合はどうなるのだろうか。これもフロイスの記録から見てみたい（『イエズス会日本年報』上）。
　天正九年（一五八一）二月、フロイスは東アジア巡察使のヴァリニャーニに同道して、大友宗麟が用意してくれた船で、豊後府内から泉州堺へ向かった。織田信長に謁見するためである。途中、能島の海賊衆が船に乗り込んできた。フロイスは船内に武装兵士を乗せていないかを確認するためと書いているが、おそらく警固の嚮導役だろう。
　そして船はフロイスらが望まぬ塩飽に入港した。これは同乗した能島の海賊衆が船頭に命じたためだと思われる。塩飽は先に見たように能島村上氏が支配する島だった。島の関所で代官と毛利方の役人がフロイスら一行の荷物をすべて揚陸して内部を調べた。これは通行税の駄別料を賦課する手続きだったと思われる。
　ようやく塩飽を離れた船は将軍足利義昭の御座所がある備後鞆津を通過し、淡路島北端の岩屋に入港した。ここでフロイスら一行は織田方の軍船二艘から略奪をうける。おそらく新たに警固料を取られたのであろう。かつて毛利方の最前線拠点だった岩屋はすでに織田方が接収していたのである。
　船頭は岩屋から兵庫に入港しようとしたが、ヴァリニャーニが入港せずに順風を利用して一気に堺に行くよう命じた。これ以上、警固料という名目の収奪を避けたかったからだろう。すると、フロイスらの船を多数の海賊船が追跡してきた。摂津兵庫はすでに織田方の勢力圏だから、この海賊衆は織田水軍の一翼であろうか。兵庫港は駄別料を徴収する海関だったのだろう。警固料を取り損ねたため、海賊衆が追いかけてきたのである。フロイスらの船は三〇丁櫓で全速力をあげて海賊船の追尾を振り切って堺に入港した。
　しかし、海賊船は諦めずに堺まで追いかけてきたのである。そしてフロイスらの船を取り囲んで気勢をあげた。フロイスらは堺商人でキリシタンの日比屋了珪に保護されてようやく上陸した。了珪は約三〇〇人の配下に鉄炮の火縄をつけさせたうえで海賊衆と交渉した。了珪は警固料として一六〇貫文（約一五〇クルザード）と酒肴を贈ったが、海賊衆は納得せず、おそらく警固に違約したという名目だろうか、フロイスらの積荷すべてを引き渡すよう要求したという。
　フロイスの筆はここで終わっていて、どういう結末になったかわからない。それにしても、海賊衆が自分たちの勢力圏外である堺まで執拗に追尾したことに驚かされる。警固料の徴収は、やはり海賊衆にとって生命線だったのだろう。

村上武吉の登場と厳島合戦

　戦国時代になって、三島村上氏による芸予諸島の支配が確立するが、そのなかでも、能島村上氏の御家騒動から実力で家督をもぎ取った村上武吉（一五三三～一六〇四）の台頭が目立つようになる。
　武吉は能島村上氏の庶家に生まれた。能島村上氏の家譜によれば、幼い頃、家督をめぐって、従兄弟で惣領の村上義益と数年間にわたり争う。一時、武吉は肥後国に逃れて菊池武俊の庇護をうけて元服し、一字を与えられて武吉と名乗ったという。武吉を後見したのは叔父の隆重（父義忠の次弟）で、隆重に迎えられて家督を継いだとされる。



過所旗。海上の通行手形である。村上武吉が天正９年（1581）に厳島神社の祝に与えたもの。（今治市村上水軍博物館蔵　写真は山口県文書館所蔵の複製旗）

　武吉幼少の頃の御家騒動は、北九州をめぐる大内氏と大友氏の争奪戦と関連すると指摘されている。武吉派は大内氏に、義益派は大友氏にそれぞれ味方したという。そうした縁からか、武吉を後見する隆重は大内義隆から厳島での通行税徴収の特権を得ている。
　天文二十年（一五五一）、三島村上氏の動向にも大きな影響を与える出来事が起きた。中国・北九州六か国の太守、大内義隆が重臣の陶晴賢の謀叛により殺害されたのである。晴賢は義隆の甥で大友宗麟の弟の義長を大内氏の家督につけて実権を握った。
　それから四年後、晴賢に挑戦する人物が現れた。毛利元就である。安芸高田郡吉田荘の国人領主から身をおこした元就は次第に安芸一円に勢力を広げ、天文十九年（一五五〇）には二男元春に吉川家を掌握させ、三男隆景によって沼田・竹原の両小早川家の統一を成し遂げさせた。元就はいわゆる毛利両川体制を確立していた。
　元就は晴賢の謀叛から三年間辛抱して服従するふりをしていたが、同二十三年（一五五四）、石見国津和野城主の吉見正頼が亡主大内義隆の姉婿だった関係から反陶の旗を掲げて挙兵すると、元就もこれに呼応したのである。五月、毛利軍は佐東銀山・己斐・草津・桜尾といった陶方の境目の城を攻略し、一気に厳島を占領した。こうして広島湾の制海権を握ると、元就は晴賢が吉見氏を攻めている間に小早川水軍を長駆西に急派し、大胆にも晴賢の本拠である周防国富田若山（現・周南市）を急襲させたのである。晴賢は元就を「猛悪無道」と非難して激怒した。
　翌弘治元年（一五五五）春、元就は厳島の北端有ノ浦に宮尾城を築いた。厳島はもともと大内氏の支配下にあり、晴賢もまた厳島周辺の海上交通に関する掟を定めて支配を強化していた。元就の行動は明らかに陶方に対する挑発だった。その狙いは、厳島に陶軍をおびき寄せておき、それを海上から奇襲して潰滅させるという大胆な軍略でもあった。元就の軍略の帰趨を決するのは水軍力だった。
　一方、晴賢は九月二十一日、自ら出陣し、屋代島衆や宇賀島衆など防長の警固衆五〇〇余艘とともに総勢二万余の軍勢で厳島に上陸した。そしてその日のうちに宮尾城を猛攻し、空濠を埋め、水の手を断ったので、早くも落城寸前となった。
　元就も急ぎ後詰すべく出陣した。しかし、毛利方は両川勢を合わせても総勢四〇〇〇余人。軍船も毛利氏直属の川ノ内警固衆が五〇～六〇艘、小早川水軍が六〇～七〇艘、それと隆景の与力衆である因島の村上吉充の警固船が若干と、多めに見積もっても二〇〇艘に満たなかった。
　そこで、毛利方では隆景の重臣で沼田警固衆の棟梁である乃美宗勝を派遣して、能島の村上武吉と来島の村上通康を味方につけようと説得工作をしていた。宗勝にとって、武吉は姉の孫である。その縁を活かそうとしたのだ。
　だが、九月二十七日になっても、沖家の両村上氏の去就は定まらず、しびれを切らした元就は隆景に沖家衆を頼らずに宮尾城の後詰に向かうことを告げて、厳島を望む地御前の火立岩に本陣を置いた。
　翌二十八日、待望した沖家衆の警固船二〇〇余艘が沖合に現れ、廿日市沖に停泊した。宗勝の説得が奏効したのである。元就が沖家の警固衆に期待し

た役割は本土と厳島の間の海峡である大野瀬戸に停泊して、陶軍の退路を断つことだった。

晦日の日没後、折からの暴風雨のなか、毛利軍はひそかに地御前を発し、厳島の東側、包ヶ浦に上陸した。そして博奕尾の尾根に登り、搦手から一気に晴賢の本陣に殺到した。奇襲は大成功し、海に逃れられずに追い詰められた晴賢は自害して果てた。毛利方が討ち取った首級は四〇〇〇を超えたという。

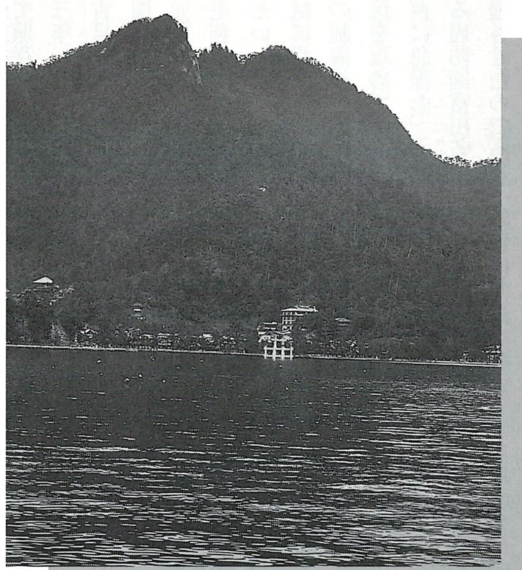
陶方の警固衆は五〇〇余艘という大軍団だったが、二万の陶軍を上陸させるのを優先して廻船（兵員輸送船）が多く、攻撃力に優れた武者船は少なかった。沖家警固衆は敗走してくる陶方の軍船を次々に沈めた。陸も海も毛利方と沖家衆の大勝利だった。

ところで、厳島合戦では沖家衆が参戦しなかったという説がある。宇田川武久氏は通説を批判して、元就の隆景宛て九月二十七日の書状で来援交渉の打ち切りを指示していることや、参戦を証明する史料がないことなどを根拠に不参加説を主張した。

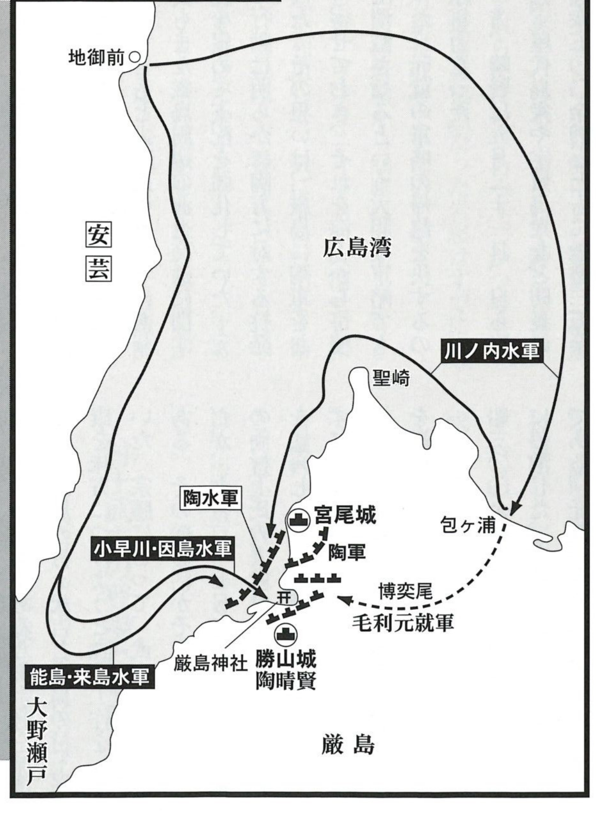
しかし、沖家の両村上氏は参戦したと考えられる。すでに指摘されているが、有力な反証史料がある。それは元就の嫡男隆元が村上武吉に宛てた感状で「今度弓矢中、隆景を以て首尾を談じ御入魂の次第、我等父子に対し本望に候」と謝意を述べて、周防国玖珂・熊毛両郡内に二三〇〇石を宛行うことを申し出たものだ。感状の日付は十月二日である。これが弘治元年のものなら、厳島決戦の二日後のことであり、感状としては自然で疑う点はない。

毛利方の編纂史料『二宮佐渡覚書』『森脇覚書』『老翁物語』『万代記』なども、両村上氏の参戦を記している。とくに『万代記』は毛利直轄水軍である川ノ内警固衆の関係者が叙述したものである。両村上氏の参戦を無視したほうが自分たちの手柄を強調できて都合がよいはずだが、それでも記しているのは、両村上氏の参戦が動かし難い事実だったからであろう。

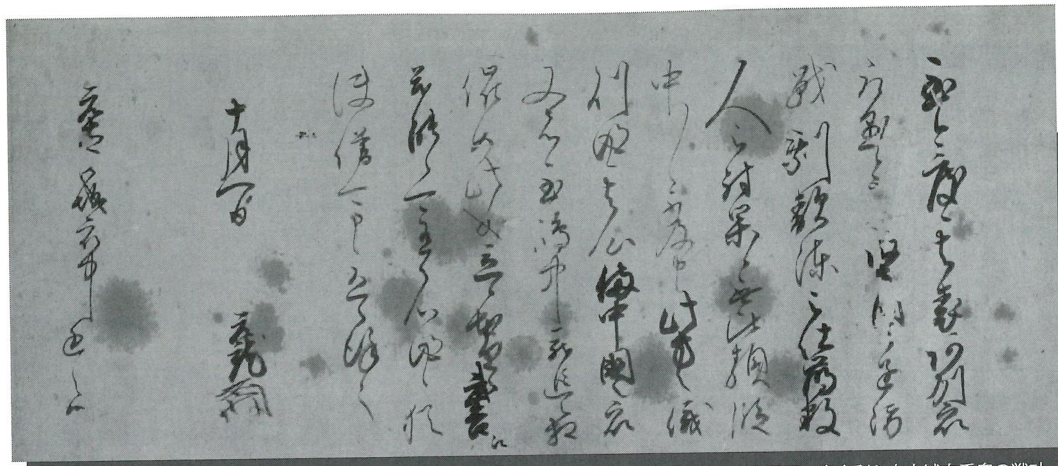
また『万代記』には、十月十一日付で元就が武吉に宛てた感状が収録されている。それには「旁（方々）御出でありて海陸大利を得候、元就存生の間忘れがたく候」と感激して謝意を述べている。書止文言が「恐惶謹言」となっていて厚礼すぎるが、陶氏に勝って高揚した気分にある元就の感謝の念が反映していると考えれば、それほど不自


上・能島・来島両村上氏の水軍（沖家衆）が集結した大野瀬戸から厳島神社を望む。（写真・桐野作人）

厳島合戦毛利軍進攻図



右・地御前を先発した川ノ内水軍は毛利元就率いる主力軍を包ヶ浦に上陸させたのち、聖崎を回って南下し、陶水軍に襲いかかる。小早川・因島水軍は安芸本土寄りを進んで、陸戦隊を上陸させ、その後回頭して、背後から陶軍を攻撃する。能島・来島水軍は正面から奇襲する。厳島合戦は、沖家軍の参加により計算どおりに元就が勝利を得た戦いだった。


毛利元就書状（写）。永禄11年（1568）の第1次本太合戦で阿波・三好氏を撃退した村上武吉配下の島吉利ら本太城在番衆の戦功を賞したもの。このころ毛利氏は豊前で大友氏と交戦中であり、武吉は長門・赤間関に出陣していた。三好勢はその隙を狙って本太城を奇襲したのである。だがほどなくして武吉は大友・三好両氏と誼を結び、毛利氏から離反する。（今治市村上水軍博物館蔵）

然ではない。元就・隆元父子の武吉宛ての感状が揃っている以上、両村上氏の参戦は疑えないであろう。

それに、沖家衆には毛利方に味方する事情があったように思われる。大内義隆の代に三島村上氏が厳島で京・堺商人から通行税を徴収する特権を与えられていたが、晴賢はその特権を剥奪してしまった。三島村上氏には陶方に遺恨があったのである。毛利方に味方したのはこの特権を回復する目的もあったに違いない。

両度の木津川合戦

厳島合戦で毛利方に味方したからといって、沖家の両村上氏が元就に服属したわけではなかった。あくまで海上傭兵としての行動にすぎなかったのである。その証拠に、村上武吉は一時期、豊後の大友宗麟に味方している。

陶晴賢を討ったのち、防長二か国を経略した毛利氏は弘治三年（一五五七）から天正五年（一五七七）までの二〇年間の長きにわたって大友宗麟と北九州の争奪戦をくり広げた。三島村上氏も毛利方に味方して、門司城攻防戦に参戦したのをはじめ、海上封鎖や兵粮輸送などに活躍した。

しかし、永禄十二年（一五六九）になって、武吉は大友方に加担した形跡がある。武吉は豊前に進出していた僚軍の来島・因島の両衆とともに戦う予定になっていたが、病と称して周防上関に留まったままだった。そのため、両村上氏は敗北してしまった。その後、武吉は日和見からさらに旗幟を鮮明にし、大友・備前浦上両氏と結んだ。

元亀二年（一五七一）三月、備中児島をめぐって大友氏に支援された浦上方が毛利方と戦った。浦上方には阿波三好氏の重鎮篠原長房まで加わったので、毛利方は苦戦した。これは第二次本太合戦と呼ばれる。このとき、小早川隆景が能島村上氏支配下の塩飽衆の加勢を期待したが、塩飽衆は動かなかった。

武吉の離反により瀬戸内の海上支配が危機に瀕した毛利方は同年七月、小早川水軍に来島・因島の両村上氏の警固衆とともに能島を襲撃させた。武吉は懸命に防ぐが、水の手まで攻められたという。

武吉の危急を救ったのは宗麟だった。武吉と来島の村上通総との和睦を仲介したのである。その後も武吉の反毛利の姿勢はつづくが、翌三年十月、毛利輝元と浦上宗景の和睦が成立すると、武吉も再び毛利方と協調する姿勢に転じた。

この一件を見ると、武吉の不満は塩飽諸島を含む備中の何らかの権益と関わっていたのかもしれない。山内譲氏によれば、永禄十一年の対大友戦における武吉の日和見は同時期に備中児島で第一次本太合戦があったことと関連しているという。本太城には武吉の重臣島吉利が在番していたが、阿波三好氏に急襲されたため、武吉は本太城が気にかかり、上関を動けなかったのではないかというのだ。

第二次本太合戦ののち、天正四年（一五七六）に武吉の叔父村上隆重とその子景広に小早川隆景から備中笠岡周辺に一〇〇〇貫文が与えられ、さらに児島の本太城も武吉に与えられている。これを見ると、毛利方の能島村上氏への慰撫工作ではないかと思われる。

こうして再び毛利方となった能島村上氏だったが、大きな活躍の舞台が与

えられた。織田信長に徹底抗戦している石山本願寺への兵粮入れという大任だった。これは能島村上氏あるいは三島村上氏だけでは不可能で、毛利直轄水軍の川ノ内警固衆や小早川水軍を総動員した大作戦となった。第一次木津川沖合戦がそれである。

天正四年七月十二日、三島村上水軍を含む毛利水軍は淡路島の岩屋を発した。『信長公記』は船団の総数を「七・八百艘大船」としており、毛利水軍は未曾有の規模だったと思われる。

織田方の水軍は摂津・和泉の海賊衆で三〇〇余艘で、木津川河口を守っていた。名のある船大将は真鍋七五三兵衛・沼野伝内・同伊賀守・同大隅守・宮崎鎌大夫・同鹿目介や尼崎の小畑、花隈の野口といった衆である。このうち、二人の宮崎氏は兄弟で河内の豪族だった。

『信長公記』は木津川河口での戦闘を次のように記している。

「そのような処に（陸でも合戦が行われているところに）、海上は（毛利水軍が）焙烙火矢などというものを拵え、お味方（織田方）の船を取り籠めてから、次々と投げ入れ焼き崩した。多勢にかなわず、七五三兵衛・伊賀守・伝内・野口・小畑・鎌大夫・鹿目介ほか、歴歴の者が数多く討死した。西国船は勝利を得、大坂（本願寺）に兵粮を入れ、西国へ引き上げていった」

一方、毛利方の史料は武吉の嫡男元吉ら一五人の船大将が連署した注進状である（『毛利家文書』三三八号）。一五人の内訳は、毛利方五人、小早川方四人、能島方三人、因島方一人、来島方一人、宇喜多方一人である。毛利・小早川の両水軍の比重が高いが、三島村上水軍も三分の一を占めていた。

この注進状には『信長公記』に触れていない点が書かれている。岩屋を発した毛利水軍は泉州貝塚に進出して、そこで雑賀衆の水軍と合流し、翌日、堺から木津川河口に乗り寄せている。木津川河口には織田水軍二〇〇余艘が待ち受けていた。船数は『信長公記』より一〇〇艘少ない。そのなかに安宅船と思われる「警固太船」数艘がいた。それは甲板に「勢楼（井楼）」を組み立てた「かこい舟（囲船）」だった。高い井楼の上に大筒や大鉄炮の重火器を備えた重装備の巨船である。この船には「河摂（河内・摂津）之陸衆」が乗船していた。右で見た宮崎兄弟もこの囲船に乗っていた可能性がある。

決戦が行われたのは十三日から十四日早朝にかけてだというから、かなり長い船いくさだった。「彼の太船残らず焼き崩し候」と注進状は戦功を誇っている。織田方の囲船は全滅したのである。図体が大きいだけに動きも鈍重だったと思われ、毛利水軍に囲まれて追い詰められ、焙烙火矢で止めを刺されたのであろう。

織田水軍はおそらく焙烙火矢を初めて見たのではないだろうか。その驚きと混乱から立ち直れないまま、対応できずに敗退したと思われる。

焙烙火矢は毛利水軍のなかでも三島村上水軍の秘密兵器だった。『武家万代記』によれば、天文二十年（一五五一）冬、陶・大友方の廻船三〇艘を宇賀島海賊衆が護衛して因島付近の海関を強行突破したことがあった。これに怒った村上武吉は因島村上氏とともにこれに攻撃を加えた。敵の主力は「盲船」だった。これは船上の四方を板や竹で装甲した軍船で、極めて防御力が強い。

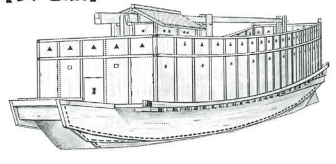
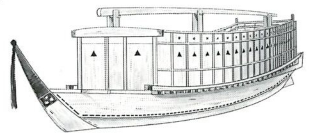
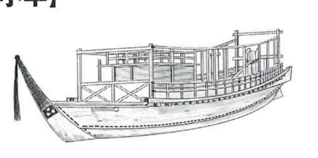
因島村上の軍船がこの盲船に近づいたところ、敵は防御力のゆえか高をくくって、楼の上から射撃せず、わずかに胴壁の陰から弓・鉄炮を放つのみである。そのため、難なく舷側へ乗り付



【村上水軍の将兵と武器】

焙烙は織田水軍を恐怖におとしいれ、壊滅させた武器として名高い。
（今治市村上水軍博物館蔵　イラスト・香川元太郎）

水軍の主要軍船

軍船	使用船種	
本船（将船）	【安宅船】 	大将以下船奉行や兵士などが乗船する旗艦。船首から船尾まで楯板で装甲された総矢倉の軍船で、船首に大筒が据えられ、楯板には弓・鉄炮用の狭間が設けられている　兵力　兵士60人／水夫80人／大筒3門／鉄炮（10匁玉）30挺
武者船	【関船】 	本船を護衛する。海戦時には弓船・鉄炮船に続いて交戦する。安宅船と同じく総矢倉で囲われているが、安宅船より小型・軽量。　兵力　兵士30人／水夫40人／大筒1門／鉄炮（10匁玉）20挺
弓船 鉄炮船	【小早】 	本船を護衛する。開戦時には最初に敵船に突入する先鋒の船。弓・鉄炮大将、小頭や弓・鉄炮足軽が乗船。矢倉はなく、垣立と呼ばれる低い防御壁で囲われている。そのため防御性は劣るが、スピードと旋回性能に優れている。　兵力　兵士10人／水夫20人／鉄炮（10匁玉）8挺

（主として『野嶋流船軍書』による。イラスト・板垣真誠）

戦法例



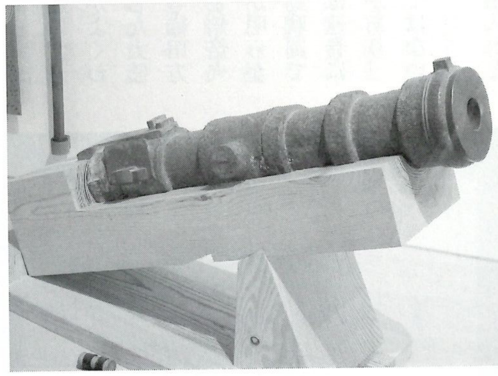
【一船掛かり】

敵の船1艘に対し、弓・鉄炮船各1艘と武者船2艘で攻撃する。鉄炮船は敵船との距離が90～100メートルになったら射撃を開始し、弓船は9～11メートル程度に接近してから射放つ。その後、武者船が焙烙を投げ込み、敵船に接舷して斬り込む。

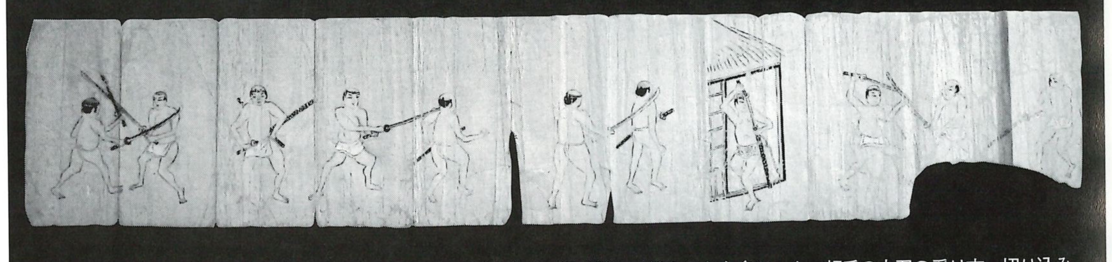


【一軍掛かり】

「一船掛かり」に弓船と鉄炮船を各1艘増やした戦法。さらに大船と交戦する場合は、弓船・鉄炮船・武者船合計10艘を1戦闘単位として戦う。これを「一軍一船掛かり」と称し、敵が何十艘になってもこの基本戦闘単位と陣形で交戦すると『野嶋流船軍書』などは伝える。



能島村上氏に伝わる虎蹲砲。（今治市村上水軍博物館蔵）



水軍の太刀使いを示した『表九ツ太刀筋図』。敵の船を引き寄せ、乗り移って戦うことも多かった。相手の太刀の受け方、切り込み方などが示され興味深い。（今治市村上水軍博物館蔵）

〈参考文献〉【論著】村谷正隆『海賊史の旅—村上水軍盛衰記』 海鳥社　1990／森本繁『戦国最強の海上軍団・毛利水軍』 新人物往来社　1991／山内譲『海賊と海城』 平凡社　1997／同「伊予国三津と湊山城」『四国中世史研究』 7号　2003

けて焙烙を投げ入れ、たちまち四、五艘を殲滅したという。焙烙火矢は木津川沖合戦より二五年前から三島村上水軍によってすでに使われていたのである。

　木津川沖合戦の勝利により、毛利方は兵粮入れに成功した。この頃が毛利方が陸海双方で織田方に攻勢をかけた絶頂期だった。しかし、二年後には織田方が反転攻勢に出てくる。それが第二次木津川沖海戦である。

　今度は織田方に秘密兵器があった。毛利水軍の焙烙火矢の威力をまざまざと見せつけられた信長は志摩水軍の首領、九鬼嘉隆にその対応策として、鉄張船の建造を命じたのである。天正六年（一五七八）六月、伊勢大湊で竣工した鉄張船六艘と鉄の装甲がない「白舟」一艘（滝川一益配下）の計七艘は紀伊半島を大回りして泉州淡輪に姿を現した。これを雑賀衆の軍船が攻撃したが、大鉄炮を一度に放ってこれを一蹴した。

　『多聞院日記』によれば、この鉄張船は長さ一二〜三間（約二一・六〜二三・四メートル）、幅七間（約一二・六メートル）という巨大な船だった。そして大筒三門と大鉄炮多数を装備して格段の攻撃力を有していた。

　十一月六日、毛利水軍は六〇〇余艘で再び木津川河口に押し寄せた。河口には鉄張船六艘が展開していた。今度は毛利方が織田方の新兵器に驚く番だった。海戦は辰の刻（午前八時）から始まった。『信長公記』をまた見てみよう。

「初めは九鬼水軍が支え難いのではないかと思われたが、六艘の大船は大鉄炮を多数装備していた。敵船を近くに引き寄せてから、大将船とおぼしき船を大鉄炮で狙い撃ちして打ち崩した。そのため、（毛利水軍は）鉄張船を恐れて近づかなかった。そして（毛利水軍）数百艘を木津川沖に撃退したので、見物していた者は九鬼右馬允の手柄だと感じ入った」

　毛利水軍は九鬼水軍の鉄張船に太刀打ちできずに撃退されたことがよくわかる。そして九鬼水軍が装備した大筒や大鉄炮という重火器の面でも織田方に後れをとった。今後、鉄炮と焙烙火矢では太刀打ちできないことが明らかになったのである。ただ、初動戦闘で鉄張船の威力を悟った毛利方は遠巻にして接近戦に出なかった形跡があり、必ずしも大打撃を蒙ったわけではないように思われる。

　しかし、石山本願寺への兵粮入れという任務を果たせなかったのは事実で、これ以降、毛利方は本願寺への効果的な支援ができなくなった。追い詰められた本願寺はこの海戦から一年半足らずのうちに信長に降伏するのである。

沖家騒動——武吉押し込め？

　天正八年（一五八〇）閏三月、本願寺顕如は信長に降伏して紀州雑賀に退去した。毛利氏は反信長戦線の有力な一翼を失い、加えて、摂津の荒木村重の敗退、播磨の別所長治の滅亡、備前の宇喜多直家の離反が重なって、中国戦線で急速に退潮していく。

　それは陸だけでなく海でも軌を一にしていた。織田方の中国方面司令官の羽柴秀吉は翌九年から毛利方の警固衆に対して盛んに調略を仕掛けてきた。そのせいか、能島・来島の両村上氏が羽柴方に寝返ったという噂が流れ始めた。

　それはまったく根拠のない流言ではなかった。天正八、九年頃、村上武吉が信長に音信して鷹一居を贈っている事実がある。信長の返状には「然して望むことこれあらば、聊かも異儀なく候、その意成るべく候也」とあり、武吉の希望があれば、叶えてやると請け負っている。



村上景親画像。武吉の次男。母は来島通康の次女。関ヶ原合戦の前に輝元から1000石を宛行うと約束されている。関ヶ原合戦後、周防大島に移り、のちに萩藩御船手組に組み込まれ防府三田尻に居住。慶長18年（1613）死没。（今治市村上水軍博物館蔵）

〈参考文献〉【論著】宇田川武久『日本の海賊』　誠文堂新光社　1983／太田雅慶『小早川水軍の将　浦宗勝』　アイシステム　1992／金指正三「潮流と航路と水軍城跡について」　『瀬戸内水軍』（瀬戸内水軍資料調査報告書）　広島県文化財協会　1975／河合正治「内海中央部の海賊衆」　『瀬戸内水軍』（瀬戸内水軍資料調査報告書）　広島県文化財協会　1975／久葉裕可「海賊衆能島村上氏の登場」　『宮窪町誌』　1994／福川一徳「天正十年沖家騒動再考」　『四国中世史研究』７号　2003／村上和馬「水軍の城」　『日本城郭大系』16　新人物往来社 1980

儀礼的な交流ではあったが、当時、鷹の贈答は服属の意思表明だと理解されていた。それまで敵対していた信長への贈答は、武吉の秘めたる思惑が反映していると見るべきだろう。毛利氏から離反したわけではないが、一方で織田政権とも共存する道を模索しようとしたのではないか。その背景にはむろん、木津川沖海戦の敗戦があり、織田水軍との対決が不利であることを悟ったからに違いない。

　現実に、秀吉は小西行長らに命じて播磨・備前で自前の水軍を育成しつつあった。すでに淡路の岩屋や播磨の英賀といった拠点を失った以上、毛利方の前線は陸は備中、海は備讃瀬戸まで後退を余儀なくされていた。備讃瀬戸には能島村上氏支配下の塩飽諸島がある。武吉の行動はこうした情勢転換に敏感に反応したものではないだろうか。

　武吉の不審な動静を察知した毛利方は小早川隆景と乃美宗勝が中心になって懸命に引き止め工作を行った。毛利方が元亀年間の日和見・離反の再来かと猜疑したとしても無理はない。

　そうした流れのなかで、天正九年四月から翌年四月にかけて、能島村上氏では家督交替があり、武吉が隠居して元吉が当主となった。福川一徳氏は元吉をはじめ能島家中による武吉押し込めだと推測している。まことに興味深い見解である。能島家中も親毛利派と親織田派に分裂し、毛利・小早川方の後押しをうけた元吉が主導権を握り、一種の家中クーデターを起こした可能性がある。元吉はおそらく毛利輝元からの一字拝領であり、武吉とくらべ、世代的に毛利氏への忠誠度が高かったのであろう。

　家中騒動が起こったのは能島村上氏だけではなかった。小早川水軍の総帥、乃美宗勝の家中にも秀吉の調略の手が伸びてきた。隆景の信任厚い宗勝はさすがにこれに応じなかったが、備中足守の宮路山城を守る嫡男元信は秀吉から安芸・周防・長門の三か国と黄金五〇〇枚という好条件を提示されて動揺した。隆景から糾問された宗勝は元信を幽閉した。その後ほどなく元信は病死している。詰め腹を切らされたと見るほうが自然である。

　さらに不穏だったのは来島の村上通総である。通総は伊予河野氏の一門でもあり、折から家督をめぐって当主通直との対立を深め、天正七年頃から河野氏から独立しようとしていた。秀吉の調略がそれに輪をかけたのである。武吉の場合は、織田・毛利の双方と等距離外交をとろうとしたが、通総は河野・毛利の双方から離脱を企てたのである。織田方に靡く動きをみせた武吉と通総とでも温度差があった。

　通総とその兄で河野氏一門の得居通幸は天正九年九月、来島警固衆を率いて河野方と戦闘状態に入った。いわゆる沖家騒動の始まりである。

　武吉は輝元・隆景から周防一帯に膨大な知行宛行を約束されると再び翻心して、来島氏の掃討を決意する。この頃、惣領に復帰したと思われる。通総が秀吉のもとに出奔すると、翌十年五月、毛利・河野連合軍と能島村上水軍は来島領に攻め寄せた。武吉は来島城を攻め、対岸の大浜浦を焼き払い、さらに得居通幸の本拠、風早郡の鹿島城に攻め寄せた。しかし、来島・得居の両勢の抵抗も頑強で、戦いは同十三年までつづく。

村上水軍のその後——能島海上分国の崩壊

　来島村上氏が織田方に奔ったことにより、三島村上氏体制も事実上、崩壊したといってよいかもしれない。武吉の勢力圏は、東は備前児島、塩飽諸島、西は周防灘、豊後水道まで及んでいた。福川一徳氏はこれを「能島海上分国」と呼んでいる。

　わが国海賊史上、空前の版図を築いた能島村上氏だったが、天正十六年（一五八八）、豊臣秀吉の惣無事令の一環である海賊禁止令によって、その経済的基盤を奪われ、毛利氏に臣従する道を選ぶしかなかった。

　関ヶ原合戦ののち、武吉・元吉の嫡流は屋代島に本拠を置き、屋代村上家あるいは大村上と呼ばれ、長州藩の船手組頭となって幕藩体制を生きていく。武吉の二男景親の家も同じく船手組頭となった。因島村上氏も同様に船手組頭になったが、のち屋代村上家の配下に編入される。

　一方、出奔した来島の村上通総は秀吉の水軍大将となったが、朝鮮の陣で討死する。その後、子の康親が関ヶ原合戦で西軍についたため、伊予から山深い豊後玖珠郡森に転封された。その頃、久留島氏と改姓して一万四〇〇〇石と少禄ながら陸の大名となった。

　三島村上氏は「海賊衆」という生き方を失いながらも、三者三様の道をたどって幕末維新を迎えたのである。

〈参考文献〉【史料】『イエズス会日本年報』上　村上直次郎訳　雄松堂出版／『中国史料集』（「言延覚書」「二宮佐渡覚書」「森脇覚書」「武家万代記」）　米原正義校注　人物往来社／『萩藩閥閲録』第一・三巻　山口県文書館編修・発行　マツノ書店復刻版／『フロイス日本史』5　中央公論社／『宮窪町誌』資料編　宮窪町誌編集委員会編　宮窪町／『毛利史料集』（「桂岌圓覚書」「老翁物語」「万代記」）　三坂圭治校注　人物往来社／『山口県史』史料編　中世１・３　山口県

戦略分析

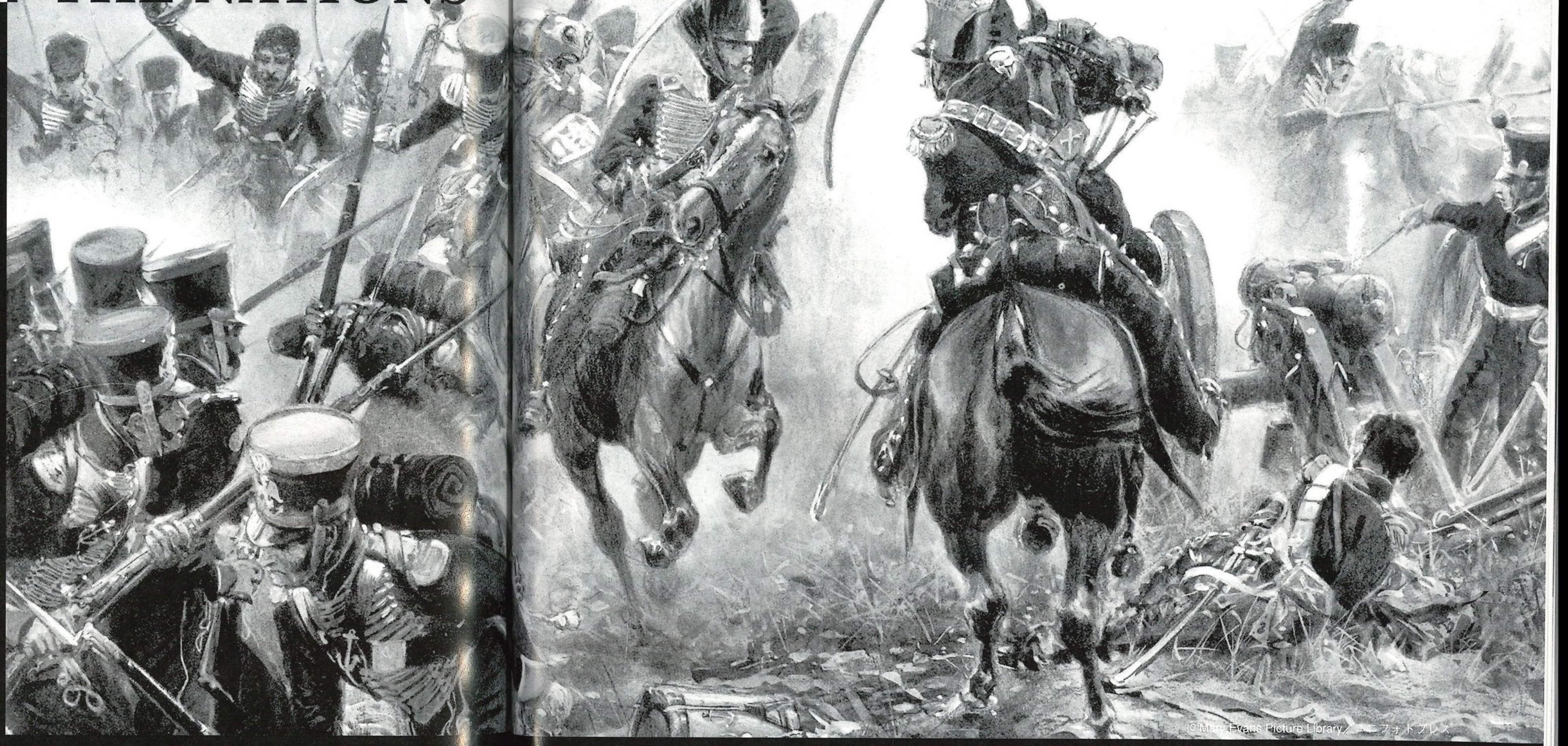
ナポレオン帝国の崩壊

‘天才’を凌駕したプロイセンの戦争システム

ロシア遠征の破滅的失敗にも拘わらず
新たな大軍を創設した英雄ナポレオン
この戦争の天才に、軍制改革で生まれ変わった
プロイセンとその同盟軍が立ち向かう！

THE BATTLE OF THE NATIONS

文＝佐藤俊之



1813年10月のライプチヒの会戦において、フランス軍(手前)に襲いかかるプロイセン騎兵。左端は前線に投入された海軍歩兵である。

落日のナポレオン

　一八一二年、フランス皇帝ナポレオン一世は、イギリスを欧州市場から閉め出そうとした大陸封鎖令を無視するロシア帝国に、六〇万を超える兵力によって侵攻した。だが、フランス軍は決定的な勝利を得られないまま、冬の訪れとともに撤退を余儀なくされ、ナポレオンが率いていた史上最大の陸軍は、困難な退却行の末に事実上壊滅した。

　一七九二～九九年のフランス革命戦争、そしてナポレオンが政権を掌握した一八〇〇年から一八〇九年までの間に、フランスはプロイセン王国に対して一度、オーストリア帝国に対しては三度の大勝利を獲得し、両国およびこれを支援したロシアといった列強に対して極めて有利な講和を結ぶことに成功、事実上欧州の覇者として君臨してきた。

　しかしロシア遠征の失敗は、ナポレオンの支配に屈していたプロイセン、オーストリア、さらにドイツ諸侯に再び反攻の兆しをもたらした。さらにフランス国内でも、長引く戦争に疲れた人々は、ナポレオンの栄光に疑いを抱き始めていたのである。

　一八一二年の暮れ、ナポレオンは敗残のフランス軍数万を東欧に残したままパリへ帰還、国内の反動勢力を牽制するとともに、ロシアで失われた兵力の再建に取り組んだ。

　ナポレオンはこれまで、戦場での勝利によって列強を屈服させてきた。それゆえ、ナポレオンの威信はロシアでの挫折によって揺らいだのである。しかし彼は六〇万もの大軍を失いはしたが、ロシア軍に対して戦場で敗北したわけではなかった。ここで新たな勝利を獲得できれば、失われかけた威信を取り戻すことはまだ可能である、そうナポレオンは考えていた。

　戦力を補充し部隊を再編成すれば、再びロシアに対して大きな勝利を得られる。ナポレオンにとって一八一三年の年明けは、ロシアとのさらなる戦いとなるはずであった。

　ところが、フランス軍がロシアからの撤退をほぼ完了しつつあった一八一二年十二月、フランス軍の同盟国としてナポレオンとともにロシア遠征に参加していたプロイセン軍指揮官、ルートヴィヒ・ヨルク将軍は独断でロシアと中立協定を結び、ロシア軍のプロイセン領通過を認めてしまった。

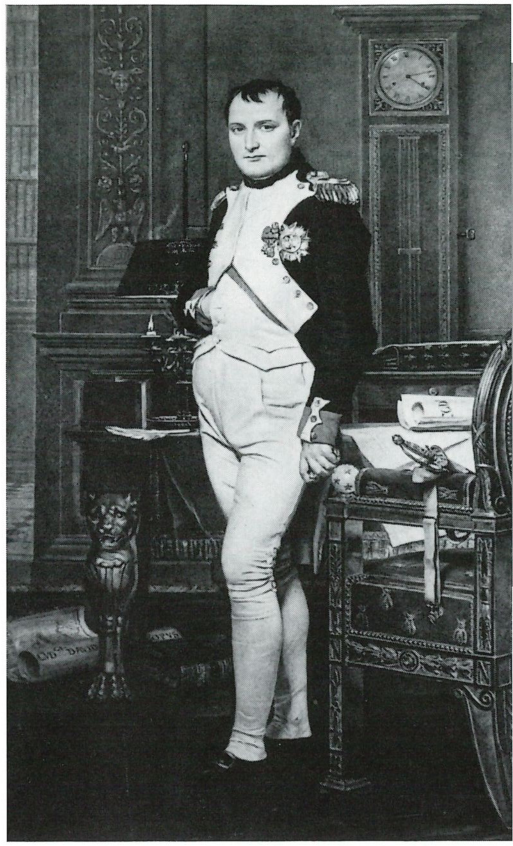
　さらに東プロイセン州がヨルクの行為を承認、国内でも反ナポレオンの機運が高まってきたため、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は一八一三年三月、前月のロシアとの密約に基づき、フランスに宣戦を布告した。

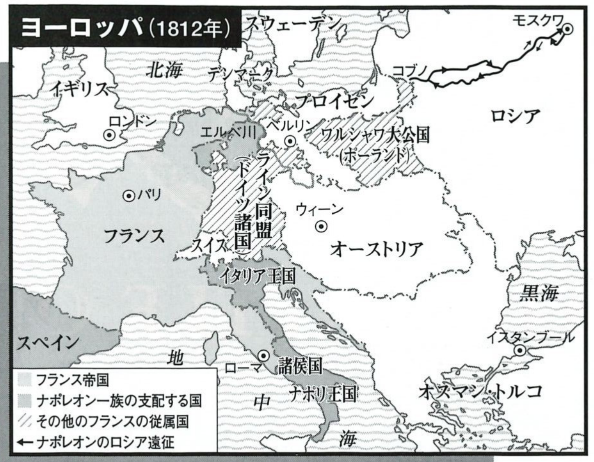
　このときプロイセン領内のフランス軍は、各地の要衝に守備隊を残しつつ、エルベ川付近まで後退してきていた。ナポレオンの次なる戦場はロシアではなく、その掌中からこぼれ落ちたドイツを取り戻すための戦いとなったのである。

新生プロイセン軍

　一八〇六年にナポレオンに大敗を喫し、フリードリヒ大王以来の常勝軍としての誇りを喪失したプロイセン軍は、フランスの従属国として屈辱の日々を送る間、近代的なフランス軍に匹敵する戦力を獲得すべく、さまざまな改革の努力を行っていた。

　ナポレオンが一七九六～一八〇九年までの諸戦役でことごとく勝利することができたのは、彼の軍がフランス革命がもたらした「国民軍」だったからである。フランス軍の将兵は徴兵制によって集められた膨大な数の市民であ





左：ナポレオン・ボナパルト（1769～1821）。その軍事的天才でフランス皇帝となるも、ロシア遠征の失敗で数十万の兵を失う。しかし驚異的な能力で軍を再建、上のようにこの時点でも未だ欧州の大半を支配下においていた。

り、近代的な訓練を受け、革命に熱狂していた。

さらに、貴族を排除したフランス軍では指揮官も平民の兵士あがりで、ナポレオンに心酔し、能力主義によって出世したものたちだった。こうした軍隊をナポレオンは手足のように動かし、絶対王政時代の旧式な軍を持つプロイセン、オーストリア、そしてロシアに対して優位に立つことができたのだった。

社会生活の枠外にいた男たちを傭兵として徴集し、貴族たちが指揮権を独占していたプロイセン軍は、一八〇六年の大敗北によって戦争のやり方が変わったことを思い知らされ、改革の必要を痛感したのである。

フランスに従属していた五年の間、大臣だったカール・フライヘア・フォン・シュタインは農奴の解放と都市の民主化を推し進め、国民軍編成の土台を築いた。そしてこの基礎の上に新しいプロイセン軍を作り出したのが、来るべき一八一三年の戦いでナポレオンのライバルとなるシャルンホルストだった。

ゲルハルト・ハンス・ダヴィット・フォン・シャルンホルストは平民の生まれで、ハノーファー選帝侯国の砲兵将校からプロイセン軍に移籍した際に貴族に列せられた。彼はナポレオンに対抗するには、フランス軍同様の徴兵による国民軍と、それによって生み出される巨大な軍隊を統率するため、十分な教育を受けた指揮官と参謀将校による大規模な指揮系統が必要だと考えていた。

シャルンホルストはシュタインの民主化政策によって、プロイセン軍に徴兵される兵士が自分たちの国のために戦うであろうと信じる一方で、彼に賛同する若手の将校たちを中心に参謀教育を施し、軍の命令系統がすばやく伝達され、かつ臨機応変に戦いに挑むことができるよう努力した。

シャルンホルストのもとには、後に彼の跡を継ぐことになるアウグスト・ヴィルヘルム・アントン・フォン・グナイゼナウや、後に『戦争論』を執筆するカール・フォン・クラウゼヴィッツらが集まり、各部隊の参謀が総司令部の作戦意図を理解し、部隊間の連携を可能にするとともに、作戦目的に基づいて各級指揮官が戦場で柔軟な行動を行えるようこれを補佐する、という後のプロイセン参謀本部の礎を築いたのである。

こうして一八一三年の戦役が始まるころプロイセン軍は、「国民軍」を支える後備兵制度を実施する準備を整え、ナポレオンに敗れる以前とは異なる、新しい軍隊に生まれ変わりつつあった。

フランスに対してプロイセン軍は、ナポレオンを裏





右：プロイセン軍制改革の功労者・シャルンホルスト（1755～1813）。主な功績は①国民皆兵に基づく常備軍創設。②身分にとらわれない将校の登用と育成。③参謀制度創設と参謀教育のための陸軍大学設置など。左：シャルンホルスト亡き後、その後継者として参謀制度の改革に尽力したグナイゼナウ（1760～1831）。プロイセンがナポレオンに敗れた1806～07年の戦役では、バルト海に面するコルベルク要塞を死守して勇名を馳せた。後に1815年のワーテルロー戦役で、最後の勝利を得る。

切ったヨルク将軍の部隊を含め一三万五〇〇〇の兵力を有し、そのうち約六万五〇〇〇を機動戦力として、勇猛で知られるゲプハルト・レベレヒト・フォン・ブリュッヘル将軍の下に集めることができた。この数字は後備兵制度が軌道に乗ればさらに増える可能性を秘めていた。

一方、プロイセン軍とともにナポレオンに対抗しようとしていた同盟国ロシア軍は、退却するフランス軍を追撃する過程で敵軍同様大きな消耗を強いられたが、それでもプロイセン国境付近に一三万の兵力を送り、うち四万ほどを機動戦力として用いることができるという状況だった。

つまり、一八一三年戦役の開始時点で、普露同盟軍は約一〇万の野戦軍でナポレオンを攻撃しようとしていたのであった。

フランス大陸軍の再建

これに対しナポレオンは、ロシアで消滅した大陸軍を再建するために、あらゆる方策を実行した。

彼はまず、ロシア戦役の生き残りにドイツ駐屯部隊の一部を加えた約四万の兵力を、自身の養子であるユージューヌ皇子に与えてエルベ川の線を保持させるとともに、ロシア戦役の間国内に留め置いた防衛軍七万八〇〇〇、一八〇七年以来ゲリラ戦の続くスペイン戦線から引き抜いた四万、海軍兵士約二万三〇〇〇、警察から都市警備隊員一〇〇〇名、退役軍人からなる騎兵戦力三〇〇〇などを集めた。

ナポレオンはさらに、一八一二年度に徴兵された新兵一四万弱を訓練未了のまま軍に編入することで、春までにどうにか三〇万近い兵力を用意し、そのうち約二〇万を野戦軍として前線に投入可能な状態に仕立て上げた。

加えて、ナポレオンにはドイツやイタリアの諸侯、ならびに彼が建国したポーランドの軍勢があった。ただしドイツ諸国では反フランスの動きが強まりつつあり、ポーランド軍は敵陣の遥か後方にあってフランス軍とは連絡が途絶していたため、これがどの程度あてになるかは未知数であった。

ともあれ、こうしてフランス軍は一八一三年の戦役が始まる時点で普露同盟軍の二倍の戦力を確保したのである。

しかし、新生プロイセン軍がかつてのプロイセン軍ではなかったように、一八一三年のフランス軍もまた、かつての常勝大陸軍とは似て非なるものだった。

フランス軍は兵力でこそ同盟軍に対して優位に立っていたが、先のロシア戦役で一五万頭もの馬匹を失い、かつ当時の馬の一大産地であったドイツが敵地となったために、騎兵が大きく不足していた。

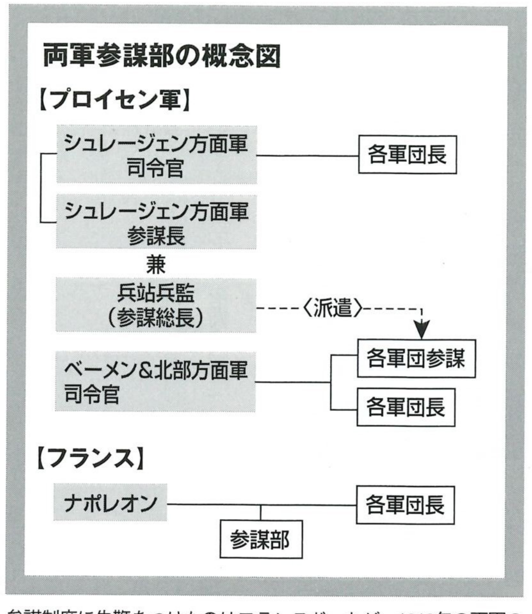
また、野砲も急な軍の再編と輸送用馬匹の不足により、野戦軍全体で三五八門しか有していなかった。これに対して普露同盟軍は全軍で一一〇〇門、野戦軍だけでも約五〇〇門の野砲を有していたのである。

さらにやっとのことで寄せ集めた兵士の多くも未熟だったうえ、かつてフランスに勝利をもたらした優秀な指揮官たちもまた、あるものは過去の戦役で戦死し、またあるものはスペインに拘束され、ナポレオンの手元に残された将軍たちは、二〇万の未熟兵を率いるにはとても経験豊富とはいえない状態だった。

もちろんナポレオン自身、こうした自軍の状況をよくわかってはいた。だ

が、敵はかつて撃破したことのあるプロイセンとロシアである。厄介な冬将軍も今はいない。兵力は敵の二倍であり、加えて彼自身の軍事的天才ともいうべき戦術がある。兵士や指揮官は彼に心酔しており、ナポレオン自身が陣頭指揮を執れば彼らは熱狂し、さまざまな不利を払拭できるであろう。ナポレオンはそう考えていた。

しかし、一八一三年の戦場では、多くの場面でフランス軍のこの欠点が浮き彫りにされ、ナポレオンの自慢の戦術が霞み、覆されるような戦いが繰り広げられることとなるのであった。



参謀制度に先鞭をつけたのはフランスだったが、1813年の両軍の状況は大きく違っていた。プロイセン軍は自軍の「参謀総長」に相当する兵站兵監（シャルンホルスト。後にグナイゼナウ）が、シュレージェン方面軍の参謀長を兼ねるとともに、その他の同盟側方面軍の各軍団に参謀を派遣していた。彼ら参謀は作戦目的を熟知し、必要に応じて軍団長に具体的な助言をして補佐したため、軍団、方面軍は独力で行動が可能であった。対するフランスの参謀部は、基本的にナポレオン１人の補佐に過ぎず、兵力が拡大して軍団が増え、連絡も困難な広大な戦場では、その天才をもってしても、各軍団を思い通りに動かすには限界があったのである。

春季戦役始まる

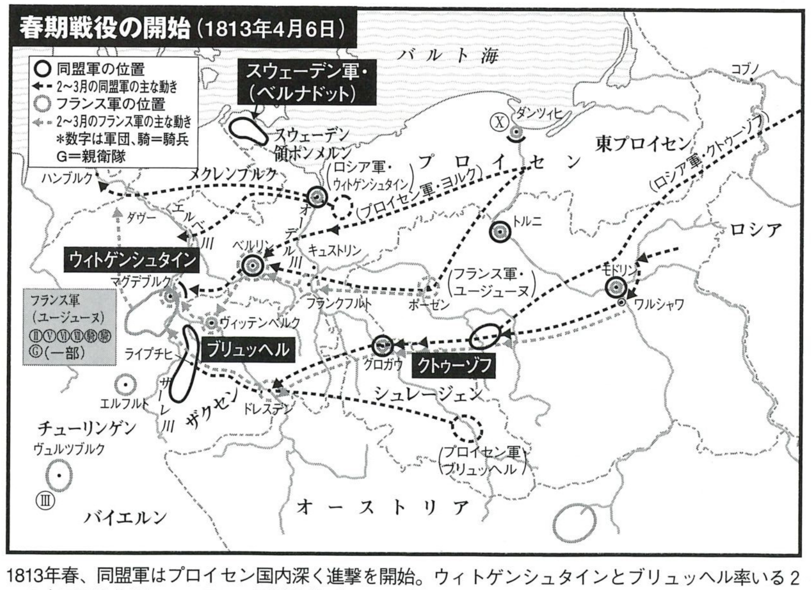
ナポレオンが考えていた対普露同盟軍の作戦は、彼の得意技ともいうべき機動戦と、それに続く自軍に有利な状況での敵主力との決戦というものであった。

彼はまず北ドイツからプロイセン中心部へと攻勢を仕掛け、首都であるベルリンを占領しプロイセン軍の戦意を低下させた後にオーデル川へと突進する。同地で包囲されている友軍部隊と合流して戦力を増強しつつ、ロシア軍の後方連絡線を北側より脅かすことで、敵に決戦を強要するつもりだった。

ナポレオンは三月、まずユージューヌにドイツ国内の兵力を任せ、可能な限り前方で同盟軍を足止めして主力がエルベ川西岸に集結する時間を稼がせた。

ユージューヌは相次ぐ後方へのコサック騎兵による襲撃と、北ドイツでの武装蜂起、さらに自軍左翼に強力な敵部隊が出現したとの噂などに振り回され、ナポレオンが予期していたよりも遙か後方のマグデブルクまで退却を強いられ、どうにかエルベ川の支流であるザーレ川の線を保持していた。

ナポレオンはこの間にチューリンゲン地方のエルフルトに、主力部隊および補給物資を集結させつつあった。ところが、ナポレオンが部隊編成に手間取っている間に、普露同盟軍は、ロシア軍のウィトゲンシュタイン将軍率いる約二万と、プロイセン軍のブリュッヘル元帥率いる二万五〇〇〇からなる前衛部隊二個が、エルベ川を渡河してフランス軍の防衛ラインであるザーレ川へと接近してきた。



1813年春、同盟軍はプロイセン国内深く進撃を開始。ウィトゲンシュタインとブリュッヘル率いる２つの方面軍を先頭に、フランス軍防衛線ザーレ川に迫った。ユージューヌはその足止めに失敗する。

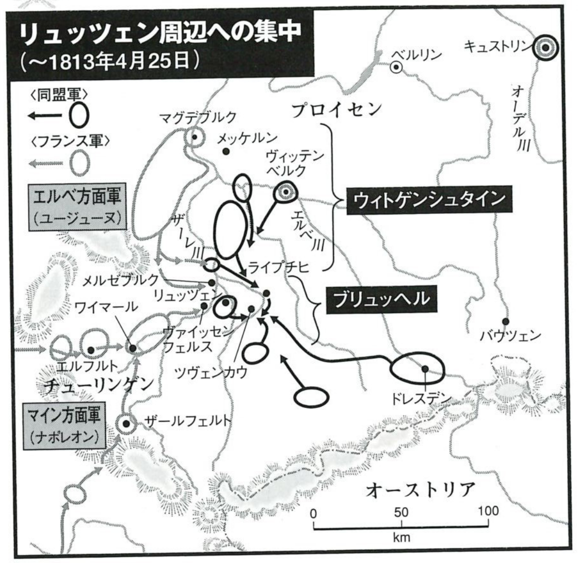
同盟軍側は、ナポレオンが優勢な戦

力を持っていることに気づいており、プロイセン軍の参謀総長に相当する地位にあったシャルンホルストを始め、前線の指揮官はフランス軍の反撃を警戒していた。また、同盟軍の総司令官であるクトゥーゾフ元帥が病気によって指揮もままならず、主力部隊の前進が遅いことも問題となっていた。

だが、ロシア皇帝アレクサンドル一世が迅速な攻勢を軍に命じたため、シャルンホルストは前衛部隊をベルリン方面とシュレージェン方面の二つに分け、その両方がプロイセン軍とロシア軍の混成となるように編成し、フランス軍の追撃を開始したのである。

シャルンホルストは二つの部隊のいずれにも、彼自身の教育を受けたプロイセン軍参謀がいることから、分割された部隊の連携は不可能ではないと考えていた。また、クラウゼヴィッツをはじめとする将校がロシア戦役の際にロシアの軍事顧問として従軍した経験から、普露両軍の協調行動も可能であると思われた。

だがそれでも、短期間で瞬く間に再建を果たしたフランス軍に対して、同盟軍はまだ戦備が整っているとは言い難く、この進撃が危険なものであることには変わりはなかったのである。



同盟軍の２方面軍は、ライプチヒ近郊で合流を果たし、主力もこの地に集結した。フランス軍は、エルベ方面軍が北方から、ナポレオンのマイン方面軍は正面からこれに対すべく、リュッツェン周辺へと進む。

四月初頭、ユージューヌの部隊はマグデブルクの東に位置するメッケルン付近でウィトゲンシュタイン軍と遭遇し、これを圧倒したが、またしても自軍背後に敵部隊出現との不確かな情報によって戦闘を中止、ザーレ川西岸へ退却してしまった。騎兵の不足によりフランス軍の情報は制限され、その悪影響がはやくも現出していた。

ナポレオンは目前に敵部隊が出現したことで、ベルリンを目指すという当初の計画を放棄し、投入可能な全軍でこの同盟軍部隊を粉砕することに決めた。彼は彼自身が指揮する「マイン方面軍」に一四万を集め、ユージューヌの「エルベ方面軍」には六万を与え進撃を命じた。

ナポレオンは武装蜂起の続く北ドイツにダヴー元帥の一個軍団を残しつつ、エルベ方面軍がメルゼブルク付近で、自身の主力部隊はヴァイッセンフェルスあるいは、さらに南方でザーレ川を渡河し、ライプチヒ付近に集結すると思われる同盟軍に対して自身が正面から、エルベ方面軍が北方から攻撃を行おうと考えていた。

一方、ユージューヌの退却によって、二つの同盟軍はライプチヒ近郊で無事合流を果たし、四月下旬には主力部隊が到着してその戦力は七万を超えた。だが、二〇万を有するフランス軍にはまだ到底及ぶものではない。

シャルンホルストはナポレオンとまともに戦うためには、戦力充実のためのさらなる時間と、さらなる同盟国が必要だと考えていた。特に重要なのがいまだフランスとの同盟を解消していないオーストリアである。

プロイセンとしては普露同盟軍がフランス軍と激突し、少なくとも善戦してみせることが、オーストリアをはじめとする中立勢を味方に引き入れるために必要な、政治的なポイント稼ぎになると判断し戦闘を決意、フランス軍が集結中のヴァイッセンフェルス方面へと進撃を開始していた。

こうしてフランス軍と同盟軍は、ライプチヒ南方の町リュッツェン近郊で不意に激突することとなったのである。

リュッツェンの戦い

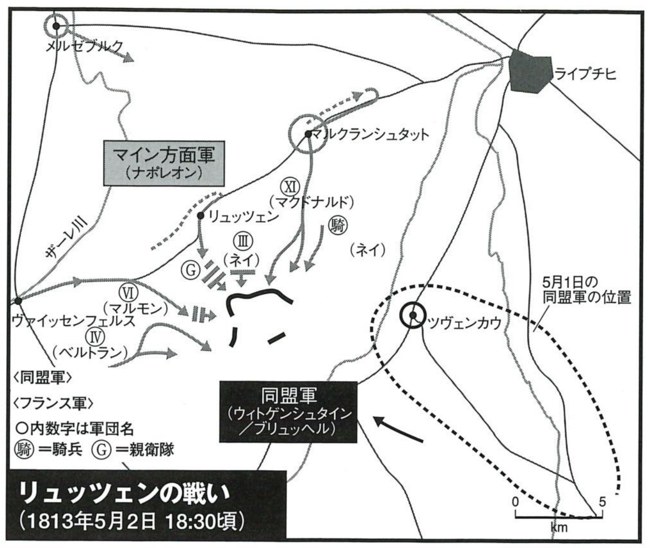
一八一三年五月一日、マイン方面軍はミシェル・ネイ元帥率いる第3軍団を先頭にヴァイッセンフェルスから東方へ進出、ネイの部隊はナポレオン率いるマイン方面軍主力の渡河を援護するため、リュッツェンを占領し、その南に展開した。

だが、前方の偵察が不十分だったフランス軍は、すでに同盟軍がリュッツ

エン南方に接近していることに気づかなかった。そのため渡河を行ったナポレオンの部隊はいきなり激しい抵抗を受け、勇猛な騎兵指揮官だったベシェール元帥が戦死するほどの激戦を強いられることとなった。

そして翌五月二日、ナポレオンの命令によってネイがリュッツェン南方に進出させた二個師団に対して、同盟軍が攻撃を開始した。ところが同盟軍は集結に手間取り、フランス軍が陣地を確保する時間を与えてしまった。

ウィトゲンシュタインとブリュッヘルが陣営を整えようと試みる間に、ネイが第3軍団の残りの部隊を引き連れて戦場に到着。ナポレオンもこの事態に迅速に反応し、ネイに戦場の死守を命じるとともに、マルモン元帥の第6軍団とベルトラン将軍の第4軍団を右翼に、マクドナルド元帥の第11軍団を左翼に展開させ、同盟軍の両翼を攻めようと試みた。



1813年戦役最初の会戦で、ナポレオンは同盟軍を包囲しかけたが、日没とともに後退を開始した敵軍を、騎兵戦力の不足から追撃・撃滅することができなかった。

同盟軍は戦闘が始まった後も部隊の集結が遅々として進まず、前線では激戦によって部隊が勢いを失いつつあった。戦いは午後を通じて行われ、ナポレオンは次第に同盟軍を包囲しつつあった。

この危機から同盟軍を救ったのは夕暮れだった。午後六時、日が暮れるとそれまでの激しい戦闘は収束へと向かい始めた。普露両軍は戦列を整えつつ退却を開始したが、騎兵戦力の少ないナポレオンは、逃げる敵を効果的に追撃することができなかった。

こうして五月二日の「リュッツェンの戦い」あるいは「グロース・ゲルシェンの戦い」と呼ばれるこの戦役最初の大会戦は終わった。

フランス軍は戦闘には勝利したが、自軍の損害は二万を超え、特に終始激戦を経験したネイの第3軍団は二五パーセントもの兵士を失っていた。そしてこれに対し同盟軍側には、追撃の失敗により一万数千の損害しか与えられなかったのである。

これは到底プロイセンあるいはロシアを屈服させる「完全勝利」とは言い難かった。戦場では敗北を喫したものの、ロシア軍もプロイセン軍も、まだ戦闘編成を保ち続けており、士気も崩壊していなかった。

バウツェンの戦い

リュッツェンでの勝利とその後の進撃によって、フランスはザクセンの支持を得ることができたが、ナポレオンにとっては、この戦術的勝利を活かして、さらなる進撃と、こんどこそ戦争の勝敗を決する大勝利を獲得する必要があった。

一方、同盟軍側も退却に成功したとはいえ、無傷ではいられなかった。プロイセン軍を指揮していたブリュッヘルと、その参謀を務めたシャルンホルストはともに負傷し、特にシャルンホルストは脚に重傷を負い、これが後に彼の命を奪うこととなる。

ともあれ、普露同盟軍はドレスデンを経由して、ビューロウ将軍率いる一部の部隊をベルリン方面の警戒のために派遣し、主力部隊はさらに東方の補給拠点バウツェンまで後退した。

ナポレオンは同盟軍を追撃しつつドレスデンを攻略、補給基地を同市に前進させるとともに、部隊の再編成を行った。エルベ方面軍を率いていたユージューヌはイタリア方面の警戒に回され、フランス軍は兵力二〇万の一個軍となった。

ナポレオンはこのうち、主力部隊の左翼警戒とベルリンに脅威を与える目的で第2、第3、第5、第7の各軍団および第2騎兵軍団からなる八万四〇〇〇をネイ元帥に与え、彼自身は残りの一一万五〇〇〇を率いてバウツェンへと進撃を続けた。



「プロイセン軍とのリュッツェンの戦い」（酒田市立光丘文庫所蔵）。幕僚を従えたナポレオンが馬上から指揮をとっている。周囲で丈の高い毛皮の軍帽を被っている兵士たちが、フランス軍中で最強のエリート部隊である親衛隊歩兵。

左翼のネイの部隊は、同盟軍との戦闘の際にはその北側の側面に脅威を与えることが求められていた。ドレスデンからバウツェンへと向かう戦場は南側が中立国であるオーストリア国境でもある山地で、同盟軍をこの方向へ敗走させれば敵は退路を阻まれて壊滅するかもしれないという期待があったからである。

だが同盟軍もまた、ロシア軍の補給源があるシュレージェンに近く、かつオーストリア国境へもほど近いバウツェンへの後退は自軍に有利であると考えていた。シャルンホルストはこの戦役で勝利するには、是が非でもオーストリアの参戦が必要だと確信しており、戦闘が国境に近づけば、オーストリア宮廷を戦争に巻き込むことができるかもしれない、と考えていたのであった。

こうして両軍は互いの思惑によってバウツェンの町に吸い寄せられていった。そして五月十六日、ナポレオン軍の前衛を務めていたマクドナルド元帥の第11軍団がバウツェン近郊で集結する同盟軍部隊と接触、ナポレオンは自軍主力をバウツェンに向けて前進させるとともに、ネイに北方から戦場へ向かって南下するよう命じた。

このとき同盟軍は、リュッツェンの戦場から後退した七万に後方で待機していた三万、そしてバウツェンで彼らを待っていた一万四〇〇〇のロシア軍を含む増援を加え、ベルリン防衛のための派遣部隊を除き、九万近い兵力を集結させていた。

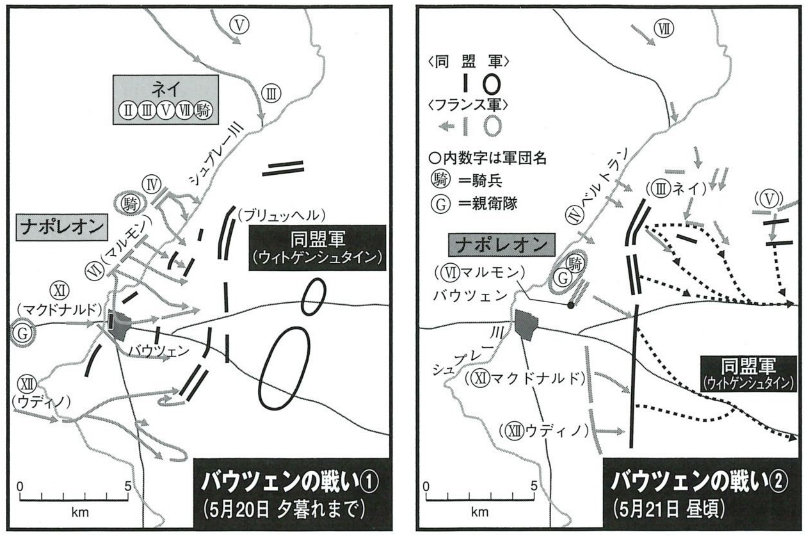


リュッツェン戦後、同盟軍主力はベルリン方面に一部隊を派遣、主力はバウツェンへ退いた。ナポレオンは要衝ドレスデンを確保しつつ、左翼のネイ軍とともに、同盟軍を追った。

五月十九日、ナポレオンは配下の軍団のために攻撃命令を作成した。その作戦は、かつて一八〇五年にフランス軍に大勝利をもたらしたアウステルリッツの戦いを彷彿とさせる両翼の分断と中央突破を狙ったものだった。

五月二十日午後、フランス軍はまず、ナポレオンの計画どおり、一一万五〇〇〇の兵力を有する主力部隊のうち、

右翼のウディノ、マクドナルド、マルモンらが率いる三個軍団によって同盟軍戦線に攻撃をしかけた。
同盟軍は両軍を挟んで南北に流れるシュプレー川を巧みに利用して防御線を敷いていたが、フランス軍は川の強行渡河に成功し対岸のバウツェンの町を占領、同盟軍は戦線を支えるために予備の多くを左翼に投入せざるを得なくなった。そしてこの間、ネイの軍団は着々と南下を続けていたのであった。
翌二十一日、ナポレオンは再び同盟軍左翼に向かって攻撃を開始した。前日激戦を演じたフランス軍右翼の三個軍団は引き続き激しい攻撃で敵部隊を拘束、ナポレオンはベルトラン将軍率いる予備二万と騎兵予備、および精鋭の親衛隊を手元に置き、その日の午後に到着したネイが攻撃を開始すると同時にこれを投入した。
ところが、ネイの攻撃はプロイセン軍守備陣地の正面に対して行われた結果、これを突破できず、さらに縦列で行軍してきた背後の部隊が渋滞を起こしてしまった。そのためこの攻撃は同盟軍戦力を十分に引きつけることができず、ナポレオンが満を持して行った中央への攻撃は尻すぼみとなってしまった。
その日の夕刻、ナポレオンはやむを得ず最後の切り札である親衛隊を中央に投入、これによってついにプロイセン軍の戦線は崩壊し、同盟軍は退却に転じた。だが、ネイが幕僚*の進言にもかかわらず同盟軍の後方へ回り込んでおらず、またフランス軍右翼部隊も敵軍の激しい抵抗で押し戻されていたため、敗走する同盟軍の退路はがら空きとなっていた。
ゆえに、「バウツェンの戦い」と呼ばれるこの会戦によっても、ナポレオンは同盟軍を壊滅に追い込むことに失敗してしまう。騎兵で優位に立つ同盟軍は、その夜の悪天候にも助けられ、フランス軍の追撃をまんまとかわしてしまったのであった。この戦いでフランス軍は約二万五〇〇〇、同盟軍は約一万の兵を失った。フランス軍は激戦の末に小さな戦術的勝利を手にしたに過ぎなかった。
フランス軍はバウツェンでの会戦後も、シュレージェンとベルリンを目指し可能な限り前進したが、現状の戦力、特に騎兵の充実を待たずしては戦役を成功裏に終わらせることは不可能だと判断するに至った。また同盟軍側もさらなる戦力の増強、および外交によるナポレオン包囲態勢を確立するための時間を必要としていた。
こうして六月二日、両軍は七月二十日を期限とする休戦協定を結んだ。一八一三年戦役の決着は、秋まで持ち越されることとなったのである。



ナポレオンは同盟軍の撃滅を期し、20日、右翼3個軍団で敵左翼を攻撃、接近中のネイに敵右翼を衝かせ、予備で中央を突破せんとした。だが21日、ネイの攻撃は進捗せず、同盟軍を撤退させてしまう。

時間稼ぎの休戦

一八一三年の春季戦役と秋季戦役を結ぶ束の間の休戦は、六月から八月半ばまで続いた。フランス軍あるいは同盟諸国軍のいずれも、この休戦が和平につながるとは考えてはいなかった。
両軍ともにこの休戦を利用して兵力の増強に努めるとともに、さらなる援軍、とくに春の間中立を維持していたオーストリアを味方に引き入れようと、外交戦を演じた。
オーストリア外相メッテルニヒはフランスの味方をするつもりはなかったが、旧来のライバル国家であるプロイセンが台頭することも望んでいなかった。オーストリアとしては、休戦をただ長引かせ、ロシアやプロイセンを増

＊ 幕僚＝このときネイの参謀長を務めていたのは、『戦争概論』などの著書で知られるスイス人兵法家アントワン・ジョミニであった。彼はこの後の休戦期間中に仏軍参謀総長との不和が原因でロシア軍に身を転じた。


プロイセンの後備軍兵士。その象徴である十字のマークが軍帽に見える。後備兵制度は、兵力の増強およびプロイセン民衆に国土防衛の意識を喚起することを目的としたいわゆる民兵組織で、主に郷土防衛を担当する予備兵力となることを期待されていた。この1813年戦役においては後備兵部隊はいまだ編成途上にあったが、秋季戦役のころには、歩兵・騎兵合わせて約11万人が動員され、一部は野戦軍、残りは攻囲部隊や後方部隊として勤務した。後備兵制度は形を変えて、その後のドイツ軍に引き継がれ、第二次世界大戦に至るまで続いた。

長させずにナポレオンの力を削ぐ方法を模索しようと考えていたのである。
ナポレオンとの戦いにはどうしてもオーストリアの戦力が必要だと考えていたシャルンホルストは、リュッツェンの戦いで重傷を負っていたにもかかわらず、自らウィーンへと交渉におもむくが、メッテルニヒは彼をプラハに足止めして会おうとはしなかった。
ナポレオンは休戦の間に訓練中だった新兵を含む膨大な兵力をかき集め、いまだ敵陣後方で包囲されているいくつかの要塞守備隊約五万五〇〇〇を合わせ、およそ七〇万の兵力を確保した。そのうち四四万程度が第一線の野戦軍に、四万三〇〇〇が第二線の予備に、二万六〇〇〇がチロルおよび北ドイツといった両翼の守備に配備され、残りは総予備とされた。
再編成されたフランス軍は、同盟軍に匹敵する野砲を装備し、歩兵の質も慌てて編成された春季戦役時よりも向上していた。だが馬匹は相変わらず不足し、砲や物資の移動と騎兵の戦力に深刻な影響を及ぼしていた。
これに対し同盟国側もまた戦力を倍増させていた。プロイセンでは、シャルンホルストが提唱し三月に履行された後備兵制度によって予備戦力を整え、編成未了の補充兵も含めて約三〇万の兵員を確保、八月までに二〇万弱の野戦軍を編成した。
この中からフランス軍が立てこもる要塞を監視するために三万を引き抜いた結果、プロイセン軍は約一六万の戦力で次なる戦いを迎えることとなった。プロイセンの同盟国ロシアは三〇万をドイツに投入し、うち一八万を野戦軍として使用可能だった。
加えて、やはりナポレオンの没落を望んでいたイギリスは、兵力こそ数千のドイツ人傭兵を送っただけであったが、プロイセンとロシアに二〇〇万ポンドの軍事援助を約束し、加えて同盟に加わることを条件に、オーストリアに対しても五〇万ポンドの援助を申し出た。
さらに七月に入ると、欧州大陸にあった自国領をナポレオンに侵犯されたスウェーデンが対ナポレオン同盟軍に加わることを表明。ここでついにオーストリアは参戦を決意し、メッテルニヒはナポレオンに非常に不利な講和条件を突きつけたうえで、それを拒絶したフランスに対して宣戦を布告することとなった。
こうして同盟軍にはスウェーデン軍二万五〇〇〇とオーストリア軍二〇万が加わり、野戦軍の総兵力は六〇万近く、予備の補充兵を加えると八〇万を超える巨大なものとなったのである。
これこそ、シャルンホルストが来たるべき戦いに望んでいたものだった。彼はこれらの同盟軍を使って、いかにしてナポレオンを破るかという作戦についても考えを巡らせ、プロイセン軍の他の参謀たちと協議を重ねこれを煮詰めていた。シャルンホルストの方法は一言でいえば、ナポレオンに得意の機動戦を許さないというものであった。
同盟軍はベルリン、シュレージェン、オーストリアの三方から、ドレスデンを前進基地とするフランス軍を取り囲んでいるが、列強各国の政治的な思惑から全軍を統率する総司令官は存在しなかった。しかも総兵力では上回っているものの、三方向にいるそれぞれの方面軍は、フランス軍の全戦力に比べれば劣っており、もしナポレオンが内線*の利を活かし全力で同盟軍の一方面を攻めれば、各個撃破の可能性があった。
そこでシャルンホルストは「ナポレオンが率いる主力部隊との決戦を避ける」という方針を編み出した。ナポレ

＊内線（作戦）＝数方向の外側から求心的に接近する敵に対し、自軍の後方連絡線を内側に保持して戦うこと。

オンが出陣してきたらその方面は後退し、同時に彼にとって持久戦区となる他の方面で攻勢に転じる。これを繰り返せば、フランス軍は転進に次ぐ転進で戦力を消耗し、同盟軍は包囲の輪を次第に狭めることで集結し、弱体化したフランス軍を全軍で握り潰すことが可能になる、シャルンホルストはそう考えていた。

だが彼は、自身が構想した勝利への道を自ら歩くことはできなかった。プラハで足止めを受けている間にシャルンホルストの負傷は悪化し、休戦中の六月半ば、彼は敗血症によってその命を奪われてしまったのである。

しかし、彼が再生させたプロイセン軍は、一人の軍事的天才が率いる軍隊ではなかった。シャルンホルストとともに新しい軍事戦略を研究し、またその教えを受けた参謀将校が、すでに彼の理念と戦略を正しく理解していたのである。

ともあれ、こうして休戦は八月中旬にオーストリアがフランスに宣戦を布告することで終わりを告げた。これまでナポレオンは、ある戦場で一度に二国以上の列強と対峙することはなかったが、来るべき戦いでは普露墺瑞の四か国を相手にせねばならなくなった。また、これに加えてナポレオンは、今は亡きシャルンホルストの生み出した新しい軍隊、新しい戦略と戦うこととなったのであった。

秋季戦役・ドレスデン会戦

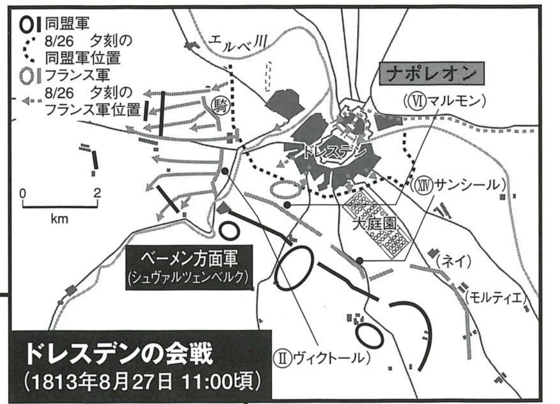
休戦終了時、同盟軍はベルリン周辺にプロイセンおよびスウェーデン軍からなる「北部方面軍」約七万、東方にプロイセン軍とロシア軍で構成された「シュレージェン方面軍」約五万、南方にはオーストリア、プロイセン、ロシアの三国軍合計一八万を擁する「ベーメン方面軍」を正面戦力として展開していた。

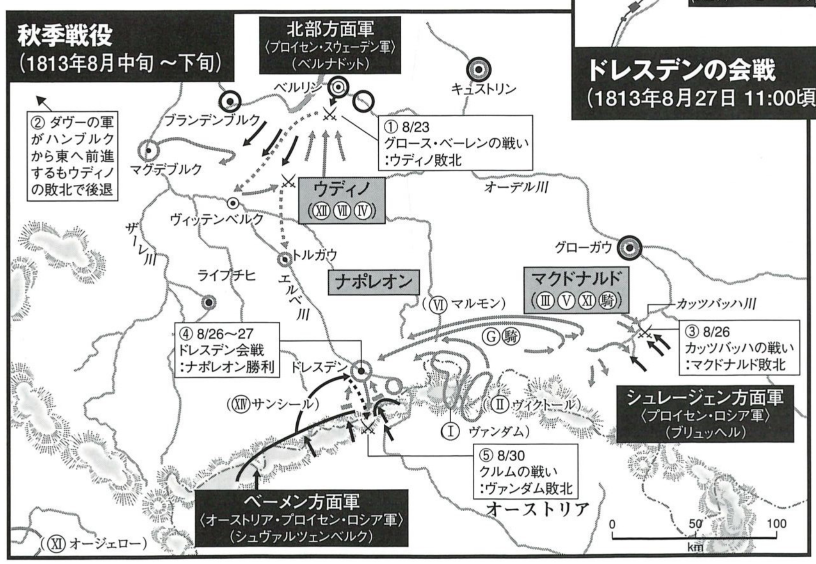
シャルンホルストの跡を継いだグナイゼナウ将軍は休戦失効の直前に各国元首や将帥らと作戦について協議した。彼はシャルンホルストの構想を共通の戦略として各軍に承認させるとともに、各方面軍にプロイセン軍部隊を配属することも認めさせた。

グナイゼナウは、同じ教育を受けたプロイセン軍参謀がすべての方面軍に存在することで、それぞれが離れた地点で作戦を行っていても、単一の作戦目標のために協調行動を取ることが可能になると考えていたのだった。

そしてその作戦はシャルンホルストの構想どおり、ナポレオンの主力が存在しない方面で攻勢を繰り返してフランス軍を疲弊させ、最終的に全軍が北部方面軍とドレスデンを結ぶライプチヒで合流して、敵軍の連絡線を切断するという形で落ち着いた。

東北南を三方包囲され





三方の敵の各個撃破を狙うナポレオンは、勝利の確率が高い北へウディノを送り、自らは増強間近の東の敵を事前に叩こうとした。しかし南の敵がドレスデンを攻めたため、急遽その側面を衝くべく兵を返す。だが①ウディノの攻撃は撃退され、②それを支援したダヴーも後退。③東の敵に対したマクドナルドも敗れ、④ナポレオンはドレスデンで勝つも、⑤ヴァンダムの追撃では返り討ちにあった。



「ドレスデンの戦い」(酒田市立光丘文庫所蔵)。手前の軍隊が、ドレスデン（右奥）を攻撃する同盟軍右翼。河川を挟んで左奥に描かれた同盟軍左翼は、市街から橋を渡って攻撃をかけるナポレオン軍により崩れかけている。

たナポレオンにとって、同盟軍を各個撃破し、対仏同盟を崩壊させるしか勝利への道はなかった。彼はどの方面の敵を目標とするかについて深く考えを巡らせた。

重要なのはエルベ川の渡河点と兵站基地であるドレスデンの防御だった。ナポレオンは彼自身の主力部隊をドレスデン近郊に集結させ、南と東から迫る同盟軍の中央に位置するとともに、一二万の兵力をウディノ元帥に与えて、北ドイツのハンブルクに配備されているダヴー元帥の一個軍団とともにベルリンを目指すよう指示した。

ナポレオンは、南方の敵は退却路をオーストリア国境の山岳地帯に守られており、東方の敵部隊への攻撃は、フランス軍の連絡線を危険なほどに延長することになると考え、北部への攻撃こそ最も勝利の望みが大きいと判断したのだった。

ウディノが弱体な北部方面軍を撃破しベルリンを占領すれば、東方のシュレージェン方面軍は北上して南方のベーメン軍との連携を失うか、あるいはそのままの位置で北側面をフランス軍に晒すことになる。いずれの場合でも、プロイセンとロシア、そしてスウェーデン軍が敗北を喫すれば、優柔不断なオーストリアは戦争から脱落するであろう。これがナポレオンの基本戦略となったのである。

ところが実際の戦いは、ナポレオンの思惑どおりには進まなかった。ナポレオンは休戦が終わると同時に、東方のシュレージェン方面軍がロシアの援軍によって増強されつつあるという情報を手に入れた。彼は敵軍が合流する前にこれを撃破しようと、ドレスデンに若干の守備隊を残して主力を東へと進め、同時にウディノにはベルリンへの進撃開始を命じた。

ところが数日後、ドレスデンからベーメン方面軍の攻撃を受けているという報告がナポレオンの下に届いた。ナポレオンはドレスデンに集結している敵を側面から衝こうと主力を反転させた。彼はマクドナルド元帥にはエルベ上流の支流であるカッツバッハ川の線で東方からの敵軍を足止めし、ウディノには引き続きベルリンへの進撃を指示した。

こうして八月二十六～二十七日の二日間にわたる、秋季戦役最初の大会戦である「ドレスデンの戦い」が発生することとなった。

ナポレオンは五日間で二〇〇キロを踏破する強行軍でドレスデンに一二万を集結させ、ドレスデンの町の南方から激しい攻撃を続けている同盟軍一七万の両側面を攻撃した。これによって、河川を挟んで主力から分断されていた同盟軍左翼は壊滅的打撃を受け、八月二十七日にドレスデン攻撃を中止、後退を開始した。

ナポレオンは巧みな戦術指導と彼自身が戦場に存在することで生じる士気高揚、防御側に有利な要塞都市ドレスデンの地形などによって、自軍より強力な同盟軍を敗走させるという会心の勝利を得た。同盟軍はこの戦いで三万八〇〇〇もの兵力を損失し、ナポレオ

ン軍には一万をわずかに超える損害を与えたに過ぎなかった。

だが、結局一八一三年の秋季戦役において、ナポレオンが獲得した勝利はこの「ドレスデンの戦い」ただ一回だけだったのである。そして彼が束の間の戦術的勝利を得ている間に、彼のいない戦場では崩壊が始まっていた。

最初の敗北はドレスデン会戦に先立つ八月二十三日、ベルリンを目指していたウディノ軍に襲いかかった。敵軍の二倍近い兵力を有するフランス軍は順調にベルリンの正面まで前進していたが、急な進撃で部隊は道路上に長く伸びてしまっていたのである。

北部方面軍に配属されていたプロイセン軍団司令官ビューロウ将軍はこの隙を逃さず反撃に転じ、ウディノ軍先頭のレイニエ軍団とグロース・ベーレンの町で衝突してこれを敗走させた。

この年最初のフランス軍の敗北に動揺したウディノは、わずか一個軍団が敗走したに過ぎないにもかかわらず進撃を停止し、エルベ川の線まで退却してしまった。彼らと呼応して進撃していたダヴー軍団は単独ではどうすることもできず、ハンブルクに引き返すしかなかった。

さらに二つ目の敗北の報告がドレスデン会戦の翌日にナポレオンに届いた。東方の警戒を命じていたマクドナルドの部隊が、ドレスデン会戦と同じ八月二十六日にカッツバッハ川の対岸でブリュッヘル元帥率いるシュレージェン方面軍に伏撃され、一万五〇〇〇の兵を失って後退してしまったのである。

同盟軍は計画どおり、ドレスデンでナポレオンが戦っている間に、彼のいない北方と東方でフランス軍に打撃を与えていた。そして、これら一連の攻撃の中核を担っていたのは、計画を立案したプロイセン軍の部隊だった。

ナポレオンの受難は続いた。彼は北方と東方の危機に対処するため、自身が率いる主力部隊を内線の中央に位置するドレスデンに留め置き、南へと敗走するベーメン軍の追撃にはヴァンダム将軍の一個軍団のみを差し向けた。

だが、わずか一個軍団では満足な追撃戦は行えないばかりか、ヴァンダムはいつのまにか追撃していた部隊とは別の敵に背後に回り込まれ、クルムという狭い山道の町で挟み撃ちに遭って兵の半数と軍団長を失うという大損害を被ってしまった。

結局ナポレオンは、主力部隊を相次ぐ進路変更と強行軍およびドレスデンでの戦闘で消耗させた末に、一回の勝利と三回の敗北を喫したのである。フランス軍は北方、東方、南方の全戦区において主導権を失ったのであった。

ナポレオン包囲網縮まる

ナポレオンはそれでも、まだ北方の敵軍を叩いてベルリンを占領すれば、状況を好転させることが可能だと考えていた。ところがこのとき彼は、この攻撃を自身で率いることをせず、配下のネイ元帥に任せてしまった。

というのも、ナポレオンはフランス全軍の統率と作戦指導を彼一人で行っており、各戦域の情報を手に入れ戦況を判断するためには、戦線の中央に位置している必要があったのである。彼が主力を率いて北進すれば、兵站の中枢であるドレスデンは東南二方向から脅威にさらされ、しかもナポレオン自身はこれに対処することが難しくなる。

だが、これはフランス軍が内線の利を放棄するということだった。総兵力に劣るフランス軍は敵の一方面軍に対して全力であたらねば勝利は望めない。しかしナポレオンは自軍を分割し、あらゆる地点で敵に対して弱体な状況を自ら作ってしまったのである。

もともとナポレオンは北ドイツとチロル地方という戦場の両翼をダヴーとユージューヌという優秀な指揮官に任せ、中央の主力はすべて自身で掌握できると考えていた。しかし一八一三年の戦いは、両陣営が膨大な兵力を投入したと同時にその戦場もまた巨大になり、ナポレオン一人の手には負えなくなっていたのだった。

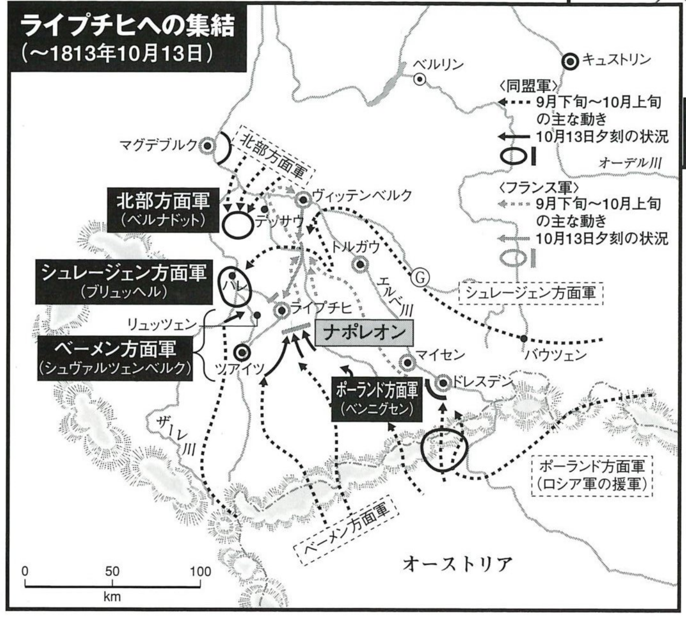
これに対して同盟軍側は、「ライプチヒでの全軍集結」という確固たる作戦目標を持つ各方面軍が、その時々の戦術をこの作戦目標に合致させ、揺るぎない前進を行おうとしていた。ナポレオンはこのとき、同盟軍の各方面軍に配属されたプロイセン参謀、いわば「シャルンホルストの遺児たち」の統一された意志に囲まれ、その包囲の輪の中で立ち尽くしていたのであった。

ドレスデン会戦に続く九月の戦闘は、こうした状況によって次々とナポレオンを追いつめていった。フランス軍はナポレオン自身がいないあらゆる方面で同盟軍に対して数度の敗北を喫し、ナポレオンの主力が投入された方面では慎重かつ巧みに戦闘を回避されてしまった。

〈地図参考〉Brigadier General Vincent J.Esposito and Colonel John R.Elting『A Military History and Atlas of the Napoleonic Wars』(Greenhill Books)／Peter Hofschroer『Lutzen & Bautzen 1813』『Leipzig 1813』(Osprey)

ドレスデン会戦後、同盟軍はナポレオンの主力との決戦は巧妙に避けながら、他の方面では分割・派遣されたフランス軍を攻撃し、消耗を強いた。9月下旬、攻勢をあきらめたナポレオンは全軍をドレスデン周辺に集結。同盟軍はシュレージェン及び北部方面軍が合流し、増強されたベーメン軍とともどもライプチヒでの決戦を目指す。ナポレオンは北部の敵を叩くべく、再度兵力を分割して送るが失敗。結局10月中旬には、同盟軍によりライプチヒ周辺に追い詰められる形となった。





ナポレオンのこの苦戦によって武装蜂起はドイツ全土に広がり、コサック騎兵による後方連絡線への襲撃とともにフランス軍の補給状況を悪化させ、さらに秋の悪天候はナポレオンの兵士たちの機動力を奪った。

そして九月二十三日、ナポレオンはついに同盟軍に対するこれ以上の攻勢が不可能であると判断し、全軍をドレスデンを中心とするザクセン地方へ後退させることを決定した。

一方、同盟軍側はいよいよ攻撃に転じるときがきたと考え、ブリュッヘル率いるシュレージェン方面軍を北方へ展開させて北部方面軍と合流させ、さらなるロシア軍増援によって補強されたベーメン軍もフランス軍が守るドレスデンへの進撃を中止し、決戦場と定められていたライプチヒへとその進路を転じた。総兵力は南北合わせて約三二万。

これに対し、二六万の兵力を手元に集中させたナポレオンは、同盟軍が二手に分かれた瞬間、その一方に全力を投入することで再び各個撃破のチャンスが訪れたと感じた。だが補給の要であり、なおかつ いまや唯一の同盟


「ライプチヒ付近の戦闘」(酒田市立光丘文庫所蔵)。右から押し寄せる同盟軍と左手に敗走するフランス軍が描かれている。続々と集結する圧倒的な兵力の同盟軍に、ナポレオンは3日間の死闘空しく退却した。

国となったザクセンの首都ドレスデンを放棄することはできない。彼はまたしても兵力を分割して弱体な戦力で北方に向かい、同盟軍に対する勝利の機会を逃してしまったのである。

ライプチヒ会戦——英雄の黄昏

十月の最初の二週間、ついにナポレオンはなすすべなく、じわじわと同盟軍が迫るライプチヒへ自軍を集結させるしかなかった。そして十月十六～十八日の三日間、両軍合わせて五〇万人に達する兵力が、ライプチヒの町を取り囲む戦場で激突することとなった。

ナポレオンは南北から攻撃してくる同盟軍の一方に反撃戦力を集中することに、最後の「各個撃破」の望みを託した。彼は四個軍団をネイに与えてライプチヒ北部を守らせ、主力一二万を率いて南部の敵を撃破するつもりだった。

だが、実際の戦闘は彼が望んだような整然としたものではなかった。ライプチヒの北西、北東、南東、そして南方から迫る同盟軍と、これに必死で対処しようとするフランス軍はいたるところで交戦し、あるところは前進に成功、あるところは後退を強いられ、戦況を正確に掴むことは困難だった。

作戦面において戦争の巨大化がナポレオンの采配を鈍らせたように、五〇万の兵力がぶつかり合う未曾有の戦場では、フランス軍および同盟軍の将帥たちはいずれも、戦術の枠を競い合うような余裕はなくなっていたのである。戦いはもはやナポレオンの天才によって帰趨を決められることもなく、互いの戦力がただただぶつかり合う修羅場と化していたのである。

十六日の戦闘はフランス軍が二万五〇〇〇、同盟軍が三万の損害を被る激戦だった。同盟軍は翌日、さらなる増援を集結させることに費やした。一方のナポレオンは戦況が思わしくないことから撤退を決意していたが、同盟軍がなにか致命的なミスを犯すかもしれないと、戦いの二日目を無為に費やしてしまった。

そして三日目となる十月十八日、より強大になった同盟軍が再び攻撃を開始したとき、フランス軍は、ナポレオンの計画どおり撤退を始めた。だが後退するフランス軍はライプチヒの町の西側を流れる河川に一本だけかかる橋梁に殺到し、しかも工兵隊が全軍の撤収が完了しないうちにその橋を破壊してしまったため、撤退は大混乱に陥った。

同盟軍は労なく、自滅していくフランス軍を追撃するだけでよかった。こうして「ライプチヒ会戦」はナポレオンに、ロシア遠征の失敗をも上回る敗北をもたらすこととなったのである。

この戦いでナポレオンは同盟軍に六万近い損害を与えたものの、六人の戦死者を含む数十名の将官と七万もの兵士を失い、さらに「不敗の将軍」としての威信をも喪失した。

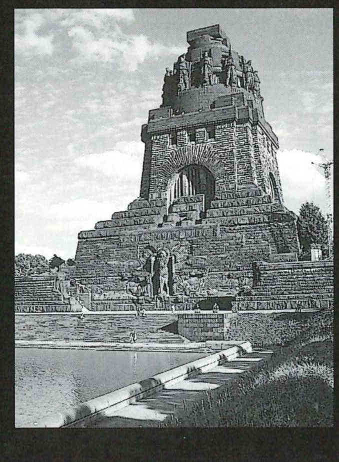
フランス軍はドイツ全土を放棄してフランスへ退却したが、戦いはこれで終わりではなかった。その年の暮れから一八一四年の春にかけて、同盟軍はさらにナポレオンを追ってフランスへと侵攻し、ついに皇帝を退位に追い込むことになる。

ロシアでの失敗を覆そうと試みられた、一八一三年におけるナポレオンのドイツ戦役は、このように彼の政治的地位をも奪う大敗北に終わった。

かつてナポレオンは、彼自身が生み出した「国民軍」によって戦争を巨大化させ、その変化に対応できない周辺国を圧倒した。だが、彼に敵対する軍もまた戦争の巨大化に追随したとき、そこに出現した広大な「戦場」は、彼の手にすら余りあるものとなった。

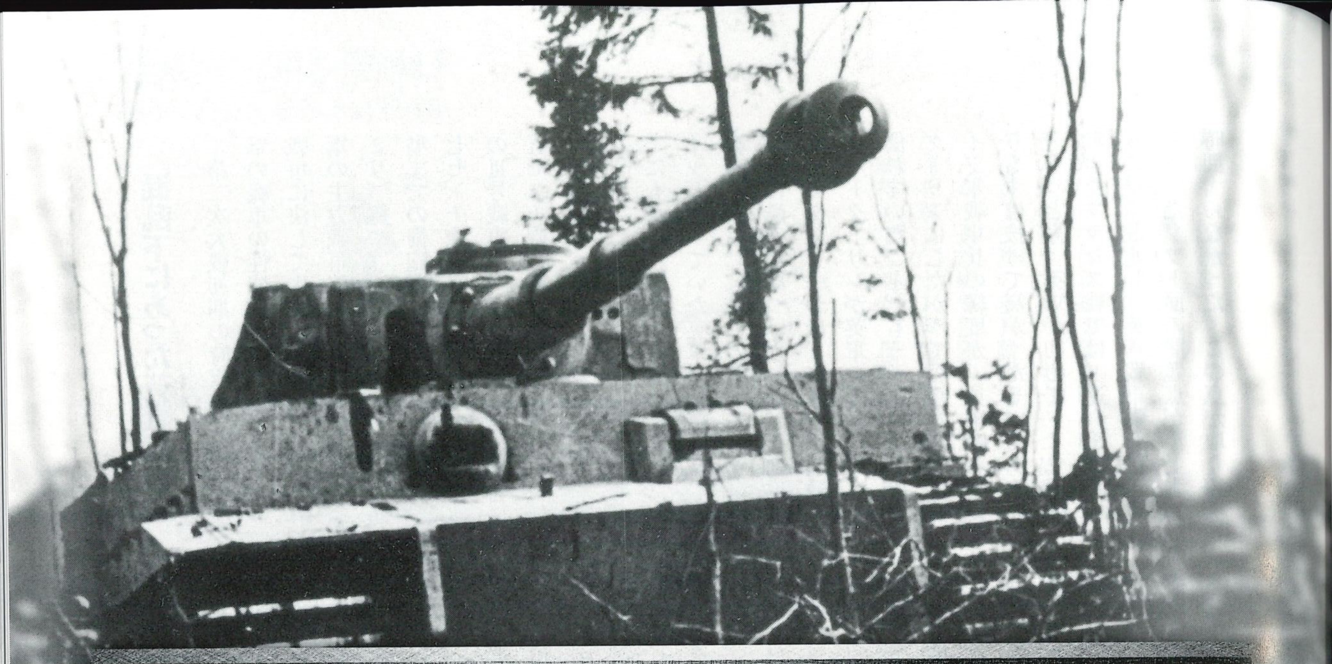
ナポレオンは大部隊に長期にわたって強行軍を強い、確実な勝利を得られないまま兵を失うという消耗戦に屈したのだった。

そしてその新たな戦場を制したのは、こうした消耗戦に耐える兵力を持っていた同盟国の人的資源と、ナポレオンの天才に対して消耗戦という返し技をぶつけたシャルンホルストの弟子たち、プロイセンの参謀たちだったのである。



現地に建つ巨大なライプチヒ会戦記念塔。ドイツでの敗北は、ナポレオンの欧州支配に事実上終止符を打つことになった。

〈参考文献〉デイヴィッド・ジェフリ・チャンドラー　君塚直隆、糸田郁子、竹村厚士、竹本知行訳『ナポレオン戦争(第4巻)』(信山社)／F.N. Maude『The Leipzig Campaign,1813』(Ken Trotman)／Digby Smith『1813 Leipzig』(Green Hill Books)／Michael V. Leggiere『Napoleon Berlin』(University of Oklahoma Press)／Simon Forty & Michael Swift『Historical Map of Napoleonic Wars』(PRC Publishing)／Peter Hofschroer『Leipzig 1813』『Lutzen & Bautzen 1813』(Osprey)



ドイツ重戦車に対抗した連合軍の戦車戦術

鋼鉄の虎を狩れ!

HUNT TIGER AND PANTHER

戦場を彷徨し始めたゲルマンの猛獣たちは
米英戦車兵にとって恐るべき脅威となった
そして悪戦苦闘の中から
編み出された猛獣退治の秘策——
物量と合理性を融合させた戦術を解き明かす

文=白石　光
イラストレーション=樋口隆晴



（上）主武装8.8cm砲、最大装甲厚100mmという、恐るべき性能を有したティーガーⅠは、連合軍戦車兵の恐怖の的であった。（下）整列したM4シャーマン。バランスのとれた戦車だったが、単体性能ではティーガーⅠに対抗できなかった。

混乱下にあった英戦車隊

第二次大戦初期の時点での英軍や米軍の戦車の性能は、同時期のドイツ軍戦車に決して劣らなかった。当時の英軍の主力戦車砲である二ポンド（四〇ミリ）砲や、米軍のＭ３やＭ４の中期型までの備砲だった七五ミリ砲は、三・七センチ砲や四二口径五センチ砲装備のⅢ号戦車や、短砲身の二四口径七・五センチ砲を搭載したⅣ号戦車と、ほぼ対等に戦える威力を備えており、ハード面では特に大きな差はなかった。

にもかかわらず、米国よりも先にドイツと戦っていた英軍の戦車隊は、開戦当初からしばらくの間、ドイツ軍戦車隊に酷く痛めつけられた。その理由は二つある。一つは、ドイツ軍の戦車運用ドクトリンが英軍のそれに比べて優れていたこと。もう一つは、そのドクトリンにしたがって戦車を動かすドイツ軍戦車兵の練度が、英軍戦車兵よりもずば抜けて高かったせいである。

もっとも、英軍が初めてドイツ軍と戦ったフランス戦では、連合軍はあまりに早く敗北し、英軍戦車隊が抱えるこうしたソフト面の問題点が浮上する時間すらなかった。この点が取り沙汰されるようになるのは、北アフリカ戦にドイツ軍が介入してからである。

北アフリカの緒戦では、ハード面ではさほど劣らないがソフト面で劣るイタリア軍戦車隊を、英軍戦車隊が叩きのめしていた。ところがドイツ軍戦車隊の登場で、今度は英軍戦車隊が叩きのめされる立場となってしまう。

しかし、何度も叩かれているうちに英軍戦車兵の練度が向上し、ドイツ軍式の運用ドクトリンも見よう見真似で会得すると、元来、戦車の性能にさほど優劣差があるわけではなかったことが幸いして、ドイツ軍戦車隊ともそこそこ戦えるようになった。

だが、智将ロンメル率いるドイツ軍は戦車だけでなく対戦車砲の運用にも長けており、対戦車砲と戦車を併用した複合的な機甲戦では、英軍戦車隊は苦戦を強いられた。その原因は、当時の英軍戦車の二ポンド砲にあった。

何とも不可解だが、英軍は二ポンド砲用の榴弾を前線部隊に交付せず、対戦車砲との交戦は、一個中隊に数両の割合で配備されていた、榴弾しか撃てない三インチ（七六・二ミリ）榴弾砲を搭載するＣＳ（ＣＳは〝Close Support〟＝近接支援の頭文字）型戦車に任せることになっていたのだ。

ところがＣＳ型戦車は配備数が少なかったため、戦闘の初期に全車が撃破されてしまうことも度々で、以降は二ポンド砲搭載の戦車が対戦車砲と交戦するハメになる。だが、対戦車砲のような軟目標を徹甲弾で撃つのは、飛ぶ鳥を散弾銃ならぬライフル銃で撃つようなものでなかなか撃破できず、さりとて、車載機銃で敵の砲員を掃射しようにも、その有効射程まで接近する間に、対戦車砲に返り討ちにされてしまうことのほうが多かった。

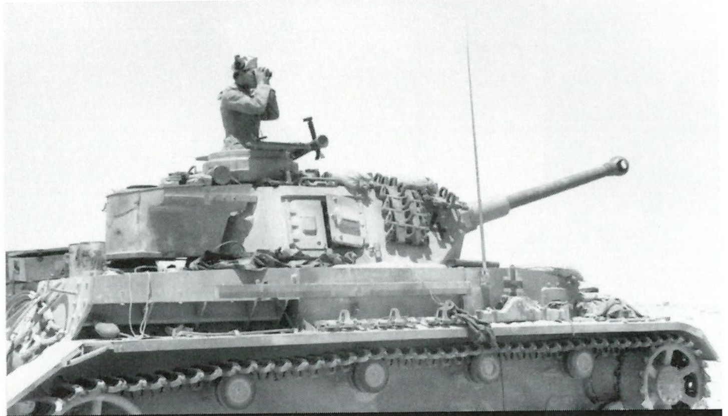


95mm榴弾砲を装備した英軍の近接支援（ＣＳ）型、セントーMk.Ⅳ。写真はノルマンディー戦におけるもの。第２次大戦緒戦において、英軍の戦車運用方針は２ポンド砲搭載戦車とＣＳ型戦車の位置づけで混乱していた。

実は第二次大戦前夜の英軍では、主力戦車の任務を二つに大別して、それぞれに別個の車種をあてるという、独特の戦車運用ドクトリンが唱えられていた。一つは戦線突破や戦車戦が主任務の巡航戦車であり、もう一つは歩兵支援が主任務の歩兵戦車である。

だが、巡航戦車部隊の主力が徹甲弾だけを撃つ二ポンド砲搭載型戦車なのは納得もできるが、榴弾による歩兵支援が主任務で、戦車戦は二義的なはずの歩兵戦車部隊まで二ポンド砲搭載型戦車が主力とされ、ＣＳ型戦車の配備比率が巡航戦車装備部隊と同じだという点は何とも不可思議である。

英軍のこの戦車運用ドクトリンは、任務の専門分化に主眼を置いて考案されたものだったが、結局はめまぐるしく変転する戦場に即していない机上の理想論にすぎなかったのである。



長砲身7.5cm砲を搭載したドイツのⅣ号戦車。北アフリカには、本タイプの他にも、火力が強化されたⅢ号戦車などが配備されたが、英軍戦車部隊にも２ポンド砲を６ポンド砲に換装したクルセーダーや、米国製のＭ３、M4などが配備され、均衡を保つことができた。



クルセーダーの陰で休息している英戦車兵。２ポンド砲装備のクルセーダーMk.Ⅰ／Ⅱが配備されていた北アフリカの英戦車隊は、のちに６ポンド砲装備のMk.Ⅲを受領した。だが、やがて英独両軍の戦車における性能の均衡を破る「怪物」が登場することになる。

二ポンド砲から六ポンド砲へ

一九四一年、ソ連に侵攻したドイツ軍はT―34とKVという強力な戦車と遭遇したことによって、自軍戦車の急速な性能向上に、より力を注ぐことになった。まずⅢ号戦車とⅣ号戦車の火力が急ぎ強化され、旧式戦車や鹵獲戦車の車台に対戦車砲を搭載した対戦車自走砲の生産に拍車がかかり、のちにティーガーⅠとパンターとなる新型重戦車と新型中戦車の戦力化も急ピッチで推進された。

その結果、北アフリカにも新型のドイツ軍戦車が現れた。四二口径五センチ砲を、より装甲貫徹力に優れた六〇口径のものに換装したⅢ号戦車と、同じ理由で二四口径七・五センチ砲を四三口径（のちに四八口径）のものに換装したⅣ号戦車がそれである。

だが英軍でも、二ポンド砲より強力な新型の六ポンド（五七ミリ）砲を搭載したクルセーダーMk.Ⅲや、米国製M３リーおよびM４シャーマンという新型戦車の配備を開始していた。特にM３とM４は、徹甲弾も榴弾も撃てる七五ミリ砲を搭載しており、それまで二ポンド砲と三インチ砲の二本立てで無駄に苦戦を強いられてきた英軍戦車兵たちを大いに喜ばせた。

以降、米国製のM４は終戦まで事実上英軍の主力戦車として戦い続けることになるが、同軍では、多種の砲弾が撃てるM４の七五ミリ砲を「汎用砲」と位置付けるとともに、性能的に巡航戦車としても歩兵戦車としても使えるM４を、「汎用戦車（ユニバーサル・タンク）」と称するようになった。もっとも、英国以外の国の戦車の備砲のほとんどは徹甲弾も榴弾も撃つことができるのが当たり前で、それを改めて汎用砲などと呼び、その砲を搭載した戦車をわざわざ汎用戦車などと呼んでいた国など、他にはなかったのだが。

ところが、六ポンド砲にはまたも二ポンド砲での愚行が繰り返されていた。というのも、二ポンド砲より強力な六ポンド砲を一刻も早く戦力化するため、金属の塊の徹甲弾に比べて開発が難し



射撃中の17／25ポンド対戦車砲。戦時下における英国の生産力不足によって一旦、その生産が棚上げにされていた同砲であったが、ティーガーIの登場によって量産が開始された。しかし、常に配備数は不足気味であった。この17ポンド砲は、のちに「虎狩り」の切り札として、姿を変えて登場することになった。

い榴弾の手配が後回しにされ、前線部隊には徹甲弾しか交付されなかったのである。

　というわけで、英軍はドイツ軍戦車の「進化」に対して、米国製のM3やM4を大量に取得することにより、かろうじて追随することができていた。

　しかし、既存の英軍や米軍の戦車ではその性能の差を埋めるのが困難なほど、桁違いに強力なドイツ軍戦車が目前に迫っていた。

北アフリカに現れた鉄の虎

　英軍はかねてから、ドイツ軍の暗号の解読やソ連からの断片的な情報によって、近々、ドイツ軍の新型重戦車が北アフリカに出現するかもしれないと推察していたが、一九四二年十一月、それが現実となった。ティーガーIの登場である。

　すでに前年の十二月に参戦していた米国も、奇しくも同じ四二年十一月、北アフリカに上陸してドイツ軍と戦っていたが、当時、前線にあった英軍と米軍の戦車には、ティーガーIとまともに戦えるものが一車種もなかった。

　そして、「タイガー・ショック」と称されたこの事態を受けた英軍と米軍は、それぞれ別の反応を示すことになった。

　まず英軍だが、開戦以来、ドイツ軍戦車によって苦戦を強いられてきたという経緯に加えて、事前に情報を得ていたため、すでに対抗策を講じていた。それは、一九四一年に開発に着手され、六ポンド砲の後継として試作まで終了していたが、英国の軍需生産能力の限界によってまだ生産されていなかった一七ポンド（七六・二ミリ）砲の生産を開始したことだ。その結果、砲そのものは造られたが、砲架が追いつかないという事態が生じた。そこで、二五ポンド野砲の砲架を転用することでこの問題を解決した。

　こうして、英軍初の量産型一七ポンド対戦車砲が完成し、「一七／二五ポンド対戦車砲」と命名された上で一〇〇門が限定生産された。四三年一月、これらはチュニジアへ送られ、同年三月のマレト戦で初陣を飾り、ティーガーIにかろうじて一矢を報いている。

　一方、米軍は英軍とは違った結論に達していた。米軍もティーガーIが強力な戦車である点は認めたが、ドイツの軍需生産能力なども加味した総合的な分析の結果、従来のドイツ戦車に比べてティーガーIの生産にはより多くの資源とマンパワーが必要なため、たやすく量産できるとは考えられないという答えを得たのだ。ゆえに局地的な脅威とはなっても、戦局全体を左右するような脅威にはならないと判断し、特別な対策は講じなかった。

　結局、米軍のこの分析どおり、わずかな数のティーガーIでは北アフリカの戦いの趨勢を覆すことなど不可能で、一九四三年五月十三日、在北アフリカの枢軸軍は全面降伏に至った。しかし、そのわずかな数のティーガーIが、驚くほど多数——一説では一〇倍ともいわれる——の連合軍戦車を屠っていた。



家屋の陰に隠れて敵を待ち伏せしているティーガーI。写真はイタリア戦ではないが、こうした地形を利用した待ち伏せ攻撃で、遠距離から敵を一方的に撃破できる強力な火砲を有したティーガーは、連合軍戦車兵たちにとって恐怖の的であった。



イタリアでの戦いで、狭隘な峠道を前進するM4シャーマン戦車。イタリア半島は、防御する側にとって伏撃するのに適した地形である反面、攻撃する側にとっては、動きを封じられ、狙い撃ちされやすい、不利な戦場であった。

　というのも、北アフリカで唯一、ティーガーIを標準的な射距離で撃破できる一七／二五ポンド砲もまだ数が少なく、ほとんどの場合、M4やクルセーダー、チャーチルなどが交戦することになったが、これらの連合軍戦車に搭載された七五ミリ砲や六ポンド砲では、全射程においてティーガーIの前面装甲の貫徹が不可能で、側面か後方に回り込んで命中弾を与えねばならなかったからである。それですら、わずか数十メートルにまで肉薄しなければ貫通が困難だった。ところがティーガーIのほうは、当時としては遠距離の約二〇〇〇メートルの射距離でも、北アフリカにいるすべての連合軍戦車のどの部位も、自在に貫通することができたのである。

　このように、北アフリカでは事実上の無敵戦車となったため、ティーガーIの乗員の戦意は著しく高揚した。何しろ、敵に「殴り返される」ことを恐れずに「殴り続ける」ことができるのだ。しかも同地には射界がひらけた開豁（かいかつ）地形が多く、八・八センチ砲の最大の長所、遠距離での射撃性能をフルに発揮できた。

　逆に、連合軍戦車兵にとっては、自分のパンチは全然相手に通用しないのに、相手のパンチはこちらをノックアウトできるという圧倒的な劣勢に追い込まれた。以降、「虎の悪夢」が語り継がれていくようになる。対抗手段は唯一、ティーガーIの側面か後面に肉薄し、そこに徹甲弾を撃ち込むしかなかった。

　だが、いちばん厚い前面装甲を敵に正対させるのが戦車運用の常識である。そのため、巧みな戦車機動術という実力に加えて、幸運という神様のオマケがなければ、連合軍戦車が「虎を狩る」ことはできなかった。しかし、連合軍戦車兵たちのこの苦闘の経験が、のちに「虎狩りの技」を編み出させることになるのである。

イタリア戦での教訓

　北アフリカ戦終結後、連合軍戦車隊は次の戦いに向けて第一線の装備を改変した。英軍ではクルセーダー、ヴァレンタイン、M3の三車種が、また米軍ではM3が、すべてM4へと更新され、完全にM4が主力となったのだ。

　やがてシシリー戦が始まり、イタリア戦が続いた。だが前者は島嶼部の戦いであり、後者は半島山岳地形の戦いだったため、北アフリカのような開豁地形が少なく、戦車戦らしい戦車戦はあまり起こらなかった。その代わり、守るドイツ軍が攻める連合軍に対して遅滞戦闘を仕掛けるような戦いが頻発したが、このような戦いでのティーガーIは、まさに悪夢そのものであった。

　例えば、進撃路たる峠道の傍らに居座ったわずか一両のティーガーI（またはパンター）が、巧妙に隠蔽された射撃陣地を利用した伏撃を実施すると、山岳地形のため連合軍戦車隊は側面や後面に回り込むことができず、独力での打開が困難となることも間々（まま）あった。そんな場合、戦車隊は支援砲撃と近接航空支援を頼りに、犠牲の多い正面攻撃を繰り返すしか打つ手がない。このようなドイツ軍の戦術によって、連合軍の連隊規模の部隊が足止めをくらうこともまれではなかった。

しかしこういった戦いを通して、戦車戦における効果的な支援砲撃と近接航空支援の方法を連合軍戦車隊は編み出すことになったのである。そしてこれは、のちの「虎狩りの技」の重要な構成要素の一つとなる。

英軍、虎狩りの切り札を開発

ところで、英軍にとってティーガー（およびパンター。以降、ティーガーと記した場合はパンターも含むものとする）に対する切り札であった一七ポンド砲は、当然、戦車砲化されることになったが、そこで大問題が生じた。それは、当時の英国製の戦車で、大型の一七ポンド砲を砲塔に搭載できる車種が一つもなかったことだ。このような場合の手っ取り早い対策は、全周旋回砲塔に比べて内部容積を広くとることができ、より大型（あるいは強力）な砲の搭載が可能な固定戦闘室を備えた駆逐戦車や対戦車自走砲を造ることである。

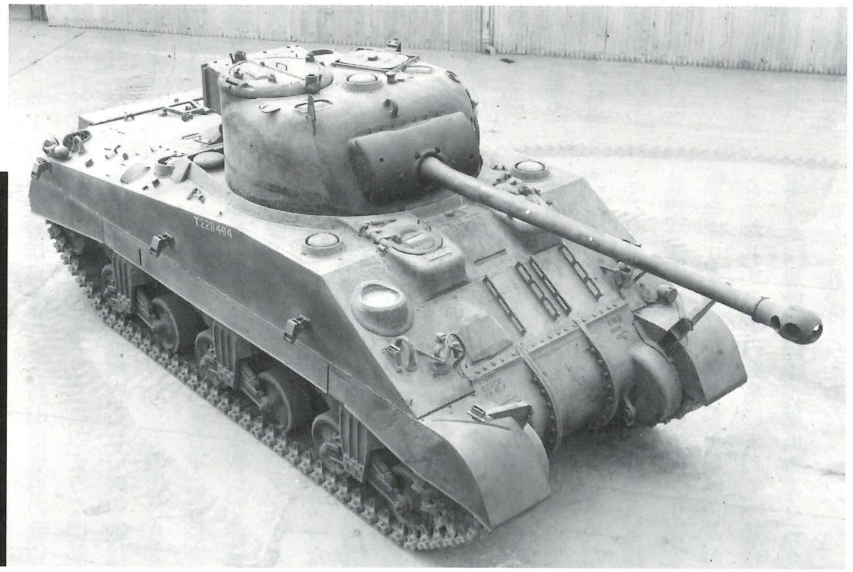
だが英軍は、どうしても全周旋回砲塔に一七ポンド砲を搭載した戦車がほしかった。というのも、英軍は砲の射界に制限があり運用に制約がかかる駆逐戦車や対戦車自走砲は防勢用兵器であり、戦車こそが積極的な攻勢用兵器だと認識していたからである。

だがそうなると、一七ポンド砲を搭載した新型戦車が完成するまで、英軍戦車隊はティーガーとまともに戦える戦車を手にすることはできない。しかし、近く確実に実施される欧州本土への反攻において、今まで以上に多くのティーガーが出現するのは間違いなく、悠長に構えているわけにはいかなかった。

そこで考えられたのが、M4の七五ミリ砲を一七ポンド砲に換装することだった。幸いM4は将来の火力強化を見越して設計に余裕が持たされていたため、わずかな改造で一七ポンド砲に換装することができたのである。こうして、M4ファミリーでは最強の「米英混血」戦車、シャーマン・ファイアフライが誕生した。

ファイアフライの装甲はM4のままなので、防御力はティーガーよりずっと脆弱であった。ただし一七ポンド砲の威力のおかげで、通常のM4や当時の英軍の第一線戦車であるクロムウェル、チャーチルの七五ミリ砲では撃破が困難なティーガーに対して、五分とはいかないまでも四分六分ぐらいの勝負を挑むことができた。そのため、英軍は来るべき欧州反攻に向けて、M4一〇両に一両程度という少ない割合ながら、ファイアフライの部隊配備を推進した。

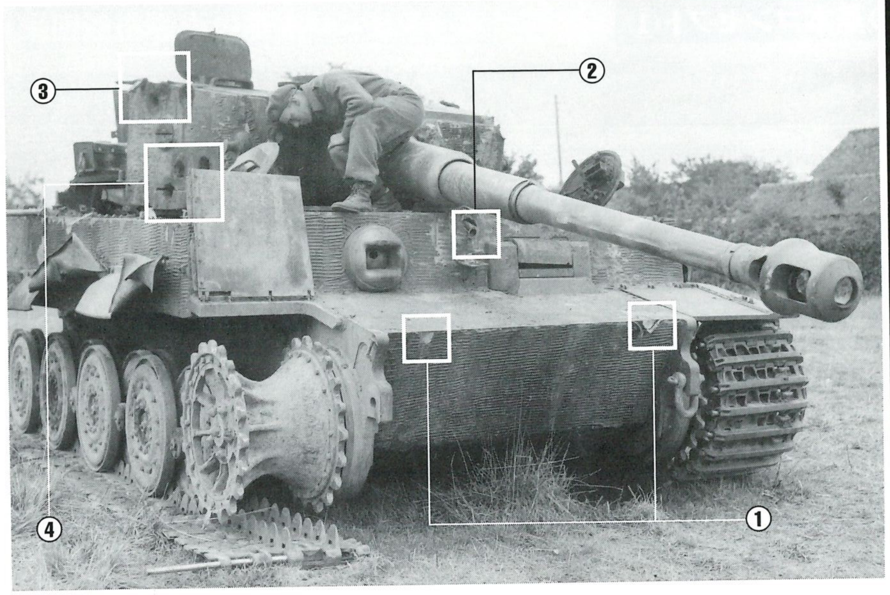
一方米軍は、予定されていた自軍の戦車の火力向上計画に「タイガー・ショック」がわずかに追い風となった状況下、七五ミリ砲よりも強力な七六ミリ砲を搭載した新設計の砲塔と、防御力が強化された車体を持つ改良型のM4シリーズ（以降はM4（七六）と表記）の生産を開始していた。しかしこの七六ミリ砲は、砲腔口径こそ一七ポンド砲と同一だが発射薬量が少なく、威力的に劣っていた。



「猛獣殺し」の切り札として英国が開発したシャーマン・ファイアフライ。17ポンド砲への換装に際して、無線機を砲塔外の収納箱に移す程度の改造で搭載できたことは、シャーマンがゆとりのある設計の戦車であることを物語っている。ドイツ重戦車に対抗する有効な手段と位置づけられたファイアフライは、終戦までに約2100両が生産された。

集団連携戦術

一九四四年六月、連合軍が欧州本土への反攻を開始すると、案の定、ティーガーとの対戦が頻発した。この戦いでは、連合軍戦車隊はM4を主力とし、特に英軍ではクロムウェルとチャーチルがそれを補ったが、火力の面でかろうじてファイアフライがティーガーに対抗可能なだけで、M4（七六）は、従来の七五ミリ砲搭載型M4よりもややまし、といった程度にすぎず、おまけにそのファイアフライやM4（七六）も絶対数が少なかった。



撃破されたティーガーから読み解く連合軍の集団連携戦術。①車体前部のエッジ部に砲弾が命中した痕跡が2つ確認できる。②車体上構正面の垂直部に、命中した75㎜級の砲弾がめり込んでいる。③砲塔側面に2発ほど命中した痕跡があるが、④そのすぐ下にも命中痕が3つほど確認でき、そのうちの1～2発が貫徹したようである。多方向から砲弾を受けているこのティーガーは、集団連携戦術による連合軍戦車隊の包囲攻撃によって撃破されたと推察できる。また、砲塔側面の狭い範囲に5～6発が集弾しているのは、このあたりを狙った数両のM4が速射にものを言わせて短時間に撃ち込んだ可能性を示唆している。

このように、個々の戦車の性能では絶対にティーガーにかなわないことを悟った連合軍戦車隊は、それらが多数まとまって出現することが少ない点に着目し、M4やクロムウェルでも対抗可能な策として、戦車の集団連携戦術を編み出すこととなる。

例えば、素手の男がナイフを持った男とサシで勝負すれば必ず刺されてしまう。しかし、素手の男一〇人ほどが四方から一斉に襲いかかれば、何人かは刺されるだろうが、残った素手の男たちが、ナイフを持った男を捩じ伏せて勝つ可能性はきわめて高い。この理屈を戦車に置き換えたものが戦車の集団連携戦術である。

しかも、この戦術には近接航空支援と支援砲撃も必要に応じて組み込むことができた。というのも、当時の連合軍戦車隊では大隊レベルで、また、前衛を務める部隊ともなれば中隊レベルでも、前線航空支援統制車と砲兵前進観測車が随伴しており、いつでもそれらの支援を求められたからである。このように、戦車の集団連携戦術は、北アフリカでのティーガーとの苦戦の経験から考えられた戦車戦技と、イタリアで得られた近接航空支援と支援砲撃のノウハウを合体させたものといえる。

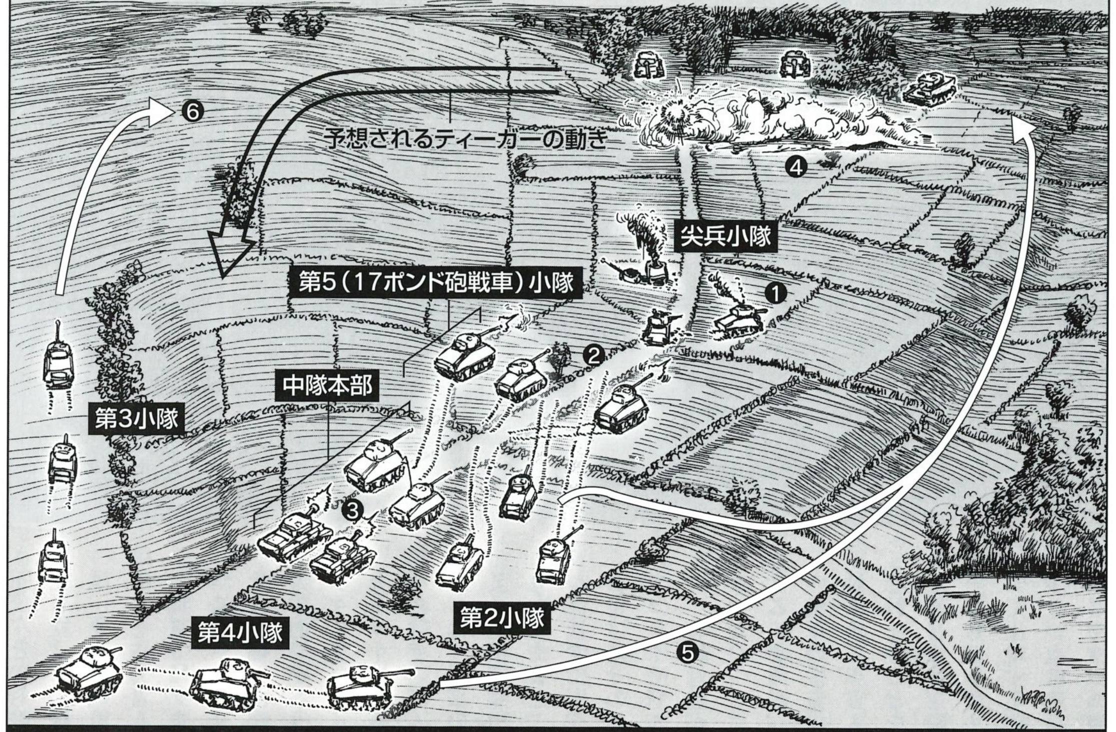
この戦術は、英米両軍でほぼ同時に用いられるようになった。欧州派遣連合軍司令部は英米両軍の混成組織であり、もちろん両軍は戦場でも踵（きびす）を接して戦っていた上に、母国語が同じ英語だったので、情報交換もスムーズに行えた。しかも、主力戦車までが同じM4シリーズだったため、国籍を超えての戦術の普及に、何ら支障もなかったのである。

戦車の集団連携戦術は、敵に対して数で勝負を挑むため、例えば米軍の場合、「一両のティーガーに対して、最低でもM4一個小隊（五両）をもって戦え」という指示が出されており、それは英軍の場合も同様であった。特に戦車同士の緊密な意志疎通がこの戦術を円滑確実に実施するための最大のキーポイントだが、弱電技術に長じた米英両軍の戦車搭載無線機器は性能がよく、各車間の緊密な無線連絡を可能としたため、最大限のチームワークを発揮して戦うことができたのである。

接敵と目標の配分

次に、この戦術を解説してみたい。英軍のM4戦車中隊が行動中、突然、ティーガー数両と遭遇した。味方戦車の被弾が接敵を知るきっかけとなるか（当時の戦車戦では往々にして最初の被弾車発生＝接敵となった）、こちらが先に敵を発見するかでその後の展開はや

集団連携戦術の基本コンセプト①



イラストは英軍をモデルにした運用概念。①尖兵の被弾により、ティーガーの出現を察知した中隊長は②17ポンド砲戦車と③ＣＳ型に発煙弾による④煙幕の展張を命じ、同時に各小隊へ両翼包囲を命じる。中隊長は、軟弱地のある右側の低地からは重量のあるティーガーは来ないと判断、⑤主攻を右翼（2、4小隊）とし、⑥左翼（3小隊）は稜線を盾とする位置に移動を命じる。

や変わってくるが、ここではM４の被弾で戦闘が始まったことにする。

被弾車が生じれば、当然ながら中隊の各車は慌てて「敵はどこだ、敵はどこだ」と隊内無線でわめき合うことになる。

このとき、もしティーガーの発砲炎を目撃した車両があれば、無線で中隊全車に通達するとともに、その地点に発煙弾を撃ち込む。その発煙弾を目印に、他の車両も同一地点に次々と発煙弾を撃ち、まずは煙幕でティーガーの照準を阻害し、得意の遠距離からの精密射撃を封殺する。同時に、中隊全車で一気に突進してM４の有効射程距離まで間合いを詰めて接近戦を挑むか、周囲の掩護物を探して各車を隠れさせ、それを利用した有利な条件下での迎撃戦とするかを中隊長は決断する。

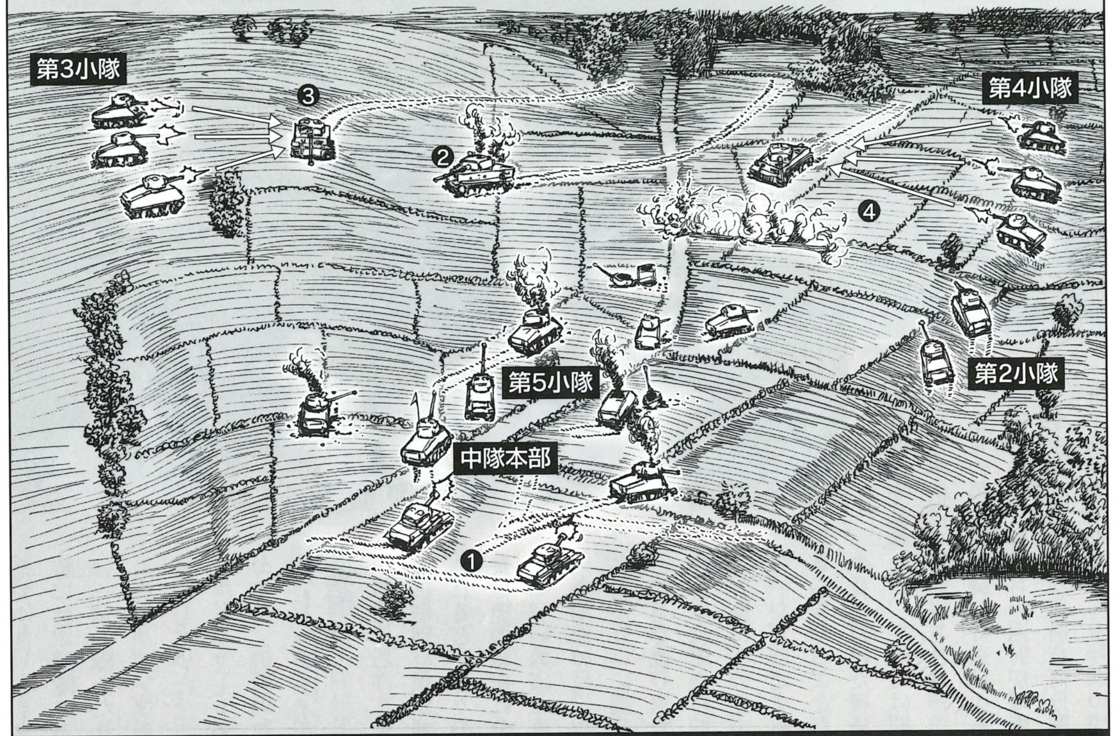
ただ、状況判断中も当然ながらティーガーの射撃は続いており、味方に損害が生じていることも多く、戦闘の初期に運悪く中隊長車が被弾すると、連携行動の円滑性が損なわれることもあった。特に英軍の場合、欧州侵攻後の数か月間は、中隊規模の作戦行動では中隊本部小隊が先鋒を務めるケースが多かったが、これは訓練の過程で、指揮官が先陣をきるという騎兵時代からの伝統の名残りであり、中隊程度までの小規模な部隊本部は、原則的に「前に出る」と規定されていたことが原因だった。

また、場数を踏んだ英軍戦車兵が少なかったことも災いした。もちろん、北アフリカやイタリアで戦った古強者もいたが、比率的には「実戦処女」の戦車兵が多く、その結果、中隊長車が失われると中隊全体が混乱に陥ってしまい、ティーガーによって順番に討ち取られるという事態が生じやすかった。

このような戦訓から、ノルマンディー戦中期以降の英軍戦車隊では、どんなに小さな戦闘単位でも指揮官は中央に位置し、やや大きな戦闘単位ともなれば、指揮官は戦列から一線下がって位置するよう改めている。

英軍は以前から煙幕を好み、発煙弾発射器や発煙装置にご執心だったが、戦車の集団連携戦術が編み出されて以降、煙幕をいっそう多用するようになり、米軍でも事情は同じだった。しかしその弊害も生じている。煙幕は、風向によっては味方の視界の邪魔になる反面、敵からは適当に見透かすことが

集団連携戦術の基本コンセプト②



第５小隊は正面から射撃を継続してティーガーを拘束。①ＣＳ型は引き続き発煙弾射撃で、両翼に回る各小隊の機動を掩蔽。②前進中に側面を17ポンド砲戦車に撃ち抜かれたティーガー。③敵の②の車両を射撃した英軍戦車を撃破したが、第３小隊に不用意に側面を曝し、集中射撃を食らうティーガー。④低地という遮蔽された接近経路を使用したことで側面から集中射撃が可能となった第２、第４小隊。

できる場合もあるため、味方の煙幕が敵を利してしまうことも起こったのだ。だが、他に戦いようのない連合軍戦車隊としては、運次第の失敗には目をつぶり、煙幕に頼らざるを得ないというのが実情であった。

一方、ティーガーの乗員にはベテランが多く、一両一両でも戦況に応じて柔軟に戦えた。ドイツ軍戦車兵が語ったという有名な「トミー（イギリス兵、イギリス人の意）の素人連中を教育してやるか」という台詞（せりふ）も、どうやらそんなところから生まれたようだ。

さて、もし敵の発砲炎が確認できなければ、それが見つけられるまで中隊はティーガーから撃たれ続けなければならないが、その場合、ただ黙って次の被弾車を待つわけではなく、各車とも、発煙弾発射器で自車の周囲に煙幕を展張して隠蔽しつつ、身近な掩護物の陰に逃げ込むことになる。そして、敵の規模が確認できたら（当然詳細の確認は不能だが）、中隊長は各小隊ごとに大雑把な個別目標を振り分け、以降、個別目標とその小隊単位の戦闘は、それぞれの小隊長が指揮する。

一方、中隊長は戦況全般を見渡すため、中隊本部小隊を従えて戦闘の中心からやや下がった位置に掩護物を求め、直属の九五ミリ榴弾砲装備のCS型戦車による発煙弾射撃やHEAT弾（成形炸薬弾）射撃を統制する。

大陸反攻直後の英軍機甲連隊（他国の大隊規模）では、麾下のA、B、Cの各中隊ごとに一個小隊（三両）のファイアフライが配備されていたが、このファイアフライ小隊は個別目標を割り当てられることよりも、中隊長の直接指揮の下で、火急の小隊を支援するような戦闘行動に従事することが多かった。

このファイアフライ小隊はティーガーとの対戦時の切り札的存在であるため、戦意、戦技ともに中隊きっての優秀な戦車兵たちが配属されていた。逆にドイツ軍では、危険な「長っ鼻（一七ポンド砲装備車は砲身が長かったことから）」は優先目標とされており、ゆえに同小隊が最初に損害を被ることも多多あった。

ファイアフライは数が少ないことが最大のネックだったが、四四年の秋以降、同じ一七ポンド砲を装備するチャ*レンジャーも含めて配備数が徐々に増

＊チャレンジャー＝クロムウェル巡航戦車を大幅に改修して17ポンド砲を搭載した戦車。しかし、構造上の問題があり、一応完成はしたが、並行して開発されていたファイアフライが優秀な性能だったため、少数しか生産されなかった。



写真に見る集団連携戦術①：稜線の反対斜面で待機中のＭ４小隊。手前の戦車に立っているのは小隊長で、稜線の向こう側を窺っている。中隊長からの命令があった場合、他の小隊とともに直ちに前進を開始する手はずだが、不用意に戦場へと突入した場合は小隊がまとまって撃破される危険性もあった。

えてゆき、ドイツ敗戦時には、連隊によっては一個中隊あたり九両ものファイアフライを装備していた。これはノルマンディー上陸当初の実に三倍もの数だ。

チームプレイと速射性

さて、こうして各小隊に個別目標が割り振られると、各々の小隊長はその撃破に全力を注ぐ。いちばん単純で効果的なのは、小隊の各車が互いに援護射撃と躍進を繰り返しつつ、連合軍戦車ならではの速射性にものをいわせて、ただひたすら砲を撃ちまくることだった。生死を賭けた戦場では、砲身寿命や過熱など、平時では問題とされる事柄は一切無視された。

Ｍ４の場合、熟練した乗員なら一分間に二〇～二五発もの速射が可能だが、さすがにこのような速射を何分間も続けるわけではなく、何十秒かの間に集中して行うにすぎない。

だが、一目標に対して最低でも二～三両がこんな速射を加えるのである。たとえ射弾の半分しか命中せず、しかも装甲を貫徹される可能性がまったくないとわかっていても、不気味な命中音と振動の連続は、敵乗員の戦意を削ぎ、判断力を狂わせるのを助長する。

また、たとえ貫徹しなくとも、命中弾によって生じる防盾部や砲耳部への断続的な衝撃が、照準器を破損させたり、駐退器から油漏れを起こさせたりする可能性もあった。車体部への衝撃は、燃料系および駆動系の故障や無線機器の不調を誘発することもある。このような状態に追い込めれば、撃破できずともその場における戦力としては無力化させたことになる。

反面、速射の欠点は連続する発砲炎と発射煙のせいで、敵にこちらの位置を容易に把握されてしまうことである。



写真に見る集団連携戦術②：不用意に突入した場合、混戦に巻き込まれてティーガーやパンターに喰われることになりかねない。写真では手前に撃破されたシャーマンの車体後部が、そして少し離れたところにも1両のシャーマンが撃破されている。複数の車両がひとかたまりになって撃破されているということは、小隊レベルでの機動の際、敵によって先に撃破された可能性を示している。よく見ると、手前のシャーマンの砲身は後方を、奥のシャーマンの砲身は前を向いており、出し抜けに前後を取られた状態で交戦せざるを得なくなったのかもしれない。



写真に見る集団連携戦術③：写真中央に3両のパンター戦車が撃破されているが、各車の砲身の向きに注目。向いている方向がバラバラであり、さらにひとかたまりになって撃破されていることから、このパンター部隊は連合軍戦車部隊に包囲攻撃されたものと推察される。また、手前に1両のシャーマンが撃破されているが、パンターとの距離はどう見ても100m前後の至近であることから、一気に肉薄したところを撃破されたのだろう。集団連携戦術が用いられたとすれば、これは「猛獣狩り」の最終段階ということになる。

特に敵がベテランの場合、装甲を貫通しない命中弾などは意にも介さず正確に応射され、確実に一両ずつ始末されてしまうことになる。有名なティーガー・エース、ヴィットマンの戦例がその典型例である。

こうした戦闘の結果、割り当ての目標を早々に撃破した小隊は、戦況をモニターしている中隊長の指示で、まだ戦闘中の他の小隊の応援に向けられるのが普通だった。ところが、敵との位置関係の把握が不正確なまま不注意に移動すると、応援の小隊が逆にやられてしまうこともあった。

今日に残る写真でも、彼我の遺棄車が散乱する戦場で、明らかに小隊規模の応援部隊と思われるものが一隅でまとまって撃破された場景に出くわすことがあるが、これこそが「不正確と不注意の代償」の実像である。

一方、支援砲撃と近接航空支援は、ティーガーの部隊が強すぎて、戦車の集団連携戦術が通用しないような場合に、味方の戦車を一気に引き下げた直後のタイミングで実施されることが多かった。

だが、そのタイミングの調整がなかなか難しく、支援砲撃の場合は、まだ彼我双方の戦車が入り交じっている状態のうちに砲撃が始まってしまったり、こちらの後退に乗じて敵が前進してきたため、敵の背後を砲撃してしまったりすることもしばしば起こったし、近接航空支援の場合は、攻撃機が敵と味方を混同して攻撃を加えたりした。

だがそれでも、強力なティーガーに喰い殺されかけている連合軍戦車隊には、支援砲撃と近接航空支援が生存を賭けた最後のカードとなることも度々だったという。

戦車の集団連携戦術のあらましは、ざっとこんなところだ。第二次大戦中の連合軍の戦車兵教育は、操縦、射撃、整備の個車訓練に始まり、小隊、中隊、連隊という集団訓練へと進む。しかしこれは集団機動訓練ともいうべきもので、ドリルに戦車の集団連携戦術などが盛り込まれるのは、結局、戦後になってからであった。ちょうどこの辺りは、各国の航空隊で本格的な異機種間空戦訓練が戦後になってから採用されたのと似ている。

以上のように、戦車の集団連携戦術は前線の大隊長や中隊長、小隊長といった中級以下の指揮官たちが実地で身に付け、実地で伝承していったというのが実情である。それでも、単なる物量ではない「こうすれば対抗できる」という確固たる戦術があったからこそ、連合軍戦車隊はとりあえず「虎を狩る」ことができるようになったのである。

だが一方で、ティーガーのほうが連合軍戦車よりも優れているという根本の部分は変わらず、結局「敵は倒したが、味方もそれ以上に倒された」という苦戦は免れなかった。つまり連合軍戦車兵たちが、敵よりも多くの血を流すことで勝利を得たのもまた事実なのである。

だが彼らは、それでも非力なＭ４でよく戦った。前面、側面、砲塔を問わず、多数の非貫徹弾痕が残り、さらに数発の貫徹射入孔をさらして撃破されたティーガーを写した数々の写真がその証拠である。これこそが、無名の連合軍戦車兵たちが血と涙であがなった栄光のモニュメントにほかならないのだ。

〈参考文献〉Rea Leakey & George Forty『Leakey's Luck』／Stuart Hamilton『Armoured Odyssey』／Robert J. Icks『famous Tank Battles』／Kenneth Macksey『Tank versus Tank』／Peter Chamberlain & Chris Ellis『British and American Tanks of World War Ⅱ』ほか多数。

D-Dayに向けて開発された新兵器

Panjandrum
パンジャンドラム

防備が強固な敵海岸線に
突破口をあけよ!――

その要求に応えて開発が始められた
特殊兵器はまさに「奇想天外」なものだった
度重なる失敗の果てに
意外な結末を迎えたイギリス秘密兵器の
泣き笑い開発秘話

文=廣田厚司



フランス沿岸に設けられたコンクリート防壁。ヒトラーが「大西洋防壁」と豪語したフランス沿岸への上陸作戦では、こうした障害を突破するための新兵器が必要と考えられた。

英国では、ヨーロッパ大陸を支配する強大なドイツ軍を駆逐するためのノルマンディー上陸作戦の実施が一九四四年夏と決定される前年から、すでに上陸戦用の特殊器材や新たな兵器がいろいろと開発されていた。

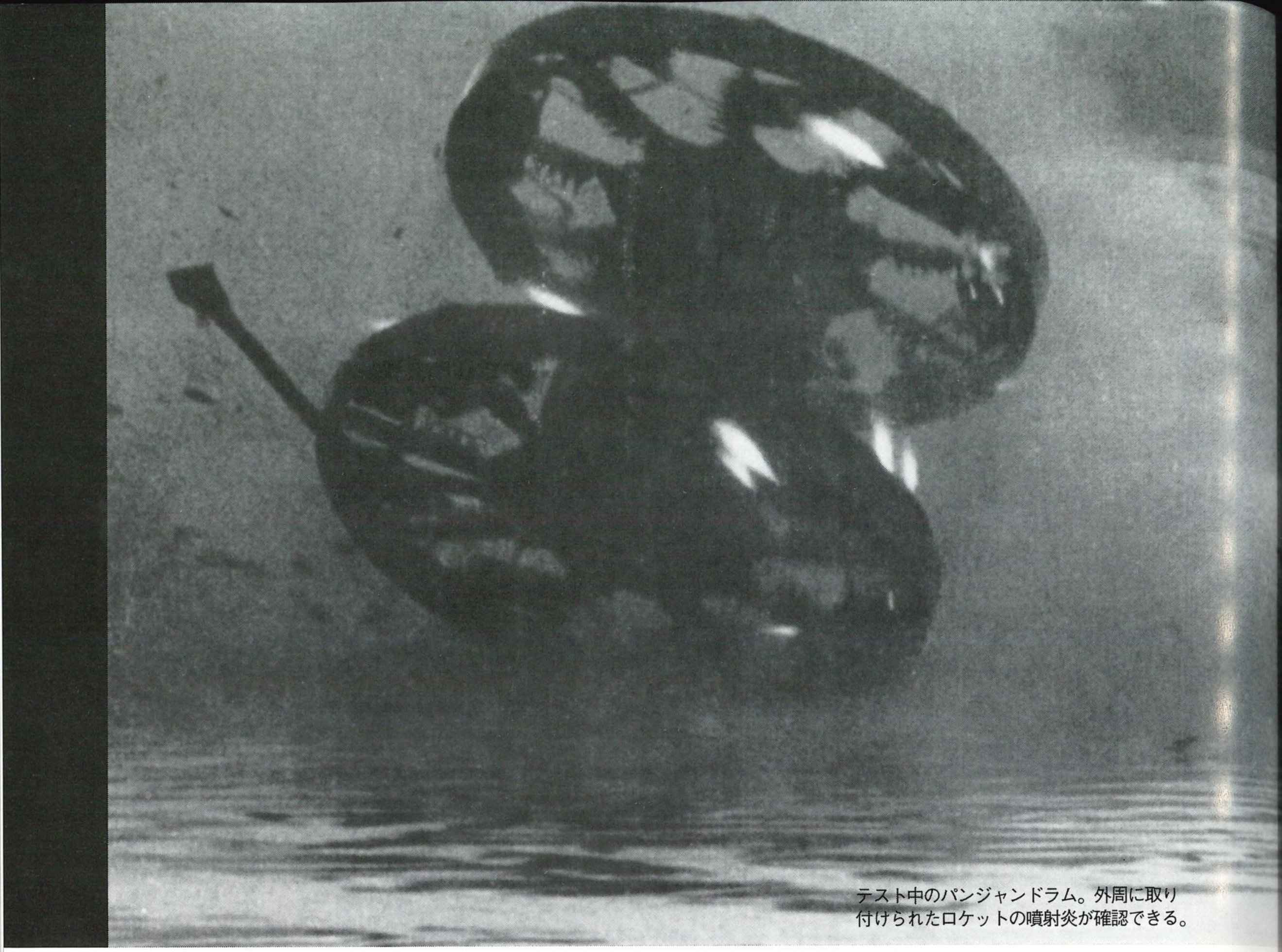
例えば、巨大なコンクリートと鋼鉄から造られた重量一六〇〇〜六〇〇〇トンまでの「フェニックス」と呼ばれた潜函を、上陸地点沖に沈めて人工港を造ることや、上陸部隊の膨大な車両群に燃料を補給するため、英仏海峡を横断して設置されるパイプ・ライン「プルート」などはよく知られた例であろう。だが、この他にも、秘密兵器と呼ばれるものが多種類、開発された。その中の一つに「グレート・パンジャンドラム」と称する、いわば「回転爆薬大車輪」とも形容すべき奇抜な兵器があった。

「パンジャンドラム」とは、十八世紀半ばにロンドンで上演された、劇作家兼俳優だったサミュエル・フートの演劇の中で、靴の後部に取り付けた火薬筒の爆発力を利用して、神出鬼没に動き回るという怪物に由来するものだが、このどことなく胡散臭い兵器にはぴったりの名称だった。

開発の始まり

欧州大陸を制覇したヒトラーは、沿岸部に強固な防衛陣地を設け、これを難攻不落の「大西洋防壁」と呼んで盛んに宣伝していた。ことに連合軍が上陸を予定したフランスの海岸は、要塞陣地やコンクリート防壁、地雷原、そして火砲と無数の機関銃が配置されていると思われた。このため連合軍総司令部は、ここを素早く突破することが、上陸戦の成功の可否を決めることになるであろうと考え、高さ三メートル、厚さ二メートルのコンクリート壁を突破できる兵器の研究を、英国兵器開発の総元締めであるDMWD(諸兵器開発部)に任せたのである。

DMWDでその兵器の研究の主務者となったのが、航空力学者として著名なネヴィル・シュート・ノーウェー博士だった。博士は一トン爆薬を爆発させれば、コンクリート壁に戦車を一両通過させるだけの穴を開けられるのではないかと考えたが、そこへ、どのような方法で爆薬を運ぶかが課題となった。それに対して数種の案が検討されたが、いずれも決定的なものとはならなかった。



テスト中のパンジャンドラム。外周に取り付けられたロケットの噴射炎が確認できる。

そんな折に、DMWDの指揮下にあるCOXE(Combined Operations Experimental Establishment:統合作戦実験研究所)の幹部の一人だったフィンチ・ノイス空軍大佐が、一枚の兵器のラフ・スケッチを博士のもとに持ち込んできたのである。

COXEは、ノルマンディー上陸戦用兵器の研究、開発、評価を行う目的で、一九四三年に英国南西部にある鄙びた町アップルドァ付近に設立された。アップルドァは、荒涼としたデボン州内を流れるトー河が、ブリストル海峡へと注ぐあたりにある町だが、このトー河口は外海の荒波が洗う広い砂浜や砂利と岩石浜、そして砂丘帯などからなる、人気のない場所であった。このため秘密兵器の開発に適している上に、「フランス海岸」の環境条件にも似ていたことから、COXEはこの地に設立されたのだった。

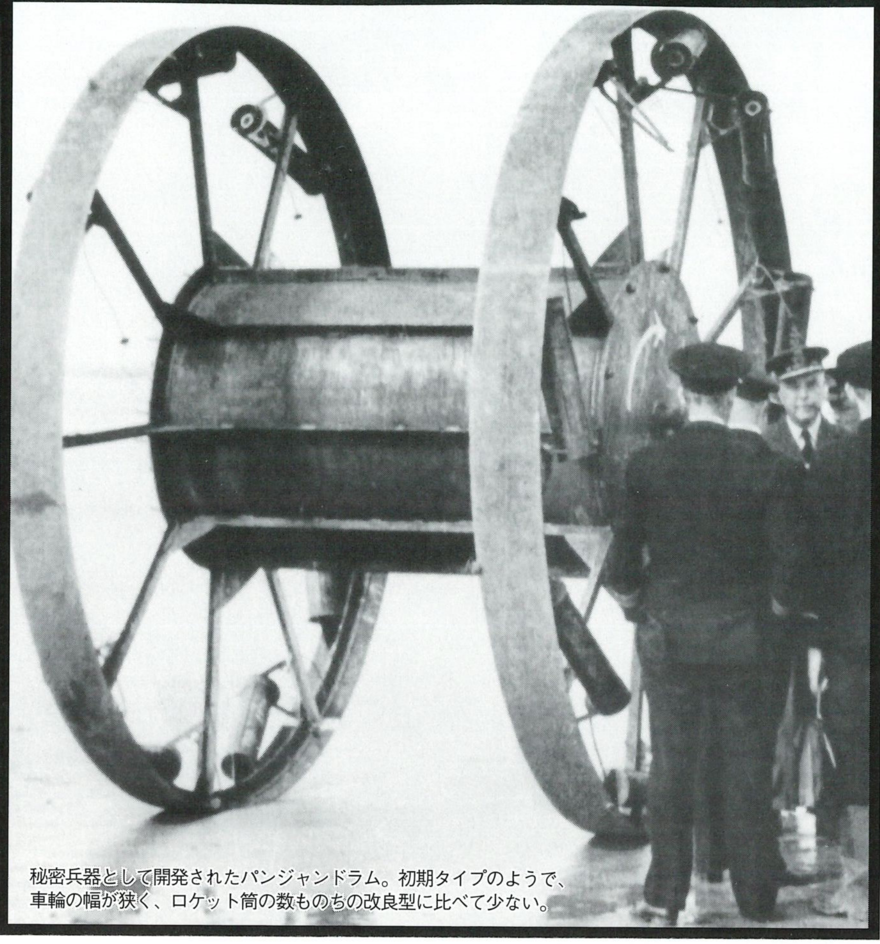
このCOXEのノイス大佐が提案したプランは、「極めて大胆な概念」と表現できるようなものであった。それは、直径が三メートルで接地幅が三〇センチという、二個の鋼製の大きな車輪をドラム状に組み合わせたもので、車軸部には四〇〇〇ポンド(一・八トン)の高性能火薬が充填される。そして、二つの大車輪の外周に沿って、固形火薬のロケット筒数基を取り付け、その爆発力(推力)によって時速六〇マイル(九七キロ)の速度で、海岸を転がりながら地雷原を爆発させて突進し、コンクリート防壁にぶち当たると衝撃で信管が働いて瞬時に爆発して防壁に大穴を開けるという兵器だった。

このアイデアは防壁突破の新兵器を探していた、ノーウェー博士の強い関心を惹くことになった。そして一九四三年八月初旬、ロンドン郊外北東部にあるレイトンストーンの専用工場で極秘裏に実物の組み立てが行われ、一か月のちには試作型パンジャンドラムが完成した。この化け物のような大車輪はアップルドァの実験施設へ、暗夜に紛れて密かにトレーラーで運び込まれたのである。

挫折の始まり

このように、開発は厳重に秘匿されていたのだが、同年九月三日に行われた最初の実験地は、なぜかアップルドァの町から二・四キロほど離れたウェストワード・ホーという、海水浴を楽しむ人々が多数集う海岸が選ばれた。

しかも、パンジャンドラムは休日で賑わう海岸へトレーラーから降ろされて、その異様な形状の大車輪が多くの市民たちの好奇の目に晒されることになってしまったのである。これは、秘匿という面からすれば極めて不可解なことと言わねばならなかったが、後で述べるように、その背景にはある重要な意味が隠されていたのである。



秘密兵器として開発されたパンジャンドラム。初期タイプのようで、車輪の幅が狭く、ロケット筒の数ものちの改良型に比べて少ない。

炸薬は車軸部に充塡されることになっていたが、実験ではここに一・八トンのバラスト砂袋が積まれた。そして、推進力を生み出す一八個の固形火薬ロケット筒を車輪の外周に順に取り付けられたパンジャンドラムは、海岸へ向かって停泊した上陸用舟艇の乗降ランプの上に載せられた。

まず、ノーウェー教授があまり自信がなさそうに、そっと電気点火スイッチを押すと、大車輪に取り付けられたロケット筒が一斉に雷のような轟音を発し、パンジャンドラムの周囲が火炎と煙に包まれた。そして、パンジャンドラムは傾斜したランプを転げ落ち、ついで浅い海に突入すると、蒸気煙に包まれながら大きな飛沫を上げて突っ走り始めた。

ところが、少し真っ直ぐに進んだ後、片方の車輪のロケット筒二基が外れてバランスを失い、右方向に大きく旋回して濃密な灰色の煙に包まれたままパタリと停止してしまったのである。

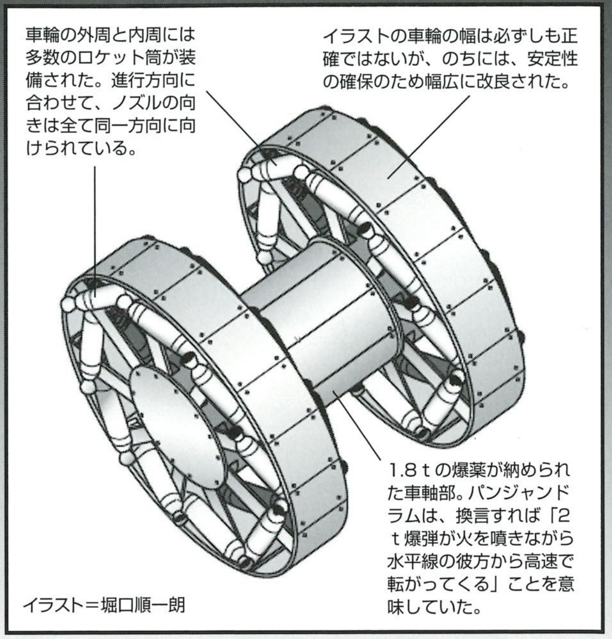
この失敗の原因はパワー不足と判定された。その対策として車輪の内周側にもロケット筒が装着されることになり、結局ロケット筒の数は二倍となった。そして翌日、トー河口のインストー浜へ持ち込み、前と同じ方法で実験が行われた。

今度は前回の実験に比べると倍の距離を転がったが、相変わらず方向性が悪く真っ直ぐに進むことができなかった。再び、原因はロケット筒の数が少ないからだと考えられたが、二個の車輪には、もはやロケット筒を取り付けるスペースがなく、やむなく車輪を一個加えて三車輪方式として、ロケット筒を増設することにした。

本来、ロケットを用いる車両や飛行物体は推力の増加に応じて増速することが可能で、速度や方向性の調節もできる。だがパンジャンドラムは、地面に接地している車輪そのものにロケット推力で回転力を与えて転がそうとするものであった。このため、やたらとロケットの数を増やしても、車輪が空転してしまい速度の増加にはつながらない。おまけに、転がる大車輪の方向をコントロールする装置が何もなかったのだ。信じ難いことだが、これらの点については、ほとんど考えられていなかった。

この新方式の実験は、もはやコミック・ドラマというべきものであった。

Panjandrum



イラストは、外側だけでなく車輪の内側にもロケット筒が装備され、その数が2倍となった時のもの。構造自体は非常に単純なものだが、多数の炎を噴き出しながら100km／hの速度で突進してくるパンジャンドラムは、もし完成していたら敵兵への心理効果は絶大なものとなっただろう。

三輪になったパンジャンドラムは、干潮時、海岸に設けられた木製の発進台上に置かれたが、あれこれと準備しているうちに潮が満ちてしまい、大車輪のほとんどが海中に潜ってしまった。

にもかかわらずこの状態で点火ボタンが押されたが、ぶくぶくと海中から大きな泡があがっただけで大車輪はびくともしなかった。やがて、次第に引いてゆく潮の中から、三番目の車輪がつぶれた状態となったパンジャンドラムが姿を現した。こうして、成果を挙げることができなかった開発チームは、ロンドンにある設計局に次の策を求めて、いったん戻っていったのである。

制御装置が取り付けられたが……

この時点で、もはや誰の目にも成功の見込みはないように思われた。だが驚いたことに、開発チームはロケット・パワーの強化こそが解決策であるとして、再び二輪に戻した車輪の内周と外周に、小型化した七〇基以上のロケット筒を取り付けて、先の失敗から三週間後、再度実験に挑んだのである。

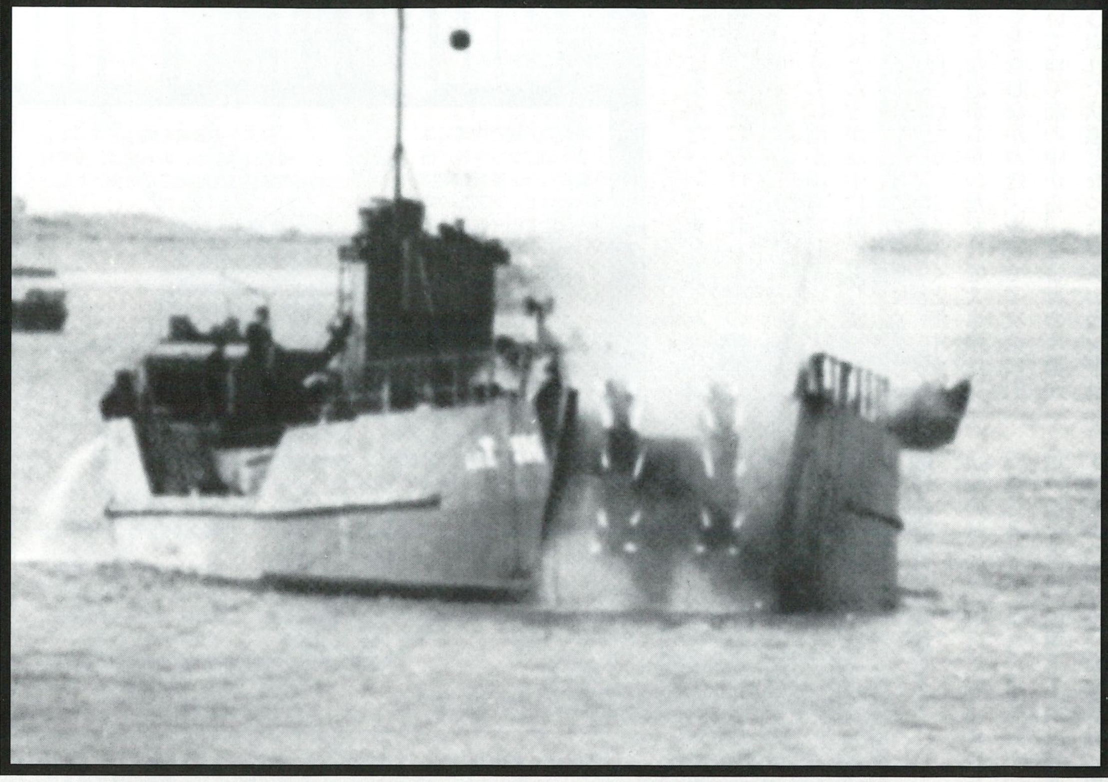
その光景は物凄いものだった。ロケットが点火されたパンジャンドラムは、上陸用舟艇のランプから火を噴きつつ転がり出ると、浅い海を越えながら、海水の飛沫と蒸気を空中高く撒き散らして砂浜へ向けて突進した。そして、海岸に乗り上げると突然左に回転して海に戻り、転覆してしまったのである。

それでも炎を噴き続けているロケット筒は、車輪から外れると、急上昇したり砂の上をのたうち回ったり、さらには海中で爆発して蒸気を上空に噴き上げたりした。だが、この惨状にもめげず、開発チームはまたまた残骸を回収すると、次の実験に備えたのである。

次のパンジャンドラムには、原始的な遠隔操縦の一種ではあるが、左右の方向性を制御する装置が取り付けられた。これは一トン牽引ウィンチを設置して、このウィンチの左右から伸びる長い鋼線を二つの車輪におのおの接続し、ウィンチ側で鋼線を引くことでブレーキをかけたり、方向を制御しようというものだった。本来、制御装置が必要なことは当たり前であっただろうが、誰も考えなかったことは不思議なことと言わねばならない。

再び、実験責任者のノーウェー博士の指揮によりロケットに点火されたパンジャンドラムは、渚に沿って時速一〇〇キロで走り始めたが、すぐに左方向へ針路が逸れ始めた。そこで、ノーウェー博士はウィンチの右側の鋼線を操作して方向を修正しようとしたが、六〇〇メートルほど延びていた鋼線の強度が限界を超えたため、ぶつりと切断されてしまい、おまけにもう一本のケーブルにからみついたことから実験は中止された。

それでも懲りずに、より強度の高い鋼線に交換した上に、回転時の安定性を保つため車輪の幅を広くし、ロケット筒の本数をさらに増加させたもので実験が続けられたが、結果はほとんど改善されなかった。一本のロケット筒は四〇ポンド（一八キロ）の推力を四〇秒間生み出すことができたが、結局、すさまじい轟音を上げながら車輪を予測できない方向へと転がすだけだったし、それどころか、パンジャンドラムが時速八〇キロを超える回転になると、強い遠心力の作用により車輪に取り付



ＬＳＴ（上陸用舟艇）から今まさに発進せんとするパンジャンドラム。2つの車輪の外周と内周におのおの装着されたロケットの噴射が見える。いかにも勇壮だが、満足な結果となった実験は一つもなかった。

けられた重さ九キロのロケット筒自体が次々と脱落した。

開発チームはロケット筒の脱落防止締具の改善と、ウィンチと鋼線による制御方法の改良に全力をあげることになり、数週間が過ぎていった。そのころ、DMWDはCOXEに対して、パンジャンドラムを用いることは、上陸作戦を立案する上層部で決定された事案であり、兵器としての命中精度は大きな問題ではないと指示した。これは要するに、どんなものでもよいから使うのだ、という意思表示であった。

パンジャンドラムの開発中止

一九四四年一月、上陸作戦が半年後に迫ったところで、上陸作戦指導部の陸海軍高官と著名な科学者たちを立ち会わせて、最終実験が行われることになった。彼らは第一回目の実験が行われたウェストワード・ホーの海岸に集まった。

一方、この実験を記録撮影するように指令を受けたのは、もと自動車レースのプロ・カメラマンとして知られる、ルイス・クレマンタスキーという人物で、彼は小型の一六ミリ撮影機をもって実験を記録することになった。

このクレマンタスキーが残したメモと、ロンドンの帝国戦争博物館に保管されている、撮影されたフィルムに基づいてこの実験を再現すれば、以下のようなものだった。

上陸用舟艇から発進したパンジャンドラムは、初めは上陸用舟艇から旨く転がり出た。そして、付近の小高い砂丘の上から軍の高級将校たちが双眼鏡で見守る中、この大車輪は浅い海中を転がりながら岸辺の砂地へ向かって急加速していった。轟音が響き、二個の車輪の周囲はロケット噴射のまばゆいばかりの火炎が閃き、時速は一〇〇キロに達したようだった。カメラマンのクレマンタスキーは一六ミリ・シネ・カメラのレンズを大車輪に向けて懸命に撮影していたが、やがて止め具の外れたロケット筒は次々と脱落して、噴射しながら空中を飛び跳ね、パンジャンドラムは平衡を失ってよろめいた。

次に砂浜の穴に突っ込むと右方に大きく回転し、クレマンタスキーめがけて突進してきた。危険を感じた彼は避難し始め、見学の提督や将軍たちも砂浜の陰の有刺鉄線に囲まれた避難所に身を寄せ合って待避した。だがパンジャンドラムは再び向きを変え、今度は

Panjandrum

ノルマンディーに上陸したイギリス軍の兵士たち。海岸線の敵を排除した直後のようだ。奇抜な兵器パンジャンドラムは、有効性の面でとうてい満足できるものとはなり得なかったが、欺瞞用兵器としての役割は果たしたようである。



海に向かって転がりながら、途中の砂山にぶつかって爆発し、車輪から外れた数個のロケット筒がもの凄い速度であちこちへと飛び去った。クレマンタスキーは再びカメラを構えて、この大車輪の最期を撮影したのだった。

このように「制御できない暴れ兵器」の実態は、実験を見にきた人々が思い描いた、パンジャンドラムがロケットの炎を引きながら、上陸部隊の先頭に立って敵陣に突進して将兵の士気を鼓舞する、という壮大な夢を打ち砕いてしまった。

そしてウェストワード・ホーの実験場から引き上げた高官たちは、それ以降、パンジャンドラムに関する一切の話をすることを禁じられたのである。そして、DMWDに「上陸地点への輸送途上でロケットが爆発した場合、上陸用舟艇が危険に晒される」という理由で、公式に開発中止命令が発せられるにおよび、パンジャンドラムの開発は終わったのである。

パンジャンドラム開発の本当の意味

しかし、この物語の終章として、これまで述べてきた幾つかの不可解なできごとの謎解きを、完全ではないにしてもせねばならないであろう。

英国のロンドン指揮所（London Controlling Section）という機関は、チャーチル首相の直接指示により、高度な戦略上の秘匿と欺瞞活動を行っていた。この機関は一九四三年以降、連合軍のヨーロッパ大陸への上陸地点「ノルマンディー」を、ドイツ軍には別の場所、すなわち「パ・ド・カレー」だと信じ込ませることを目的にして、広範囲にわたる欺瞞作戦を行ったのである。その結果、ヒトラーは最後までパ・ド・カレーこそが主上陸地点だと信じ込み、そこの海岸防備が固められたのだった。

こうした背景のもとで、パンジャンドラムは、もっとも強固な海岸防御陣地を持つ北フランス海岸への上陸戦で、威力を発揮する秘密兵器として位置付けられ、その情報がドイツ側に流れるように、わざと休日の海水浴で賑わうアップルドァ付近の海岸で実験が行われたとされるのである。今まで述べてきた経緯から推測すると、恐らく提案された当初は欺瞞用とは位置づけられていなかったが、やがて検討段階で兵器として疑問視され、最初の実験の時にはすでに欺瞞用兵器となっていたと思われる。

そう、賢明なる読者の推察どおり、連合軍の上陸地点はパ・ド・カレーなのだと、ドイツ側に知らせる一手段となりさえすれば、パンジャンドラムの真の役割は完了するのであり、兵器としてものになるかどうかは別の問題だったのである。

〈主要参考文献〉『The Secret War』Brian Johnson, British Broadcasting Co.／『Allied Secret Weapons The War of Science』Brian Ford, Ballantine Books／Author's Conversation with Mr.Ron Murray, Mooreside, England, 2005. Feb／Luis Klemantasski paper『The Great Panjandrum』Imperial Museum Library, via Jeff Pavey, London, U.K.



左舷斜め前方から見た、建造中の装甲巡洋艦『筑波』。日本が自力で製作した最初の主力艦は、世界の水準から見ても見事な速さで建造された。写真は進水式を間近に控えた、明治38年12月10日の姿。

装甲巡洋艦『筑波』への道

空前の大型艦建造に挑んだ明治日本

日露戦争劈頭、旅順を巡る攻防の只中で
日本海軍は戦艦2隻を同時に失うという非常事態に直面した
それはかつて経験したことのない、主力艦国産化への第一歩となった

文＝田村尚也

戦艦『初瀬』『八島』の喪失と主力艦国内建造の決定

明治三十七年（一九〇四）二月十日、日本とロシアは、ほとんど同時に宣戦を布告し、日露戦争が正式に始まった。

当時の日本海軍は、戦艦六隻、装甲巡洋艦六隻を主力とする、いわゆる「六六艦隊」を完成させていたが、戦艦はいずれもイギリス製であり、装甲巡洋艦は、イギリス製が四隻、ドイツ製とフランス製が各一隻と、すべて国外で建造されたものだった。

これらに加えて、開戦前にアルゼンチンがイタリアのアンサルド社に発注していた装甲巡洋艦二隻を完成直前に買い上げており、まもなく日本に到着する予定であった（二月十六日に横須賀入港）。

対するロシア海軍の太平洋艦隊は、戦艦七隻、装甲巡洋艦四隻を主力としており、すべての戦艦を含む主力を旅順港に、装甲巡洋艦三隻等をウラジオストック港に、若干の警備兵力を朝鮮半島の仁川港等に、それぞれ配置していた。

日露両軍の海上兵力を比較すると、装甲巡洋艦の数などから日本海軍がやや優位に立っていたといえる。ただし、ロシア海軍のバルト海艦隊（いわゆるバルチック艦隊）がヨーロッパから極東に回航されてくれば、その優位も一挙に逆転するし、大陸に展開する陸軍部隊やその補給物資を運ぶ輸送船の安全を確保するためにも、ロシア太平洋艦隊を早期に撃破する必要があった。

このため日本海軍は、宣戦布告前から一部の兵力で仁川港に急襲をかけるとともに（冒頭に「正式に」と記したのはこのため）、駆逐隊で旅順港に夜襲をかけたが失敗。次いで、沈船による旅順港の閉塞作戦を三度にわたって試みたが、いずれも失敗した。

続いて、旅順港の機雷封鎖を試み、太平洋艦隊の旗艦だった戦艦『ペトロパヴロフスク』を司令長官のマカロフ中将もろとも撃沈したが、日本軍もロシア軍の機雷によって戦艦『初瀬』、『八島』の二隻を同時に失ってしまった。ロシア軍はいつも同じ哨戒線上を通過する日本艦隊を見て機雷を敷設していたといわれており、日本艦隊も翌日にはコースを変更する予定だったとされている。

戦艦戦力の三分の一を一挙に失った日本海軍は、主力艦の補充が焦眉の急となった。

実は、日本は日露戦争の直前に、イギリスのアームストロング社とヴィッカーズ社に対して戦艦各一隻（のちの『香取』『鹿島』）の建造を発注していた。しかし、両艦の完成がこの戦争に間に合うかどうかはわからなかったし、仮に間に合ったとしても日本への回航時に中立国に抑留[*1]されることも考えられた。

また、日露戦争の直前には、チリがアームストロング社とヴィッカーズ社に発注していた戦艦二隻を、ロシアに購入される前に日本が買い取ろうとしたが、ロシア側の妨害もあって交渉が進まず、結局は日本と同盟関係にあったイギリスが自国海軍用として買い取るという事件もあった。

結局、この時点では、国内で主力艦の建造を急ぐよりほかに手がなかったといえる。

こうして、当時は戦艦に次ぐ主力艦だった装甲巡洋艦（日本海軍の艦種類別は一等巡洋艦）二隻の建造が決まり、命名前の仮称は一番艦が『子号』、二番艦が『丑号』とされ、のちにそれぞれ『筑波』『生駒』と命名された。

“巡洋戦艦のさきがけ”『筑波』型装甲巡洋艦

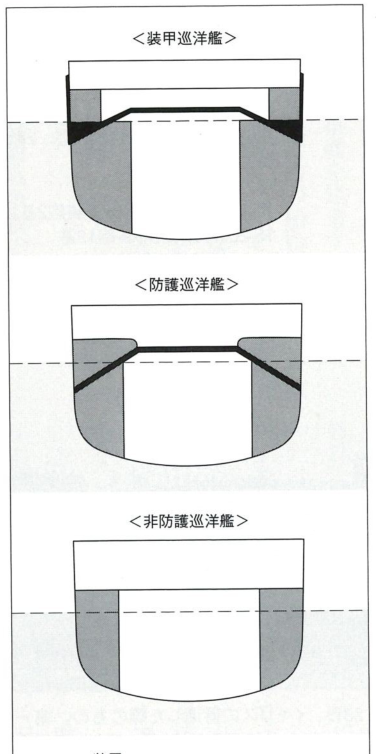
装甲巡洋艦（Armored Cruiser）とは、その名のとおり舷側に甲鉄（Armor）を施した巡洋艦のことで、舷側内に搭載された燃料の石炭や水密区画だけが頼りの非防護巡洋艦（Unprotected Cruiser）や、水線付近に薄い装甲の防護甲板を持つ防護巡洋艦（Protected Cruiser）よりもはるかに高い防御力を持つ。

ここで当時の日本海軍で最新の戦艦だった英ヴィッカーズ社製の『三笠』（右）と『筑波』（左）のスペックを比較してみよう。

●常備排水量
一万五一四〇トン
一万三七五〇トン
●主砲
四〇口径一二インチ砲四門
四五口径一二インチ砲四門
●舷側水線部装甲
九インチ（二二九ミリ）
七インチ[*2]（一七八ミリ）
●最大速力
一八ノット
二〇・五ノット

このように両艦の排水量の差は約一割に過ぎなかった。主砲の砲身長は『筑波』型の方が一・五メートルほど長く、最大速力も『筑波』型の方が二・五ノット速い。当時、日本海軍で最新の装甲巡洋艦だったイタリア製の『春日』型の最大速力は二〇ノットだった

■ 巡洋艦の装甲



*1：中立国に抑留＝実際、日清戦争では、アームストロング社で建造された水雷砲艦『龍田』が、回航途中に中東のアデンで抑留された。水雷砲艦とは、味方の大型艦への雷撃を狙う敵の水雷艇を撃攘し、自らも敵の大型艦に雷撃を行う砲艦のこと。　*2：7インチ（178ミリ）=8インチ（203ミリ）とする資料もある。

から、これと比較しても『筑波』型の方がわずかに速かった。

つまり、『筑波』型は、最新の戦艦を上回るほどの砲力とやや劣る防御力、最新の装甲巡洋艦と同等の速力を兼ね備えた、後に出現する巡洋戦艦（Battle Cruiser）のさきがけともいえる画期的な装甲巡洋艦だったのである（後に世界最初の巡洋戦艦であるイギリスの『インヴィンシブル』級の登場後、『筑波』型の艦種類別も巡洋戦艦に改められた）。

主力艦急速建造への挑戦

この先進的な『筑波』型は、呉海軍工廠で二隻がほぼ同時に建造されることになった。

それまでに国内で建造されたもっとも大きな軍艦は、日清戦争直前に横須賀造船部（のちの横須賀海軍工廠）で建造された海防艦『橋立』で、その常備排水量は四二七八トンに過ぎなかった。また、呉工廠で建造されたもっとも大きな軍艦は、常備排水量三三六六トンの三等巡洋艦『対馬』で、『橋立』よりさらに小さかった。そこから一挙に四倍以上も大きい一万四〇〇〇トン級の大型艦を建造しようというのだ。

しかも、一番艦は起工後二年で竣工、二番艦は三か月遅れで起工し、正味二年六か月で竣工する計画が立てられた。ちなみに前述の『橋立』は、開戦直前で引渡し前の試験を一部省略したにもかかわらず、竣工までに約六年もかかっている。『橋立』と同じ『三景艦』でフランスのフォルジ・エ・シャンチュー社で建造された『厳島』は三年八か月足らずで竣工しているから、日本での建造ペースは二年半近くも遅かったことになる。

また、『筑波』型とほぼ同時期にヴィッカーズ社で建造された戦艦『香取』（常備排水量一万五九五〇トン）は引渡しまでに二年一か月かかっているから、仮に『三景艦』での工期の差をそのままに当てはめると（排水量が『香取』より一割あまり小さいとはいえ）『筑波』型の建造に四年以上かかっても不思議はない。

それを二年余りというイギリスの超一流造船所とさして変わらない工期で建造しようというのだから、日本の造船技術にとっていかに大きな飛躍だったかがわかるだろう。


要目（新造時）
常備排水量：13,750t
垂線間長：134.1m
幅：22.8m
平均吃水：8.0m
主機：レシプロ蒸気機関2基、2軸
出力：20,500馬力
速力：20.5ノット
兵装：30.5cm45口径連装砲2基、15.2cm45口径単装砲12基、12cm40口径単装砲12基、7.6cm40口径単装砲6基
45cm水中魚雷発射管3門
装甲：水線178(203)mm、甲板51mm、司令塔203mm
乗員：879名

完成した装甲巡洋艦『筑波』。写真はアメリカの植民300年祭に参加後の明治40年(1907)2月28日、イギリスに寄港した際のもの。第一種軍装を着用した乗員が整列している。大正元年(1912)に巡洋戦艦に艦種変更され、第一次大戦にも参加するが、大正6年(1917)横須賀軍港内で爆発事故により沈没した。しかしその名は、姉妹艦『生駒』とともにわが国の技術史、建艦史に刻み込まれている。



戦時中の日本では、船体用鋼材の輸入をロシア側に妨害されるのを防ぐため、中立国アメリカへ発注するなど苦心が必要だった。また、特殊な処理の必要な甲鈑の開発に挑戦し、苦闘の末成功させた。写真は『筑波』用ニッケル鋼鈑（明治38年7月2日撮影）。

主力艦国産化への基盤づくり

もっとも、日本海軍における主力艦国産化の準備は、日露戦争の数年前から始められていた。

具体的には、明治三十六年度から一一年間にわたって戦艦の建造やそれを維持整備する陸上設備の増設等を行う『第三期海軍拡張計画』を明治三十五年に閣議に提出し、日露開戦前年の明治三十六年には帝国議会で予算が成立していた。そして、それまで雑役船などを建造していた呉海軍造船廠の第三船台を、主力艦を建造可能な大型船台に拡張する事実上の新設工事が始められていた。

また、同年十一月には、呉海軍造船廠と呉海軍造兵廠[*3]を合併して呉海軍工廠を新設するとともに、海軍で唯一の製鋼部を設置していた。

加えて、ヴィッカーズ社とアームストロング社に日本軍艦を発注した機会を利用して、両社の甲鈑[*4]等の製造工程を見学させるために海軍の技術者を派遣するなど、具体的な技術情報の収集にさえ動き始めていた（現実には、ヴィッカーズ社は秘密保持が厳重で、同盟国の技術者といえども重要な工場は囲いを設けて近づくことさえ禁止された。一方、アームストロング社は比較的オープンで、工場等も自由に見学できたものの、技術水準がヴィッカーズ社より低く、あまり参考にならなかったという）。

呉工廠で『筑波』型が建造されることになったのは、兵器の製造等を担当する造兵部が各工廠の中でもっとも充実していたこと、軍艦向けの特殊鋼を製造する製鋼部が呉工廠にしかなかったこと、などが大きい。

国産甲鈑の製造に挑む

明治三十七年十一月、呉工廠で第三船台の事実上の新設工事が完了し、続いて隣の第二船台の拡張工事が始められた。そして、翌三十八年一月十四日には、第三船台上で仮称『子号』装甲巡洋艦、のちの『筑波』が起工され、同年三月十五日には第二船台上で仮称『丑号』装甲巡洋艦、のちの『生駒』が起工された。

ところで、軍艦を建造するには、船体を組み立てるための船台や船体そのものを構成する鋼材だけでなく、さまざまな構成部品が必要になる。例えば、舷側等に取り付けられる甲鈑や主砲等の砲身、機関室内に搭載される罐（ボイラー）や往復動（レシプロ）式機関などなど……。

ところが、日露戦争前の日本では、高度な製造技術を必要とする甲鈑や砲身はもちろん、造船用の鋼材さえ満足に調達することができなかった。このため、日本は、日露戦争の直前に、大量の造船用鋼材を修理用としてアメリカに発注していた。

同盟関係にあったイギリスではなく、中立国のアメリカに発注したのは、日露が開戦した場合にイギリスから日本に向かう船は、途中のスエズ運河の通過時等にロシア海軍が多数保有していた通商破壊用の巡洋艦や商船改造の仮装巡洋艦に臨検、拿捕、撃沈される恐れがあったためだ。

今回の『筑波』型の建造では、このアメリカ製の鋼材を船体に割り当てて、呉工廠では、まず機密性の高い甲鈑や砲身を国産化することになった。この中でもとくに大きな課題となったのが、特殊な処理を必要とする甲鈑の製造だった。

日本海軍では、すでに明治三十二年（一八九九）から、呉海軍造兵廠長の山内万寿治（やまのうちますじ）大佐を甲鈑の製造技術や製造機械等の調査のためにヨーロッパに派遣していた。

そして、明治三十四年から既存の輸入設備を使って、イギリスで日本軍艦

*3：造兵廠＝造兵の「兵」とは兵器のこと。具体的には火砲や魚雷等を指す。ちなみに造機の「機」とは機関のこと。
*4：甲鈑＝耐弾性の向上等のために特殊な処理を施した鋼鈑のこと。

の建造を見学した際に見聞きした情報をもとに、手探りで甲鈑の製造に挑戦し始めた。この時は、溶鉱炉で製造された鉄塊（インゴット）をローラーで伸ばして鍛える圧延機（ローリングミル）がなかったため、一〇〇〇トン水圧機（プレス機）を使って甲鈑を鍛えたという。

しかし、翌三十五年始めにようやく完成した六インチ（一五五ミリ）厚の甲鈑二枚を使って試験射撃を実施したところ、一枚は六インチ徹甲弾に耐えたが、もう一枚は亀裂を生じて破砕されてしまった。

その後、呉工廠製鋼部には、明治三十七年から三十八年にかけて、二五トン酸性平炉（溶鉱炉の一種）二基、甲鈑用均熱炉[*5]、四八インチ圧延機、八〇〇〇トン水圧機、水槽、油槽、スプリンクラーなどの製造設備が次々と設置された。

明治三十九年には、これらの新鋭設備を使って、ヴィッカーズ社やアームストロング社の工場見学から帰国した技術者の手によって『筑波』型用の七インチ甲鈑が試作されたが、射撃試験では再び亀裂を生じて関係者を落胆させた。

甲鈑の破断面等を詳細に検査できる走査式電子顕微鏡等のない当時、冶金工学は経験工学的な色彩が非常に濃く、それまでの甲鈑製造の経験不足が大きく影響したといえるだろう。

その後は、とくに被弾時の甲鈑の亀裂防止に焦点を絞り、焼き入れや焼き戻し等の加熱処理の研究に力を注いだ。約半年後、再び七インチ甲鈑を試作して射撃試験を実施したところ、今度は六インチ砲弾はもちろん、破壊力の大きい八インチ砲弾にも耐え、懸案となっていた亀裂破壊も生じなかった。

こうして呉工廠の製鋼部は、限られた情報と不十分な設備という悪条件の中で試行錯誤を繰り返しながら、分厚い甲鈑の製造技術を会得していったのである。

主要な構成部品をすべて国産化

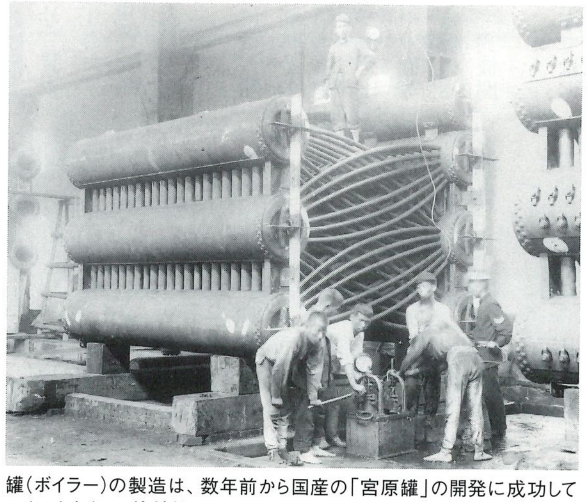
ここで話は前後するが、日本海軍では、日清戦争当時に臨時軍事費で緊急輸入した工作機械等を使って、明治二十九年（一八九六）から薬莢の製造に着手し、次いで六インチ砲の製作を始めていた。

その後、イギリスのアームストロング社の技術協力を得て砲身の製造技術を習得し、明治三十六年には呉造兵廠で八インチ砲を試作したものの、砲身鋼は長年にわたって輸入品に頼っていた。また「六六艦隊」の戦艦はいずれもアームストロング社製の一二インチ（三〇・五センチ）砲を搭載するなど、大口径砲もすべて輸入品に頼っていた。

明治三十八年になると、呉工廠製鋼部で溶製された国産のニッケル鋼を使って六インチ砲が製作され、翌三十九年起工の『筑波』型には、初めて国産の一二インチ砲が搭載されることになった。失敗を重ねた甲鈑とちがって、主砲の国産化に比較的すんなりと成功したのは、アームストロング社の指導によるところが大きいのであろう。

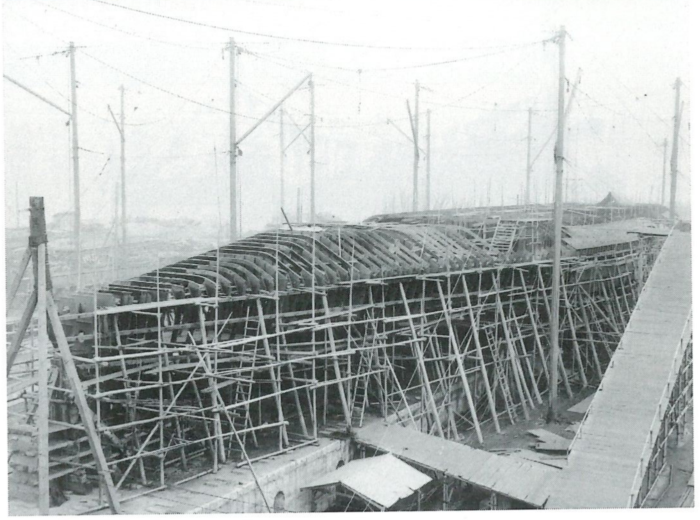
主力艦の機関に関しては、例えばヴィッカーズ社製の『三笠』には、もともとフランスで開発された「ベルヴィール罐（ボイラー）」が搭載されており、主機は罐で発生させた蒸気を高圧、中圧、低圧の三つの気筒（シリンダー）で順次膨張させる三連成（三段膨張式）三気筒機関が搭載されていた。『三笠』に次いでヴィッカーズ社に発注された戦艦『香取』には、中圧気筒を出た蒸気を二つの低圧気筒で膨張させる三連成四気筒機関が搭載された。クルマのエンジンも同じだが、三気筒エンジンよりも四気筒エンジンの方がバランスに優れ、回転がスムーズで高速発揮に適している。

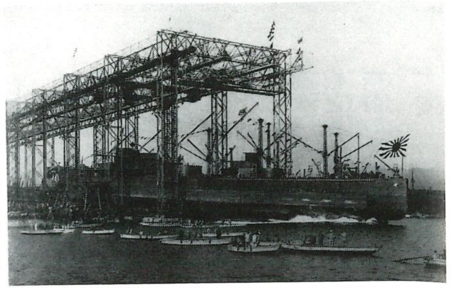
日本海軍では、すでに明治三十二年に宮原二郎造船大監（のちの機関少将）



罐（ボイラー）の製造は、数年前から国産の「宮原罐」の開発に成功していたこともあり、比較的スムーズに進んだ。写真は試験中の『筑波』のボイラー（明治38年8月3日撮影）。

＊5：甲鈑用均熱炉＝甲鈑を均一に加熱する炉。





上：ガントリークレーンの一例。写真は川崎造船所における戦艦『伊勢』進水式の光景。大正5年（1916）11月12日撮影。左：建造中の『筑波』を左舷前方より見る。ガントリークレーンがなかったため、部材の運搬は、船台の両側にやぐらやデリックを立て並べ、ワイヤーロープを渡して行っていた。明治38年3月19日撮影。

の考案した国産の「宮原罐」を、水雷敷設船『第一大湊丸』に搭載して良好な試験結果を得ていた。そこで『筑波』型には、主力艦としては初めて、国産の宮原罐が搭載されることになった。また、主機には、ヴィッカーズ社製の戦艦『香取』の主機をベースに設計、製作された国産の三連成四気筒機関が搭載されることになった。この機関の最大出力は二〇万五〇〇〇馬力に達し、国産機関としては初めて二〇万馬力の大台を超えた。

さらに二番艦の『生駒』では、搭載機関の陸上での試験運転時に重油噴射装置の実験を行ったところ、一〇〜一五パーセントもの性能向上が確認されたため、これまでの石炭専焼方式に代わって、石炭と重油の混焼方式が採用されることになった。また、建造中の一番艦『筑波』の機関も、混焼方式に急遽改められることになった。こうした改良を加える余裕のあったところを見ると、機関の国産化も甲鈑の国産化に比べると比較的容易に進められたようだ。

こうして『筑波』型では、甲鈑、主砲、機関といった主要な構成部品を一挙に国産化することに成功した。

『筑波』型の建造は、造船技術だけでなく造兵技術や造機技術に関しても、日本海軍に大きな飛躍をもたらしたのである。

『筑波』型の船体組み立て

次の大きな課題は、船体の組み立てであった。

当時の作業手順は、まず造船用の鋼材を木型どおりの寸法に切り出し、必要に応じてハンマー等で叩いて折り曲げる。その部材を起重機（クレーン）で吊り上げて船台上の所定の位置に移動させ、隣り合った二つの部材を重ね合わせて固定する。両方の部材にあけられた穴に、焼いて軟らかくした鋲（リベット）を通し、ハンマーで叩いて部材同士を接合し、船体を組み立てていく、というものだった。

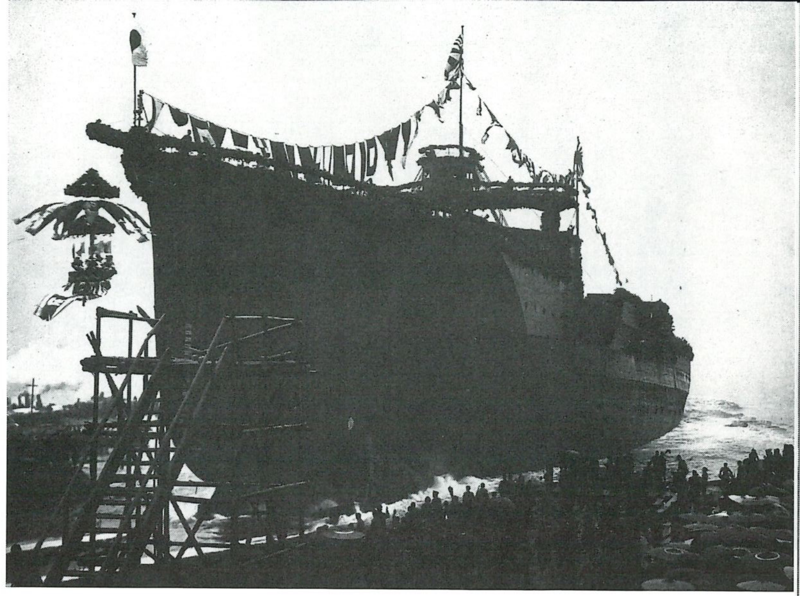
旧海軍の造船官だった福井静夫氏によると「造船とは、見かたによっては一種の運搬工業だとさえいえる」という。船体の組み立て工事でもっとも大きな労力を要するのは、船体を構成する部材の運搬なのだ。ところが、拡張工事が終わったばかりの第三船台には、大量の部材を効率よく運搬するのに必要なガントリークレーンがなかった。

ガントリークレーンは、別名「橋型起重機」とも呼ばれる。その名の通り、船台の左右に長大な高架（走行桁）を設けて、その上に船台をまたぐように橋状の構造物（桁：ガントリー）を載せた構造になっている。

その橋状の構造物には巻上機（ウィンチ）が備えられており、これで吊り上げた部材を前後左右に平行移動させることができる。ただし、船台の全長に匹敵する巨大なガントリークレーンの建設には膨大な資材と労力、それに長い工期を必要とする。戦時下で主力艦の完成を急ぐ海軍に、そのような余裕はなかった。

そこで呉工廠では、電動巻上機を据え付けた鉄製のシャー（やぐら）や三トンデリックを船台の両側にいくつも立てて間に合わせた。しかし、これらの装置では、ガントリークレーンのように部材を前後左右に自在に移動させることはできないので、運搬能率はガントリークレーンよりもはるかに劣る。

呉工廠では、こうしたハンディを背負いながらも、イギリスの超一流造船所並みの急速建造を目指していたのだ。



晴れて進水式を迎えた『筑波』。艦尾が海上に浮揚した瞬間の光景（明治38年12月26日）。

組み立て時の問題は、このガントリークレーンの欠如だけではなかった。最大の問題は、進水までに約一三〇万本が必要と見積もられた膨大な量のリベットを打つ鋲打工の不足だった。それまでは、大型艦の建造を国外の造船所に依存しており、海軍工廠では『筑波』型よりもはるかに小さな艦艇を細細と建造するだけだったから、国内で空前の大型艦を二隻同時に建造するとなれば、鋲打工が足りなくなるのは当たり前のことだった。

このため、呉工廠の造船部では、鋲打工を大量に募集して速成教育を実施することになったが、それでも二番艦の『生駒』の建造を考えると充分とはいえず、最終的には民間の三菱造船所の工員が動員されることになった。

実は『筑波』型の建造決定後、呉工廠造船部長の小幡文三郎造船大監（のちの技術少将）は、部下の技術者を連れて長崎の三菱造船所や神戸の川崎造船所の造船設備や能力を調査していたのである。

当時、民間の造船所で大型船の鋲を打てる鋲打工を大量に抱えていたのは三菱造船所しかなかった。同造船所は、日清戦争後の明治三十二年から水雷艇の組み立てを手始めに海軍艦艇の建造にも乗り出しており、ここで主力艦の建造に加わることには大きな意義があった。

海軍と三菱造船所との交渉の結果、『生駒』の防御甲板の工事はすべて同造船所が請け負うことになった。そして、同造船所ではこれを自社の工場で一旦組み合わせた上で呉工廠に送り、同工廠の第二船台上で長崎から来た同社の工員がこれを組み立てた。

ちなみに、三菱造船所は大正六年（一九一七）に三菱重工長崎造船所に改称され、のちに『大和』型戦艦の二番艦『武蔵』の建造を担当するまでに成長する。『筑波』型の建造は、海軍の工廠だけでなく、民間造船所でも大型艦の建造技術を育成する大きなキッカケになったのである。

『筑波』の進水と完成

明治三十八年十二月十二日、仮称『子号』装甲巡洋艦は、起工からわずか一一か月で進水式を迎えることになり、同日に『筑波』と命名されることになった。この時点では、船体に重量の大きい甲鈑や主砲、機関等は搭載されていない。これらは進水後に船体を艤装岸壁に横付けして搭載される。

工期の短縮や建造費の抑制を考えれば、船台上で可能な限り工程を進めておくのが望ましいが、進水時の船体重量が大きくなると、今度は進水作業が難しくなる。

このため、例えばヴィッカーズ社建造の『香取』の進水重量は九五二一トンと常備排水量の六〇パーセントにも達していたが、『筑波』型の進水重量は六一四四トンと常備排水量の四五パーセントに抑えられていた。それでも、国内でこれだけの重量の船体を進水させるのは初めてのことであった。

晴れの進水式には、皇太子殿下のご臨席を仰ぎ、すべての準備作業を前夜のうちに整えていたはずであった。ところが、進水時に船体が滑り降りる進水台のうち、水中に置かれた台に取り付けられた錘（おもり）の一部が作業中に落ち、台が水中にわずかに浮き上がってしまった。

ここで呉工廠の小幡造船部長は、上司の山内工廠長に進水の延期を要請するとともに自らの進退伺いを提出した。山内工廠長は、すぐに進水作業の中止を決定するとともに小幡部長の進退伺いを却下。進水式は中止され、皇太子殿下は神戸に戻られて、多数の列席者も解散した。

こうして進水式は、再び海面が高くなる大潮の日を待って、二週間後の十二月二十六日に改めて行われ、今度はめでたく成功した。起工から一年足らずの短期間で進水まで漕ぎつけたのである。

続いて、進水した『筑波』の船体に各種の艤装工事が施され、開発済みの甲鈑や主砲等が搭載された。前述したように『筑波』用の七インチ甲鈑の射撃試験が成功裏に終わったのは、竣工のわずか四か月前のことだったから、船体への装着にギリギリのタイミングであった。

そして、明治四十年（一九〇七）一月十四日、一等巡洋艦『筑波』は日本初の国産主力艦として竣工した。『筑波』の起工日は明治三十八年一月十四日だから、起工からちょうど二年間で完成したことになる。これは世界的に見ても、イギリスの超一流造船所以外では考えられない驚異的な急速建造であった。

一方、二番艦の『生駒』は若干工期が長引き、三年と一週間余りで完成した。だが、一番艦の『筑波』と同じ工廠でほぼ平行して建造されたこと、民間造船所が主力艦の建造に初めて参加していることなどを考慮すれば、『筑波』型以前の建造実績と比較して充分に短い期間で完成したといえるだろう。

『筑波』型の建造が意味するもの

もっとも、日露戦争は「日本海海戦」での日本海軍の大勝利によって、明治三十八年九月に終結したため、『筑波』や『生駒』は戦争には間に合わなかった。それでも、日本の主力艦の建造能力を世界に示したことの意義は大きい。

考えてみれば日本は、江戸時代にピリオドを打ってからわずか四〇年足らずの間に、当時の最先端の科学技術の結晶といえる主力艦を自力で建造するまでになったのである。その背景には国家をあげての富国強兵政策があり、世界の列強に「追いつき追い越せ」という強烈な国家意思が存在していた。

戦艦等の主力艦が国家意思を表明する具体的な手段であったこの時代、『筑波』型の装甲巡洋艦は、完成後はもちろん建造の過程においても、日本の国家意思を世界に向かって強烈にアピールした艦だったといえるだろう。

そして、その国家意思の通り、やがて日本の造艦技術は世界の列強に追いつき、そして一部の技術では追い越したのである。

■呉における主力艦国産化への道

	第2船台	第3船台	主要構成部品			その他
			甲鈑	主砲	機関	
明治32（1899）			技術調査のため山内大佐を欧州に派遣		国産「宮原罐」を試験	
明治33（1900）					重油燃焼の研究に着手	
明治34（1901）			既存の輸入設備で甲鈑製造開始			
明治35（1902）			6インチ甲鈑試作（失敗）			「第三期海軍拡張計画」を閣議に提出
明治36（1903）	生駒	新設 筑波	英・ヴィッカーズ社とアームストロング社に技術者派遣	8インチ砲試作		「第三期海軍拡張計画」を帝国議会で可決「呉海軍工廠」を新設
明治37（1904）			製鋼部に酸性平炉、圧延機など各種設備を翌年にかけ次々に設置			2.10 日露両国宣戦布告
明治38（1905）	拡張 3.15	1.14 12.26		国産ニッケル鋼で6インチ砲製作		9.5 ポーツマス講和条約調印
明治39（1906）	4.9	ガントリークレーン設置	7インチ甲鈑試作	45口径12インチ砲を国産化	「生駒」の罐に重油噴燃装置を装着、陸上試験	
明治40（1907）						
明治41（1908）	3.24		←--○→ は艦船の工事期間、 -------- は船台の工事期間、 ○ は進水			

主力艦国産化は一朝一夕に成し遂げられたものではなかった。上の図に見るように、組織の整備や施設の増強、主要部品の開発などが、試行錯誤を重ねながら『筑波』の完成に向けて収斂していったのである。

〈主要参考文献〉福井静夫著作集第一巻『日本戦艦物語〔Ⅰ〕』（光人社）／雑誌『世界の艦船』518号、521号、別冊『日本戦艦史』『日本巡洋艦史』（光人社）／堀川一男著『海軍製鋼技術物語―大型高級特殊鋼の製造技術の発展―』（アグネ技術センター）／『呉海軍工廠製鋼部史料集成』（非売品）／外山三郎『日本海軍史』（教育社）／木村清『造艦回想』（出版協同社）／防衛庁防衛研究所戦史室戦史叢書『戦史叢書　海軍軍戦備〔1〕昭和十六年十一月まで』『戦史叢書　陸海軍年表』（朝雲新聞社）／秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』（東京大学出版会刊）

実戦経験から生まれた歩兵火器の革新

突撃銃開発史

HISTORY of ASSAULT RIFLE

紛争地域のニュース映像などで頻繁に登場するカラシニコフ自動小銃（AK）は、アサルトライフル＝突撃銃というジャンルに分類される現在もっともポピュラーな歩兵火器だ。このAK47開発のきっかけとなったのが、第二次世界大戦でドイツが開発したStG44である。その新型銃は実戦で有効性を証明し戦後の歩兵火器体系に変革をもたらした

文＝松代守弘　銃器写真提供＝白石 光



1942年に先行量産された、史上初の突撃銃MKb42（H）。ドイツのヘーネル社が開発したもので、ワルサー社が開発したモデルとともに実戦投入され、良好な成績を示した。本体にプレス加工を多用するなど量産性も高く、基本設計の多くが量産型のMP43に引き継がれた。

第一次世界大戦末期、ドイツ軍は浸透戦術*1を多用して大きな戦果を挙げたが、中でも注目を集めたのはサブマシンガン（短機関銃）の威力だった。隊列を組んだ集団の突撃とは全く異なり、十数人程度の小グループが情況に応じて接敵を避けつつ前進する浸透戦術においては、サブマシンガンの有効射程はせいぜい二〇〇メートル程度だったにもかかわらず、敵との交戦距離がずっと短くなったため、非常に大きな威力を発揮した。特に塹壕内での白兵戦では、重くて長い小銃を射撃する機会はほとんどなく、また銃剣を振り回す余地もなかったのに対して、小さくて軽いサブマシンガンは取り回しが容易で、不意に現れた敵に対してもすぐに反応できたのである。

しかし、局地的な勝利は戦局全体を動かすに到らず、最終的にドイツは第一次世界大戦に敗北した。戦後、ベルサイユ条約によってドイツ軍はサブマシンガンを保有することが禁じられたため、敗戦時に残存していたサブマシンガンは廃棄されるか、あるいは警察*2の装備とされた。こうしてワイマール体制下のドイツ共和国軍は大幅に規模を縮小されたため、少ない兵力で国土を防衛する様々な戦術や兵器の研究が熱心に進められた。

第二次大戦前夜の歩兵火器事情

歩兵用の小銃は十九世紀末から二十世紀初頭にかけて完成の域に達し、第一次世界大戦に参加した各国歩兵部隊の主力兵器だった。これらの小銃はいずれも後装式で銃身には旋条（ライフル）を施し、槓桿（こうかん）と呼ばれるボルトをスライドさせることによって弾倉の弾丸を装填する構造になっていたため、ボルトアクションライフルと呼ばれた。

当時の歩兵用小銃は、長さ一・二メートル、重さ四キロ前後で、銃剣を取り付けるとさらに長さと重さが増した。口径は六・五ミリ～八ミリで、有効射程は九〇〇メートル前後に達していた。ただし、一発撃つごとにボルトを引いて次弾を装填しなければならなかったため、正確にすばやく連射することはほぼ不可能だった。そのほか、騎兵用に銃身を短くして軽量化した騎兵銃も存在していたが、基本的な構造は同一で、性能的にも大差なかった。

ドイツでは研究の結果、歩兵部隊同士の交戦距離がおおむね四〇〇メートル前後であることが明らかにされ、また数十メートル未満の至近距離で交戦する際や、市街地や陣地などでの白兵戦においては、サブマシンガンのような連続発射火器が有効であることも判明した。ただし、サブマシンガンの有効射程はわずか一五〇～二〇〇メートルに過ぎないため、見通しのよい地形ではボルトアクションライフルや機関銃に射程外から攻撃される危険性があった。

また、第一次世界大戦中のドイツ軍はサブマシンガンを機関銃と同様に捉え、射手と弾薬手のチームで運用していたが、そのような運用は誤りとして退けられ、連続発射火器を兵士の個人装備とすることが望ましいとされた。その一方で、既存の歩兵用小銃はもちろん、騎兵銃でさえ大きすぎ、かつ重過ぎることが判明し、また射程も過大であると評価されたのである。

ドイツ以外の各国でも同様の研究が行われ、ほぼ同様の結果が出ており、一九二〇年代から三〇年代には次世代の歩兵が装備する銃に必要な要素がおおむね固まっていた。その要素とは、

主要な歩兵火器の比較

代表的な歩兵火器を性能面で比較したもの。長射程・大威力のライフルと近距離戦闘向きのサブマシンガンでは戦闘距離（射程）や威力に大きな差があり、突撃銃（アサルトライフル）は両者の働きをほどよいところで兼ねる性能を備えていた。

小銃（ボルトアクションライフル）

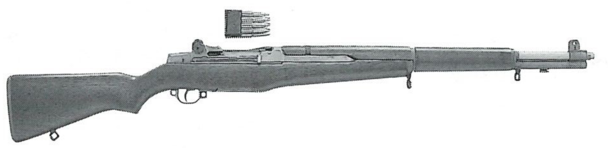
□射程：長 □反動：大 □威力：大 □連射：不能 □サイズ：大 □重量：大



長さ1～1.2メートル、重さ4キロ前後で、口径は6.5ミリ～8ミリ。有効射程は900メートル前後。ボルトアクションライフル用弾薬を使用し、連続発射は不可能。写真はモーゼルKar98K／ドイツ。

自動小銃（オートマチックライフル）

□射程：長 □反動：大 □威力：大 □連射：可能 □サイズ：大 □重量：大



連続発射可能なライフル銃。長さ1～1.2メートル、重さ4キロ前後で、口径は6.5ミリ～8ミリ。有効射程は7～900メートル前後。ボルトアクションライフル用弾薬を使用し、大半が引き金を一回引くごとに一発発射するセミオートマチックライフル（半自動小銃）だが、引き金を引いている間は連続発射し続けるフルオートマチック機能を備えたものもあった。ただし、反動も大きいため、連続発射時の反動制御は困難。写真はM1ライフル／アメリカ。

突撃銃（アサルトライフル）

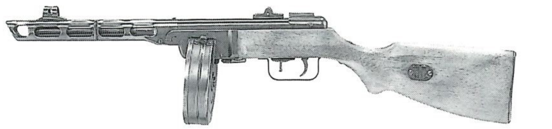
□射程：中 □反動：中 □威力：中 □連射：可能 □サイズ：中 □重量：中



第二次大戦後期にドイツが実戦投入したＳｔＧ44（ＭＰ44）は長さ0.94メートル、重さ5.2キロで、口径は7.92ミリ。有効射程は400～500メートル前後。専用に開発された弾薬を使用し、連続発射も可能。写真は先行量産されたMkb42(H)／ドイツ。

短機関銃（サブマシンガン）

□射程：小 □反動：小 □威力：小 □連射：可能 □サイズ：小 □重量：小



長さ0.7～0.9メートル、重さ3～4キロ前後で、多くは木製銃床や折畳み式銃床を備える。口径は7.62ミリ～11.5ミリ、有効射程は150～200メートルで、拳銃用弾薬を使用し、引き金を引いている間は連続発射し続けるフルオートマチック射撃が基本だが、引き金を一回引くごとに一発発射するセミオートマチック機能を備えたものもあった。写真はPPSh41／ソ連。

*1 浸透戦術＝小部隊で敵の防御拠点を迂回、浸透しつつ前進し、さらに後方拠点を叩いて前線部隊の戦意を喪失させ、最終的に敵部隊を全面崩壊させる戦術。
*2 警察の装備＝大戦後、ドイツは警察にサブマシンガンや装甲車を保有させ、準軍隊的に扱っていた。一種の条約逃れと言えなくもないが、戦後のドイツでは共産主義革命を目論む集団と、退役軍人を中心とする武装民兵との小競り合いがたびたび発生していたため、治安維持のためには警察の重武装化が必要だった。

近距離においてサブマシンガンのような制圧火力を持ち、四〇〇メートル前後の中距離ではボルトアクションライフルと同程度の精密射撃能力を備え、加えて遠距離においても軽機関銃に匹敵する支援火力を提供可能であることという、あまりにも欲張った内容であった。

つまり、サブマシンガンより長い有効射程を持ちつつ、ボルトアクションライフルより小型軽量で、しかも連射可能な銃が要求されたのである。そのためには、旧来のボルトアクションライフル用弾丸のように高初速、強反動の弾薬ではなく、新たに低初速[*3]、弱反動の弾薬を開発することが必要だと指摘されていた。

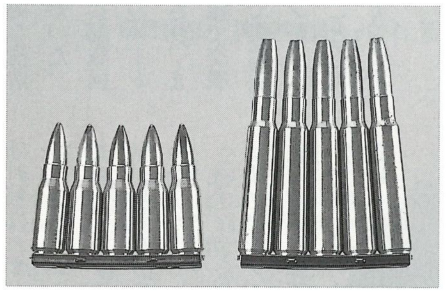
しかし、研究の結論がいささか理想を追求しすぎていたことに加え、各国とも第一次世界大戦期に生産したボルトアクションライフルの余剰在庫を大量に抱えていた。その上、文字通りの消耗品である弾薬の生産設備を更新することは、費用もさることながら補給面での混乱というリスクも存在していた。そのため、ドイツ以外の各国では既存の弾薬を使用した自動小銃を開発することとして、リスクを最小限にしつつ歩兵用兵器を近代化しようと試みた。

既存の弾薬を使用した自動小銃は各[*4]国で開発されていたが、自国で生産し、実戦投入したのはアメリカとソビエト、ドイツの三国程度だった（ごく少数だがイタリアも自国で自動小銃を開発し、実戦投入している）。これらの自動小銃は大半が引き金を一回引くごとに一発発射するセミオートマチックライフル（半自動小銃）で、引き金を引いている間は連続発射し続けるフルオートマチック機能を備えたものもあったが、多くは試作段階に留まった。しかも、従来の小銃と同様の曲銃床（射手が構えやすいように肩付け部分が曲がっている銃床）を備えており、連続発射時に反動で銃口が上に跳ね上がるため、機構的に可能だったとしても、連続発射[*5]は事実上意味をなさなかった。



MP43（MP44/StG44）

MKb42（H）に実戦での使用結果のフィードバックやワルサー社モデルの機構などを加味した本格量産型がMP43。これに小改良を加えたものがMP44である。ヒトラーの目を欺きサブマシンガンとして生産されたMP43だが、東部戦線より帰還した将校がヒトラーの前で「あの新型自動小銃がもっと欲しい」と懇願したことから、すべてがばれてしまった。



7.92ミリモーゼルと7.92ミリクルツの比較

左が新弾薬のクルツ弾。同じ7.92ミリ口径ながら、右のモーゼル・ライフル弾とクルツ弾では弾丸の長さや薬莢の大きさがかなり違うことがわかる。反動もライフル弾に比べてマイルドで、フルオートで射撃した場合でも銃のコントロールはしやすかったという。

突撃銃誕生

ドイツは他国とは異なり、口径は旧来の弾薬と同じ7・92ミリでも、薬莢を短くして発射薬の量を減らした低初速、弱反動の弾薬を開発している。新弾薬は、全長が短くなったことから7・92ミリクルツ（クルツはドイツ語で短いという意味）と呼ばれ、さらにその弾薬を使用する新型銃の開発を進めていた。

一九三八年より始まった7・92ミリクルツを使用する新小銃の開発は順調に進み、一九四二年半ばにはヘーネル社とワルサー社の試作銃が完成し、先行量産型が実戦投入された。

先行量産型は機関騎兵銃を意味するMKb42と名づけられ（ヘーネル社が開発した型はMKb42（H）、ワルサー社の型はMKb42（W）と区別された）、直銃床[*6]（サブマシンガンのように銃身からまっすぐに伸びている銃床）を備えていた。そして、MKb42は東部戦線で大きな戦果を挙げたため、ヘーネル社の基本設計にワルサー社の技術を取り入れた量産型の生産準備が進められた。ところが、歩兵の小銃には一定の長距離射撃性能が必要と信じて疑わないヒトラーが量産許可を出さなかったため、やむなくシュペーア軍需相がMP43（MP＝短機関銃）という名目で量産を強行した。

前線に投入されたMP43は予想通りの大きな戦果を挙げ、きわめて有用な兵器であることを立証したため、最終的にはヒトラーも折れて量産許可を出した。その後、細部に改良を加えたMP44が登場したが、新兵器であることを強調するためStG44に改称された（StGはSturm＝突撃、Gewehr＝銃の略で、英語圏では「アサルトライフル」、日本語では突撃銃と訳された）。

StG44はバリエーションを含めて約四二万六〇〇〇挺が量産されたが、サブマシンガンが役に立たない開けた地形でも、またボルトアクションライフルをもてあます市街戦でも非常に効果的な兵器であり、さらに軽機関銃のような援護射撃でさえ、決して不可能ではなかった。

つまりStG44突撃銃とは、一九二〇年代から三〇年代にかけて構想されていた、次世代兵器そのものだったといえよう。

第二次世界大戦後、捕獲したStG44を試射した連合軍の将兵や、民間市場に流出した銃を実射したコレクターたちは、異口同音に反動が柔らかく（マイルドと評している）、力の弱い人間でも連続発射時のコントロールが比較的容易なことを高く評価している。彼らは、あらゆる射撃姿勢でコントロールが容易で、銃身を固定物に載せるなどすれば、数百メートル以上遠方の目標に対しても、ある程度まで効果的な射撃が可能なこと、そして操作や手入れが容易であることに対して、「真の万能銃」と最大級の賛辞を惜しみなく与えているのだ。

第二次世界大戦中に突撃銃の威力を思い知らされたソビエト軍は、即座に低初速、弱反動の新型弾薬と、外見上はStG44とよく似たAK47（カラシニコフ）を開発したが、量産が始まったのは大戦後である。しかし、戦後は共産圏を代表する火器として、文字通り全世界で広く使用された。また射程性能を重視して高初速、強反動弾薬へのこだわりが依然として根強く残っていたアメリカ軍も、AK47に刺激を受けて方針を転換し、低初速、弱反動の新型弾薬を採用、さらにM16突撃銃を開発している。

これらの突撃銃は、体力の劣る未訓練の女性や子どもにさえも、侮れない殺傷能力をもたらす兵器となった。もし十分な訓練を積んでいるならば、一挺の突撃銃を手にしたたった一人の射手でさえ、ボルトアクションライフル装備の一個分隊を阻止することも不可能ではない。

突撃銃の登場は地上戦のあり方を一変させ、現代社会にも多大な影響を与えたのである。



塹壕で守りに就くドイツ兵。傍らには対戦車無反動砲のパンツァーファウストが置かれ、その上にStG44（左）とGeW43自動小銃が立て掛けてある。GeW43は7.92ミリライフル弾を使用するガス圧作動のセミオートマチックライフル。ドイツにおける歩兵火器開発の成果が一堂に会したような写真である。

*3 低初速、弱反動の新弾薬＝突撃銃は、小銃ほどの長射程は必要とされず、弾丸も小銃弾より小さかったため、発射火薬（装薬）も少なくて済む。しかし装薬の燃焼速度や機関部の構造上、旧来の装薬の量を減らすだけでは問題の解決とはならなかった。

*4 各国の自動小銃開発＝ドイツでも、保険として既存のボルトアクションライフル用弾薬を使用する自動小銃の開発を進めていた。

*5 射手が立った状態で連続発射し、ある程度の命中精度が確保できないなら、個人装備の小銃として実用的な連続発射機能を有しているとはみなされないだろう。

*6 ドイツ空軍のFG42とアメリカのジョンソンM1941、BARなどは直銃床を備えていたが、ボルトアクション小銃と同じ弾薬を使用していたため、連続発射時の反動制御は困難で、実用的な連続発射機能を備えているとはいい難かった。これらの銃は自動小銃と機関銃の中間的な存在といえよう。

Battle of Underwater

Vol. 8

現代の水中作戦用装備

文／イラスト＝坂本 明

●個人用水中作戦装備

近年、多発する地域紛争に特殊部隊が投入されることが多くなっている。こうしたことから、海洋や河川に関係する特殊部隊の装備も格段に進歩している。

軍の潜水隊員や特殊部隊隊員が使用する潜水装置はいくつかあるが、特殊部隊隊員が最も多用するのは酸素閉鎖式回路潜水装置である。これは、開式回路（いわゆる通常のアクアラング）では水中に排出される呼気を、炭酸ガス・キャニスターに通すことで炭酸ガスを除去し、酸素と混合して再使用するものだ。呼気を再利用することで、タンクに充填する酸素の量を九〇パーセント節約でき、その結果、携帯するタンクも小型のものを用いることができるという利点がある。

この方式の潜水装置では一九七〇年代後半にドイツのドラッガー社が開発したドラッガーLARⅦが有名で、世界中の軍や警察で使用されている。ドラッガーLARⅦを含めて、今日各メーカーで開発している酸素閉鎖式回路潜水装置はどれも基本的原理や構造は同じで、潜水中に気泡が出ず、ほとんど作動音もしないため特殊部隊の水中作戦には適している。

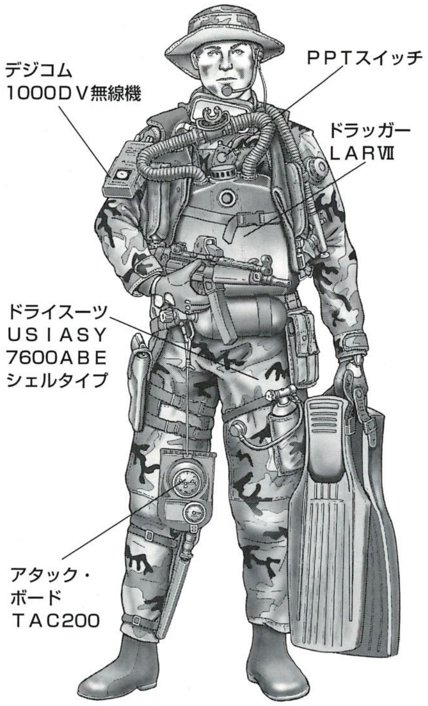
次にスーツであるが、特殊部隊の隊員や海軍のダイバーは、任務であれば暖かい南洋から冷たい北海まで、どこの海でも潜らなければならない。中でも冷たい海水は体温を奪い、生理機能を低下させてしまう。

そんな低温海水の中でも体温を保持して人間が活動できるように開発されたのが*ドライ・スーツだ。これにより、ダイバーはドライ・スーツの下にインナーを着ることと、スーツ内部の空気の層によって、極寒地においても活動可能となったのである。

タイフーン社やUSIA社などが開発した最新のドライ・スーツは、外層にゴアテックスなどの素材を使用し、上陸してもスーツを着用したまま任務を継続できるほど良好な着用感となっている。その上、防弾パネルを挿入すればボディ・アーマーにもなる特殊部隊専用のものも開発されている。

特殊部隊隊員や海軍ダイバーが水中を移動する時、通常は深度計とコンパスの付いたアタックボードと呼ばれる水中航法装置を使用する。水中ではアタックボードで深度や方位を確認し、フィンを動かした回数から泳いだ距離を算出して自分の位置を決定する。しかし最近では、ナビゲーション・コンピューターが開発され、より正確な方位や位置の決定ができるようになった。またナビゲーション・コンピューターに事前に海底の状況をインプットしておけば、装置が現在のダイバーの位置や方位を測定・計算してディスプレイに移動した軌跡や現在位置、目標までの距離などを示すことも可能となっている。

現代の水中装備の例（SEALS）



デジコム1000DVは、水上での交信距離約1000m、浅い深度で短距離なら水中でも交信が可能。マスク部分にマイクが取り付けられているため、潜水移動中でも会話が可能で、PPTスイッチは送受信の切り替え用である。シェルタイプ・ドライスーツは特殊部隊がよく使用するもので、保温性は若干低下するが、耐久性に優れている。

●隊員を輸送する装備

アメリカ海軍では、SEALS隊員などを輸送するSDV（SEALS Delivery Vehicle：潜水員輸送艇）や、潜航中の潜水艦から発進して艦外活動を行わせるため、潜水艦の甲板上に搭載するドライデッキ・シェルターを開発した。ドライデッキ・シェルターは潜水艦の甲板上に設置された水密式格納庫のようなもので、SDVを格納したり船外活動用の潜水装置や予備酸素ボンベなどの収容庫として使われる。隊員が潜行中の潜水艦から艦外に出る時には、潜水艦のハッチからドライデッキ・シェルターのアクセス部を通ってシェルター内部に入り、アクセス・ドアを閉めた上で内部に注水、次にシェルター開閉ドアを開けて海中に出る。

SDVは、かつての人間魚雷に相当するような小型の特殊潜水艇で、上陸する隊員を海岸近くまで輸送し、隊員の体力消耗を防いだり、重装備を輸送するのに使われる。

第二次大戦以後、水中作戦が本格化すると、潜水艦（あるいは水上艦艇）から目標地点まで隊員を運ぶ輸送装置の研究が行われ様々なものが開発されてきた。現在、アメリカで主力として使われているのが、グラスファイバー製のボディを持つMk.Ⅷで、アメリカ海軍では一四隻保有しているという。

操縦士と輸送されるSEALS隊員が潜水装置を着用して搭乗するウェット式で、一隻当たり四～六名の隊員を輸送できる。電動モーターによる推進方式で航行音は非常に小さく発見され難く、コンピューター化された航法システムを装備するという。

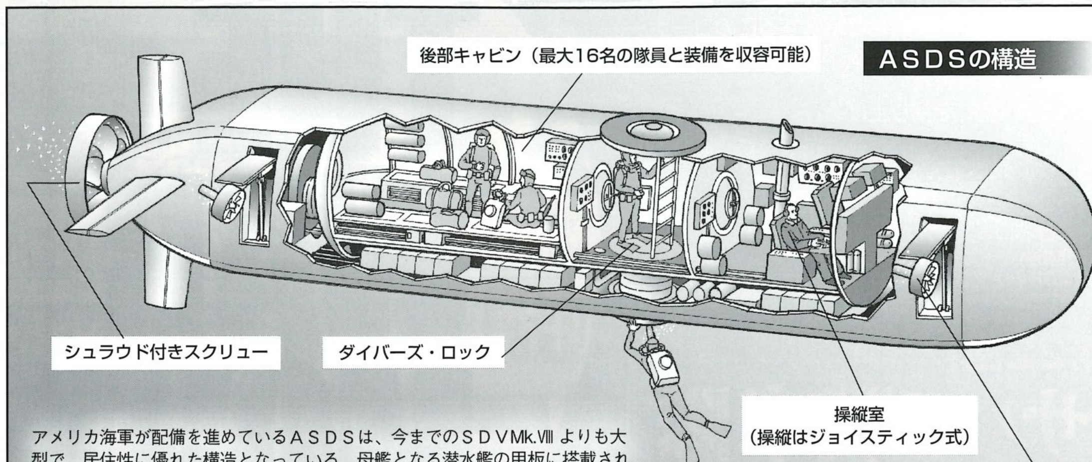
このMk.Ⅷの後継として開発が進められているのがASDS（Advanced SEALS Delivery System：発展的潜水員輸送システム）で、ロサンゼルス級攻撃型潜水艦やオハイオ級戦略潜水艦、最新鋭のヴァージニア級などの原子力潜水艦に搭載して運用される。従来のSDVとは異なり操縦士や輸送員を船体内部に収容するドライ式で、北海のような冷たい海でも、隊員は目的地まで海水に晒されずにすむため、体力の消耗を防ぐことができる。当然ながらASDSの船体はSDVMk.Ⅷに較べて大型化し、小型潜水艦ともいえる構造になった。

ASDSの巡航速度は約八ノット、航続距離は約二〇〇キロ。船体が大きくなった分、ペイロードも増大して一六名のSEALS隊員とその装備を運ぶことができる。また操縦は操縦士と副操縦士（兼航法士）の二名で行う。各タンクへの注排水、潜行中のトリムや姿勢制御、操舵に関しては、人間の操作が舵やスラスターなどに直接伝達されるわけではなく、人間の操作に対しコンピューターが判断して適度な操作量を伝達する仕組みである。また各装置をコンピューターがモニターし、稼働状況や異常を操縦士に伝達したりするなど、これまでのSDVとは異なり、高度にコンピューター化されている。このため、目的地の位置座標や深度をコンピューターに入力すれば、自動操縦も可能である。

操縦士には、潜水艦士官（潜水艦学校を卒業して潜水艦資格章を有する将校）、副操縦士にはSEALSの小隊指揮官を務める士官（潜水艦の搭乗経験の豊富な将校）が充てられている。操縦士と副操縦士ともにASDSの操縦訓練を行い、操縦資格を取得するが、さらに操縦士は五週間、海軍の潜水学校で訓練を行ってダイバーの資格を取得しなければならない。これは、通常の潜水艦と違い、艦の運用目的がSEALS隊員を目的地まで輸送し、潜行中の船体からダイバーズ・ロックを使って隊員を発進させたり回収することにあるため、操縦士にダイバーの経験と知識が必要とされるからである。ASDSは二〇〇三年の終わり頃から作戦運用試験が始まっており、実戦配備となる日も近いと思われる。

SDVのような潜水隊員を輸送する小型潜行艇は、アメリカ海軍だけでなく、フランスやイタリア海軍でも運用されており、海軍系特殊部隊員の輸送などに使われている。また潜水装置や関連装備を開発・販売する企業も小型潜行艇の開発には積極的で、多数の商品が発表されている。

ASDSの構造



アメリカ海軍が配備を進めているASDSは、今までのSDVMk.Ⅷ よりも大型で、居住性に優れた構造となっている。母艦となる潜水艦の甲板に搭載されて作戦海域に向かい、母艦から隊員がASDSに乗り移って行動を開始する。このため、隊員への負担が軽減されている。

*ドライスーツ＝ウェットスーツは直接肌に密着した一重構造で、水にはいると体も濡れるが、ドライスーツの場合は二重構造となっているので、体を乾いた状態（ドライ）に保つことができる。保温性はウェットスーツよりも高く、流氷の水中撮影など、極寒の潜水ではドライスーツが主に使われる。

《豪華3大付録》

1 【復刻】昭和38年製・全国特急路線図
2 高度3万7千M俯瞰・CGレールマップ
3 鉄道施設図解ブック〈スイッチバック編〉





オールカラー 84ページ／予価980円〈税込〉

2005年
11月18日(土)
発売！



第1巻 スーパー白鳥・白鳥



■総力ルポ
八戸⇒函館256.4キロを大追跡！
「スーパー白鳥」
全走行ルートパーフェクトガイド

■完全データ
国鉄時代[キハ80系]からJR時代[789系]まで
「白鳥」「スーパー白鳥」歴代車両総覧

特急途中下車 JR大湊線の旅
宮脇俊三・発掘エッセイ—ほか充実の特急企画満載！

●シリーズ第1期 以下続刊！

第2巻	こだま	2005年12月17日発売予定
第3巻	かもめ	2006年 1月18日発売予定
第4巻	ワイドビューしなの	2月18日発売予定
第5巻	スーパービュー踊り子	3月18日発売予定

(刊行内容は若干変更になる場合があります)

Gakken

映画好きの編集者がリレー形式で
戦争を題材とした映画をご紹介するこのコーナー。
今回は北アフリカにおける1両の戦車の戦いを描いた
「喉が渇く」戦争映画
『サハラ戦車隊』を採り上げる。

監督：ゾルタン・コルダ
出演：ハンフリー・ボガード
　　　ブルース・ベネット
　　　ロイド・ブリッジス
DVD発売中
販売：GPミュージアムソフト

THE WAR MOVIE

【第22回】『サハラ戦車隊』

(1943年・アメリカ)

戦争映画は、大きく二つに分けられると筆者は考えている。一つは『史上最大の作戦』や『遠すぎた橋』、『バルジ大作戦』のような、一つの歴史的大作戦を扱った「スペクタクル」型。そしてもう一つが、『戦争のはらわた』やドイツ映画の『橋』などに代表される、少数の兵士や部隊を扱った「局面」型だ。これはかなり乱暴な分類だとは思うが、今回紹介する『サハラ戦車隊』は、後者の「局面型戦争映画」といえる。

一九四二年六月、ドイツ軍がトブルクを占領して今まさにエル・アラメインの戦いが始まろうとしている頃、北アフリカに派遣されていた米陸軍の小規模なM3戦車部隊の生き残った一両が、はぐれた本隊との合流を目指し、行進を始める。途中、英軍衛生部隊（自由フランス軍のフランス兵含む）の生存者、英連邦のスーダン兵、イタリア軍やドイツ空軍の捕虜も収容して、いつの間にか十数名に膨れ上がり、極度の水不足に陥った。彼らは、砂漠の廃墟で井戸を発見、一息つくが、そこには同じく水不足に苦しんでいたドイツ一個大隊も向かっていた……。

戦争映画というと、男の義務だの、使命感や友情だのが戦う理由になりやすい。まあ、この映画も、ドイツ軍が接近していると知った時に、さっさと逃げればいいものを、主人公のガン軍曹が、敵を足止めして兵士の義務を果たそう、などと言うし、エンディングも「彼らは勇敢に戦った」的な終わり方をしている。

しかし、本質的には砂漠における水の争奪戦である。まるで、映画『マッドマックス』かマンガ『北斗の拳』のような設定だが、ちょっと考えてみると、実際、一時期でも本隊からはぐれてしまった当時のドイツ軍や英軍の小部隊などは、本当にこんなもんだったんじゃないだろうか？もちろん、敵との遭遇に注意しつつ、兵士として行動しただろうが、本隊と合流しようと必死に移動している兵士の頭の中は「水っ！」しかなかったに違いない。



愛車「ルルベル」の前で話し合うガン軍曹（中央）と部下。ちなみにこの時期、実際に米軍の小規模部隊が、英軍にM3戦車の使い方を教える目的で北アフリカに派遣されていた、という話もあるが、定かではない。
写真協力：「財団法人 川喜多記念映画文化財団」

武器や弾薬の補給以外にも、兵士にとって水や食糧は不可欠だ。これが北アフリカという環境ではいわずもがなである。作中、半ば枯れている井戸の滴を、長時間かけてため込むシーンや、やっと溜まったカップ一杯の水をガン軍曹が「一人、三口までだ」といってみんなで回し飲みするシーン、後半、水がなくなってボロボロになりながらも攻撃するドイツ軍などを見ると、兵士として戦っているだけでなく、生存のための闘争のようにも見えてくる。そういう意味で、『サハラ戦車隊』は「喉の渇く戦争映画」、ひいては少数の兵士の現状に焦点を当てた戦争映画と言えるだろう。

あと、この映画の製作年にご注目。実際の公開は一九五一年だが、製作は一九四三年。そう、作中の設定の一年後の製作なのだ。だから、出てくるM３戦車は本物である。よく宣伝で言われる「本物の戦車が撮影に用いられた！」というレベルではなく、当時の米軍のホンモノのM３なのだ。さらに、ドイツ軍が卑怯者に描かれているが、これも製作時期を考えればさもありなん。逆に、当時の日本の鼻につく戦意高揚映画なんぞと比べると、娯楽性は高い。『サハラ戦車隊』は一九九五年に『デザート・ストーム／新サハラ戦車隊（未公開）』としてリメイクされ、これもビデオなどで発売されているようなので、旧作と新作を見比べてみて、時代の価値観の相違を考えてみるのも一興だろう。

（バイオ大森）

書店にて絶賛発売中!!

定価1631～2100円（5%税込）

第24巻 局地戦闘機 紫電改
海軍航空の終焉を飾った傑作機の生涯


第25巻 陸軍機甲部隊
激動の時代を駆け抜けた日本戦車興亡史


第26巻 伊勢型戦艦
航空打撃力を有する世界で唯一の航空戦艦

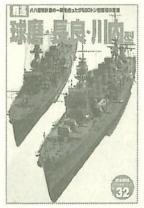

第27巻 妙高型重巡
欧米列強を刮目させた条約型巡洋艦の奮闘


第28巻 日VS.米 徹底分析 陸海軍基地
太平洋をめぐる拠点争奪戦と戦略・戦術のすべて


第29巻 局地戦闘機 雷電
本土防衛の重責を担った高速強武装迎撃機の魁


第30巻 扶桑型戦艦
帝国海軍初の超弩級艦『扶桑』『山城』、その誕生と最期


第31巻 陸海軍試作戦闘機
烈風、震電、キ八三、キ九四……幻のつばさ①


第32巻 軽巡 球磨・長良・川内型
八八艦隊計画の一翼を担った5500トン型軽巡の変遷


第33巻 零式艦上戦闘機2
最新の考証とCGで現出する不朽の名機の雄姿


第34巻 帝国陸軍 戦車と砲戦車
欧米に比肩する日本の対戦車戦闘車両の全容


第35巻 甲標的と蛟龍
知られざる帝国海軍特殊潜航艇秘史①


第36巻 海龍と回天
知られざる帝国海軍特殊潜航艇秘史②


第37巻 帝国陸海軍 補助艦艇
総力戦に必要とされた支援艦艇群の全貌


【歴史群像】太平洋戦史シリーズ

第38巻 最上型重巡
軽巡から重巡へと変遷を遂げた傑作艦の足跡


第39巻 帝国陸軍 戦場の衣食住
糧食を軸に解き明かす〝知られざる陸軍〟の全貌


第40巻 烈風と烈風改
新資料を基に今明かされる『烈風伝説』の実像


第41巻 世界の戦艦
砲力と装甲の優越で艦隊決戦に君臨したバトルシップ発達史


第42巻 帝国海軍 一式陸攻
双発機の概念を凌駕した中型陸上攻撃機の真実


第43巻 松型駆逐艦
簡易設計ながら生存性に秀でた戦時急造艦の奮戦


第44巻 重巡 古鷹・青葉型
斬新な設計と重兵装で列強海軍を驚嘆させた優秀艦の軌跡


第45巻 帝国海軍 真実の艦艇史
未発表写真と綿密な考証で明かされる秘められた新事実の数々


第46巻 四式戦闘機 疾風
大戦末期にベールを脱いだ陸軍航空隊の最終兵器


第47巻 利根型重巡
帝国海軍重巡の掉尾を飾った画期的設計の航空巡洋艦


第48巻 日本軍艦発達史
海戦術と兵装の進化に寄与した帝国海軍栄光の足跡


第49巻 沖縄決戦
太平洋戦争最後の激戦と沖縄県民の戦い


第50巻 戦艦「大和」
空前のクオリティーで再現！精密3DCG「大和」大特集


第51巻 帝国海軍 真実の艦艇史2
史料の精査と傍証の積み重ねで解き明かす定説の真偽と知られざる逸話の実相


Vol.15「長門型戦艦」、Vol.16「高雄型重巡」、Vol.17「伊号潜水艦」、Vol.18「特型駆逐艦」、Vol.19「陽炎型駆逐艦」、Vol.20「大和型戦艦2」、Vol.21「金剛型戦艦」、Vol.23「秋月型駆逐艦」は品切れです。

Modern Warfare MW 歴史群像シリーズ **新・現代戦史!** 定価:各1995円



[図説] 中東戦争全史
The Arab-Israeli Wars 1948～

パレスチナの地を巡るアラブ=ユダヤ激闘の軌跡

[図説] 湾岸戦争
The Persian Gulf War 1990-91

多国籍軍vs.イラク軍!! ペルシャ湾岸の砦(クウェート)を巡る210日間の攻防





[図説] 最新 アメリカ軍のすべて
U.S.FORCES ILLUSTRATED

陸・海・空軍・海兵隊の素顔と四軍統合戦闘システムの実像

組織/ドクトリン/歴史/兵器を網羅した「米軍入門書」の決定版!!

[図説] 最新 世界の特殊部隊
SPECIAL OPERATIONS FORCES OF THE WORLD

非正規戦、対テロ任務、破壊工作、情報収集……。
軍・警察エリートたちの任務、装備、そして現在を徹底詳解!!



Modern Warfare MW

[図説] 世界の銃 パーフェクトバイブル
The Perfect Bible of World's Guns

銃の歴史・分類・メカニズムを徹底詳解!!

【カラー特大企画】ドイツの老舗銃器メーカー
ザウアー&ゾーン社の銃の製造現場を徹底紹介!!
拳銃とライフルの設計、部品加工から組み立て、試射まで!!

【特別付録】**①一目でわかる「銃と弾薬の発達年表」**
②世界の銃器メーカーカタログ



【徹底講座】銃と弾薬の歴史とメカニズム
【カラー徹底図解】まずは知っておきたい銃の種類と特徴/世界の名銃セレクション～拳銃からマシンガン、珍銃まで!! 編集部が厳選した名銃ベスト69を一挙掲載!!
【カラー特別企画】近未来銃～進化する銃の行方/ボディー・アーマー発達史/カラシニコフの真実/徹底取材・陸上自衛隊土浦駐屯地武器資料館
ほか充実企画満載!!

B5判/182頁/定価2100円(税込)

Modern Warfare MW 学研[歴史群像]シリーズ **《絶賛発売中!!》** B5判/定価:各2100円(税込)

[図説] ドイツ戦車パーフェクトバイブル I

第一次大戦型からチェコ製戦車、I～IV号戦車までを大図解!!

●カラー特大企画 **第二次大戦型[現存]ドイツ戦車探訪記** ムンスター、コブレンツ、ソミュール、ボーヴィントン……今も生きるドイツ戦車を徹底詳解!!/**[図説]ドイツ戦車の基本の「き」** ドイツ軍の戦闘車両の種類と役割、ネーミングの法則、塗装とマーキングの変遷をわかりやすく解説!! ●3大徹底図説 **ドイツ戦車のテクノロジー** 人員・機器の車内配置から駆動系、操向系まで!! その技術の詳細に迫る!!/**ドイツ戦車の内部はどうなっているのか** 超詳細イラストで見るIV号戦車G型の砲塔と戦闘室の内部/**ドイツ戦車はこうして造られる** 開発要求から設計、モックアップ製作、部品生産から組み立て、納品まで!! ●特大付録 **ドイツ戦車[詳細]発達チャート** ●【系列別徹底ガイド】第一次大戦型、両大戦間期型からI～IV号戦車までの発達史 ●【軍装】ドイツ戦車兵の軍装 WWI～現代 ●【検証】ドイツの工業技術力と戦車生産現場の実像/戦車の側から見たドイツ軍の機甲戦術 **ほか充実企画満載!!**





[図説] ドイツ戦車パーフェクトバイブル II

V号戦車パンター、VI号戦車ティーガーからレオパルト1、2までを大図解!!

●カラー特大企画 知られざるドイツ装甲部隊指揮官の教育機関 **ムンスター機甲学校徹底取材**
●カラー特別企画 史上最強の主力戦車**[徹底解剖]レオパルト2A6** ●徹底検証 **ドイツ戦車系列別徹底ガイド** V号戦車パンター系列/VI号戦車E型ティーガーI系列/VI号戦車B型ティーガーII系列/その他の戦車/レオパルト1、2系列 ●2色図説 ティーガーIの運用マニュアル「ティーガーフィーベル」を読む/シミュレーションで理解する[イラスト図解]ドイツ装甲部隊の戦術/米英ソ連軍はドイツ装甲部隊といかに戦ったか[図説]連合軍の戦車運用理論と対戦車戦術 ●技術解説 ドイツ戦車のテクノロジー(Part2)戦車砲/砲塔/装甲/サスペンションほか ●検証 ①汎用主力戦車はいかに生まれたか/②グデーリアンの知られざる素顔 ●特別付録 **ドイツ戦車[詳細]発達チャート**
ほか充実企画満載!!

【歴史群像】W.W.II 欧州戦史シリーズ
WWII GREAT BATTLES OF EUROPE

待望の[第2次世界大戦]ヨーロッパ戦線の新シリーズ続々刊行!!

絶賛発売中!!
●B5判/174～190ページ/定価:各1680～1890円(税込)

Vol.1 ポーランド電撃戦
「中欧の大国」わずか四週間で消滅! 「電撃戦」と「Z国防計画」を徹底分析!

Vol.2 西方電撃戦
英仏連合軍を壊滅させた本格的[電撃戦]の精髄を抽出分析!!

Vol.3 英独航空決戦
英本土上陸作戦の実相と史上最大の航空戦を徹底詳解!

Vol.4 バルバロッサ作戦
ヒトラーvs.スターリン 2500kmにわたる戦線で独ソ両軍大激突!!

Vol.5 北アフリカ戦線
英軍物量作戦を翻弄したロンメルの一翼包囲・迂回戦術を徹底図解!

Vol.6 大西洋戦争
ヴォルフ・パックvs.ハンター・キラー 連合軍シーレーンを巡る兵器システムの激突

Vol.7 クルスク機甲戦
東部戦線に咆哮する鋼鉄の猛獣たち!! 赤軍大反攻とマンシュタインの機動防御

Vol.8 ノルマンディー上陸作戦
「大西洋の壁」を打ち砕いた史上最大の統連合上陸作戦

Vol.9 アルデンヌ攻勢
ヒトラー最後の大攻勢「ラインの護り」作戦の実相に迫る!

Vol.10 ベルリン攻防戦
独軍最後の電撃戦「春の目覚め」作戦と帝都ベルリンを巡る死闘を徹底図解!

Vol.11 ドイツ装甲部隊全史I 黎明編(1917～39)
A7V突撃装甲車両からチェコ製35(t)、38(t)戦車まで



Vol.12 ドイツ装甲部隊全史II 攻勢編(1939～43)
III、IV号戦車からティーガーI重戦車まで



Vol.13 ドイツ装甲部隊全史III 衰亡編(1943～45)
V号戦車パンターからヤークトティーガー、マウスまで



Vol.14 ソヴィエト赤軍興亡史I 革命・国内戦争編(1917～36)
「縦深戦略理論」と「先進的兵器群」!! 30年代「世界最強の軍隊」の実像とは!?



Vol.15 ソヴィエト赤軍興亡史II 「大祖国戦争」前編(1936～43)
スターリンの欧州・極東戦略と赤軍「組織・戦術・兵器」の変貌を図解!!



Vol.16 ソヴィエト赤軍興亡史III 「大祖国戦争」後編(1943～45)
ジューコフの大反攻作戦と戦後「ソ連軍」の実相に迫る!!



Vol.17 武装SS全史I 萌芽・台頭編(1933～42)
武装親衛隊のルーツと「政治的兵士」たちの実像



Vol.18 武装SS全史II 膨張・壊滅編(1942～45)
最大八〇万の将兵を擁したナチス親衛隊最強の組織の全貌



Vol.19 ドイツ本土防空戦 英米爆撃機集団vs.独防空システム
「第三帝国」上空で繰り広げられた史上空前の航空戦の実像



Vol.20 ドイツ陸軍全史 カイザーの軍隊、共和国の軍隊からヒトラーの軍隊へ
「最強の軍隊」八〇年の歴史とその機構・実力・多様性



Vol.21 アメリカ陸軍全史 誕生からWWIIまで!! 「星条旗の陸軍」一七〇年の軌跡を詳解
参戦数年で枢軸国軍を凌駕した「世界最強の軍隊」の全貌



Vol.22 ヨーロッパ空挺作戦 「空飛ぶ歩兵」の八〇年の軌跡とその作戦・戦術・装備
「緑の悪魔」「赤い悪魔」「バッタの戦士」……主要国の空挺部隊の素顔に迫る!!



Vol.23 [図説] Uボート戦全史 「灰色狼」の先進的メカニズムとその作戦・戦術を徹底詳解!!
一九世紀半ばの「燃料潜航艇」からVII型、XXI型、そして現代のUボートまで!!



Vol.24 [図説] スターリングラード攻防戦 「青」作戦の発動から独第六軍の壊滅まで!! 独ソ両軍の戦略・戦術を大図解
ヴォルガ河畔の一大工業都市をめぐる「史上最大の市街戦」を徹底詳解!!



[歴史群像]WWII欧州戦史シリーズ 特別編集
オールカラー保存版!! 戦史ファン必携の1冊!!
●B5判/定価:2100円

【決定版】[図説] ヨーロッパ地上戦大全
欧州戦線の帰趨を決した55の戦いを完全網羅!!



【決定版】[図説] ヨーロッパ航空戦大全
38の航空戦と13か国の主力機を完全網羅!!



歴史群像新書の最新刊

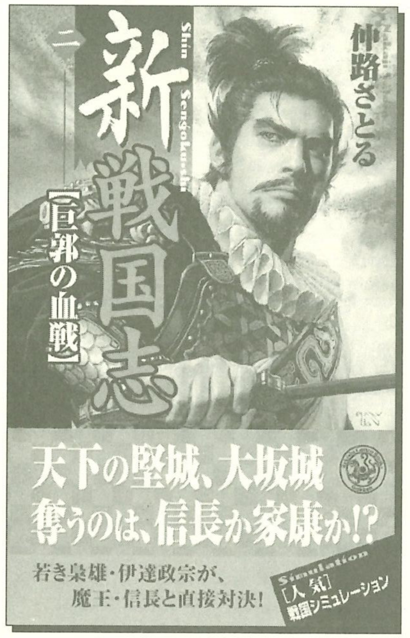
絶賛発売中!!

定価893円(5%税込)

新 戦国志②

―巨郭の血戦―

仲路さとる



天下の堅城、大坂城――
奪うのは、信長か家康か!?

徳川家康謀叛の報を受けた織田信長は、朝鮮から軍勢を全面撤退させて日本へ返した。しかしそこにも、家康の仕掛けた周到な罠が張り巡らされていた。一方、伊達政宗・最上義光・柴田勝家らに近江を調略させた家康は、大坂城に挑んでいた。そこへ信長が到着、戦いは混戦の様相を呈し、伊達政宗と信長の軍勢が直接退陣する！果たして勝敗の行方は？

続 関ヶ原②

―大坂城動く―

村田昌士



古の都に仕掛けられた
徳川5万5000の
消滅策とは!?

関ヶ原合戦から8日後、再挙兵した石田三成が東軍に勝利すると、西軍総大将・毛利輝元も遂に腹を括り、大坂城の西軍は初めて一つに纏まったかに見えた。一方、敗戦に動揺する徳川家康は再起に向け胎動、そこへ西軍2万5000の南都進軍と、秀頼大坂出陣の噂が――。それはこの戦をただ一人短期戦ととらえる稀代の謀将・真田昌幸の策の始まりだった!!

真・大日本帝国軍 陸海統合の嵐

米濠連絡線を遮断せよ ③

羅門祐人



日本帝国はハワイへの補給路防衛のため、連合軍の出撃基地であるクリスマス島、パルミラ島攻撃と航路攪乱に従事するドールマン艦隊の撃滅に戦艦、護衛空母を中心とした艦隊を出撃させた。しかし索敵に向かった一式飛行艇が発見したのは、正規空母4隻を含んだハルゼー司令官率いる大艦隊であった。かくして南洋上で双方の空母を狙う死闘が始まった！

異戦 関ヶ原 ⑦

戦国挽歌 完結

得意の野戦を仕掛ける徳川家康に、石田三成が畢生の勝負を挑む！

中里融司

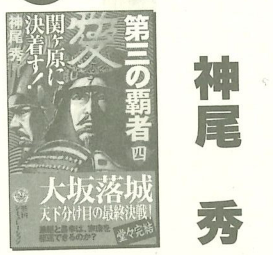


第三の覇者 ④

関ヶ原に決着す！ 完結

大坂城落城！
直江兼続vs.徳川家康、
天下分け目の最終決戦！

神尾秀



興国の楯 通商護衛機動艦隊

必中！「愛国」超兵器作戦

通商機動部隊の輸送作戦でラビに持ち込まれた秘密兵器「愛国」の威力とは？

林譲治



燎原の覇者 ①

唐入りの罠

朝鮮出兵に仕組まれた策略――
新たな戦雲うずまく
日の本を制するのは果たして？

尾山晴紀

新シリーズ



歴史群像新書 既刊のご案内

定価：798〜966円（5%税込）

Rekishi Gunzo Books Gakken

本格近未来シミュレーション

タイトル	巻数	著者
200X年 日本中東戦争 NEW	全3巻	森 詠
日本世界大戦	全4巻	森 詠
新日本中国戦争	全17巻	森 詠

大戦シミュレーション&アクション

タイトル	巻数	著者
史上最強の艦隊 NEW		原 俊雄
鋼鉄の雷鳴		奈良谷 隆
興国の楯 ソロモン機動作戦		林 譲治
興国の楯 南海死闘編		林 譲治
興国の楯		林 譲治
帝都原爆投下作戦		渡辺龍二
旭日の鉄騎兵 満蒙に吼ゆ！		陰山琢磨
旭日の鉄騎兵西へ		陰山琢磨
旭日の鉄騎兵		陰山琢磨
鶴翼の楯	1〜4	橋本 純
天空の要塞	1〜3	田中光二
超空の連合艦隊	全4巻	田中光二
超空の叛撃	全3巻	田中光二

大戦シミュレーション&アクション

タイトル	巻数	著者
異形特務空母〈那由多〉		吉田親司
帝国の聖戦	全5巻	吉田親司
荒鷲の大戦	全5巻	中里融司
無双の艦隊	全3巻	原田 治
異・太平洋戦史 日米開戦せず!!	全5巻	子竜 螢
不沈戦艦 紀伊	全16巻	子竜 螢
旭日の戦旗	全8巻	安芸一穂
旭日旗、征く！	全12巻	安芸一穂
ザ・ビッグバトル 超空の魔剣		中岡潤一郎
超超弩級戦艦土佐	全3巻	中岡潤一郎
夢幻の艦隊	全5巻	檀 良彦
黎明の艦隊	全21巻 + The Final Mission	檀 良彦
超弩級空母大和	全8巻	奥田誠治 三木原慧一
陸海統合の嵐 真・大日本帝国軍 NEW	1〜3	羅門祐人
巨艦伝説	全6巻	羅門祐人
敬天布武	全4巻	羅門祐人

大戦シミュレーション&アクション

タイトル	巻数	著者
帝国の決断 死闘篇	1〜2	秋月達郎

戦国シミュレーション

タイトル	巻数	著者
覆 関ヶ原		小泉俊一郎
野望 —隻眼がみる刻—	上・下	子竜 螢
梅鉢軍記 前田風雲録	全5巻	子竜 螢
天正三国志	1〜3	安芸一穂
戦国維新 島津東征伝	1〜2	荒川佳夫
覇 関ヶ原大戦記	1〜2	青木基行
反 大坂の陣 NEW	全4巻	吉本健二
眩 関ヶ原	全5巻	吉本健二
信長帝王伝	1〜2	桐野作人
異戦 関ヶ原 NEW	全7巻	中里融司
戦国武陣侠	全5巻	中里融司
戦国覇王伝	全10巻	中里融司
真田異戦記	全5巻	村田昌士
新 天下布武	全4巻	坂上天陽
戦国の覇者	全5巻	坂上天陽
第三の覇者 NEW	全4巻	神尾 秀
覇道 武田戦記	全3巻	神尾 秀

戦国シミュレーション

タイトル	巻数	著者
信長海王伝	全3巻	秋月達郎
異説 太閤記	1〜2	久住隈苅
関ヶ原燃ゆ！	全6巻	久住隈苅
覇 真田戦記	1	神宮寺 元
戦国群雄伝	全6巻	神宮寺 元
天下大乱	全4巻	津野田幸作
戦国大乱 NEW	1〜16	津野田幸作
天下三兵法		宇佐美浩然
信長 覇海〜猛き波濤	1	橋本 純
乱世幻記	全4巻	仲路さとる
織田大戦記	1〜9	竹中 亮
真田大戦記	全10巻	竹中 亮
秘 独眼龍軍記 NEW	1〜3	工藤章興
覇 風林火山	全10巻	工藤章興
新 真田軍記	全7巻	工藤章興
戦国風雲伝	全4巻	林 律雄

中国史シミュレーション

タイトル	巻数	著者
叛 三国志	全4巻	仲路さとる
異 三国志	全6巻	仲路さとる

RGC 歴史群像コミックス 最新刊絶賛発売中!!

—各A5判・定価1000円（5%税込）

最新刊!!

一味異なる東部戦線を舞台の一品!!

狼の砲声 限定版

作／小林源文

苛酷な東部戦線。独軍戦車猟兵ハーゲンとソ連軍戦車兵ゴロドクとの、終戦までの4年間に渡る執念の戦いを描く。「ウサギの黒騎士」16頁新作描き下ろし他、数作品同時収録。小林源文コレクション第6弾。



11月28日発売予定

戦国時代最後の大戦の真相とは…!?

大坂冬の陣

原作／吉本健二
画／田中哲雄

関ヶ原の戦から14年。家康は、従属せぬ豊臣家潰しを決意。主家の面子を示すべく開戦に踏み切る豊臣家の下、誇りを賭けた牢人将真田幸村や後藤又兵衛を中心に、戦いに揺れる東西の忠臣達の姿を史実に基づき描く！



南太平洋決戦の勝者は日本側…!?

新・黎明の艦隊 ⑪

原作／檀 良彦
画／細井雄二

日米空母部隊の激突は、大西、ハルゼー両指揮官が陣頭で倒れるという死闘であった。感傷に浸る間はない。その夜の闇が明けぬ未明、南海機動艦隊はガダルカナル泊地の米キンケード艦隊と護送船団に奇襲をかける！



12月21日発売予定

追悼 戦記コミックの巨星・居村眞二

怒濤 戦艦大和

原作／橋本 純ほか
画／居村眞二

沖縄特攻〝菊水〟作戦発動！ 戦艦「大和」最後の戦いの行方は、果たして——!? 戦記コミックの最前線で戦い抜いた巨星・居村眞二、逝く……。遺作となった幻のイラストも収録した、珠玉の近現代戦記短編集！



タイトル	巻数	著者
炎の騎士 完全版		作／小林源文
カンプグルッペZbv 完全版		作／小林源文
第2次朝鮮戦争 —ユギオⅡ— 完結版		作／小林源文
東亜総統特務隊 新装版		作／小林源文
タイフーン作戦		作／小林源文
ブラウ作戦		作／小林源文
ツイタデル作戦		作／小林源文
超空の決戦	1〜2	原作／田中光二 作画／渡辺あきら
超空の艦隊	全4巻	原作／田中光二 作画／木村 孝
不沈戦艦 紀伊	1〜7	原作／子竜 螢 作画／神矢みのる
新・黎明の艦隊	1〜10	原作／檀 良彦 作画／細井雄二
黎明の艦隊	全10巻	原作／檀 良彦 作画／細井雄二
超弩級空母大和	全8巻	原作／奥田誠治 三木原慧一 作画／井上大助
戦艦大和の挽歌		作／上田 信
灼撃のレイテ		作／上田 信
波濤 戦艦武蔵		作／居村眞二
ベルリン最終攻防戦 WWⅡ実録ドイツ軍戦記		作・画／小林源文・近藤和久・たがみよしひさ 他
破 三国志	1	原作／桐野作人 作画／井上大助
異 戦国志	全5巻	原作／仲路さとる 作画／狩那 匠

歴史群像シリーズ
幕末維新がよく分かる厳選のラインナップ！ 既刊10冊、大好評発売中！！

歴史群像シリーズ73
幕末大全〈上巻〉
黒船来航と尊攘の嵐



ペリー来航で騒乱の波が押し寄せる。うねりは桜田門で井伊を飲み込み、憂国の士を奮い立たせた――。黒船来航から第一次長州征伐まで幕末の動乱を描ききる!!

B5判・220ページ／定価：1890円（5%税込）

歴史群像シリーズ74
幕末大全〈下巻〉
維新回天と戊辰戦争



長州は宿敵の薩摩と手を結ぶ。巨頭連合の前に幕府は崩壊し、新政府が産声を上げたのだが――。長州復活から戊辰、西南戦争まで明治維新を完全攻略!!

B5判・220ページ／定価：1890円（5%税込）

歴史群像シリーズ31
血誠 新撰組
峻烈壬生浪士の忠と斬



鉄の掟と血の粛清をもって幕末を震撼させた最強の剣客集団。その中で誠忠に生きた男たちの怒濤の2200日を追う!!

B5判・188ページ／定価：1223円（5%税込）

歴史群像シリーズ72
新選組隊士伝
蒼き群狼、その生と死の断章



終焉を迎えつつある幕府を支えるべく「誠」の旗の下に戦った蒼き狼達。彼らの思いを、生きる姿を、そして死にゆく様を鮮やかに描き出す!!

B5判・196ページ／定価：1365円（5%税込）

歴史群像シリーズ58
土方歳三
熱情の士道、冷徹の剣



動乱の幕末期にあってひたすら己の道を突き進み新時代に膝を屈することなく戦い続けた闘鬼の生涯!!

B5判・192ページ／定価：1365円（5%税込）

歴史群像シリーズ56
幕末剣心伝
青き志と赤き血潮の肖像



風雲急を告げる時代に湧き立つ憂国の情熱とやまざる激情！剣に志を立て、剣に命を託した男達の生き様を追う!!

B5判・192ページ／定価：1365円（5%税込）

歴史群像シリーズ23
坂本龍馬
歴史の波濤に挑んだ青春



激動の嵐吹き荒れる時代を稀代の独創力と行動力で疾駆し、日本に「夜明け」をもたらした風雲児の生涯を徹底追跡!!

B5判・204ページ／定価：1223円（5%税込）

歴史群像シリーズ46
高杉晋作
幕末長州と松下村塾の俊英



"動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し"西国・長州に突如出現した稀代の革命児29年の軌跡！

B5判・180ページ／定価：1223円（5%税込）

歴史群像シリーズ39
会津戦争
痛憤　白虎隊と河井継之助



綿々と語り継がれる会津の悲哀と長岡の痛憤。それぞれの特色と連関性を総合的に解く北国戊辰役のすべて！

B5判・180ページ／定価：1223円（5%税込）

歴史群像シリーズ21
西南戦争
最強薩摩軍団崩壊の軌跡

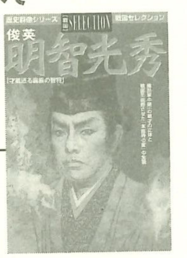


なぜ薩摩と政府は戦わねばならなかったのか――維新の大業を成し遂げながらも散った"敬天愛人"大西郷の最後の戦い!!

B5判・204ページ／定価：1223円（5%税込）

歴史群像シリーズ【戦国】セレクション
歴史群像シリーズがおくる戦国史の決定版！　充実のラインナップで絶賛発売中！

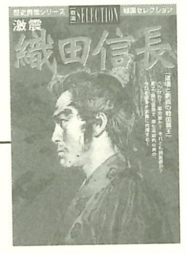
織田政権の中枢を担った穎才のすべて
俊英 明智光秀
才気迸る霹靂の智将



新参者でありながら信長より全幅の信頼を得た穎才の正体と、戦国を震撼させた最大の謎「本能寺の変」の真相に迫る！

B5判・188ページ／定価：1680円（5%税込）

戦国の六道を駆け抜けた覇王のすべて
激震 織田信長
破壊と創造の戦国覇王



うつけか？　革命家か？　独裁者か――？日本史上、もっとも過激で危険で革新的な男のいまなお謎多き実像に肉薄する！

B5判・228ページ／定価：1680円（5%税込）

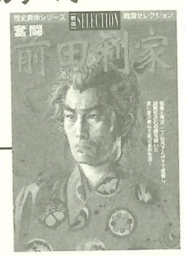
天下統一を成し遂げた"異能者"のすべて
驀進 豊臣秀吉
日本一の出世人



出自も定かならぬ小者から信長の後継者へ、そして太閤へと成り上がった天下人のすべてを解剖する！

B5判・204ページ／定価：1680円（5%税込）

戦乱の時代を律儀に生きた武辺者のすべて
奮闘 前田利家
百万石の槍働き



半世紀にわたって織田・豊臣政権を支え続け、加賀百万石の礎を築いた、世に並ぶ者なき武辺者の生涯に迫る！

B5判・196ページ／定価：1680円（5%税込）

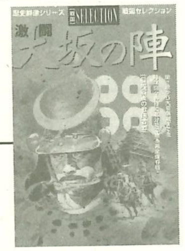
1600年、天下分け目の大合戦のすべて
決戦 関ヶ原
戦国のもっとも長い日



太閤秀吉の死去に始まる天下を二分した争乱の真実。関ヶ原決戦から各地の合戦、謎・裏面史・異説まで完全検証！

B5判・228ページ／定価：1680円（5%税込）

家康、豊家討滅への政戦略のすべて
激闘 大坂の陣
最大最後の戦国合戦



戦国総決算に向け、徳川完全支配の布石が次々と打たれる――最終勝利者・家康の深慮遠謀、最後の15年の全軌跡！

B5判・196ページ／定価：1680円（5%税込）

日本一と謳われた最強武将のすべて
奮迅 真田幸村
戦国でもっとも強い漢



「日本一の兵」と称された真田幸村のすべてと、父・昌幸、兄・信之をはじめとする真田一党の真実に迫る！

B5判・196ページ／定価：1680円（5%税込）

戦国最強の呼び声高き聖将のすべて
疾風 上杉謙信
破竹の懸り乱れ龍



軍神・毘沙門の化身を任じた義将の怒濤の戦歴と、景勝が継いだ武門上杉の闘魂の軌跡を追う！

B5判・204ページ／定価：1680円（5%税込）

乱世を生き抜いた"独眼竜"のすべて
風雲 伊達政宗
炯眼独眼竜の雄材大略



苛烈な戦国サバイバルをしたたかに生き抜いた"遅れてきた戦国武将"独眼竜政宗の、伸るか反るかの一代記！

B5判・196ページ／定価：1680円（5%税込）

戦国九州を席捲した精強軍団のすべて
裂帛 島津戦記
決死不退の薩摩魂



奇抜独特の戦術と比類無き勇猛さで、鬼島津と恐れられ、薩摩隼人と讃えられた侍魂の神髄を探る！

B5判・204ページ／定価：1680円（5%税込）



◆歴史群像シリーズ78

争覇春秋戦国

凋落する周に鼎の軽重を問う春秋の覇者。
秦の独走を阻むべく合従連衡を繰り返す戦国の七雄。
混沌とした時代は一方で孔子を筆頭に
先哲・諸子百家を生み落とす。
名君・賢相・雄将・哲人・説客・壮士・美女が織りなす
知られざる中国黎明期の魅力に迫る一冊!!

●主な内容

【カラー企画】《イラスト再現》合戦・城郭・宮廷・会盟・軍装・工房／遺構・遺物紹介
【折込付録】図説春秋戦国時代の変遷／フローチャート
【春秋時代】春秋略史／ドキュメント『春秋の五覇』・『晋の六卿』／傾国の系譜／春秋人物伝
【諸子百家】稷下の学／儒家／道家／法家／兵家／墨家／陰陽家
【戦国時代】戦国略史／ドキュメント『戦国の七雄』・『戦国の四君子』・『始皇帝の統一』／刺客の系譜／戦国人物伝
【春秋戦国徹底分析】戦国各国の世界観／兵制の変遷／万里の長城／鉄器の影響／商人の実相／漢字の起源と伝播／祭礼と墳墓／春秋戦国Q＆A／春秋戦国小説ガイド

絶賛発売中!!
B5判・180ページ／価格：1575円（5％税込）

◆歴史群像シリーズ80

日本天才列伝

科学立国ニッポンの立役者

日清・日露戦争の勝利の陰にも、乾電池や火薬を独自に開発した日本のテクノロジーの高さがあった。いまや世界中の人々にとって欠かせない血清療法、ビタミン、旨味成分を発見したのも、ファクシミリ、テレビ、アンテナを実用化したのも日本の天才なのである。彼らがいかに困難に打ち勝ち、独自の発想で世界に先駆けた偉業を成しとげたのか――科学立国ニッポンの底力を再確認できる珠玉の評伝集！

●主な内容

【カラー企画】カーボンナノチューブ・飯島澄男／国立科学博物館・科学技術館／アニメが描いた未来 科学が叶える今
【第1部】巨大な障壁に挑んだ日本の叡智
北里柴三郎／高峰讓吉／鈴木梅太郎／野口英世／下瀬雅允／外山亀太郎／木原均／今西錦司／大森房吉／木村栄／長岡半太郎／仁科芳雄／湯川秀樹
【第2部】独自の探究を極めた異色の賢人
屋井先蔵／二宮忠八／御木本幸吉／牧野富太郎／荻野久作／南方熊楠／西村真琴／石原純／寺田寅彦／中谷宇吉郎
【第3部】実用化で夢を叶えた応用の奇才
池田菊苗／八木秀次／高柳健次郎／丹羽保次郎／古賀逸策／加藤与五郎／水谷豊
【第4部】博士アラカルト　解剖・世界の科学賞／理化学研究所小史／女性科学者／真偽の淵を歩いた科学者たち／郷土に貢献した科学者・開発者／科学史年表



絶賛発売中!!
B5判・172ページ／価格：1575円（5％税込）

歴史群像シリーズ特別編集
歴史群像シリーズがオールカラーでおくる図説の決定版！

戦国武将がすぐ見られるビジュアル事典
【決定版】図説 戦国武将118
全国の戦国武将全118人の肖像・家紋・印章・花押・言葉・軍旗を完全網羅！　戦国を駆け抜けた武将たちのデータ大集合！

B5判・192ページ
定価：1995円（5％税込）

全国81名城オールガイド
【決定版】図説 日本名城集
五稜郭から首里城まで一度は行ってみたい城を集めに集めた一冊。居ながらにして日本の名城を旅できる！　縄張・城用語事典付き。

B5判・192ページ
定価：1995円（5％税込）

有名武将の名品から足軽胴まで戦国甲冑一挙掲載！
【決定版】図説 戦国甲冑集
有名武将の当世具足から変わり兜、足軽胴までを網羅した一冊。甲冑変遷史や各部の構造などの解説も充実した戦国甲冑本の決定版！

B5判・184ページ
定価：2205円（5％税込）

地図で読み解く戦国史!!
【決定版】図説 戦国地図帳
各地方に割拠した国人がわかる分国別国人マップをはじめ、有名武将の版図変遷図や合戦図など戦国基礎データが満載の一冊!!

B5判・160ページ
定価：2100円（5％税込）

変わり兜から隠れた名品まで甲冑ファン必携の決定版！
【決定版】図説 戦国甲冑集Ⅱ
オールカラー戦国甲冑本第二弾！　今度は兜を極める！　兜の変遷史から各部の構造・立物の種類を図解を交えて解説するほか、技術の粋を尽くした江戸甲冑も登場！

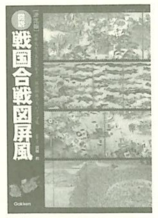
B5判・178ページ
定価：2205円（5％税込）

「倭は国のまほろば」から「堪へ難キヲ堪へ」までウンチク満載!!
【決定版】図説 名言で読む日本史人物伝
日本の歴史を彩った249の名言・名句を取り上げ、その言葉を残した人物や背景を紹介！　ヴィジュアル情報を満載した歴史ファン必携の人物・名言事典!!

B5判・208ページ
定価：1995円（5％税込）

干戈の響きが蘇るビジュアル戦国史
【決定版】図説 戦国合戦集
数々の戦場を復元して大好評を得てきた「歴史群像シリーズ」の復元イラストを一挙に集大成！　戦国合戦が見て楽しめる！

B5判・192ページ
定価：1995円（5％税込）

川中島から島原の乱まで徹底網羅の大パノラマ集
【決定版】図説 戦国合戦図屏風
開いて納得！　折り込み・観音開きを駆使した手法でかつてないワイド画面を実現。あの武将の名勝負が、歴史的な一戦が色鮮やかに甦る!!

B5判・192ページ
定価：2100円（5％税込）

幕末維新オールカラー人物データファイル！
【決定版】図説 幕末志士199
幕末ファン必携！　尊攘浪士・討幕志士から天皇・公家・新選組・文化人・女性など幕末人物199人を網羅したデータブック!!

B5判・208ページ
定価：1995円（5％税込）

これぞ決定版！　新選組史跡パーフェクトガイド!!
【決定版】図説 新選組史跡紀行
早春の多摩から厳寒の北海道まで、新選組の足跡を丹念に辿ったガイドブックがついに登場！　239カ所もの史跡が撮り下ろしオールカラー写真で色鮮やかに甦る!!

B5判・200ページ
定価：2100円（5％税込）

源平合戦オールカラー人物データファイル！
【決定版】図説 源平合戦人物伝
平氏、源氏の一族郎党から、それを取り巻く貴族、天皇、法皇、女性などを一挙に紹介！　貴族の世から武士の世へ、大転換を織りなす人物模様が浮き彫りになる一冊!!

B5判・192ページ
定価：1995円（5％税込）

既刊11冊、大好評発売中!!

エソテリカ別冊

【図説】皇室のすべて

世界最長を誇る日本の王室の全貌



女性天皇誕生か？

日本の「象徴」を徹底解剖し、平成皇室の「今」を知る！

【おもな内容】

- 巻頭カラー…**天皇の人生儀礼**●帝の生涯を彩る祭祀の世界を見る
- 第1章……**Q＆A・皇室大百科Ⅰ**●天皇家の基礎知識と皇室経済・公務の実際を総説
- 第2章……**天皇と皇族**●天皇・皇族の23人と旧宮家の全プロフィール
- 巻中カラー…**皇居と離宮**●天皇家の御用地を秘蔵写真でガイドする
- 第3章……**Q＆A・皇室大百科Ⅱ**●天皇家の暮らしと祭祀の世界を総説
- 第4章……**天皇家を支える人々**●宮内庁のしくみと伝統を守る宮中の裏方たち
- 第5章……**皇室を震撼させた重大事件**●知られざる近代の奇事異聞を紹介
- 特別付録……**皇室関連法律集**●皇室典範・皇室経済法ほか

写真・図版満載！　「皇室用語集」ほか、ユニークなコラムも収録！　定価＝1365円〈5％税込〉

絶賛発売中！



学研M文庫 ［戦史シリーズ］ Gakken

絶賛発売中

急降下爆撃 ハンス・ルデル 高木 真太郎 訳
「ソ連人民最大の敵」と呼ばれた独将校の戦闘記録

U-ボート977 ハインツ・シェッファー 横川 文雄 訳
ヒトラー生存説を生んだ独潜水艦南米入港の全貌

空母ガムビアベイ E・P・ホイト 戸高 文夫 訳
レイテ沖で撃沈された米空母がみた連合艦隊！

擲弾兵 パンツァーマイヤー戦記 クルト・マイヤー 松谷 健二 訳 吉本隆昭 監修
武装SS野戦指揮官が綴る激闘の記録！

独ソ戦史 バルバロッサ作戦 上中下 パウル・カレル 松谷 健二 訳
世界各国で大ベストセラーを記録した最高傑作！

独ソ戦史 焦土作戦 上中下 パウル・カレル 松谷 健二 訳
世界各国で大ベストセラーを記録した『バルバロッサ作戦』続編！

中東戦争全史 山崎 雅弘
中東戦争の歴史と背景をわかりやすく解説する！

現代紛争史 山崎 雅弘
紛争の経緯と背景を分かりやすく読み解く一冊

世界戦史 歴史を動かした7つの戦い 有坂 純
7つの戦いの戦術と英雄たちの事跡を描く！

世界戦史② 英雄かく戦えり 編集部 編
8つの戦いを描く、好評シリーズ第二弾！

日本戦史 戦国編 河合 秀郎
図版史料とともに怒濤の戦場を再現！

日本戦史 戦国編② 激闘！大包囲戦 編集部 編
好評シリーズの戦国編、第二弾！

日本海海戦 岡本 好古
皇国の興廃この一戦にあり。日本はなぜに戦い、いかに戦ったのか！

元乗組員が綴る栄光の軌跡 **重巡摩耶** 池田 清
戦艦をも陵駕した最後の条約型巡洋艦の戦闘記録！

潜水艦隊 井浦 祥二郎
潜水艦作戦の名著が蘇った！日本の潜水艦作戦の全貌が見えた！

戦艦で綴る太平洋戦史 **十二戦艦物語** 川又 千秋
日本海軍が世界に誇った巨大戦艦の栄光と戦闘の軌跡

最後の零戦 白浜 芳次郎
第二次大戦の大空の覇者・零戦。最後まで生き残った名パイロットの真実の戦闘記録

伊58潜 帰投せり 橋本 以行
潜水艦の作戦行動は秘中の秘！知られざる真実の戦闘記録

［詳解］独ソ戦全史 デビット・M・グランツ ジョナサン・M・ハウス 守屋 純 訳
独ソ攻防戦の実相を資料をもとに克明に描く、衝撃の戦史！

日本の戦歴 **パールハーバー** 真珠湾奇襲攻撃 平塚 柾緒
我、奇襲ニ成功セリ！ パールハーバーの真実！

日本の戦歴 **日露戦争** 上下 旅順攻略戦／日本海海戦 平塚 柾緒
明治三十八年、小国日本と大国ロシアの国交が断絶し戦争に突入した。

伊6潜 サラトガ雷撃す 稲葉通宗
伊六潜、伊三六潜の艦長が綴る壮絶なる潜水艦戦の記録

陸軍編 海軍編 **日本の秘密兵器** 小橋 良夫
兵器史上まれな秘密兵器の数々

湾岸戦記 村松 剛
いま、世界が注視する中東戦域の現代史



実物大 戦艦大和を体感せよ

1/1 SCALE BATTLESHIP YAMATO

今も多くの日本人の心にその雄姿を刻み込んでいる戦艦大和
その実物大映画撮影セットが広島県尾道市で公開されている
史上空前の巨艦を直に体験できる貴重な機会である

文＝編集部
協力＝大和ロケセット公開推進委員会

映画『男たちの大和／ＹＡＭＡＴＯ』の撮影のため、広島県尾道市向島の日立造船の造船ドック脇に造られた戦艦大和実物大セット。部分的とはいえ、ここまで戦艦大和を再現した撮影セットは初めてだ。（写真協力＝尾道の詩）

戦艦の迫力を体験できる尾道の戦艦大和

戦後六〇年の節目となる今年は、太平洋戦争に関する話題が多いが、なかでも戦艦大和には大きな話題が二つあった。一つは、大和の生まれ故郷ともいえる広島県呉市に、呉市海事歴史科学館、通称「大和ミュージアム」がオープンしたこと。そしてもう一つが、年末公開の映画『男たちの大和／ＹＡＭＡＴＯ』撮影のため、原寸大の戦艦大和の撮影セットが組まれたことだ。

撮影セットは、広島県尾道市にある日立造船のドック脇にある。撮影が終了した現在は一般公開されており、甲板上の見学順路を歩きながら見ることができる。

実物の戦艦大和は全長二六三メートルあったが、撮影セットは艦首から約一九〇メートルほどの長さ。艦橋や煙突はないが、四六センチ砲や対空兵装などは往時の姿を再現している。完全再現ではないものの、「本物と同じ大きさ」の戦艦大和ともなれば、だれでも心惹かれるものがあるはずだ。

実際に甲板に立ってみると、その大きさは圧倒的。四六センチ主砲は第二砲塔のみしか備えられていないが、「戦艦の主砲とはこういうものだ」と言わんばかりの迫力が伝わってくる。日本では、旧海軍艦艇の威容を実地体験できるのは戦艦三笠くらいしかないという寂しい状況だが、尾道の戦艦大和は、巨艦の迫力を実際に体験できる千載一遇の機会といえるだろう。

船体

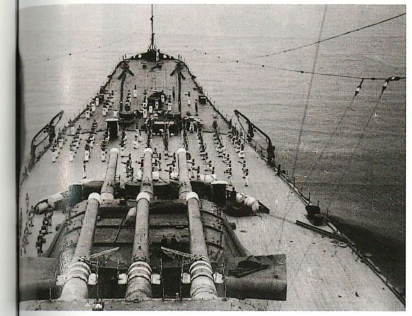
中央部をメインに再現した全長一九〇メートルの巨躯



➡航走する在りし日の戦艦大和。撮影セットでは、写真の赤く塗りつぶされている部分が再現された。映画の画面では、艦橋などセット化されていない部分はＣＧやミニチュアを合成して描かれる。



⬆撮影セットは全長190メートルで、艦橋、煙突、後甲板部分を除く全体の七割ほどが造られている。第２主砲塔から第１副砲塔、司令塔、高角砲・機銃群と続く重厚さと複雑さが混在する大和の特徴が見事に再現されている。甲板上を歩いてみると、広さに余裕を感じる前甲板に比べ、機銃群の周辺はかなり窮屈な感じになることがわかる。



艦首（中央部より）



艦首（御紋章）



⬅⬆艦首部分を第１副砲塔上から見たもの。左上のモノクロ写真は同型艦武蔵の艦首甲板。見比べてみると、細かい艤装類は別にしても雰囲気は実物をうまく再現していることがわかる。菊の御紋章を戴く艦首は非常に複雑な曲線で構成されており、前に立って司令塔方向を見ると、ほとんどがその陰に隠れてしまうほど圧倒的なボリューム感がある。

各部の造形美は見どころ満載

船体は全体の七割ほどの再現にとどまるが、それでも巨大さは充分に伝わってくる。艦首甲板に立って艦橋方向を見ると、四六センチ砲を三連装した巨大な砲塔と、一五・五センチ三連装副砲が存在感を放つ。一五・五センチといえば陸軍の火砲なら立派に重砲だが、四六センチ砲の前にはまるで豆鉄砲のように見えてしまう。

巨砲が鎮座する砲塔ターレットも巨大だが、それが設置された幅三九メートルの甲板の広さはさらに圧倒的だ。艦首から中央部に向かってゆるやかにアップダウンを描いている大和独特の甲板のスロープも手に取るようにわかる。甲板には五〇〇〇枚以上ものフローリング材が使われており、写真などで見る甲板の雰囲気がよく再現されている印象だ。

重装甲の司令塔は、小さな開口部に至るまで再現されていて、さすがに金属の質感は無理だが、重厚な雰囲気は伝わってくる。近くで見ると、材料の構造合板の継ぎ目が見えたりするが、距離を置くと気にならなくなるから不思議。やはり「大きさ」の効用だろう。

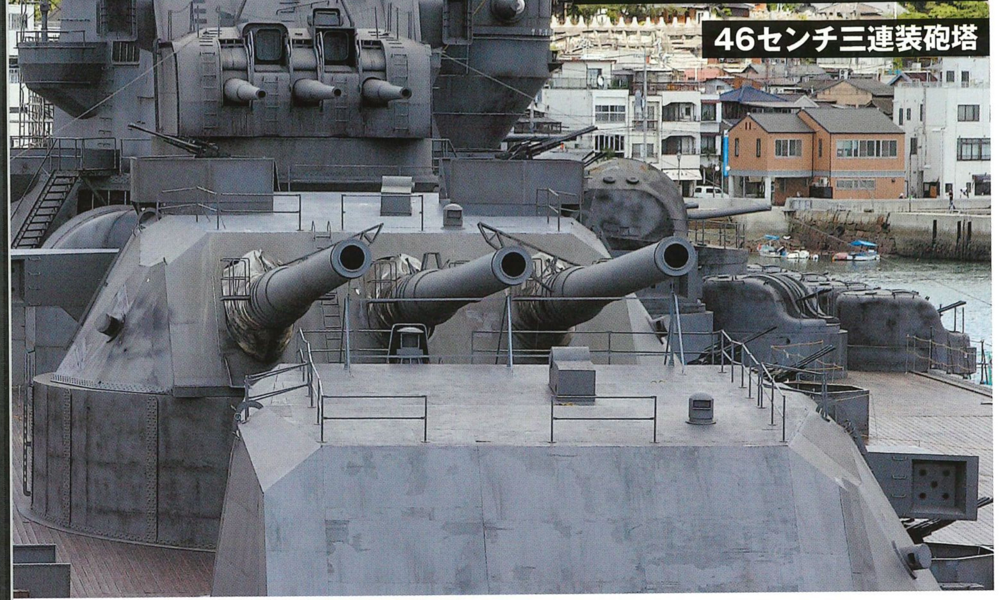
白眉はなんといっても主砲と副砲の砲塔周辺で、砲そのものはもちろんだが、ハッチや梯子といった細かい部分も適度に省略しながら再現してある。砲塔後部の曲面や、副砲砲塔の細かいスリットなど、模型ではわからないような部分も見どころといえる。

主砲・副砲

圧倒的存在感を放つ世界最大の艦載砲

➡第２主砲塔の基部。ターレット周辺の接合部は、リベット一つ一つにいたるまで再現されている。リベットの材質は鉄ではなくコルクや樹脂だということだが、塗装されているとまるで金属のような質感がある。





46センチ三連装砲塔

⬆右舷前方から見た主・副砲塔。映画では写されることがない第1主砲塔の右側面が平面になっているのは撮影セットならではだが、それでも大和主砲塔の大迫力は充分に伝わってくる。背景に写っている家屋は対岸にあるものなので単純比較はできないが、比べてみると砲塔の巨大さ（実際、住めそうなくらい大きい）が想像できるのではないだろうか。

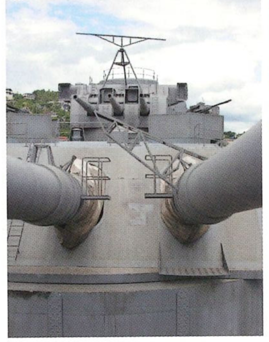
米戦艦との差異が際立つ
戦艦大和、曲線の美

戦艦大和のライバルとしてよく比較される米海軍アイオワ級戦艦。性能はともかく、デザイン的な比較をしてみると、アイオワ級が比較的直線を主にして工業製品的なまとまりを見せるのに対し、大和型は曲線が多く、ある種工芸品的な複雑さを持っている。実際に甲板を歩いてみれば、模型での比較とはまた違った造形面での発見があるのではないだろうか。



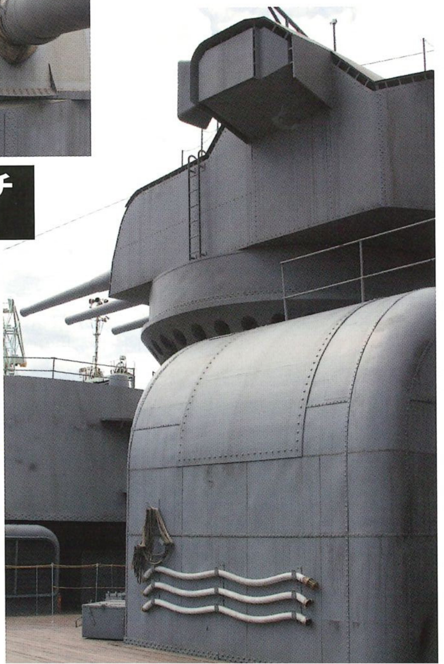


写真はアイオワ級戦艦の『ウィスコンシン』。司令塔や連装両用砲など、大戦後期の米戦闘艦の特徴である直線基調の造形が目立つ。（写真提供＝三野正洋）



⬅第２主砲塔正面から司令塔方向を望む。第２砲塔は左右旋回が可能で、46センチ砲も俯仰が可能だが、撮影時に稼動させる際のバランスを考慮して砲身長は本物より約２メートル短く造られている。

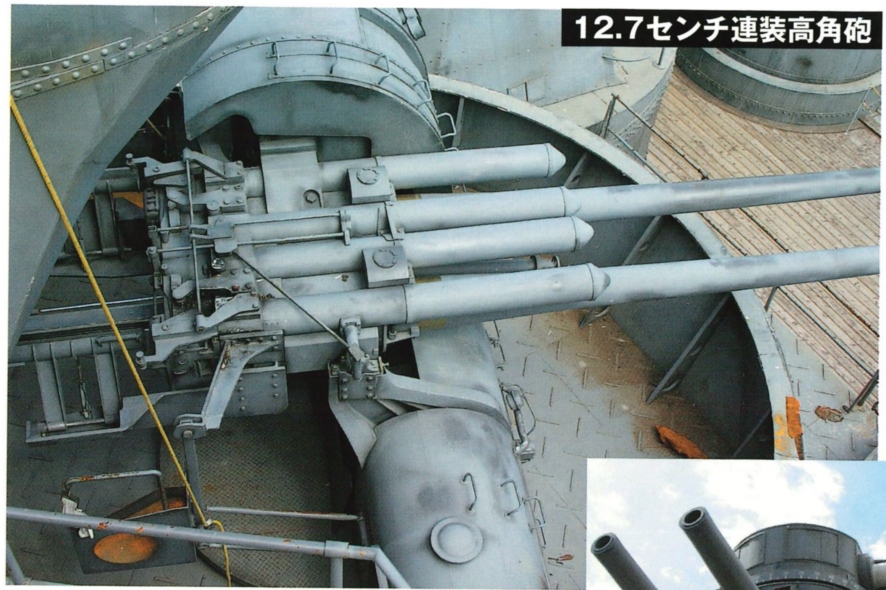
15.5センチ三連装副砲



➡三年式15.5センチ砲塔を甲板から見たところ。最上型巡洋艦から転用した砲塔だが、測距儀や装甲防御などの付加により、外観が大きく変わっている。撮影セットでも、その複雑な側面形状や、60口径という長砲身砲を突き出した精悍なフォルムを楽しむことができる。

高角砲機銃群

造形の妙が目を楽しませる無数の対空火器群



⬆12.7センチ連装高角砲は、沖縄特攻時には12基（竣工時は防楯付き6基）設置されていた。増設分の6基は主砲の爆風を受けやすい位置にあったため、既設の砲から防楯を移設。セットでも、高い位置にある高角砲は防楯なしの露天状態で、沖縄特攻時の姿を忠実に再現している。うち1基（写真）はアップ撮影用に装弾装置など細部まで造られている。



⬆甲板から連装高角砲を望む。砲の上に見えるのは高角砲射撃指揮所。大和の対空砲火は、米艦載機に対してほとんど損害を与えられなかったが、見た目の迫力は圧倒的である。



⬅防楯付き連装高角砲。大和型のものは強烈な爆風に対し、防楯の装甲が強化されていた。左右非対称の独特な形状が見どころ。見学順路からは見えないが、撮影時に開けられた被弾跡がある。



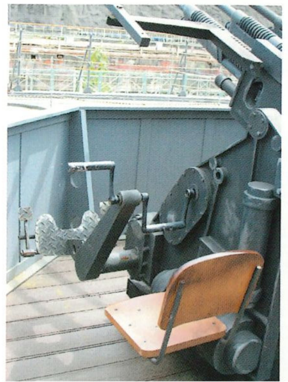
➡露天の三連装機銃座。写真のものは第2砲塔上のものなので上からは見られないが、甲板上にあるものは見学順路からもよく見える。



⬅九六式三連装機銃も、防楯つきと露天の二種類がある。丸みがある防楯の形状や戦闘時に開くシャッターなど、細かいところまで作り込まれていて、見学順路からも間近に見られる。船体が大きいのでそれほど大きく感じないが、大戦中の中戦車の砲塔並みの大きさがある。

対空火器も見どころ満載で、オープントップのもの、装甲を備えたものなど、形状の差異が楽しめる。なかでも一二・七センチ連装高角砲の一基は、アップ撮影用に砲の細部まで再現されている。見学順路からは見えにくいが、ぜひ映画で確かめてほしい部分だ。なお、紹介している写真の中で上方から写しているものは特別に許可をもらい、取材用に撮影させていただいたものである。

縮尺の大きなプラ模型は見下ろして楽しむことが多い。視点としては航空機パイロットのそれだが、この大和は乗組員の視点から軍艦を体験できる。浮かべる城、という表現が「なるほど」と理解できるはずだ。公開は来年三月いっぱいまでで、その後は解体される予定だという。本物とは違い沈むことなく姿を消す大和。その前にぜひ一度、甲板に立ってみてはいかがだろうか。



⬅甲板上の銃座に置かれた三連装機銃。操向、俯仰用のペダルやハンドルも造り込まれ、雰囲気がよく再現されている。兵員が座すこともなく蒼空に銃身を振り上げる機銃には、なんともいえない哀愁がある。

映画

『男たちの大和／YAMATO』で"最期のドラマ"を目撃せよ

▶▶▶12月17日(土) 全国東映系ロードショー





⬆銃座に就く内田（中村獅童）。セットとCGで甦った大和によって、60年前の人間ドラマもまた現代に甦る。



⬅米艦載機の攻撃を受けて次々に沈黙する対空火器群。リアリティ徹底追求の戦闘シーンは必見である。奮闘むなしく終末への時を刻む大和の艦上で、なお生きある限り運命と戦う男たちの姿が胸を打つ。

大戦末期、激戦続く沖縄への援兵として水上特攻の途に就き、沈没するまでの大和の戦いを、乗り組んだ若者たちの死闘を通して描く。辺見じゅんの原作『決定版 男たちの大和(上・下)』(ハルキ文庫刊)を、佐藤純彌の監督・脚本により映像化した戦争巨編。主人公の森脇役の反町隆史、内田役の中村獅童をはじめ豪華キャストの競演や、約六億円をかけた大和撮影セットを駆使した戦闘シーンなど見せ場満載。史実を扱った戦争映画としては実に久々の大作だけに、大いに期待したい作品である。

『男たちの大和／YAMATO』美術 松宮敏之氏が語る
実物大「大和」の魅力

「材料は、鉄骨構造で制作した基本セットに、撮影用に特殊加工された厚さ18ミリの構造合板、FRP(合成樹脂)のほか、一部発泡スチロールも使用しました。甲板には6000枚近い別注のフローリング材を使っています。苦労したのは、砲身を上下可動や旋回させたりするため、主砲の細部にわたってバランスを取ることが必要だった点で、構造についての念入りな確認を繰り返しました。こだわったところは実物大のセットが生み出す迫力、本物の戦艦大和のきめ細かい部分の再現です。乗艦してもらえれば、その素晴らしさを体感していただけると思います。別々に制作された部品が、搬入されるにしたがって『大和』というひとつのまとまりを醸し出していくところには感動しました。完成後の大きさは予想できていましたが、実物を目の当たりにして改めて"美しさ・力強さ・歴史の重み"を感じさせられました」

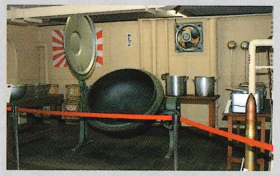


⬆細かい部分の再現もさることながら、すべてが組みあがって初めて伝わる巨大戦艦ならではの力強さ、美しさが何よりの見せ場だという。

室内セット・小道具展示も必見

大和のセットが造られている造船所内には、艦内の撮影セットや小道具を展示した施設もある。艦のセットとはまた違って、乗組員の生活などを垣間見られる展示が楽しめる。乗組員の私物など、日本映画の小道具スタッフの技術をぜひ見ておこう。なお、尾道観光協会サイト「おのなび(下記アドレス)」内に大和撮影セット関連のページがあるので、公開期間など詳細はそちらをチェックしていただきたい。

http://www.ononavi.jp/fan/yamato.html



⬅大きな炊飯釜が印象的な厨房のセット。兵員室なども展示されており、艦内の再現も見どころが多い。



➡タバコなどの小物類も見事なでき。映画の雰囲気を盛り上げるこれら小道具も「大和」の一部といえるだろう。

●所在地／広島県尾道市向島町・日立造船向島西工場跡地(JR尾道駅の南東)。
●公開時間／9:00～17:00(11月30日まで)、9:00～16:00(12月1日～3月31日)※入場は30分前まで。
●休艦日／毎週木曜日・12月29日～31日(11月3日は開場)。※メンテナンスのため臨時休艦の場合あり。
●料金／一般・大人(中学生以上):500円、小学生:300円。
●問い合わせ先／大和ロケセット公開推進委員会(電話／0848-20-6262)

『男たちの大和／YAMATO』全国共通劇場招待券応募先
〒141-0022 東京都品川区東五反田1-22-1 五反田ANビル2F (株)学習研究社「歴史群像74号招待券係」まで。発表は発送をもってかえさせていただきます。

●伊勢佐木町 東映より『男たちの大和／YAMATO』劇場招待券プレゼントと特別ご優待のお知らせ／全国共通劇場招待券を5組10名様にプレゼントします。応募は左記まで。また、伊勢佐木町 東映(横浜市中区伊勢佐木町3-107 JR関内駅より徒歩6分／http://www1.ocn.ne.jp/~ise-toei/)では、12月17日の公開日より、本掲載誌持参の方は窓口料金より200円割引します。



根城の本丸部分。安土桃山時代の姿を復元している。中央のL字型の建物が主殿で、その周りを取り囲むように納屋や板倉、鍛冶工房などが立ち並ぶ（八戸市博物館提供）。

きらびやかな天守閣も
壮大な石垣もそこには存在しない
だが再現された南部根城には
戦国の凛とした空気がある



博物館の前に建つ南部師行の騎馬像。師行は南朝方に与し、後に和泉で高師直と戦って討死した。

復元された北奥羽の戦国城郭

南部根城

Nanbu NE-JO

文＝編集部

本誌では、昨年四月号（No.64）で現代に甦った戦国の城として、静岡県の高根城を紹介したが、実はもうひとつ、発掘調査に基づいて建物に至るまで復元された戦国期の城がある。それが北奥羽を支配した根城南部氏が、約三〇〇年にわたって本城とした「根城」である。

南部氏はもともと甲斐国波木井郷の地頭職を務めていたが、元弘三年（一三三三）、南部師行が新田義貞の鎌倉攻めにしたがったことで頭角を現した。その後、師行は後醍醐天皇によって陸奥国司に任じられた北畠顕家とともに奥州へ下向し、建武元年（一三三四）、陸奥国の最奥部の糠部郡八森（現八戸市）に居を構え、支配拠点とした。これが根城の始まりで、奥羽における南朝の拠点、すなわち「根の城」にちなんで命名されたともいわれている。

根城は近世城郭を思わせる広大な城域を有した城で、八つの郭からなる、いわゆる平城だ。現在では東善寺館、中館、本丸の三つの郭が「根城の広場」として整備されており、各郭を隔てていた薬研堀がよく残されている。しかし根城最大の見所は、なんといっても、主殿建築などが再現されている本丸部分だろう。

その本丸では、主殿・馬屋・倉庫・工房など様々な建物をみることができる。これらの建物では、鉋を使った工法が一部に用いられており、加工痕が重厚さを醸し出している。

なぜ建物の性格まで特定できたのかと疑問に感じるかもしれないが、実はこれも、発掘調査で得られた出土品のおかげだ。

たとえば、小刀、鎧の部品である小札などが出土した場所は武器類を扱った工房、鉄滓や鍔の鋳型などが出土した場所は、同じ工房でも鍛冶工房、といった具合だ。城下ではなく、本丸の中に工房があったというのはちょっと意外だが、これは南部氏の城の特徴のひとつといわれている。

ところで根城で目を引くのは、建築物だけでなく、文献史料から得られた情報をも加味して展示を構成していることだろう。主殿の広間では、南部氏が正月十一日に武運長久を祈願して行った儀式の様子が、史料に基づいて再現されているが、実際に復元された建物の中とあって、博物館内のジオラマなどとは一味違った雰囲気が漂っている。いうなれば戦国の息吹きを肌で感じ取ることができるのだ。

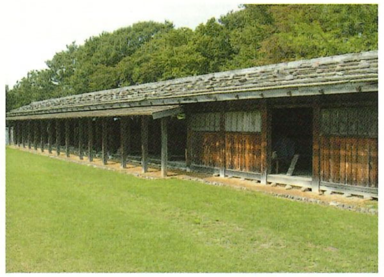
我々が頭の中で想像する戦国の城のイメージでは、とかく生活感が欠落しがちだが、根城ではそれがビビッドに伝わってくるのである。

戦国期の城は全国に数多く遺されているが、こうした復元ができたのは、徹底的な発掘調査が実施されたからこそで、戦国ファンならずとも一見の価値ありだ。

なお根城ではボランティアによるガイドも行っているので、ご利用をお奨めする。また八戸には、国宝「菊一文字の鎧兜」が収蔵されている櫛引八幡宮などもあるので、あわせて見学するとよいだろう。



復元された建築物　① 東門への橋　② 納屋　③ 板倉　④ 鍛冶工房　⑤ 工房　⑥ 中馬屋　⑦ 主殿

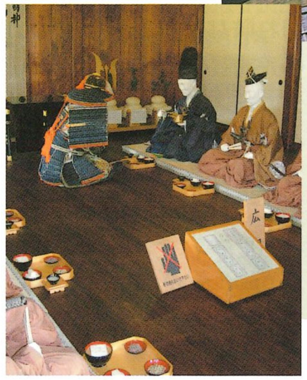




➡本丸東門へと通じる橋。本丸は柵によって厳重に囲まれているが、この柵列も調査結果を忠実に再現したものである。
⬅来客の馬を繋いでいた中馬屋。中には南部駒の剥製が展示されており、臨場感に溢れている。



当主が儀式を執り行った主殿。復元には二つの案があったが、南部曲屋を髣髴とさせるプランが採用された。見送られた復元案も模型として博物館に展示されているので、両者を見比べてみるのも一興だ。



広間に再現されている正月の儀式の様子。厳かな雰囲気が漂う。

〈参考文献〉『掘りおこされた南部氏の城　根城』『南部氏と根城』八戸市博物館／『根城　本丸の発掘調査』八戸市教育委員会

Rekishi Gunzou

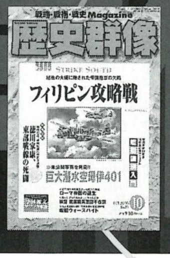
歴史群像 Back Number

買い逃がしたあの号、読みたくなった特集を手に入れるチャンス!

歴史群像バックナンバーのご案内

購入を希望される方は、希望する号を明記の上、代金+送料を現金書留または郵便小為替にて下記の住所までお送りください。送料は1～2冊340円、3～4冊450円、5冊以上590円となります。数に限りがございますので、品切れの際はご容赦ください(№53以前の号と№57は品切れです)。

お申し込み先 〒141-0022 東京都品川区東五反田1-22-1
五反田ANビル2F　学研「歴史群像バックナンバー係」
お問い合わせ　電話03-5447-2314「歴史群像バックナンバー係」



No. 73　05年10月号　930円(税込)
〈カラー〉上野岩櫃城/「三景」艦/The Simulator/ノルデン照準器/アンティータムの戦い/巨大潜水空母伊401/変わり兜
〈特　集〉フィリピン攻略戦/徳川家康、東部戦線の死闘/ローマ帝国の誕生/艦艇識別入門/検証武田騎馬軍団不在説/オール・タンク・ドクトリン/幕末英仏駐屯軍/ワイルド・ギース/戦艦ウォースパイト/H.U.ルーデルほか

No. 54　02年8月号　930円(税込)
〈カラー〉松代大本営/三河長篠城/防空基幹船佐倉丸/電波兵器/装甲艦/ヒュダスペス河の戦い/日本の記念船
〈特　集〉シチリア作戦/今川義元一代記/呉楚七國之乱/自衛隊創設史/インドシナ戦争/足利尊氏の逆襲/マルセイユ伝/インド独立ほか

No. 55　02年10月号　930円(税込)
〈カラー〉由良要塞/塹壕戦/敷設艦津軽/芥川山城/トレントンの戦い/誘導ミサイル/陸上自衛隊 朝霞駐屯地
〈特　集〉レイテ沖海戦/武田遺領争奪戦/ローマ内乱記/艦攻vs.艦爆/加賀前田家の関ヶ原/クリミア戦争/島原大乱/ベトナム戦争Iほか

No. 56　02年12月号　930円(税込)
〈カラー〉五稜郭/近江鎌刃城/電纜敷設艦初島/巨大攻城砲/蘭英戦争/ドゥーリトル襲撃隊/国際観艦式
〈特　集〉エル・アラメイン/黒田如水の関ヶ原/日本海大海戦/エニグマへの挑戦/秋月vs.アトランタ/日本刀かく変化せり/ベトナム戦争IIほか

No. 58　03年4月号　930円(税込)
〈カラー〉海軍日吉台地下壕/伊那大島城/ポケット戦艦/ヘースティングスの戦い
〈特　集〉スターリングラード攻防戦/足利義昭の陰謀/スペイン継承戦争/人工港湾マルベリー/激闘熊本城/城破り/三別抄の乱/ハワイ併合/レッドバロンほか

No. 59　03年6月号　930円(税込)
〈カラー〉大津島回天基地/遠州二俣城/駆潜特務艇第一号型/NBC偵察車/スーダン戦役/21世紀のアメリカ軍
〈特　集〉太平洋通商破壊戦/太田道灌合戦録/ナポレオン第一次イタリア戦役/参謀本部/スパイ・ゾルゲ/戦場弓術/義和団事件ほか

No. 60　03年8月号　930円(税込)
〈カラー〉大阪砲兵工廠/近江宇佐山城/哨戒艇第一号型/氷山空母/カデッシュ戦車戦/靖國神社遊就館
〈特　集〉バトル オブ ブリテン/応仁大乱/北朝鮮建国史/鹵獲兵器物語/小牧長久手合戦/オルレアン攻防戦/イラク戦争への道ほか

No. 61　03年10月号　930円(税込)
〈カラー〉大久野島/武蔵杉山城/戦時標準船2E型/戦車駆逐車/飛龍攻撃隊/エルサレム陥落/東京湾要塞第三海堡/戦国実戦格闘術
〈特　集〉満州1945/秀吉の中国戦線/レパントの海戦/帝国海軍潜水艦史/登戸研究所/ボーア戦争/北越戦争ほか

No. 62　03年12月号　930円(税込)
〈カラー〉本土決戦陣地/筑前立花山城/防空巡洋艦五十鈴/魚雷発射メカニズム/テュロス攻城戦/修武台記念館
〈特　集〉本土最終決戦/戦国本願寺/ペロポネソス戦争/戦車誕生/彰義隊/ドーバー海峡砲撃戦/イラク原子炉を破壊せよ/震洋㋹激闘録ほか

No. 63　04年2月号　1000円(税込)
〈カラー〉江田島海軍兵学校/近江観音寺城/ナポレオンのエジプト遠征/零戦復元/黒船来航/サスケハナ詳細図
〈特　集〉ミッドウェー海戦/第四次川中島合戦/赤壁大戦/機雷vs.掃海ほか
〈別冊付録〉陸海軍現存兵器ガイドブック

No. 64　04年4月号　930円(税込)
〈カラー〉笠寺高射砲陣地/遠州高根城/軽巡大淀/カタパルト/バラクラヴァの戦い
〈特　集〉真・電撃戦/失われた奥州大決戦/フリードリヒ大王の七年戦争/海鷲たちの軌跡/航空偵察/検証・二二六事件/カポレットの戦い/アルジェリア戦争ほか

No. 65　04年6月号　930円(税込)
〈カラー〉海軍鹿屋航空基地/下総本佐倉城/神川丸/戦車自動装填装置/ガウガメラの戦い/大坂城の防御施設
〈特　集〉沖縄航空決戦/王都百年戦争/大北方戦争/米ソ宇宙開発競争/軍用自転車発達史/ヒトラー専用車の謎/シベリア出兵ほか

No. 66　04年8月号　970円(税込)
〈カラー〉広島原爆遺跡/強襲山中城/陸軍装甲艇/VTOL/マレンゴの戦い/死闘ツラギ/自衛隊50年史
〈特　集〉モスクワ攻防戦/大友帝国の落日/チンギス・ハーンのアジア遠征/幕末最強「佐賀藩兵」ほか
〈付 録〉飛龍全デッキCG復元

No. 67　04年10月号　930円(税込)
〈カラー〉土浦海軍航空隊/上野名胡桃城/水雷艇千鳥/機関銃/ギリシャ独立戦争/ミズーリ就役/始皇帝軍団
〈特　集〉インパール作戦/宇喜多盛衰記/アメリカ独立戦争/M4シャーマン/決戦!倶利伽羅峠/戦国火薬考/北号作戦/チェチェン紛争ほか

No. 68　04年12月号　930円(税込)
〈カラー〉上陸作戦/上杉軍道を行く/航空機用掩体/鳥羽伏見の戦い/海軍カレー物語
〈特　集〉パットン戦車軍団/遼陽会戦/アレクサンドロスを継ぐ者は誰か/空母戦術大研究/火縄銃のつくり方/グデーリアンもうひとつの素顔/サマール沖海戦ほか

No. 69　05年2月号　1000円(税込)
〈カラー〉大和主砲塔/会津久川城/翼の進化論/リッサ沖海戦/戦国最強要塞名古屋城
〈特　集〉ソロモン1942/上杉謙信関東電撃戦/シュトゥーカ大研究/第四次中東戦争/中国通貨を偽造せよ/福島安正伝/酒保開け! ほか
〈別冊付録〉戦争遺跡ガイドII

No. 70　05年4月号　930円(税込)
〈カラー〉東京大空襲/越後荒砥城/砲艦橋立/ロビダの未来兵器/ブルゴーニュ戦争/硫黄島陥落/世界の戦争博物館
〈特　集〉ベルリン攻防戦/史伝明智光秀/春秋呉楚激突/帆走軍艦/八木アンテナと日本レーダー開発史/M1vs.レオパルト2/日本掃海隊ほか

No. 71　05年6月号　930円(税込)
〈カラー〉大和ミュージアム/ドイツ空軍シークレットウエポン/上野根小屋城/志摩半島に遺された戦争遺跡/給油艦足摺
〈特　集〉「瑞鶴」出撃/中台紛争史/毛利・大友十五年戦争/戦国の大砲/F14vsF15/サブマリナー24H/陸軍鉄道部隊/ケルベロス作戦ほか

No. 72　05年8月号　1000円(税込)
〈カラー〉陸軍伊良湖試験場/仮装巡洋艦信濃丸/近江苅安城/バノックバーンの戦い/ナバホ暗号部隊/Warbirds誕生/日本銅像見聞録
〈特　集〉地中海補給戦/濃尾争乱記/アラビアのロレンス/日本の終戦工作ほか
〈付録〉昭和15年呉軍港

※小誌バックナンバーは、定期刊行物ですので書店では最新号のみの販売となります。既刊の号は、お手数ですが学研「歴史群像バックナンバー係」まで直接お申し込みください。なお、編集部移転のため、お申し込み先が以前と変わっておりますのでご注意くださいませ。

著者インタビュー



日置英剛

Eigou Hioki

一九三五年、東京生まれ。東京教育大学文学部卒業後、兵庫県に移住。私立滝川高等学校、灘高等学校の国語教師として活躍。教員生活のかたわら『新国史大年表』の編纂を手がけ、ライフワークとして教員を引退した現在も続けている。

知られざる資料を丹念に採録『読める年表』に込めた熱き思い

文・取材／編集部

年表と聞いてどのようなものを想像するだろうか。ほとんどの読者は歴史の授業で教科書と併用して使った、あの年表を思い浮かべるのではないか。だが、今回紹介する太平洋戦争の年表は、あのような無味乾燥な受験知識用のものではない。まさに『読める年表』とでも言うべき内容である。

一日一日、まるで現在進行しているような表記。特に興味深いのは、その日何があったという記述だけではなく、同時にその事象の裏付けとなる文献、資料を探し出し、頁の下段に記載している点である。それも日本側の資料だけではなく、敵国側の証言、資料などと照らし合わせ、裏を取り、事実にもっとも近いと思われる資料を丁寧に掲載している。

この労作、『年表太平洋戦争全史』を著した日置英剛氏は、最近まで高校の国語教師であった。そんな氏がなぜこのような大作をまとめようと考えたのだろう。

「私は戦前の生まれですが戦場の経験はありません。所詮銃後に残っていた者ですので、実際に従軍された方々とは戦争経験が違う。だから、長年、戦争については口を慎むべきだと思ってきました。でも近年、そのような世代の方々が次々と亡くなっている。時代の記憶を留めるには、私のような者でも何かしなければと思うようになったのです」

とはいえ年表である。教員としての勤めのかたわら資料を集め、選定するという地道な作業をライフワークのようにして長年続けてきたという日置氏。だが、そもそも年表を編むという作業は一人でやるべきものなのだろうか。

「最近は年表をあまり個人で編むということはなくなりましたが、戦前などはよくあったんです。個人による年表の方が数人の編集によるものより表記が一貫していますし、編者の思いが溢れ、読んでいて面白い。年表は本来面白いものだったんです。

ただし、年表はそれを評価する機関がありません。だから、一生懸命作ったとしても学会の業績などにならない。学者さんが手を出さないはずです。私は学者ではなく高校の一教師ですから、かえってこれができたといえるでしょう」



Present 2 抹殺された大東亜戦争

勝岡寛次＝著　明成社／1995円

米占領軍によって占領下の体制に不適当と判断され、修整された雑誌類は本来どのような思想を伝えようとしていたのか？本書は、抹消された当時のさまざまな言論を本来の姿に復元することで、敗戦直後の日本人の持っていたありのままの「歴史認識」を解説していく。坂口安吾のエッセイ「特攻隊に捧ぐ」が今なお重く迫る。



Present 3 戦国の女性たち　16人の波乱の人生

小和田哲男＝編著　河出書房新社／1575円

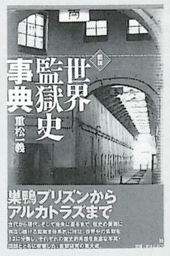
お市の方、妙玖、春日局など、戦国史に名を残した女性は数多いものの、残された史料の少なさもあって、歴史的に正確を期した彼女たちの評伝はなかなか書かれる機会がなかった。本書は、現在の歴史研究の成果を反映しつつ、あくまで具体的に戦国の女性たちの生き様を描写する。史料として、歴史読み物として完成度の高い一冊。



Present 4 日本と国際連合

塩崎弘明＝著　吉川弘文館／3045円

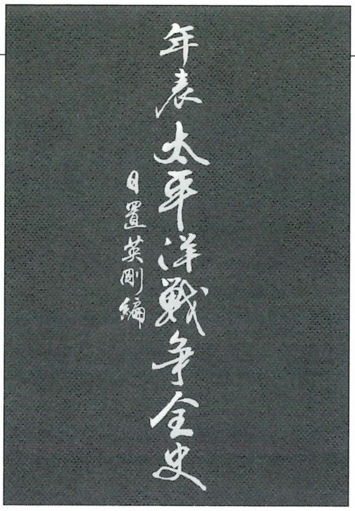
本書で語られるのは、現在の国際連合成立の元となった「連合国」と日本の関わりについての歴史である。日本にとって、二度の世界大戦を通じて対立と歩み寄りを繰り返した連合国とは何だったのか。国際貢献、日本の常任理事国入りへの動きが大きな政治的トピックとなっている現在、今一度振り返るべき歴史がここにある。



Present 5 図説　世界監獄史事典

重松一義＝著　柏書房／2940円

紀元前から現代に至るまで、世界の監獄の歴史的変遷を網羅した大著。堅固な城塞を転用したヨーロッパの城塞監獄の血なまぐさい歴史、巣鴨プリズンなども含む各国の軍事監獄や営倉、強制収容所の詳細な記事も興味深いが、なにより、人類史の複雑さをそのまま反映するがごとき「監獄」の多種多様ぶりに圧倒されてしまう。



Present 1 年表太平洋戦争全史

日置英剛／編
国書刊行会＝15750円

日置氏が年表を意識し出したのは中学生のとき。同じく市井の歴史家であった父が年表を手がけており、戦前から戦中にかけて『国史大年表』という名著を著わした。これの編集作業を手伝ったことが、年表への熱い憧れとなった。

「『国史大年表』は当時、評判を呼び大いに売れたのですが、学会からの評価は冷たかった。資料出典表記の曖昧さから、内容の信憑性が問われたのです。ならば自分がやるかぎりは出典を明記したしっかりしたものを作ろうと思いました」

今回上梓した『年表太平洋戦争全史』は、そのような思いで編集を続けている『新国史大年表』から、戦後六〇年の節目の年に、先の大戦の部分を抽出してまとめたものだ。だが、特徴的なのは他の時代を扱うのと違って社会、文化などをあえて割愛し、載せる事象を戦争だけに特化したことである。

「太平洋戦争だけは単なる歴史年表で表すにはどうもしっくりとこない。そこで戦争に絞り込み、その分、あまり知られていない資料や、間違って広まっているエピソードなどを訂正し、徹底して収集し記載しました。たとえば戦後の事実にしても、重光葵がミズーリ号で降伏文書に署名したということは少しでも歴史に詳しい方は知っているでしょうが、その翌日早朝にマッカーサー元帥と会い、直接の軍政行使や軍票の使用を止めるよう申し入れたというような事実は、大抵の方が知らないのではないでしょうか。

これからの日本国民にぜひ知ってもらいたい事実はいくらでもあります。歴史の事実をまず知らなければ、『歴史から学べ』といったところで無意味だと思うのです」

軍事裁判の件数と結果、日本が支払った賠償額など見過ごされがちな戦後資料もきっちりとひろった編者の思いは、読む者の知識ばかりか精神の幅を広げ、熱くするに違いない。

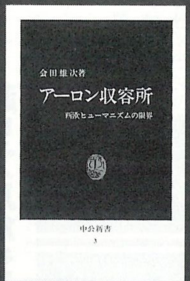
詳細な戦史資料として、また、通読するに足るひとつの歴史物語として、ボリューム感に満ちた一冊である。

BOOKプレゼント応募方法 ● Present 1〜7

このページで紹介した新刊本①『年表太平洋戦争全史』②『抹殺された大東亜戦争』③『戦国の女性たち』④『日本と国際連合』⑤『世界監獄史事典』⑥『ラストエンペラーと近代中国』⑦『目からウロコの中東史』をそれぞれ3名様にプレゼントします。ご希望の方は、本誌巻末葉書の所定の欄に①〜⑦のうち欲しい本の番号と必要事項を記入の上、ご応募ください。締め切りは平成17年12月6日（当日消印有効）。当選者は本誌2月号（平成18年1月6日発売）誌上で発表します。なお紹介した本の価格は税込みです。

歴史通ならこの定番本を読め！

Ever Green Book



アーロン収容所

歴史家が体験した捕虜生活

会田雄次＝著
中央公論新社／735円

本書は、帝国陸軍の初年兵としてビルマで終戦を迎えた筆者の「アーロン日本降伏軍人収容所」における捕虜生活を描いたものだ。捕虜収容所の実情を描いた書物は文学作品から漫画まで、すでに多くのものが存在するが、本書はその中でもやや異彩を放っている。ルネサンス史を専攻する西欧史の学徒であった筆者は、収容所での英国兵の信じがたい残忍な仕打ちに強い衝撃を受ける。家畜の餌を当然のように与える、女性兵は捕虜の前で平気で用を足す等々、これらはすべて、英国人が日本人を同じ人間とは見なしていない証左であった。西欧史研究者として西欧人に対して持っていた筆者の知識やイメージはことごとく裏切られ、やがて日本と西欧との間の途方もない文化的ギャップを認識することとなる。過酷で、ある部分では滑稽な戦争体験を通して語られる、異様な迫力を持つ比較文化論である。



Present 6 ラストエンペラーと近代中国

菊池秀明＝著　講談社／2730円

全12巻刊行予定の「中国の歴史」シリーズの第10巻は、二度の戦争で国家存亡の危機を迎えた清朝末期から、中華民国成立直前までの中国近代史がテーマ。現代のわが国のあり方とも直接つながってくるこの時代の中国を、「華南からの新しい時代の風」、すなわち辛亥革命をはじめとする改革の動きを軸にして活写する充実の一冊。



Present 7 目からウロコの中東史

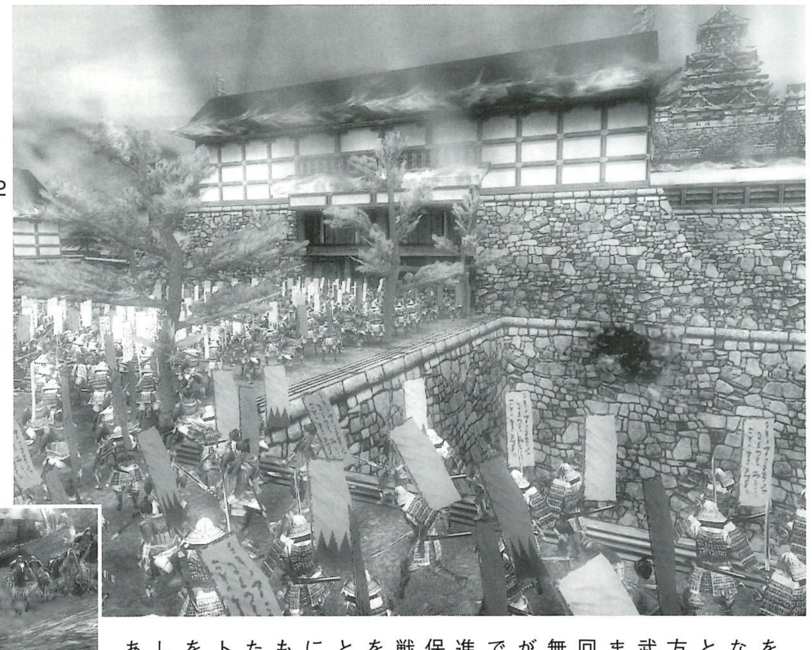
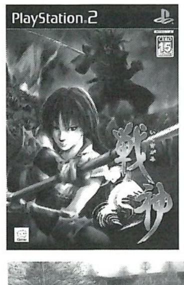
島崎　晋＝著　PHP研究所／1260円

イスラーム、パレスチナ問題、中東とアメリカとの関わり、内戦・紛争の歴史など、現代の中東情勢を理解するうえで必要十分な知識を専門的になりすぎることなく、コンパクトに解説した一冊。これを一読すれば、このところ毎日のように報道される中東における出来事が、「なぜ」起こっているのかがきっと分かるはず。

斬って斬って斬りまくる!! 痛快! ぶった斬りアクション!!

Present 8
3名

戦神
ーいくさがみー
7140円(税込)
プレイステーション2
11月24日発売

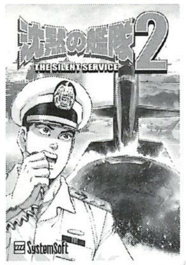





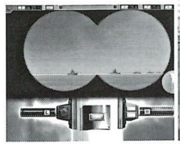
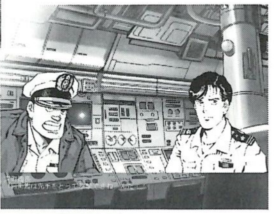

桶狭間(おけはざま)の戦いや川中島の戦いを舞台に、織田信長や武田信玄などの武将とその兵たちが魔物と戦う。主人公の戦神(いくさがみ)・建御名方命(タケミナカタノミコト)は武将たちを助けて魔物を斬り、また御柱を立てて兵たちの体力回復を図る。画面を覆い尽くす無数の魔物たちを斬りまくるのが爽快。また、魔物を斬るだけでなく、信長ら人間たちが本来進むべき道を示しつつ、彼らを保護し、導くことも求められる。戦場にあっては、一気に魔物軍を突破して活路を開くか、それとも御柱で犠牲を抑えつつ的確に敵を仕留めるか。戦略的判断も重要な要素となっている。また『スカイハイ』の作者・高橋ツトム氏がキャラクターデザインを担当、独特の世界観を醸し出している。演出もスピード感があっていい。**〈発売元:元気〉**

潜水艦「やまと」が世界にもたらす混乱! 世界が真に求めるべき平和とは何か!?

Present 10
2名



沈黙の艦隊2
10290円(税込)
Win98/2000/Me/XP
好評発売中

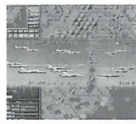



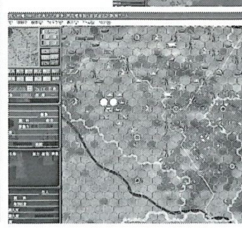
1980〜90年代に社会現象にまでなった仮想戦記マンガ『沈黙の艦隊』のゲーム化第2弾。物語は、日本初の原子力潜水艦「シーバット」の突然の逃亡から始まる。艦長・海江田は自艦を「やまと」と命名、同艦を独立戦闘国家と位置づけ、全世界を巻き込んだ戦いに挑む。海江田の真の狙い、それは世界国家樹立だった。数々の試練を乗り越える海江田の行く手には何が待ち受けるのか!? **〈発売元:システムソフト・アルファー〉**

某国からの侵略を防ぐ最新イージス艦! 超リアルなシナリオで描く現代の危機!!

Present 9
2名

現代大戦略2005
〜護国の盾・イージス艦隊〜
10290円(税込)
Win98/2000/Me/XP
11月18日発売



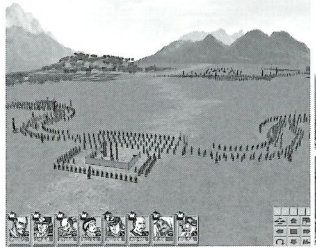
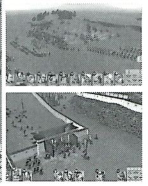
『大戦略』誕生20周年記念作品の第4弾。軍事ジャーナリスト・清谷信一氏の協力による、リアルを極めたシナリオは「日韓攻防戦・襲来!反日漁船団」から「米国東西戦争・ネオコンVSリベラル」までの全26本。登場する兵器は約1300種類。このうちの主要兵器の情報がわかる「3D兵器図鑑」がうれしい。初心者も楽しめるシンプルモードもあり、気軽に楽しめるように工夫されている。**〈発売元:システムソフト・アルファー〉**

本格的リアルタイムストラテジーの続編! 戦乱に明け暮れる時代を勝ち抜けるか?

武田信玄2
8190円(税込)
Win XP
好評発売中



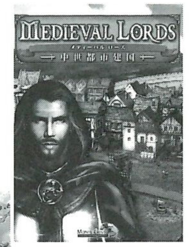
Present 11
3名

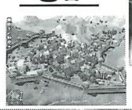
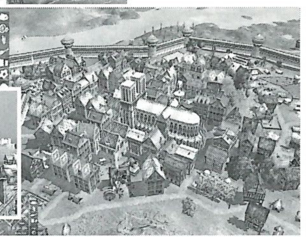
戦国時代を舞台とし、史上名高い武将たちが覇権を争う本格的リアルタイムストラテジー。プレイヤーは武田家、上杉家、織田家の中からひとつを選び、近隣諸国の武将と戦い、それらを打ち倒して勢力を広げ、日本統一を目指す。リアリティーあふれる前作に「内政」の要素を追加。武将は800人以上、戦国を彩った女性も多数登場。もちろん、戦略・戦術の部分も大幅にパワーアップされている。**〈発売元:フロンティアグルーヴ〉**

中世ヨーロッパの町並みを美しく再現! 都市建設と領土拡大、どちらも楽しめる秀作!!

メディーバル ローズ
〜中世都市建国〜
8190円(税込)
Win98/2000/Me/XP
好評発売中



Present 12
3名

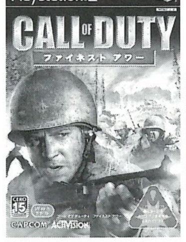




中世ヨーロッパを舞台にした建築シミュレーション。と同時に、経済をマネージメントしながら軍を編成し、敵を倒して領土を広げていく。更地に集落を作り、作物を植え、井戸を掘って道を作る……。都市をゼロから作り上げるのが楽しい。あたかも神にでもなった気分が味わえる。グラフィックも美しい。中世の町がリアルに画面上に再現され、見ているだけでも楽しい。建設できる建物は約100種類。スゴイ!**〈発売元:ズー〉**

第二次大戦に生き、死んでいった兵たち! 戦場で得たものとは何か? 勝利とは何か!?

コール オブ デューティ :ファイネストアワー
7140円(税込)
プレイステーション2/X-box 好評発売中

Present 13
3名
(プレステ2用ソフト)



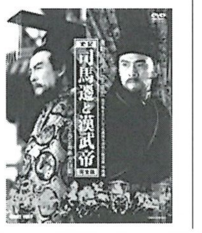


第二次世界大戦での連合軍の勝利、それは名もなき兵士たちの活躍によって得られたものだった。本作はそれをテーマに、スターリングラード攻防戦、バルジの戦い、レマーゲンの戦い、マレトの戦いなどの激闘を描く。視覚、音響、武器・兵器、戦場で交わされる友情……極限まで再現された4つのリアルが胸を打つ。近くで手榴弾が炸裂したとき、登場人物の耳が一瞬聞こえなくなったり、画面がぶれたりする演出が秀逸。また、各国が実際に使用していた武器のリアルさは、本誌読者も納得する緻密さ。敵の銃撃を受ける友軍兵士、それをかばう味方……。間違いなく戦場で見られたであろう現実がここにある。**〈発売元:カプコン〉**

古代中国に繰り広げられる壮大な人間ドラマ!!

中国中央電視台が1995年に製作し、大ヒットしたテレビドラマの完全DVD化。古代中国史を語る上で欠かすことのできない歴史書『史記』を著(あらわ)した司馬遷(しばせん)と、中国史上最高の名君とされる漢の武帝(ぶてい)。ふたりの生きざまを鮮やかに綴(つづ)る。漢代の最盛期、長い治世も終わりに近づいたゆえの気まぐれか、司馬遷の才能を妬(ねた)んでか、武帝は司馬遷が父から受け継ぎ、生涯を賭けて編纂した『史記』を火中へ投じてしまう……。壮大な中国古代史を知るには最適。**〈発売元:コニービジョン〉**

DVD-BOX
司馬遷と漢武帝
18900円(税込)
好評発売中
全3巻18話/
本編約840分



新着情報 プレゼント 応募方法

140〜141ページで紹介したプレゼント8〜13は、巻末のとじこみハガキに住所・氏名・年齢などの必要事項とアンケートの回答、並びにご希望のプレゼント番号をお書きの上、ご応募下さい。

なお、雑誌公正競争規約により、この懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合があります。あしからずご了承下さい。

また138〜139ページ「新刊紹介」、142〜143ページの「プレゼント」にもプレゼント商品が掲載されています。そちらもあわせてご覧下さい。いずれの商品も締め切りは平成17年12月6日(消印有効)とさせていただきます。

Present!
プレゼント！



Present 14
2名
ドイツⅣ号戦車J型
⬇Ⅳ号戦車の最終型、J型。平面構成の車体や砲塔シュルツェンなど、ドイツ戦車らしい姿をリアルに再現。ワイヤーカッターなどの車外装備品も立体感十分(1/48。1785円・税込)。



Present 15
2名
アメリカM10駆逐戦車（中期型）
⬆シャーマン戦車のシャーシにオープントップ式の旋回砲塔を搭載したM10駆逐戦車をモデル化。砲塔内部や戦闘室の一部まで、立体感豊かに表現されている(1/48。1785円・税込)。



Present 16
2名
ドイツⅤ号戦車 パンサーG型
⬇第二次大戦時、最良の戦車といわれたパンサーG型。防盾は初期タイプとアゴつきの2種類入り。消炎排気管やヒーターユニットのパーツもセット(1/48。1890円・税込)。



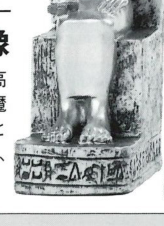
Present 17
1名
WWⅡドイツ装甲擲弾兵チーム
⬆第二次大戦後期のドイツ軍兵士フィギュア・セット。躍動感あふれる装甲擲弾兵のほか、さまざまな服装の戦車兵3体と軽車輌の乗員2体、小火器や装備品もセット(1/48。945円・税込)。





Present 21
3名
カフラー王像
⬆クフ王の子カフラー王の像（高さ70ミリ）。その名は「ラーのごとく出現する者」を意味する。エジプトのギザにある3大ピラミッドの第2ピラミッドと大スフィンクスを建造した。

Present 20
3名
セクメト像
⬅太陽神ラーの娘セクメトの像（高さ82ミリ）。戦闘と破壊の神とされ、牝獅子頭の女神として表されることが多い。頭上の丸は日輪を意味している。





Present 19
3名
イシス像
➡豊穣の女神、地母神イシスの像（高さ77ミリ）。夫オシリスの遺体を魔術をもって接し、その子を宿したという。子の名はホルス。天空神とも、父の復讐者ともいわれる神である。

Present 18
3名
ツタンカーメン王像
⬅黄金のマスクで有名なツタンカーメン王の像（高さ97ミリ）。アメンホテプ4世（アクエンアテン）の女婿、または実弟ともいわれる。その王墓発見は20世紀最大の発見とされている。



Present 23
4名
キーホルダー
⬅ロシア帝国における極東の要、ウラジオストックのキーホルダー。「東を制せよ」を意味するその名の通り、かつてウラジオストックは一大軍港だったが、現在はロシアの重要貿易港となっている。キーホルダーの色は青とピンクの2種類。

Present 22
5名
バッジセット
➡1917年の第二次ロシア革命を指導したレーニンを記念して作られたバッジのセット。





Present 24
5名
絵ハガキセット
⬆ロシア・ウラジオストックの軍事博物館で購入。各種高射砲や沿岸砲台、移動式対戦車砲など、第二次世界大戦で使用されたソ連軍の兵器が印刷された絵ハガキセット。



(左)山内千代を描く「見性院肖像画」（土佐山内家宝物資料館蔵）
(右)初代土佐藩主を描く「山内一豊肖像画」（土佐山内家宝物資料館蔵）

Present 25
5組10名
大河ドラマ『功名が辻』特別展「山内一豊とその妻」招待券
⬅賢妻・千代に支えられ、土佐一国の領主となった山内一豊。一豊と千代の人物像と山内家伝来の名宝を紹介する特別展の招待券をプレゼント。会場は江戸東京博物館。期間は12月23日～平成18年2月5日。お問い合わせは江戸東京博物館（03-3626-9974）。※以後、静岡、高知を巡回。

Present 28
2名
DVD『砂丘の敵』
⬇第二次大戦のアフリカ、マニエカ駐屯地を舞台に、錯綜する戦況とそこに生きる人々の混乱を描く。武器商人の顔も持つ謎の美女。彼女は敵か味方か……。監督は巨匠ヘンリー・ハサウェイ。本編88分／モノクロ(3990円・税込)。

Present 27
2名
DVD『北極星』
⬇1943年制作。当時、アメリカとソ連が同盟国だったため、ハリウッドがソ連に敬意を表した珍しい作品。ソ連の片田舎、ノーススター村を襲うドイツ軍に対し、命を賭けて挑む村民の誇り高き戦いを描く。本編106分／モノクロ(3990円・税込)。

Present 26
2名
DVD『激戦地』
⬇1943年9月11日、連合軍によるイタリア、サレルノ湾占領作戦を遂行すべく進撃する、米第36師団（通称・テキサス師団）の苦闘を描く。監督は『西部戦線異状なし』のルイス・マイルストン。1946年制作。本編117分／モノクロ(3990円・税込)。







応募方法

142～143ページに掲載されているプレゼント（14～28）をご希望の方は、巻末とじこみハガキにアンケートの回答と本誌へのご意見・ご感想、並びに住所・氏名・年齢・ご職業などの必要事項を記入の上、ご応募下さい。
また今号のプレゼントは、138～139ページ「新刊紹介」にて新刊のプレゼントを、140～141ページ「新着情報」ではゲームのプレゼントを掲載しています。そちらもご覧下さい。

本号に掲載されているいずれのプレゼントも、締め切りは平成17年12月6日（消印有効）とさせていただきます。当選発表は、2月号（平成18年1月6日発売）の誌面にて行います。
なお、雑誌公正競争規約により、この懸賞に当選された方は、この号のほかの懸賞に当選できない場合があります。あしからずご了承下さい。
（※事務処理上のお願い：ご住所は、できれば都道府県名からお書き下さい）

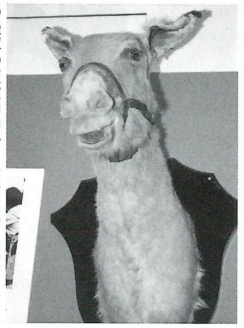
14～17提供／田宮模型（www.tamiya.com）　25提供／東京都江戸東京博物館（www.edo-tokyo-museum.or.jp）
26～28提供／ソッピース キャメル（www.sopwith.jp）

読者の声

金歯を贈られた伝説のロバ

戦後六〇年にあたる本年、東京の恩賜上野動物公園にて企画展「ライオン・カテリーナのメッセージ!～戦中・戦後の上野動物園～」が催され、久しぶりにロバの「一文字」の胸像剥製を見ることができました。

昭和十二年七月十日、中国の北京郊外の盧溝橋付近での戦闘において、歩兵第1連隊牟田口部隊の弾薬運搬用として現地調達された河原毛のロバ「一文字」(当時四歳)は、盧溝橋の戦闘および南苑、北京で数回の戦闘に参加し、弾薬運送にめざましい働きをみせたことで功績を称えられました。



➡陸軍の使役動物から動物園の人気者と、数奇な一生を送った「一文字」。その穏やかな表情は、自慢の金歯を誇らしげに見せているようだ。

昭和十四年一月、「一文字」は派遣軍司令官の寺内寿一陸軍大将より戦場の軍功動物として恩賜上野動物公園に寄贈されます。

その後「一文字」は戦中の食料欠乏難にも耐え、戦後には園内の「こども動物園」において、サマースクールなどで子供たちに愛されました。

昭和三十八年には老齢で歯を失いますが、今までの功績から前代未聞の「金歯」をプレゼントされるなど話題を振りまき、昭和四十年三月に息を引き取ったそうです。

埼玉県　RA

◆

パンプキン爆弾投下地点へ

広島・長崎に原爆を投下する前、アメリカ第509混成飛行群が原爆の訓練用模擬弾(通称・パンプキン爆弾)を、日本各地に投下したことは有名である。

その一発が新潟県鹿瀬町(現・阿賀町)に投下されたと聞いて、投下地点を訪れてみた。

会津の塩川駅から磐越西線で一時間余、昼過ぎに鹿瀬駅に着いた。線路に沿ってしばし歩き、道端で休んでいる男性がいたので話しかけてみると、なんと彼は九歳当時、パンプキン爆弾が投下された一九四五年七月二十六日、爆心地ちかくの防空壕の中で大きな爆発音を聞いたとのこと。



⬆左手奥の杉林がパンプキン爆弾投下地点。投稿者の角田氏は、米軍機が投下時に撮影した航空写真を入手し、場所を再確認したという。

不思議な偶然に驚きつつ歩を進めていくと杉林が茂る小山に到着。ここが目ざす爆心地であったが、残念ながら現在それらしい痕跡は残っていなかった。

通説では、米軍は昭和電工鹿瀬工場を目標にしたといわれているが、今回の訪問で地元民に聞くと異口同音に、

「目標は阿賀野川の鉄橋だった」と答えてくれた。たしかに昭和電工には当時、連合軍の捕虜収容所があったし、広島の原爆も相生橋を目標としているので、納得できる話である。

東京都　角田昌夫

◆

二・二六事件の慰霊像

先日、ブラブラと渋谷を散歩していた折、税務署の角地に慰霊像を発見。以前なら素通りするところ、貴誌の「戦争遺跡情報」の影響であろうか、吸い寄せられるように碑文の前へ。

それは「二・二六事件」の追悼碑であった。この辺りは、かつての陸軍用地であり、追悼碑が建っているのは陸軍監獄の処刑場跡で、事件を起こした青年将校らが刑死した場所だという。

現在は「若者の街」の象徴となっている渋谷だが、昔は軍靴の音が響く殺伐とした土地だったと知り、感慨ぶかいものがあった。



➡慰霊像が建つ一帯は旧陸軍の敷地であったが、東京オリンピック前後に再開発され、かつての痕跡はほとんど残っていない。

ちなみに、今はもう撤去されてしまったが、平成十一年ごろまでは、東急ハンズ前の神南小学校下交差点の石垣に「陸軍用地」と彫られた境界石柱が残っていたそうだ。さぞやシュールな光景だったことだろう。

東京都　橋本信哉

◆

■私は、陸軍第14軍第16師団第20連隊の捜索隊員として、昭和十六年十二月二十四日、マニラ南東のラモン湾に敵前上陸し、マニラ入城に一番乗りしました。73号の「フィリピン攻略戦」を読み、当時を思い出して感無量でした。

千葉県　島川寅一

■よく戦記物を読んでいると、偵察員が敵艦隊の報告を誤ってしまうシーンが見られ、そのたびに「なんで間違えるのか!」と思っていました。が、73号の「艦艇識別入門」を拝読し、識別がいかに難しい作業であるのか少しだけわかった気がします。

沖縄県　東郷五十六

■小林源文先生の「アフリカ軍団」を毎号愛読しています。撃墜王マルセイユとロンメルが出会うシーンがどのように描かれるのか、今から楽しみです。

愛知県　岡田治久

戦争遺跡NEWS

陸軍海上挺身隊の「Ⓡ」が潜んだ特攻艇秘匿壕〈沖縄県島尻郡渡嘉敷村〉

沖縄県慶良間諸島の渡嘉敷島にある、村指定の戦争遺跡「特攻艇秘匿壕」に行ってきました。

村の指定は今年の三月一日ということですから、指定の新しい戦争遺跡です。全国的にみても、特攻艇の秘匿壕というのは珍しいのではないでしょうか。



➡秘匿壕の内部写真。水際に掘削され、敵偵察機に発見されぬよう念入りに草木で偽装していた。

掲示板によると、赤松嘉次大尉率いる「海上挺身戦隊第三戦隊」の特攻艇一〇〇隻、人員五四〇人余が配備されていたとのことです。

壕内は特攻艇が縦に二隻秘匿できる広さがあり、堅い岩石(黒色千枚岩)をくりぬいて造られています。渡嘉志久海岸ちかくの藪中にあり、いつでも出撃可能な状態であったことがわかります。

当時は、特攻艇を浜に移動させるためのレールが二本、壕の前に敷かれていたそうです。

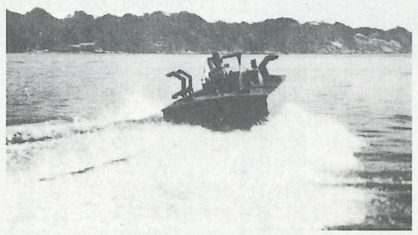
愛知県　吉瀧正勝

◆

[陸軍海上挺身戦隊]

昭和十九年二月、連合軍はマリアナ諸島、ニューギニア西部まで進出。戦局は日本にとって著しく不利になっており、圧倒的な兵力で押し寄せる敵の進撃を阻止するため、陸軍は同年七月、海上から敵船団に肉薄して必中必殺の奇襲攻撃を行う「海上挺身戦隊」を編成した。

肉薄攻撃艇は、スパイの目をゴマ化すため「連絡艇」と称され、頭文字をとって通称「Ⓡ」と呼ばれた。「Ⓡ」は長さ五・六メートルのベニヤ製のボートで、操縦席の後ろに二二〇キロ爆雷を二発積んで敵艦に近づき、急速転舵して爆雷を投下し、破壊する仕組みであった。



⬆航走中の四式肉薄攻撃艇「Ⓡ」。アーム状の爆雷保持器具が確認できる(写真は特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会刊『特別攻撃隊』より転載)。

船首に爆装が施された海軍の水上特攻艇「震洋」と違って、一応は生還できる仕組みになっていたが、所詮は机上論であり、実際は体当たり特攻したケースが多かったという。

終戦までに約四〇〇〇隻以上が生産され、渡嘉敷島には一〇〇隻が配置されたが、指揮系統の混乱などから一隻も出撃することなく自沈した。

(編集部)



⬅渡嘉敷島へは那覇市の泊港より船。

■戦艦大和の乗組員だった江本義男氏のインタビューは、帝国海軍将校の迫力が文章から感じられ、大変印象に残りました。

熊本県　遠藤智明

■「フィリピン攻略戦」の記事を大変興味ぶかく読ませていただいた。緒戦の勝利に隠された目に見えない亀裂が、軍司令部と各部隊間にあったということを初めて知りました。

宮崎県　黒木幸信

■「日本の軍用船」シリーズに紹介されていた「三景」艦、以前から変わった砲配置だなと思っていたのですが、記事を読んでますます不思議なフネだと感じました。もし、四番艦が建造されていたら命名はどうなったんでしょうね?

広島県　今田　浩

■「幕末英仏駐屯軍」の記事で、日本が欧米の植民地にされるかどうかは、本当に紙一重だったということが良くわかりました。

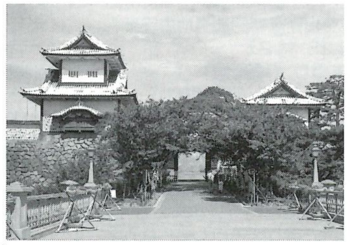
兵庫県　森　健哲

Topic　城郭&歴史ファン必見の公開講座!

金沢城フォーラム「石垣の匠と技」

加賀百万石を象徴する金沢城の石垣は、時代的にみても積み方からみても、たいへん多様性に富んでおり「石垣の博物館」と形容されている。

平成14年度から本格的に金沢城研究調査事業に着手してきた石川県教育委員会は、これまでの成果を整理し、調査によってどこまで解明されたかを紹介するため「金沢城フォーラム」の開催を決定した。石垣の築造過程や構築技術などについて多面的に検討した結果が発表されるので、是非訪れておきたい。



【フォーラムの内容】
講　演「石垣の匠と技」
報　告「金沢城の石垣調査」
「戸室石切丁場の調査」
「城郭石垣を築いた人々」
「金沢城の石垣に学ぶこと」
※パネラーを招いての討論会もあり
【日　時】平成17年11月20日(日) 10:00～16:00
【会　場】石川県地場産業振興センター　本館大ホール(入場無料)
【主　催】石川県・石川県教育委員会
【問い合わせ】石川県教育委員会事務局文化財課
金沢城研究調査室(TEL076-223-9696)

投稿大募集!!

「歴群フォーラム」では読者の皆様からの投稿を募集しています。身近な歴史情報や史跡探訪記、独自の歴史解釈など歴史群像編集部「フォーラム係」までお寄せください。投稿は返却しませんので、写真など必要な場合は複写をおとりください。戦争遺跡情報も引き続き募集中です!!

2005年全国イベントカレンダー ◆ 忙しい年末年始は、心の疲れが溜まりがち。そんな時こそイベント巡りでリフレッシュ！

11月 November

◆開館記念特別展「長崎大万華鏡～近世日蘭交流の華 長崎～」（長崎県）
開催中～1月9日（長崎歴史文化博物館）
今年11月3日にオープンした同博物館では、日本の海外交流史に関する貴重な資料4万8000点を一堂に集め、開館を記念してオランダとの交流をテーマに特別展示を行っている。国際色豊かな美術工芸品や絵画をじっくり観賞しよう。
問い／長崎歴史文化博物館
℡095-818-8366

◆萩時代祭り（山口県）
11月12日～13日（萩市）
280年以上の伝統を誇る「萩大名行列」が目玉の祭り。総勢200名を超える大規模な大名行列が、金谷天満宮を目指して萩市内を練り歩く姿は圧巻だ。さらに、駕籠に乗った姫の前で舞う「草履舞」や、長さ5.5mにも及ぶ長州一本槍による舞などが行列に華やかさを添える。
問い／萩時代まつり実行委員会事務局
℡0838-25-3139

◆坂東市岩井将門まつり（茨城県）
11月13日（坂東市）
平将門の勇姿を甦らせるべく昭和47年から始まった祭り。国王神社の杉並木を神田明神将門太鼓の響きの中、総勢100名の武者が練り歩く。祭りの最後には市内の十字路で、稚児行列、神田ばやしの山車5台、将門太鼓の競演が見られる。
問い／坂東市観光協会
℡0297-20-8666

◆長岡京ガラシャ祭（京都府）
11月13日（長岡京市）
長岡京市・勝龍寺城址にある勝龍寺城公園の完成を記念して平成4年から始まった市民祭り。今から約400年前に勝龍寺城に嫁いできた細川ガラシャ夫人を偲び、その輿入れの模様を再現する「お輿入れ行列」、そして「町衆祝い行列」、楽市楽座など幅広い催しが行われる。
問い／長岡京ガラシャ祭実行委員会事務局　℡075-959-1299

◆第84回秋の全島闘牛大会（沖縄県）
11月13日（沖縄市）
闘牛場で気性の荒い牡牛同士が真剣勝負を行う沖縄の「闘牛」。この大会は年40回以上行われる闘牛大会の頂点に位置するビッグイベントで、例年4000人以上の観客を集める。沖縄最強の牛を決定する「王座防衛戦」は大興奮必至！
問い／沖縄闘牛振興友の会
℡098-857-0185

◆逗子海岸流鏑馬（神奈川県）
11月20日（逗子市逗子海岸）
疾走する馬上から弓を射る、かつて最高の武技とされた流鏑馬。このイベントでは、武者行列が亀岡八幡宮を出陣、市内を練り歩き、そして流鏑馬会場である逗子海岸においては勇壮な演武を行う。また、逗子銀座通りでは稚児行列も開催。
問い／逗子市商工会
℡046-873-2774

◆たかとり城まつり（奈良県）
11月23日（高取町）
高取山に築城された山城・高取城城址とその城下町の2か所で行われる、高取町あげての観光イベント。古い町並みと雄大な城址の観光とあわせて、火縄銃の実演、時代行列、和太鼓演奏など、もりだくさんの催しが楽しめるはず。
問い／高取町役場企画課
℡0744-52-3334

◆利根スカイフェスティバル in KAZO（埼玉県）
11月27日（加須市）
河川敷緑地公園をメイン会場として開催されるスカイスポーツイベント。ヘリコプターや軽飛行機のデモフライト、熱気球の体験搭乗などが行われるほか、航空自衛隊からアクロバット飛行チーム、ブルーインパルスが飛来する予定だ。
問い／加須市商工会青年部事務局
℡0480-61-0842

12月 December

◆河渡祭（山口県）
12月1日（下関市住吉神社）
石見国江川で毛利氏と尼子氏が戦ったとき、毛利元就が全軍に神酒と餅粥を与え、その勢いをもって江川の戦に臨み、勝利を収めたという故事に始まった、住吉神社における開運の祭り。当日は一般参拝客に餅粥がふるまわれる。
問い／住吉神社
℡0832-56-2656

◆エアフェスタ浜松（静岡県）
12月4日（航空自衛隊浜松基地）
空自発祥の地である浜松の航空祭。同基地の第1航空団所属のT-4による大編隊飛行などのほか、小松・岐阜からはF-15やF-2が飛来、機動飛行を行う。また、ブルーインパルスの展示飛行、米軍機の地上展示など、見どころは多い。
問い／航空自衛隊浜松基地広報班
℡053-472-1111

◆新田原基地航空祭（宮崎県）
12月10日（航空自衛隊新田原基地）
F-15、F-4による大迫力の機動飛行展示が例年人気を集める新田原基地の航空祭は、自衛隊機ファンならば見逃し厳禁。もちろん、おなじみのブルーインパルスも展示飛行を行う予定になっている。航空自衛隊のほとんどの機体、米軍機がずらりと並ぶ地上展示も要チェックだ。
問い／航空自衛隊新田原基地広報班
℡0983-35-1121

◆鉄砲まつり（埼玉県）
12月10日～11日（小鹿野町）
飯田八幡神社の例大祭。200年の伝統を持つ小鹿野歌舞伎の奉納、大名行列などが行われた後、参道の両側で盛大に発射される空砲の中、2頭の神馬が社殿を一気に駆けのぼるという、息をのむ「お立ち」の神事で祭りは締めくくられる。
問い／小鹿野町役場産業観光課
℡0494-79-1100

◆那覇基地エアーフェスティバル（沖縄県）
12月11日（航空自衛隊那覇基地）
第302飛行隊のF-4EJ改による展示飛行が呼びもの。この基地は民間の那覇空港と隣接しており、沖縄でしか見られないエアライナーの数々を間近で見ることができるのもうれしいところだ。各種航空自衛隊機のほか、那覇救難隊のヘリコプターによる救難訓練展示なども予定されている。
問い／航空自衛隊那覇基地渉外室
℡098-857-1191

◆赤穂義士祭（兵庫県）
12月14日（赤穂市）
四十七士が吉良邸に討ち入りを果たした12月14日に開催される赤穂市の一大イベント。一般公募で選ばれた出演者が扮する義士たちが、赤穂城から播州赤穂駅までの道のりを行進する義士行列、忠臣蔵の名場面再現などを行い、元禄と忠臣蔵の世界をたっぷり味わえる。
問い／赤穂市産業振興部観光商工課
℡0791-43-6839

◆大河ドラマ<功名が辻>特別展「山内一豊とその妻」（東京都）
12月23日～2月5日（江戸東京博物館）
2006年新春からスタートするNHK大河ドラマに連動した企画展が開催される。戦国の世を生き抜き、功成り名を遂げた山内一豊と、「内助の功」で夫をもり立て続けたその妻にスポットをあて、山内家伝来の名宝からよりすぐった展示品によって彼らの人物像と時代背景を探る。
問い／江戸東京博物館
℡03-3626-9974

◆よこすかカウントダウン2005（神奈川県）
12月31日（横須賀市）
洋上に打ち上げられる花火、そして美しいイルミネーションで飾られた、自衛隊および米軍艦船の汽笛で新しい年を迎える港町横須賀ならではの年越しイベント。会場内では、各種音楽のステージイベント、カレー横丁、キャンドルイルミネーションなど多彩な催しがいっぱい！
問い／横須賀市観光協会
℡046-822-8301

2006 1月 January

◆新春特別展「奉納 現代刀匠刀剣展」（東京都）
1月1日～15日（靖國神社遊就館）
人間国宝大隅俊平氏をはじめとする刀匠約20名の刀剣最新作を展示。日本文化・工芸の神髄をまのあたりにできるチャンスだ。1月2～4日、7・8日には刀匠・研師らによる研磨などの実技公開も行う。
問い／靖國神社遊就館
℡03-3261-0998

◆陸上自衛隊第1空挺団初降下訓練（千葉県）
1月8日（陸上自衛隊習志野演習場）
陸上自衛隊の精鋭部隊として名高い習志野駐屯地第1空挺団の2006年「降下はじめ」の一般公開。C-1、C-130Hなどからの落下傘を使った空挺降下、AH-1Sなどのヘリコプターを駆使した模擬戦、チヌークの編隊飛行など、各種の派手な訓練展示を見ることができる。
問い／第1空挺団広報班
℡047-466-2141

●日程・行事などは変更される場合もございます。お出かけの前に電話・ホームページなどでご確認ください。



第二次大戦の猛将パットン。彼はカルタゴの名将ハンニバル（左）をはじめ、過去に幾つもの時代を生き、戦士として戦ったと公言していた。

戦場のミステリー
第7回 輪廻転生するパットン

文＝不二龍彦

第二次大戦で最大の英雄として名を馳せたアメリカ陸軍のジョージ・パットン将軍は、自分は古代から繰り返し軍人に生まれ変わり、数々の戦争を経験してきたと堅く信じ、周囲にもそう漏らしていた。

パットンの〝前世〟における軍歴は、実に華華しい。ギリシアに生まれたときはトロイア戦争に参戦し、カルタゴではハンニバル将軍として生まれてポエニ戦争などの指揮をとった。アレキサンダー大王の時代にはフェニキアで軍務につき、カエサル時代にはローマ軍の百卒長として働き、ナポレオンの麾下では元帥ミュラとともに戦ったともいう。

パットンは敬虔なクリスチャンで、仏教徒だったわけではないが、輪廻転生は信じて疑わなかった。その証拠として、彼は、過去一度も行ったことのない土地であるはずなのに、かつてそこにどんな建物があり、あるいはどんな戦闘が行われたかなどを、自分が詳細に見知っていることを挙げている。

たとえば、こんな例がある。

一八八五年、カリフォルニア州に生まれたパットンは、ウェストポイント陸軍士官学校を卒業して職業軍人となり、第一次大戦では大尉として、新たに編成された米軍戦車部隊の指揮をとった。

このときパットンはフランスのラングル高原で戦っているが、着任時、周辺の土地を案内しようとしたフランスの連絡将校に対し、「その必要はない。この土地はよく知っている」と答え、初めての土地であるにもかかわらず、運転手に行き先の指示まで与えたと、甥でパットンの伝記作者でもあるフレデリック・エアに語っているのだ。

世界的にヒットした映画『パットン大戦車軍団』（一九七〇）の中にも、パットンが古代の戦場跡で「私にはわかる。私はここにいた」と前世を回想するシーンが出てくるが、あれは実話なのである。

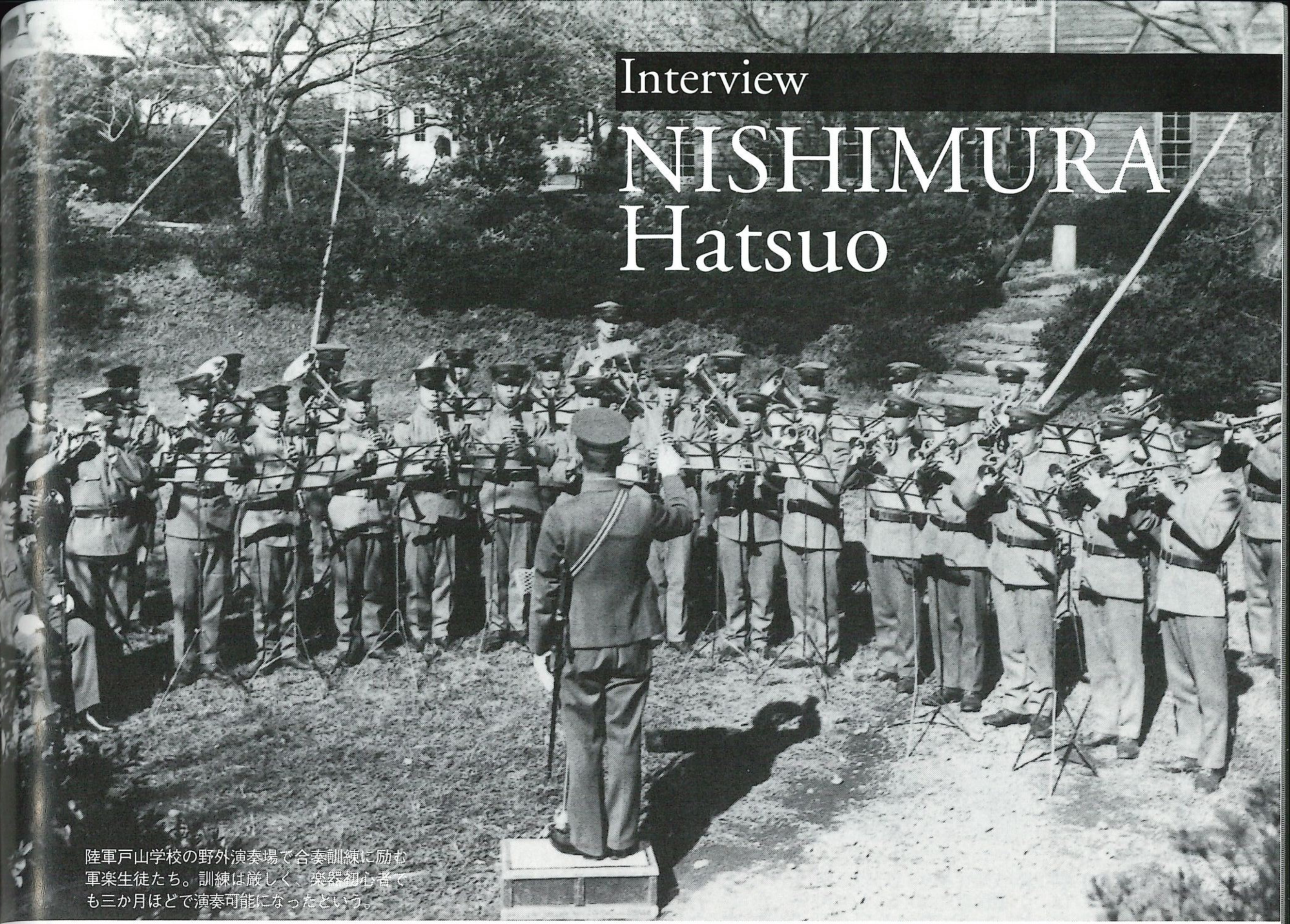
こうしたデジャビュ（既視感）や、戦局に関する予知などの能力は、第二次大戦時にもしばしば発揮されており、ともに戦った軍人の多くが、パットンの持つ心霊的な感知力や、鋭敏な「第六感」について、確かにあったと証言している。「前進」「突撃」命令一点張りの猛将として恐れられたパットンが、将兵から厚く慕われていた理由のひとつは、このESP（超感覚的知覚）と、それに基づく指揮にあったともいわれる。

ちなみに、第二次大戦でパットンが戦ったナチスドイツのヒトラー総統やSS長官のハインリッヒ・ヒムラーは輪廻信者で、ヒトラーは自分の前世をフリードリッヒ一世などに擬し、ヒムラーはハインリッヒ一世だと信じていた。

パットンの死は一九四五年十二月二十一日。一度、アメリカに戻ったのち、同年十月に米軍占領下のドイツで第15軍司令官となったが、それから二か月後に交通事故で首の骨を骨折するという重傷を負い、程なく亡くなっている。

この再赴任の前に、彼は自分の子どもたちに向かって、「私は欧州で死ぬことになっているから、向こうで埋葬してほしい」との予言を残している。

パットンのESP能力は、最後まで健在だったのかもしれない。



陸軍戸山学校の野外演奏場で合奏訓練に励む軍楽生徒たち。訓練は厳しく、楽器初心者でも三か月ほどで演奏可能になったという。

Interview NISHIMURA Hatsuo

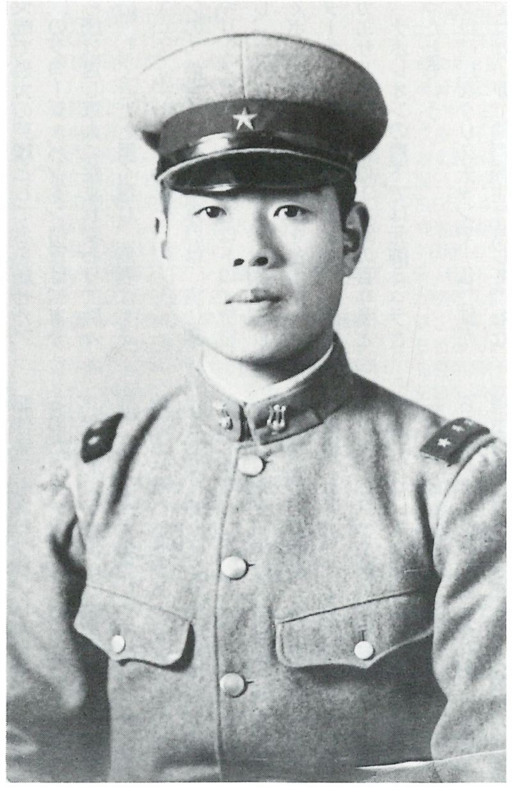
◎インタビュー

元陸軍軍楽隊員

西村初夫

音楽というものは人種であるとか、敵と味方とかそういうものを超えて人と人とを結びつける力を持っていると痛感しました

文＝小畑雄二　写真＝杉本保夫



昭和13年、軍楽上等兵となった西村氏。襟元のハープを象った軍楽兵徽章に注目。

前代未聞の慰問演奏

昭和十五年（一九四〇）二月――。

前線部隊慰問のため、陸軍軍楽隊は広東を出発。船で一昼夜、海南島を左に見て雷州半島をまわり上陸一泊。

「朝起きて、顔を洗おうと川まで行って見ると、上流から死体がゾロゾロと流れてくるんです。とてもじゃないけど顔を洗うような気分になれず、そのまま黙って引き返してきました」

と、西村初夫（元軍楽曹長）は当時の様子を回想する。

そこからトラックで十数時間、軍司令部に到着。四〇日間の演奏業務のはじまりであった。やがて彼らは大陸の南端に位置する広西省南寧市へと足を踏み入れる。

南寧は険しい山岳地帯である。

前線での戦闘もこれまでになく苛烈を極めるものとなっていた。

約三〇名の軍楽隊員は数台のトラックに分乗し、やっと通れる悪路を揺られて、さらに奥地へと向かう。険しい山道を青息吐息で登り詰め、やっと最前線の部隊まで辿り着いた。

部隊は、極端な高地に陣を張っていた。自然条件は非常に厳しい。標高は富士山とさほど変わらず、空気もかなり薄い。

が、西村を驚かせたものは、周囲の自然条件の厳しさではなかった。眼前に広がる異様な光景に、西村は思わず絶句した。

なんと敵の兵士が、すぐ目と鼻の先にいるのである。

「いや、驚きました。山の斜面にこちらの部隊はいるのですが、谷を挟んだ向こう側の斜面に中国兵が散らばっているのです。一〇〇人ぐらいはいたでしょうか。しかし、彼らはこちらを攻撃する素振りもなく、のんびりと塹壕などを掘っているのです。

なぜ戦闘が始まらないのかと聞いてまた驚きました。銃を撃っても弾が当たらないのだというのです。乱気流が激しく渦巻いていて、撃っても撃っても弾は明後日の方向へ逸れてしまう。これじゃ撃ち合っても仕方がないというので、互いに目と鼻の先で睨み合ったまま、いつしか休戦状態になってしまったということでした」

なんとも奇妙な戦場に来たものだと思いながら、西村たちは演奏の準備にとりかかる。

と、そのとき部隊長がとんでもないことを言い出した。

「こんな山奥で素晴らしい演奏を聴く機会などそう滅多にあるものではない。敵さんにも君たちの演奏を聴かせてやりたいから、ちょっと待ってくれ、とこう言うんですよ」

なんとも豪胆な部隊長である。

さっそく敵軍に通信が送られる。

と、返ってきたのは「ぜひ聴かせてもらいたい」という返事であった。敵の隊長も、なかなかの人物であったようだ。

ここに前代未聞の慰問演奏が行われることになった。谷を挟んで敵と味方が整列し、陸軍軍楽隊の慰問演奏を拝聴するのである。

西村たちは演奏を開始した。初めての体験にとまどいながらも、一人ひとりが心をこめてそれぞれの楽器に息を吹き込んだ。

戦場の谷間に、美しいメロディが響き渡る。そこには敵味方の区別なく、素晴らしい音楽の演奏に聞き惚れる聴衆の姿があった。

「一曲目が終わって、中国軍の方を見ると、なんとなく手を叩いているような感じがします。でも、ちゃんとした拍手の音は聞こえてこない。正直、ちょっとがっかりしました。でもまあ仕方ないかと気を取り直して、次の曲に移ろうとしたときのことです。

突然、万雷の拍手の音が鳴り響いてきました。高地の険しい山岳地帯ですから、拍手の音が、山びこみたいに少し遅れてくるんですね。ああ、やっぱり喜んでくれたのだとわかったときは、こっちも本当に嬉しかった。音楽を楽しむ心には、敵も味方も関係ないんだと痛感しました」

陸軍戸山学校

西村初夫が陸軍戸山学校軍楽隊へ入隊したのは昭和十二年十二月二十五日のことである。西村がそもそも軍楽隊を志望したのは、海外への強いあこがれからだった。

「中学校の図書館で陸軍戸山学校の入学案内を見て、ここに入ろうと思ったのです。とくに魅かれたのは、優秀な隊員は官費でフランス留学できるという点ですね。当時はフランス旅行なんて月に行くようなものですよ。もう見果てぬ夢の世界でした」

それだけに人気は高く、入学試験の



軍楽隊舎の裏庭で、愛用のクラリネットを手にする西村氏。担当する楽器は、各自の適性に応じて教官から割り当てられた。

競争率は非常に厳しかった。

「本当に難関でした。私が受けたときは、全国で約二〇〇〇名の応募者がありましたが、合格できるのはそのうちのわずか一〇名。実は、私も最初は落っこちたのですが、かろうじて補欠で合格することができたのです。それだけに、はじめて陸軍戸山学校の門をくぐったときの喜びはひとしおで、あの感激は今も忘れられません」

しかし、入学の喜びも冷めやらぬうちから、校内では厳しい現実が西村を待っていた。

陸軍戸山学校はもともと武道の学校である。剣道、射撃、体操など全国の強者を集め、さらに鍛え上げようという学校なのだ。たとえ軍楽隊の生徒といえども容赦なく、厳しい教練が繰り返されたのである。

「教官の中には鬼のような人がいて、徹底的にやられました。あれは辛かったですね。ただ、私たちは音楽をやるからひ弱な生徒ってわけではないんです。もともと軍楽隊に入るには、徴兵検査の*甲種合格と同じでなければ入れませんから、それなりの身体はみんな備えていました。だから、厳しい訓練にも何とかついていけたわけです」

もちろん、本業である音楽の授業も生易しいものではなかった。午前と午後にそれぞれ担当楽器の実技練習が行われ、さらに音楽理論も学ばなければならない。

「私も含めて新入生のほとんどが楽器演奏は未経験の素人です。それが一年後には先輩達の間に入って、ちゃんと合奏できるようにならなければなりません。基礎の基礎からみっちりと教え込まれました。こっちも一生懸命に努力しましたが、教える教官の方々も必死で、たいへん苦労されたと思います」

厳しかったのは授業や教練ばかりではない。西村にとって、戸山学校での忘れられない思い出のひとつとして朝の掃除がある。

「とにかく掃除は徹底してやらされるんですよ。私らは『陸軍戸山掃除学校』って呼んでいました（笑）。朝起きたとたん、すぐに雑巾がけから始めないといけないのですが、これが辛い。前の晩からバケツに水をくんでおくのですが、冬場はこの水がほとんど凍っています。手の切れるような氷水に手を突っ込んで、雑巾を絞って床をスーッと拭くと、拭いた後からパリパリと床に

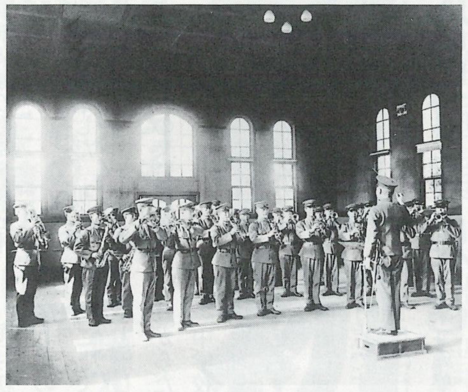
column

陸軍軍楽隊の歴史

明治2年(1869)、薩摩藩の伝習生30余名が、横浜妙光寺にてイギリスの軍楽隊長フェントンに習い、薩摩藩軍楽隊を編成したのが日本の軍楽隊のはじまりである。

明治4年、軍制の制定に伴い陸・海軍にわかれ、陸軍の軍楽隊は明治23年、日比谷から戸山ヶ原にある陸軍戸山学校に移転した。明治期に「近衛」「第三師団」「第四師団」と増設されたが、大正12年に軍縮でこれらは廃隊。陸軍戸山学校軍楽隊のみとなり、以後「陸軍軍楽」と称されるようになった。

昭和12年の日中戦争勃発から太平洋戦争を経て終戦まで、軍楽隊は各方面に出征し、演奏によって戦意高揚や慰安をはかったのである。(編集部)



伝統ある調律場(演奏場)で訓練中の西村氏と同期生たち。

各地に派遣された陸軍軍楽隊員数

○北支派遣隊	56名
○支那派遣隊	50余名
○南支那派遣隊	30名
○関東軍派遣隊	30名
○南方総軍派遣隊	56名
○ビルマ派遣隊	28名
○ジャワ派遣隊	27名
○スマトラ派遣隊	28名
○マニラ派遣隊	57名
○ニューギニア派遣隊	28名
○広島第二総軍派遣隊	36名

＊甲種合格＝現役兵に適する者として、第１級で合格すること。

氷が張っていく。それくらい寒い。雑巾を持つ手も、すぐに紫色に腫れ上がっていきました」

出征命令下る！

本来、陸軍戸山学校は二年制である。しかし日中戦争勃発の影響などもあり、西村たちは一年で卒業を迎えることになる。卒業後は軍楽隊の一員として、国内各地での演奏活動やレコード収録などの忙しい日々を送る。

「給与面ではとても恵まれていたと思います。基本の給料だけで月に四五円貰えました。当時、一流大学卒の初任給がそれくらい。こっちはまだ十八歳で四五円ですから。しかもこの基本給に各種の出張手当てや演奏手当てがついてきます。

たとえばレコード収録の場合、一曲吹き込むたびに二円ぐらい貰えます。一度に一〇曲以上吹き込むこともありますから、それだけで二〇円以上。それを一日で稼いでしまうわけです。階級が上がれば、この手当てもどんどんアップしていきます。隊長クラスになると一日のレコード収録で一〇〇円以上の手当てになることもありました」

恵まれた日々を送っていた西村だが、卒業して四か月後の昭和十四年三月、ついに出征命令が下る。三〇名編成の軍楽隊のクラリネット要員として中国大陸を目指すこととなる。

「呉から船に乗って中国へと向かいました。私たちの船室は広くてゆったりとしていたのですが、一般兵の部屋を見て驚きました。彼らは狭い部屋に三段ベッドですし詰め状態なのです。軍楽隊と一般兵とでは、明らかに待遇が違っているのですね」

軍楽隊への特別待遇は、この後もさまざまな場所で体験することになる。中国に到着した後も、兵舎や食事など、すべての面にわたって軍楽隊員は恵まれた扱いを受けることになる。

「まあ考えてみれば、私たちはそもそも非戦闘員ですからね。一応、兵士としての基礎訓練は受けていますが、武器を操るわけではありません。ある意味、不思議な軍隊ですよ。銃を持つかわりに、楽器を手にして戦地へ赴くわけです。ちょっと一般の兵士とは違いますよね」

前線への移動の際も、軍楽隊には完全な護衛がつく。護衛兵士の数は戦地によってさまざまだが、軍楽隊員とほぼ同数の護衛で手厚く守られることも少なくない。

「トラックに乗って移動していたときのことです。ぼくらは一五人ずつ分乗していたのですが、護衛兵がやはり一五人ずつ武器をもって私たちの前を守ってくれていました。それを見て、歩哨が私たちを戦闘部隊と勘違いしたらしいのです。で、非常に危険な地域へ続く道を通されてしまい、気がつくと敵の勢力の真っ只中に入り込んでいました。そのときは、もう死に物狂いで帰ってきましたよ。さすがにその歩哨は、後で護衛の警備隊長にぶん殴られていたようですけどね（笑）」

忘れ得ぬ思い出

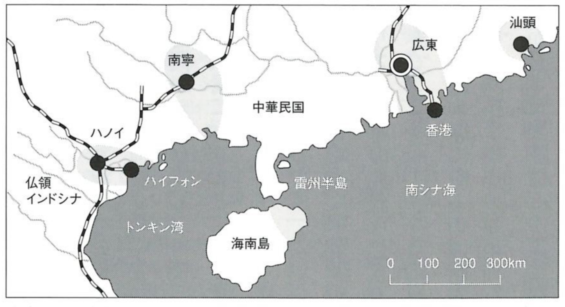
中国大陸へ渡って間もない西村たちに、ひと月もしないうちに前線への移動命令が下った。最初に向かったのは海南島である。

日本軍が占領した直後の海南島は、上陸したばかりの兵隊でごった返していた。

「船から降りたら、ものすごい数の兵隊が港へゾロゾロと集結しています。みんな予防注射を受けようとしているのですが、軍医がなんと二人しかいない。もちろん看護婦などおらず、数名の看護兵がついているだけ。これが何千人もの兵隊たちに予防注射をしようと奮闘しているから、もう大変です。私たちの番になって上着を脱ぐと、もうそれでシャツの上から予防注射を打ってくる（笑）。でも、私たちはまだ上着を脱がせてもらえるだけましでした。一般の兵士は軍服の上からブスブスと注射されていましたから」

大混雑の中をくぐり抜け、司令部へ挨拶にいくと、西村たちは冷えたビー

西村氏が演奏に赴いた主な地域



広東の軍司令部をベースに、西村氏が所属する軍楽隊の南支那派遣隊30名は、中国各地から仏領インドシナのハノイまで演奏に回った（地図上の　部分）。出動先は、所属する軍司令部の作戦参謀長の命令によって決定した。

ルで歓待を受ける。が、ビールを飲み干すや否や、すぐに市中行進を始めてくれと言われ、西村は驚きあきれた。
「いや、あれには参りました。だって島の暑さは尋常なものじゃなかったんですよ。司令部の部屋にある寒暖計ですら上限の四二度を振りきったまま動かない。ましてや外の気温が何度かなど想像すらつきません。


写真は、昭和16年12月28日に行われた香港入城式における軍楽隊の勇姿。西村氏も一員として参加している。日本軍は12月８日の太平洋戦争開戦と同時に英国領であった香港攻略を決行、同月25日に陥落させた。

それでも命令ですから、仕方なく市中行進を始めました。すぐ全身から汗が吹き出ます。まるで風呂からそのまま出てきたようなビショ濡れ状態になりました。途中、大太鼓の人間が、汗ですべったのでしょう、太鼓のバチをスポーンと群衆の中に飛ばしてしまい、それをあわてて拾いに行ったりして、もうさんざんな市中行進になったのを覚えています」

最初からさんざんな目に遭わされた海南島にはおよそ三週間ほど滞在することになる。途中、ゲリラの潜む危険なジャングルを機関銃を撃ちっ放しで突っ切るなど、戦地の恐怖をまざまざと感じさせられることもあった。

この海南島を皮切りに、西村たちの中国大陸を横断する慰問演奏の長い旅が始まるのである。

「中国ではいろんな部隊を訪れましたが、その中の忘れ難い思い出のひとつに、加藤隼戦闘隊を慰問したときのことがあります。

いつものように演奏を終えて、休憩所で休んでいると、部隊長の加藤少佐が私たちの元へやってきました。何事かと思うと、一枚の紙切れを出して、部隊の歌を作ろうと思うのだが、この歌詞に曲をつけてくれないかと言うのです。で、結局、軍楽隊の中の原田曹長と岡野軍曹が、長調の部分と短調の部分をそれぞれ作曲して、それをひとつの曲にまとめあげて加藤少佐に渡しました。それから、曲を吹奏楽用に編曲して加藤隊で演奏するとともに、軍歌指導を何度も行いました。加藤隊を訪れるたびに、戦闘機や爆撃機に搭乗させてもらいましたが、あれは忘れられない思い出のひとつです」

このとき作られた曲が、かの有名な『飛行第六四戦隊歌』、後に『加藤隼戦闘隊歌』として広まった名曲であることは、いまさらいうまでもない。

音楽を愛する心

西村たちの中国大陸での演奏活動は、前線兵士たちへの慰問ばかりではない。ときには意外な人々の前で演奏することもあった。

「香港には陥落した翌日に行きました。そこで入城式をやったのですが、占領したばかりで、まだ敗残兵が潜んでいるかもしれない状況下での行進でした。あれはけっこう怖かったですね。

一週間か一〇日ほどたって、捕虜収容所に演奏に行くことになりました。ところがこのとき、ちょっとした問題が持ち上がったのです」

演奏の準備を始めた軍楽隊の元に、イギリスの捕虜の代表らしき人物がやってきて、こう告げたのである。『インド兵と一緒の席に座るのは断固として拒否する』と。

しかし、軍楽隊はそのような話を聞いていない。一時間ほど捕虜のために演奏するよう言われてきただけである。イギリス兵とすったもんだの言い合いが続いたが、まるで埒が明かない。参謀本部へ電話で問い合わせてみたところ、少し時間を短縮してイギリス兵とインド兵と二回に分けて演奏してやれ、という返事が返ってきた。

「まあ仕方がないということで、私たちは演奏を始めました。イギリス兵はおとなしく聴いてくれて、次にインド兵の番です。同じ曲を二度繰り返して演奏するわけですが、途中から後ろのほうが何かざわめいています。どうし

たのかと思ってよく見ると、なんと先ほど退出したイギリス兵がまた戻ってきているのです。何十人ものイギリス兵が、インド兵のすぐ後ろで鈴なりになって、私たちの演奏に必死に耳を傾けているじゃありませんか。

おそらくこの人たちは、長い間、音楽に飢えていたのでしょう。久しぶりに聴く楽隊の生演奏に魅入られて、もう一度聴かせてほしいと、この場に戻ってきたわけです。あれほどインド兵と一緒の場所ではウンヌンと言っていた連中が、そんなこともすっかり忘れて私たちの演奏に聞き惚れている。この光景を見たとき、ああ軍楽隊に入って演奏を続けてきて良かったな、と心の底から思いました。音楽というものは、人種であるとか、敵と味方とか、ときにそういうものを超えて、人と人とを結びつける力を持っているのだなと思いました」

さまざまな体験を繰り返しながら、西村たちは中国大陸を西へ東へと駆けずり回った。持てる力のすべてを演奏活動に振り向けた。そして、彼らの演奏を聴きたいという聴衆は絶えることがなかった。司令官や参謀、前線の兵士たち、あるいは一般市民、ときには敵兵や捕虜にまで、さまざまな聴衆を相手に、惜しみなく音楽の楽しさ、素晴らしさを伝えてきた。


戦後、西村氏は日本交響楽団（現ＮＨＫ交響楽団）に入団した。写真は昭和40年頃、ＮＨＫホールにて演奏直前の風景。

そうこうするうちに昭和十八年――。にわかには信じられないような命令が下される。

「三年以上同じところにいる者は転属願いを出せ、という命令が隊長から出されました。信じられないような幸運です。私はもう四年経っていましたから、喜んで東京を希望し、やがて転属願いが叶えられることになりました。

普通の軍隊では考えられないような命令ですよね。でも、軍楽隊は陸軍の中にあって特殊な存在でした。軍楽隊には陸軍にもかかわらず、明確なデモクラシーが存在していました。そのおかげで、私は過酷な戦地を離れ、日本に無事帰ることができたのです」

やがて西村は日本で終戦を迎える。が、その後も西村の音楽活動は途切れることがなかった。戦後は日本交響楽団（後のＮＨＫ交響楽団）に招かれ、定年までの三〇年間、クラリネット奏者として海外演奏などにも活躍した。

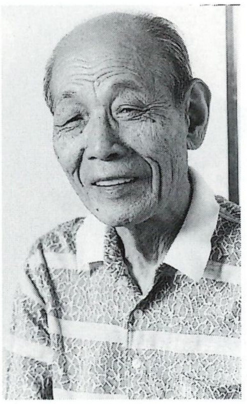
そんな西村が最近気になっていることがあるという。

「いま新宿の戸山ハイツの公園内に、『元陸軍軍楽隊跡』という碑を建てようと有志で活動しているのですが、なかなか許可が下りないのですね。これが私には残念でならない。明治四年の創設以来、陸軍軍楽隊が日本の音楽文化に対して重要な貢献をしてきたのは明白な事実なのです。その跡をきちんと残すことができないなど、あってはならないことでしょう。この記念碑を一日も早く建てたいというのが、いま私の切なる願いなのです」

そう語る西村は、今年で八十五歳を迎えた。が、驚くなかれ、西村はまだ元気に演奏活動を続けている。年に二度かつての仲間が集まり、九段会館で演奏会を開いているというから、もう恐れ入るしかない。

「午後から始まる演奏会なのですが、午前九時にはみんな集合してリハーサルを始めます。ただ、私より四歳も上の人などもいますから、昔話に花が咲いて、これが盛り上がってしまう。で、なかなか練習を始められないのが目下の悩みの種なんです（笑）」

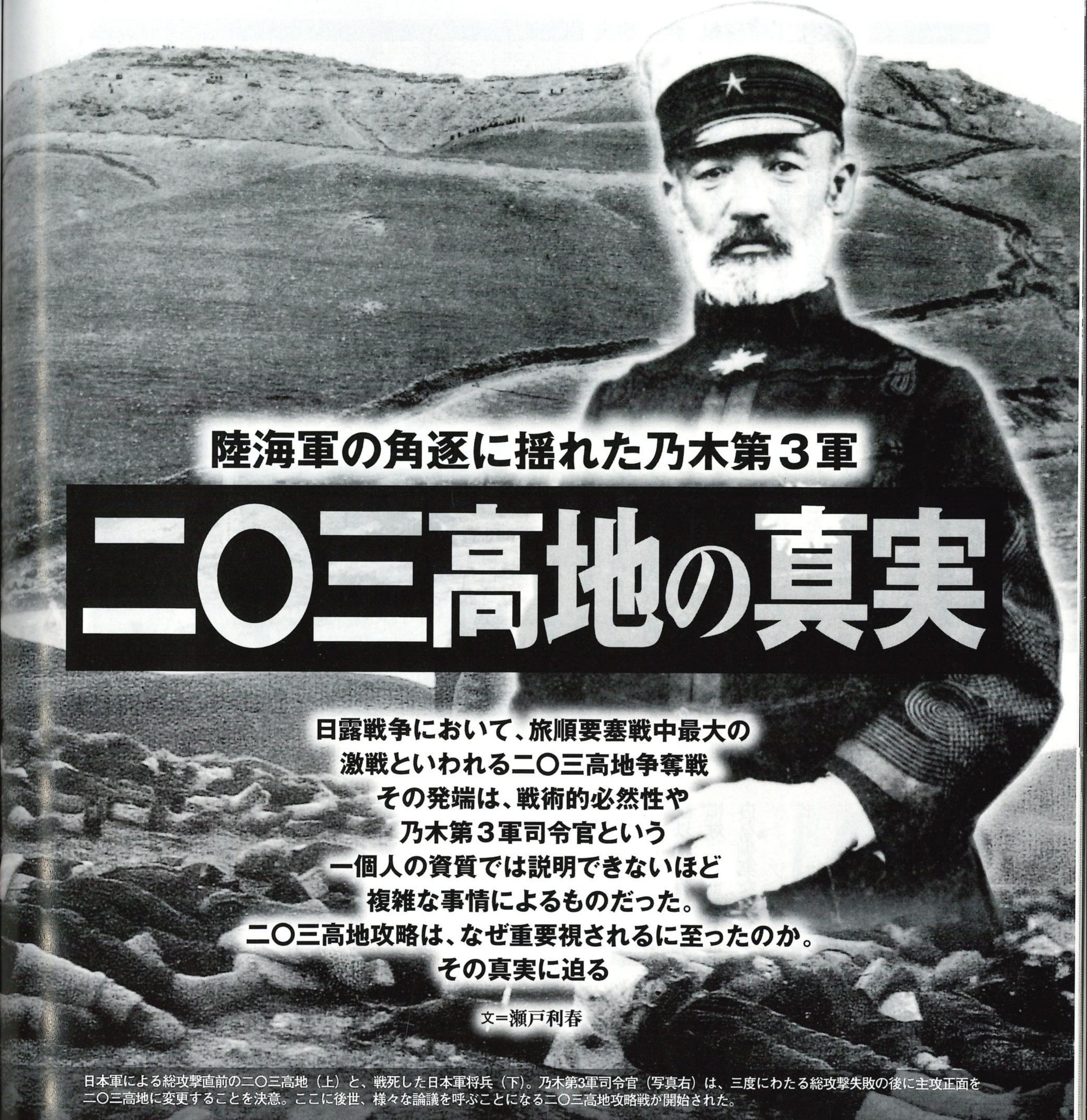
音楽を愛する心には、人種も国境もない。そしてまた同時に、年齢の壁もないことをあらためて教えられたインタビューであった。



Profile

NISHIMURA Hatsuo

西村初夫（にしむら・はつお）大正９年８月、熊本県熊本市生まれ。昭和12年、陸軍戸山学校の門をくぐりクラリネット奏者となる。昭和14年3月、第21軍司令部付の軍楽隊要員として中国大陸に渡り、各地で演奏を行う。昭和18年３月に帰国、終戦まで内地で軍楽隊業務に従事。戦後まもなく日本交響楽団（現ＮＨＫ交響楽団）にエキストラとして参加。昭和22年に正楽員となり、国内はもとより海外演奏にも活躍した。定年後も団友会や旧陸海軍軍楽隊などの演奏会に参加している。



陸海軍の角逐に揺れた乃木第３軍

二〇三高地の真実

**日露戦争において、旅順要塞戦中最大の
激戦といわれる二〇三高地争奪戦
その発端は、戦術的必然性や
乃木第３軍司令官という
一個人の資質では説明できないほど
複雑な事情によるものだった。
二〇三高地攻略は、なぜ重要視されるに至ったのか。
その真実に迫る**

文＝瀬戸利春

日本軍による総攻撃直前の二〇三高地（上）と、戦死した日本軍将兵（下）。乃木第3軍司令官（写真右）は、三度にわたる総攻撃失敗の後に主攻正面を二〇三高地に変更することを決意。ここに後世、様々な論議を呼ぶことになる二〇三高地攻略戦が開始された。

日露戦争において最大級の激戦となった二〇三高地の戦いは、海軍の要請に基づく港内への砲撃を目的として語られることが多い。そして、これを基準にして二〇三高地を攻めようとしなかった乃木の失策という見方と肉弾突撃の繰り返しのイメージとが重なって乃木愚将論が生まれ、これに対する乃木名将論との論争も発生した。

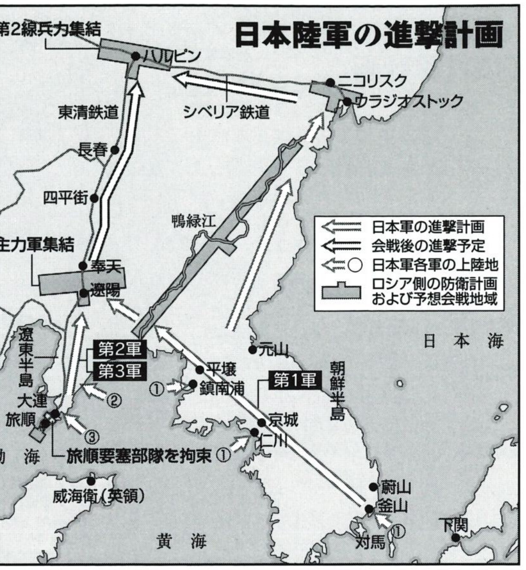
しかし二〇三高地の戦いは港内砲撃だけを目的としたわけではなく、戦術上もさほど単純ではなかったのである。

それでは二〇三高地をめぐる戦いの実相はどのようなものであったのだろうか。

二〇三高地攻略への道

日清戦争後、清国から旅順を入手したロシアはその軍港に艦隊を駐留させ、軍港の周囲には要塞を構築した。これが旅順要塞である。二〇三高地は、その名の通り標高二〇〇メートル強の小山で、要塞の外側に位置する。二〇三高地は要塞を一望できる高地で軍港内部を観測することもできる。にもかかわらず両軍ともこのことに充分な注意を払わなかった。

ロシア軍は、本防御線から突き出た地点に注意せず、日本軍も本防御線の外側の高地に、大きな関心を持たなかった。確かに二〇三高地は旅順要塞の攻防戦において死命を決する要所ではない。戦争前、ここが日露戦争でも屈指の激戦地となるとは誰も予想していなかった。にもかかわらず後に激戦地として両軍に多大な出血を強いることになる。



図は、日露両陸軍の戦略を示したもの。日本軍の方針は、第1軍と第2軍がそれぞれの目標を占領しつつ北上。合流したのち遼陽、奉天方面でロシア軍と決戦、さらに進撃して満州を縦断する分進合撃策であった。そのため、攻勢方向とは反対にある旅順は封鎖するにとどめる予定であったが、海軍の要請等により第3軍投入が決定した。兵力で日本に劣るロシア軍は、日本軍の前進を遅滞させながら野戦軍集結地の遼陽、奉天方面へ暫時後退する作戦であったため、旅順は孤立を余儀なくされる運命にあった。

ロシア側は二〇三高地を主防御線に含むと、現有兵力に比べ防衛ラインが広がり過ぎると判断して二〇三高地を主防御線に含まなかった。ロシア軍は二〇三高地とその周囲の丘にも陣地を構築はしたが、それは警戒陣地にすぎず、本格的戦闘の前には放棄する前地とみなしていた。時間が許せば、これらの場所にもかなりの防御工事を施すつもりでいたが、その前に戦争が始まり、結局二〇三高地の防御施設は野戦陣地にとどまったのである。

一方、日本陸軍には旅順を攻略する意図は戦争前にはなかった。ところが海軍がロシア太平洋艦隊―いわゆる旅順艦隊―の封じ込めに失敗した結果、海軍が陸軍に要塞攻略を要請したのである。陸軍は急遽、乃木将軍を司令官として第3軍を編成し旅順攻略に着手した。この時、第3軍の受けた命令は要塞攻略であり二〇三高地攻撃は含まれていない。後には二〇三高地攻撃を強硬に主張する海軍も、この時は特に二〇三高地攻撃を要望していなかったのである。

旅順要塞は龍河を中心に東西に大きく分割できるが、東西どちらに重点を置くかで第一回総攻撃の前に早くも論争が発生した。大本営の長岡外史次長と満州軍の井口省吾参謀は二〇三高地のある西正面からの急襲を主張し、第3軍の伊地知幸介参謀長は東正面からの攻撃を主張した。

結局、大本営に急がされた第3軍は遠回りになる西正面からのアプローチを捨て、とりつきやすい東正面を主攻軸とした。この方面は要塞内部の制高点たる望台もあり、死命を決する要所と考えられた。第3軍の作戦計画には満州軍の大山巌、児玉源太郎も同意している。

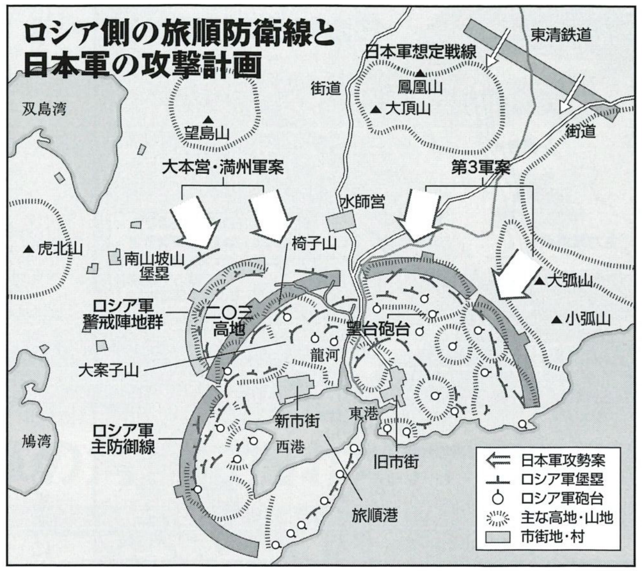
この時の西回りの主張を受けて、当初から二〇三高地攻略論が存在したかのごとく語られるが、これは誤りだ。この時はまだ誰も二〇三高地のことは考えていない。ところが後々二〇三高地攻略が焦点となると、長岡自身が、最初から二〇三高地攻略を主張したように思い込んでしまうのである。

最初の二〇三高地攻撃

一九〇四年（明治三十七）八月十九日、第3軍は総攻撃を敢行したが要塞の本防御線を突破することができず、死傷一万五〇〇〇強の大損害を出して失敗した。

第一回総攻撃の後、第3軍も満州軍も大本営も自分たちの見込みが甘すぎたことを悟った。総攻撃の後、大本営は二八センチ榴弾砲（二八榴）を第3軍に送ったが、これだけが日本軍において攻城砲と呼び得る火砲だった。

第3軍が保有していた火砲のうち、重砲と呼ぶに値するものは一五センチ榴弾砲（一五榴）一六門と、一二センチ榴弾砲（一二榴）二八門だけであった。他に海軍陸戦重砲隊が一二センチカノン砲（一二加）六門を持つだけであった（後に一五センチカノン砲二門が追加された）。この他に第3軍は一二センチカノン砲（一二加）、一五センチ臼砲（一五臼）、九センチ臼砲（九臼）多数を保有したが、これらは明治初年製の旧式砲か迫撃砲に過ぎず、近代戦で攻城砲と呼ぶには、あまりに威力不足であった。こうした中で二八榴はおおいに期待されたのである。



図は、旅順要塞の主な堡塁、砲台配置。堡塁、砲台群は、新旧二つの市街地と湾を囲む丘陵、高地帯に構築されていた。日本軍は、湾に注ぐ龍河でロシア軍防御線を東西に分け、いずれか一方を主攻面に定めようとした。図の矢印は、第一回総攻撃前の攻撃案の対立を示したもので、第3軍の伊地知参謀長が主張する東正面は堡塁、砲台の配置に厚みがあり、長岡次長ら大本営と満州軍側が主張する西正面はやや厚みが少ない。二〇三高地は、西正面に属するが、主防御線からはみ出た警戒陣地群の中心にあった。

その頃、ロシアのバルチック艦隊出港との噂が流れ海軍を驚かせた。旅順艦隊にバルチック艦隊が合流しては日本海軍に勝機はない。驚いた海軍は陸軍をせきたて、港内砲撃のための弾着観測点の確保を求めた。この観測点の候補こそが二〇三高地であった。海軍の要求を受けた第3軍はこれを快諾した。第3軍にも二〇三高地攻撃計画があったのである。

九月十九日、第3軍は攻撃陣地が一応できたことと、二八榴の威力に期待を寄せて第二回総攻撃を発動した。主攻は東北方面である。この総攻撃は九月の攻撃と十月の攻撃の二段階で構成され、九月の攻撃は第3軍側面にある前進堡塁と呼ばれるロシア軍警戒陣地の奪取を目指すものである。

この時、二〇三高地も目標となった。二〇三高地攻略は第1師団の師団長の意見具申を採用したもので、この計画では二〇三高地に助攻を行うことになっていた。本攻撃の上で邪魔になりそうな二〇三高地一帯を攻撃しロシア軍の防御力を分散させる狙いである。二〇三高地は第3軍の主攻方向である要塞東北正面から見て西側に位置する高地で、その前にはより標高の低い南山坡山(なんざんは)、横には老虎溝山(ろうこうこう)（160ページ地図参照）が控える。

日本軍がこの一帯を攻撃するにはロシア軍の左翼側に大きく回り込まねばならず、それゆえ最初の総攻撃では目標とならなかったのだが、要塞攻略を一気に進めることは不可能と判断された今、多少の時間は問題ではない。

第3軍の工兵は南山坡山、二〇三高地攻撃に向けロシア軍の射撃を避けて接近するための塹壕（交通壕）を掘削した。十九日夕方、第1師団砲兵の準備射撃の後、後備二個連隊が攻撃を行った。これは失敗し、翌二十日夕方再度攻撃が行われた。南山坡山は攻撃開始後一〇分で頂上の陣地を攻略した。

ロシア兵は士気阻喪して潰走したという説もあるが、これは誤りだろう。攻城砲兵司令部の佐藤鋼次郎少佐は、日本軍は多大な損害を出したとしている。公刊戦史の記述も激戦を感じさせるものがある。南山坡山のロシア兵は士気阻喪した訳ではなく、激戦の末に拘泥(こうでい)する必要のない前進陣地を放棄したに過ぎない。

南山坡山に比べ二〇三高地ではロシア軍は頑強に抵抗した。日本軍は二〇三高地の二つの頂上のうち、西南側をどうにか確保したが後が続かなかった。そして、ロシア軍、日本軍双方が増援部隊を派遣して激しい争奪戦が展開されたが、攻める日本軍は陣地に拠るロシア軍よりも不利であった。結局、第3軍首脳部は助攻であるがゆえに無理を避け、攻撃を中止した。

ここで不可解なのはロシア軍の動きだ。もともと前地ゆえに早々に放棄すべきはずの二〇三高地を、攻撃を受けるや一転して固守しようとしたのである。特にコンドラチェンコやスミルノフといった積極派は熱心に保持しようとした。それに比べ要塞司令官のステッセルは二〇三高地防御に熱意を示さなかった。一般に、これはステッセル無能論の根拠のひとつとされるが、当初の予定からしてむしろ正しい。旅順艦隊は既に死に体であると考えていたコンドラチェンコが、制高点でしかない二〇三高地に拘泥した方が不可解だ。

またコンドラチェンコやスミルノフは、日本軍の攻撃を受けて改めて二〇三高地の重要性に気づいたとも言われる。なまじ日本軍が攻撃して中途で諦めたため、ロシア軍に高地の重要性を教えたなどとさえ言われるが、これではコンドラチェンコ名将説と矛盾する。

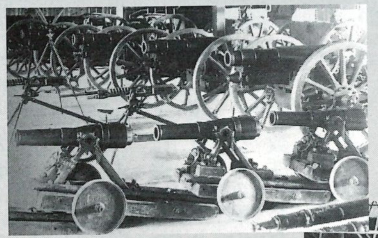
旅順攻略戦で使われた火砲

28センチ榴弾砲の活躍が大きく知られているため、日本軍が大口径火砲を派手に撃ちまくったかのような印象があるが、実際には大口径榴弾砲やカノン砲の数は多くなかった。その中で、12センチカノン砲は牽引可能な火砲として、後の奉天会戦でも威力を発揮している。これらのほかに、7.5センチ口径の野砲なども使われたが、寸土を争うような近接戦では、臼砲や現地製作の迫撃砲などが威力を発揮する局面が多かったといわれる。

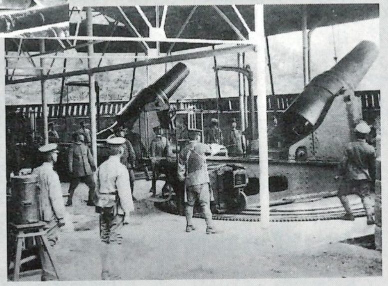
（写真提供／佐山二郎）



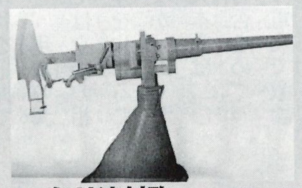
12センチカノン砲



9センチ臼砲



28センチ榴弾砲



47ミリ速射砲（ロシア製・鹵獲）

『名将乃木希典(まれすけ)』の著者、桑原嶽氏は戦場心理と説明している。確かに軍事学では制高点から俯瞰(ふかん)されることを嫌う。ロシア軍にしてみれば机上のプランでは捨てるつもりが、制高点という有利なポジションゆえ捨てるのが惜しくなったと考えられなくもない。

だが、もうひとつ地理的な問題から推論もできる。要塞戦は消耗戦だが、土地の確保が無意味な訳ではない。特に防者が消耗を避けようとした場合には、攻者は数ある堡塁を確保しながら敵を追い込まねばならない。

ところで二〇三高地は本防御線の大(だい)案子(あんし)山や太陽溝の堡塁の前面にある。これら堡塁の攻略には二〇三高地を予め確保する必要がある。しかも二〇三高地方面からは椅子山の側面を突くことも可能だ。

これをロシア側からみると二〇三高地を確保していれば、これらの堡塁への日本軍のアプローチを制約できることになる。ロシア軍は、日本軍が二〇三高地へ攻撃を指向してきたことを西正面へのアプローチと捉え（第3軍にその意志はなかったのだが）、二〇三高地という狭いポイントで押さえようとしたのではなかろうか。二〇三高地を明け渡すと、背後の山の堡塁群に限られた兵力を分散配置しなければならないのである。ましてロシア軍の兵力は日本軍より少ないのだ。

それでも保持が困難なら諦めただろうが、意外にも、支えることができてしまったために二〇三高地に必要以上にこだわる結果となった、これが戦場心理ではないか。兵力分散という目的から見て、第1師団がこの方面を助攻に選んだのは正解だったかもしれない。

焦る大本営

二八榴の威力に期待して開始した十月の本攻撃も成功の望みがなく、第3軍は早々に総攻撃を中止した。第二回総攻撃は失敗とされるが、全体として見ればさほど分の悪い戦いではなかった。前進堡塁の占領に成功し、損害もロシア軍の方が多い。だが、焦燥する大本営にはそれがわからなかった。

大本営は陸軍の参謀本部と海軍の軍令部で構成され天皇を最高司令官とする組織だ。しかし陸海軍それぞれが別個に作戦を考え、行動するのが実態だった。連絡を取り合い協議はするが、本来は海軍が陸軍の作戦に口を挟むことはできない。しかしバルチック艦隊来寇に脅える海軍は、進展しない旅順攻略の戦況に焦りを感じ、二〇三高地攻撃を強く主張した。

二〇三高地攻略に関して陸海軍は同床異夢である。海軍は海軍戦略的に二〇三高地攻略を考えたが、参謀本部の考えはまた別である。

長岡参謀次長にとって旅順攻撃はもともと余計な仕事であった。長岡は満州でのロシア軍との決戦、北韓作戦、樺太攻略を重視していた。早々と樺太攻撃軍の司令官を人選している程だ。

満州軍の井口参謀も同様だった。ドイツのメッケルに学んだ長岡、井口にとって満州平野におけるロシア野戦軍の撃破こそが戦勝の要諦なのである。旅順攻略など価値がない。できれば第

3軍を満州平野の決戦に使いたいというのが本音だ。

旅順要塞ではなく二〇三高地を占領してロシア艦隊を壊滅させ、海軍を満足させた後は、要塞はそのままにして第3軍の戦力を北上させる。彼らには時間が経つほど満州のロシア野戦軍が増強されるという焦りがあった。

ところが同じ満州軍でも大山司令官や児玉参謀長は要塞攻略が海外にアピールする点を考えたためか第3軍による旅順要塞攻略を主張していた。そして当の第3軍は、旅順艦隊はほぼ無力化していると判断していた。

すでに南山坡山に観測所を設けて二八榴の射撃で艦隊に損害を与え、死角となる狭い東港に艦隊を追い込んでいた。また第一回総攻撃頃からの海軍陸戦重砲隊の攪乱射撃で多少なりとも艦隊に損害を与えており（二八榴の弾丸がぞくぞく命中したという意見があるがこれはオーバーだろう）、そしてロシア側が水兵を陸戦隊として投入していることからも旅順艦隊行動の可能性は低いと考えていた。ただ、港内を完全に俯瞰できない以上、それらは推測でしかなく、大本営を説得しきれないことも確かである。

内地にいて現状を把握できない大本営と、現地の満州軍、第3軍では立場の相違による温度差を生じることは避けられなかった。満州軍司令部と大本営は二〇三高地攻撃の可否をめぐって数度にわたり電文で激論を交わした。

満州軍の児玉は旅順攻略に手を付けた以上、中途打ち切りは不可能と考えていた。内外に勝利をアピールする意味でも要塞は陥落させねばならない。二〇三高地攻撃こそ余計な行動で、本攻撃に集中すべきというのが児玉の考えである。

だが、二〇三高地攻略へと方針を定めた大本営は焦り、指揮系統上、直接命令できない第3軍に対しさまざまな手段で催促を行い、明治天皇の勅語まで持ち出した。海軍の秋山参謀も陸軍が二〇三高地を陥とす兵がいないなら、陸戦隊を派遣するといって脅しをかけた。その上、大本営は御前会議の結果として「速やかに旅順要塞を陥落すべく、若し能（あた）わざれば二〇三高地を奪取して敵の軍艦を処決せんことを望む」とさえ伝えたのであった。

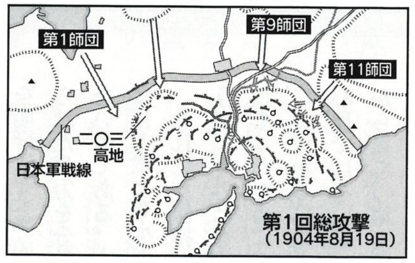
ところが、この電文に旅順艦隊より要塞攻略を重視する児玉が満州軍総司令官名で「二〇三高地の奪取には同意することができない」と付加したので話が混乱した。第3軍司令部は方針を決めるため会議を開いたものの決定を下せなかった。この辺に第3軍司令部が優柔不断と非難されるゆえんがある。

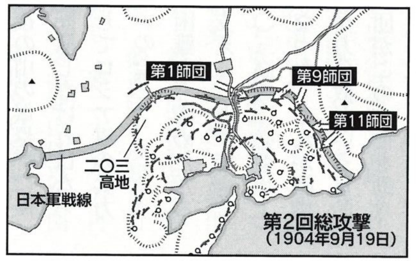
海軍、大本営、満州軍司令部の角逐は第3軍にプレッシャーとしてのしかかった。

第三回総攻撃の失敗と決心の変更

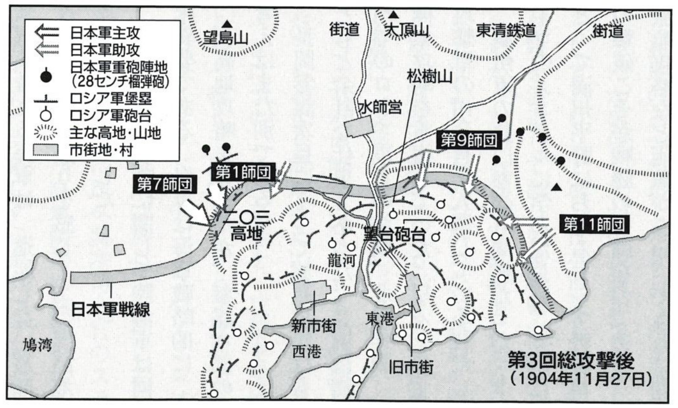
十一月、第3軍は第三回総攻撃を決した。今回も主攻は東北正面で、二〇三高地には第1師団が攻撃を行う。新たに第7師団が到着したが、これは予備として控置した。二〇三高地攻撃は

第3軍の総攻撃の経緯





←第一回総攻撃（図上）では、東正面に二個師団を置いて主攻としていた。部隊の一部は盤龍山の堡塁、砲台群（第9師団と第11師団の進路を示す矢印の中間）を突破したが、後続なく敗退した。第二回総攻撃（図中）では、東正面を主攻面として西正面に配置した第1師団の一部も加えて攻撃を行った。西の警戒陣地への攻撃には第1師団の一部が充てられている。第三回総攻撃（図下）は、はじめ東正面主攻という方針のまま行われ、二〇三高地にも第1師団による助攻が行われている。増援の第7師団を加えた二〇三高地への攻撃は、実施が第三回総攻撃に続いて行われているため、図には第7師団の動きを加え、二十六日の攻勢失敗から二〇三高地集中攻撃に転換した二十七日にかけての配置を示している。





二〇三高地から旅順港を望んだ写真。港内にはロシア海軍旅順艦隊の艦艇が見られ、確かに二〇三高地に観測点を設ければ、間接照準による正確な砲撃が可能であることがわかる。しかし、港内への砲撃は、早期に攻略した南山坡山からの観測でも可能で、実際に旅順艦隊は砲撃によりかなりの損害を受けていた。

助攻であるが、上層部の対立への配慮もあるのだろう。戦況図を観ると第1師団は羊頭湾（鳩湾）にまで戦線を延ばし、決して二〇三高地に全力を注いではいない。ロシア軍も対応して戦線を延ばしているが、第1師団の目的は西正面の圧迫にあり、二〇三高地もその範疇に含まれるようだ。

もっとも第3軍首脳部も前回の攻撃が成功までもう一息だったという思いから、二〇三高地攻撃を甘く見ていた。第3軍の津野田参謀は回想録で、第二回総攻撃の直後、二八榴の弾丸を一〇〇発も撃ち込めばどうにかなると考えていたとしている。

しかし第二回総攻撃の後、二〇三高地の重要性を認識したロシア軍、特にコンドラチェンコとスミルノフはその防御強化に努めていた。二〇三高地の二つの頂上の周囲には二重に塹壕が掘られ、堡塁の様に土盛りした屋根（掩蓋）が被せられた。

掩蓋は二〇センチから三〇センチの角材や、レール、鉄板などの柱、天井、梁で支えた。隣の老虎溝山は二〇三高地に対する側防施設（攻撃部隊を側面から射撃する施設）と位置付けられ、頂上に半永久堡塁が構築された。そして両所とも鉄条網を張りめぐらした。二〇三高地には一五センチ砲二門と機関銃、速射砲六門を配置した。防御は確かに強化されはしたが、それでもベトン（コンクリート）で固めた陣地などはなく、強化された野戦陣地に過ぎなかった。

十一月二十六日に開始された攻撃はたちまちにして行き詰まった。同夜、白襷（しろだすき）隊の奇襲も失敗し、ここに第3軍は旅順攻略に対し万策尽きた状態となってしまった。残る手は永久堡塁の地下にさらに坑道を掘り進めて爆破するしかないが、これには時間がかかり、大本営が期限と迫る一月までの攻略は見込みが立たない。

二十七日朝、乃木は、海軍の要請に配慮し二〇三高地への攻撃集中へと決心変更をした。しばしば誤解されるように第3軍は二〇三高地を攻撃していなかった訳ではないし、乃木に決断が欠けていた訳でもない。むしろ、この決心変更には満州軍司令部から派遣されていた満州軍参謀副長、福島安正少将の方が不同意であった。第3軍の白井参謀が説得した程だ。

二十七日午前一〇時、乃木は命令を発した。

「軍は、一時本攻撃正面における攻撃を中止し、二〇三高地を攻撃せんとす」

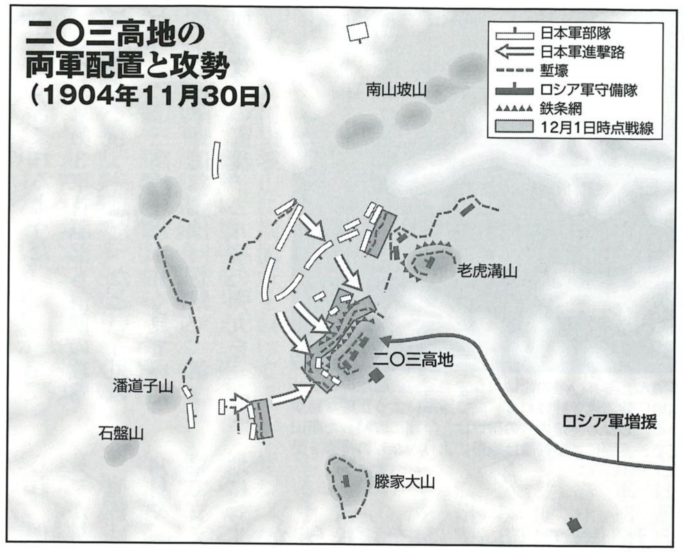
二〇三高地ついに陥落

方針を転換した第3軍は、二〇三高地攻撃を支援するため二八榴四門を含めた火砲を二〇三高地とその周辺堡塁、砲台に指向した。これは単純な火力集中ではなく、二〇三高地と老虎溝山の側背方向からの縦射も考慮したものだった。このため一部の山砲は、いまだロシア軍占領中で胸壁をへだて日露両軍が睨み合う松樹山堡塁の外壕にまで進出したほどである。

二十七日、二八榴四〇〇発、一五榴一五〇発の命中弾を得た。不発も多かったが二〇三高地の陣地の掩蔽部等の過半は破壊され、第1師団は突撃に移った。日本軍もそれまでの要塞戦の戦訓から戦術に手を加えていた。手榴弾や迫撃砲を開発し、それ以外にも機関銃や捕獲した四七ミリ砲も近接支援に活用した。四七ミリ砲はもともとロシア軍が軍艦に装備してあった対水雷艇用の砲を歩兵砲として利用したものだが、日本側もそれを逆利用した。

日本軍は二〇三高地に接近用の交通壕を設け、老虎溝山を避けて西と西南の二方向からアプローチを行った。さらに老虎溝山に助攻を行ってロシア軍の戦力を分散させた。陣地が破壊されてもロシア兵は残存し頑強に抵抗した。

ロシア軍は、二〇三高地周囲の山の砲台から支援砲撃を行った。日露両軍の歩兵が近接戦闘を繰り広げる中、味方撃ちも構わず砲撃を行ったため損害が続出した。ロシア軍守備隊は陣地に拠る分、損害は少ないが、それでも味方撃ちを避けられるわけではなかった。



図は、第7師団が投入された二十九日から、「高地占領」の誤報があった三十日までの状況を示している。すでに二〇三高地前面には接近用交通壕が掘られ、部隊は塹壕に沿って攻撃準備を整えた。十一月三十日の段階では、陣地の一部を占拠したものの、予備部隊を投入して占領区域の確保を確実にするといったことは行われなかったため、山頂間近に迫りながら戦いが膠着した。ロシア軍には、数個の野戦中隊のほか病院兵部隊などの予備兵力もあったが、この時点で日本軍を完全に撃退するだけの余裕はなかった。

日本軍は大損害を受け、どうにか西南部の第2散兵壕に突入したものの、ロシア軍の逆襲を受けて全滅した。ロシア軍も損害が続出する中、水兵や病院勤務者まで補充兵として送り込んだ。

続く二十八日、二十九日も攻撃を続行したが二十七日同様、失敗に終わった。

二十九日、損害著しい第1師団に代わり、新たに第7師団投入が決定された。三十日に攻撃を再開したものの、それまで同様のパターンを繰り返しただけであった。それでも数十人が二〇三高地頂上の一角に取り付き、これが一時二〇三高地占領と誤って伝えられた。

第7師団軍服は旧来の黒服であったため斜面が真っ黒に覆われたという程の損害を出し、師団長の掌握する兵力は二八〇〇に減ってしまった（生存者一〇〇〇余に過ぎずというのは間違い）。おまけに艦砲射撃を行っていた巡洋艦「済遠」までも機雷のため沈没してしまった。

十二月一日、満州軍参謀長児玉源太郎が旅順に来着した。一度二〇三高地占領と報告を受けた児玉が、ロシア軍に奪還されたと聞いて激怒し洋食皿を放り出したというのは、この来訪途上のことである。

児玉はいざという時には、乃木に代わり指揮権を発揮できるよう、大山から書簡を得ていた。友人同士である乃木と児玉の個人的な会談によってそうした事態は避けられたが、児玉は作戦に積極的に介入し、督戦に努めた。これが第3軍司令部の気分を害したのか第3軍首脳は児玉の所に来ずに連絡は電話ですませた、と攻城砲兵司令部の奈良武次少佐は回想している。

児玉の活動は現在では真偽とりまぜた伝説となってしまっている。攻撃準備期間に地図の記載をミスして陸大卒業記章（天保銭）を児玉にもぎとられたのは、第3軍の参謀ではなく第7師団の参謀である。戦闘を見にいった時、第3軍首脳を叱咤したというが、この時に居合わせたのは第1と第7の両師団長である。前述のように第3軍司令部員は戦闘中には児玉とほとんど顔を合わせていない。

有名な二八榴に関しても児玉は実質的に何もしていない。すでに二八榴は投入されている上、児玉が来着してから、十二月五日の攻撃再開までに陣地変換することも時間的に不可能だ。一二榴一五門と九臼一二門を二〇三高地に近い高崎山に移しただけである。

さらにロシア軍の逆襲を妨害するため味方を撃つ危険を犯しても砲撃を行うと児玉が言ったように『機密日露戦史』は記述するが、攻城砲兵の奈良少佐は「友軍がいても砲兵が射撃して困る」と児玉と第7師団長が攻城砲兵に抗議をしたと伝えている。ロシア軍の行動を阻止するためやむを得ないという奈良の説明に児玉は納得したという。

真偽は不明だが、既にロシア軍は味方撃ちの危険を犯していたし、第3軍参謀の津野田少佐も日本の山砲は動く物が見えれば発砲（ロシア兵が見えたら、でないことに注意）したとしている。奈良の証言の方が真実に近いのではないか。

死傷者収容のための休戦期間が設けられたが、日本軍はこれを利用して攻撃準備を進めた。砲兵の移動、部隊再編等を行い、二〇三高地の敵の鉄条網下に交通壕を掘り突撃路を開設した。

十二月四日、攻撃が再開され重砲二七門が二〇三高地周囲の砲台に破壊射撃を実施した。翌五日、第1と第7の二個師団の集成部隊が突撃した。『機密日露戦史』では第8師団第17連隊も存在するが、公刊戦史には記述がない。『機密日露戦史』は「17連隊に与えた命令、用法について研究事項多いが口述に止どむ」とするが、これは督戦隊であったのかもしれない。というのも児玉が日本軍歩兵の攻撃精神に対し不審感を抱いていたという説があるからだ（佐藤鋼次郎の回想録による）。

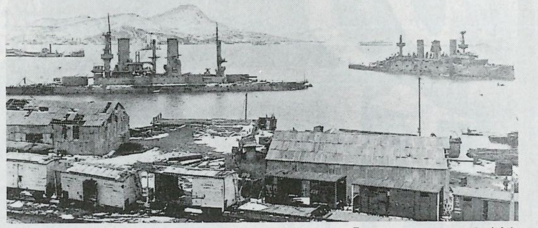
日本軍は、突撃法を改めた。高地争奪戦に敗れるのは、攻撃が途切れて後続が続かないことから、中隊規模の攻撃隊を随時送り込むことにした。混雑を避けるため狭い交通壕を負傷者後送に使うことは中止された。

午前九時からの攻撃で中隊規模の突撃隊が登攀しては損害を出し、ロシア軍の逆襲を受けた。頂上は日露双方が三度にわたり奪い合い、砲撃で双方の増援部隊が倒れていった。だが、午後二時二〇分、日本軍は二か所の頂上を奪取し、四時四五分にはロシア軍反撃の撃退にも成功した。夜半に日本軍は急ぎ野砲二門、次いで機関銃を送り込み築城も行い守りを固めた。

日本軍が野砲や機関銃を配置したのを見たロシア軍は、反撃をあきらめた。

旅順艦隊は自沈したのか

最近の有力な説に旅順艦隊は自沈だったというものがある。日露双方の史料を見る限り実際には砲撃による撃沈と自沈した艦の両方があり、砲撃の被害に対するダメージコントロール失敗の沈没もある。自沈説では砲弾が艦底まで貫徹できていないという説明もあるが、防御甲板を貫通した砲弾もあり、非装甲部での貫通もある。轟沈は不可能にせよ撃沈不可能だったわけでもない。自沈説は撃沈の基準が辛過ぎるようだ。同じ基準では戦艦「武蔵」でさえ撃沈ではないといえてしまう。明らかに自沈した艦はあるにせよ、概ね撃沈したと評価して問題はないのではないだろうか。


損傷を受け、着底したロシア軍艦。写真は戦艦『ペレスウェート』（右）と『ポルタワ』で、砲撃により撃破されたといわれている。旅順にいた艦艇は、陸からの砲撃以前に海戦で損害を受けていた艦もあり、多くが戦後に戦利艦として日本海軍に編入された。

すでにロシア軍の損害も累積しており、戦術的に不利な立場から引き際と判断したのであろう。

十二月六日、二か所の頂上のそれぞれに四〇〇人と五〇〇人の日本兵が残存していた。同日、老虎溝山も占領、ついに二〇三高地は陥落した。

二〇三高地を占領した第3軍は、ここに観測所を設け、旅順艦隊を砲撃したとされる。しかしこの経緯もさほど単純ではない。実は十二月一日の争奪戦の最中に海軍陸戦重砲隊の黒井司令官が二〇三高地西南角に上り、観測射撃を開始している。児玉が港内を観測できるか問い合わせたのも同時期のことだが、この時点では、第1師団長や攻城砲兵司令部がロシア軍の反撃を恐れて観測所設置に反対していた。

このように占領前から観測所設置の準備をしていたため、十二月五日には砲撃が開始できた。それでもロシア軍艦を撃沈するには四、五日を要した。

かくして二〇三高地の戦闘は終了したが、長く厳しい旅順戦はそれで終わらず、旅順が陥落するのはこの三週間後となる。それまで両軍はかなりの損害を出した。二〇三高地は要塞の死命を決する要地ではなかったのである。

この小山でロシア軍は五〇〇〇を超す損害を出してしまった。もっとも失ったのは大部分が水兵や後方勤務者といった第二線兵力で、コンドラチェンコも第二線兵力だからこそ消耗戦に投入する気になったともいえよう。

確かにロシア軍は予備を消耗してしまったが、二〇三高地を放棄しても遅かれ早かれ、どこかの堡塁か高地でこうした消耗は発生したはずだ。その意味で二〇三高地の戦いは、旅順攻略のタイムテーブルに大きな影響はなかったことになろう。

苦しい旅順戦の中で目に見える戦果であったため、二〇三高地の戦闘は強烈なイメージを内外に与えた。二〇三高地なる女性の髪形まで流行したほどである。ひとつの小山をめぐり日本軍は一万、ロシア軍は五〇〇〇を超す死傷者を出したのだからイメージが強烈なのも無理はなかった。

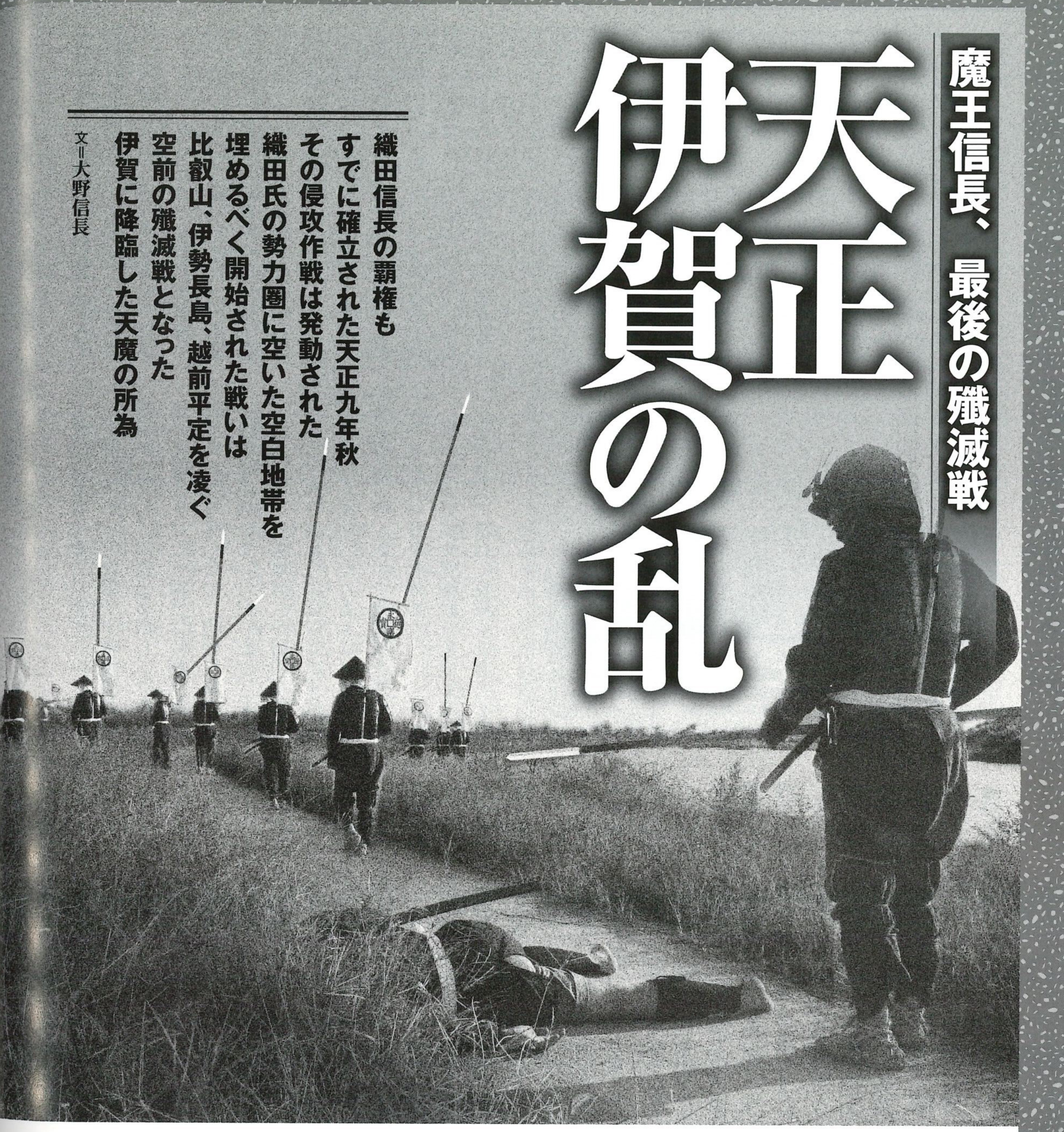
勝者である乃木は名将と称えられた反面、多くの損害と名将扱いへの反発から愚将との批判が陸軍内部で発生し一般にも流布した。だが実際のところ乃木批判には的外れな部分が多い。乃木は精神面はともかく戦術的には普通の将軍だったというべきであろう。

〈参考文献〉参謀本部『明治三十七八年日露戦史第6巻』／谷寿夫『機密日露戦史』／参謀本部『明治三十七八年戦役露軍の行動第9巻』（偕行社）／津野田是重『斜陽と鉄血』（戦記名著刊行会）／井口省吾文書研究会『日露戦争と井口省吾』（原書房）／佐藤鋼次郎『旅順攻囲秘話』（軍事学指針社）／イム・コスチェンコ『旅順攻防戦回想録』樋口石城訳（新時代社）／江森泰吉『海軍陸戦重砲隊』／桑原 嶽 『名将乃木希典』（中央乃木会）／小林台三『二〇三高地論争』／宿利重一『旅順戦と乃木将軍』（春秋社）／宿利重一『児玉源太郎』（国際日本協会）／『砲兵沿革史』（偕行社）

天正伊賀の乱

織田信長の覇権も
すでに確立された天正九年秋
その侵攻作戦は発動された
織田氏の勢力圏に空いた空白地帯を
埋めるべく開始された戦いは
比叡山、伊勢長島、越前平定を凌ぐ
空前の殲滅戦となった
伊賀に降臨した天魔の所為

文＝大野信長



天下——。

すなわち「全国区」に打って出てよりその死までのわずか一四年で、織田信長は三〇余りの国々を支配下に置き、戦乱の世に確かな収束への道を拓いた。名だたる群雄が割拠した一世紀の間で、彼ひとりがそれを為し得たのである。

そこで、我々は考える。

何故彼にだけ、それが出来たのかと。

答えは人により、あるいは観点によって様々だろう。だがひとつ確実なのは、その答えを戦略面からのみ導き出すのは難しいということだ。

敵領に橋頭堡を築き、調略の手を伸ばし、婚姻を結び、機を見ては押し、あるいは退き、一進一退を繰り返しながら少しずつ版図を拡げてゆく——。

信長の戦略はごく常識的な手順に則ったものだった。鉄甲船の開発も火器の大量投入も、全てはこれらの戦略を遂行するにあたって必要とされた「道具」であり、それすら敵方のそれに対応すべく配備したにすぎない。規模こそ違え、質的に見れば他の武将の戦略と何ら違いはなかったと言える。

だが信長には一点だけ、確実に他の武将を凌ぐ——次元の違う——能力があった。それはこの「常識的」な戦略を複数方面で同時に展開し、かつ いずれも最終的には勝利に導くという「非常識」を可能にした立体的な頭脳である。

「勝負勘」

と言い換えていいのかもしれない。

彼は孤立無援・四面楚歌の状況下にあっても、各々の勝負はもちろん、外交やインフラ整備まで含む「全てを総合した対局の優先順位」を見誤ることなく、一手一手確実に駒を進め続けることが出来た。その積み重ねが、彼を唯一無二の天下人へと押し上げたのだ。

ところで、これら信長の数多くの戦いの中で、他とは明らかに異質な展開を見せた対局がある。「天正伊賀の乱」と呼ばれる、伊賀での戦いがそれだ。

朝廷があった山城と、交通の要伊勢、そして首都安土を含む近江の隣国でありながら、元亀から天正初めの混乱期においても、そして周囲があまねく平定された後にすら、伊賀一国は手付かずのまま放置され続けた。

ところが天正九年（一五八一）九月になって信長は突如大軍勢を率いて侵入し、一気に伊賀を焦土と化す。叡山焼き討ちを一国規模にまで拡大させた、空前絶後といえる殲滅戦を行ったのである。

この時、宿敵本願寺も既になく、北は越中、西は因幡にまで織田家の侵蝕は進んでいた。放置し続けた相手に対しては、時期も規模も不相応にすら思われる軍事行動——。

信長の勝負勘がはじき出した、伊賀に対する「優先順位」と、そこで採択された戦術とは、如何なる経緯と判断のもとに決定されたのであろうか。

＝特異なる国＝

四方を山に囲まれた伊賀国——。鎌倉に武家政権が樹立して以降、他国と同様に守護が置かれ、支配が続けられてきたのは言うまでもない。

室町初期には仁木氏・千葉氏・桃井氏らがその任に充てられたが、中でも権勢を誇ったのは足利将軍家と同系の清和源氏であり、幕府設立に際し多くの勲功があった仁木氏である。

室町初期には伊賀・伊勢を含む六か国の守護や幕府要職を歴任した同氏であったが、次第に細川氏・畠山氏らとの確執が表面化して衝突におよぶ。

そしてこれに敗れたために、仁木氏は同国守護の座を逐われ、中央政権での発言力も削がれてしまった。以後、伊賀守護には、代わって細川清氏・中条長秀・山名時熙・同持豊といった幕府内の錚々たる有力者が、他国と兼任する形で任じられる事になっている。

ところが仁木氏は失脚して以後も、代々、こと伊賀国に限定する限りは、ある程度地域への影響力を保持し続けていたらしい。南北朝の動乱、明徳の乱、嘉吉の乱を経て応仁の乱に至るまでの間、細川氏や山名氏の間を縫って——一時的な守護不在の空白を埋めるような形で——幾度となく伊賀守護を命じられているのである。

ではこの間、他国に見られたように、地域に土着した仁木氏が「伊賀の領国化」を進めていたか。答えは否である。伊賀では仁木氏の着任以前から「在地小領主集合体」が数多く台頭しており、国内の諸地域は彼らによって、既に強固に支配されていたからだ。こうした小領主の台頭は、伊賀の持つ歴史的・構造的な特殊性に起因していた。

同国は平安から鎌倉末期頃まで、その国土の三分の二ともそれ以上とも言われる大部分が東大寺・興福寺・伊勢神宮といった寺社勢力の荘園であった。国内の土豪・地侍たちは、寺社を凌ぐ勢力を誇った平氏に仕えるなどして寺社支配に対抗していたが、頼みの平氏が没落して源氏の世になると、幕府に保護された寺社勢力に再び圧迫されるようになる。

そして実際には、彼ら地侍を統括する立場の伊賀守護は「立場上」寺社領を差し引いた残りわずかな地域の支配権を許されていたにすぎず、ゆえに単独では大きな統率力を発揮し得ないという構造的欠陥を抱えていた。

このため時を経て寺社勢力が衰退するに従い、地侍たちは地域ごとに小規模な集団を組織。城を構え、思い思いに近隣の荘園の横領を進めてゆく。

この「構造的欠陥」に加え、山岳地帯という地の利も手伝ったのだろう、歴代の守護はいずれも、彼ら諸荘の地侍たちを鎮圧することが出来なかったのである。

こうして独自の支配圏と行動様式を確立した彼らは「悪党」と呼ばれ、鎌倉中期頃には既に一切の中央権力の介入を拒む体制を樹立するまでに至った。同国黒田荘の、いわゆる「黒田悪党」と呼ばれる一団や、山田郡の富永・馬野の悪党などが有名である。

その後彼らはどうなったか。一般論に倣うならば、各党の中核をなす一家が勢力を強め、周辺勢力を併合して国

人領主の体裁を経て、伊賀一国を統べる戦国大名家へと成長したのだろう。或いは幕府と泥沼の戦いを続けた結果、国力を失って自滅したかもしれない。

　だが彼らは違った。在地の寺僧が預所職となることで幕府方と調停し、中央政権との摩擦を終結させたのだ。「名目上の守護を置くことを認め、中央政権との争いは避ける。その代わり既得権益を認め、互いに干渉しない」

　無論文書化した取り決めがなされた訳ではないが、そのような思惑で双方が合意したということなのだろう。彼らは自らが消滅することはもちろん、拡張してゆく可能性も閉ざしたことになる。或いは山間部の特徴である「耕作地の不連続性」が土地所有権の移動を困難にし、ゆえに他国のような「特定の小領主への支配力集中」が、事実上不可能だったからなのかもしれない。

　ともあれ、悪党と呼ばれた地侍集団の活動は沈静化した。そして戦国末期頃までには、伊賀では名ばかりの守護仁木氏を仰ぎつつも、実質的にはおびただしい数の小領主や土豪が相互に均衡を保ちながら支配を行うという特異な統治体制が樹立することとなる。

　その後、近江との国境付近は六角氏に、南伊勢との国境は北畠氏に、それぞれ若干の侵蝕を許し、国衆の中には六角・北畠氏に協力ないし従属する者すら現れるようになったものの、伊賀国内の統一は進むことなく、特異な支配体制は変わらず維持され続けていた。

　その狭い国土に五四六もの城郭や居館を抱えたままで、時代は信長の世紀を迎えるのである。

信長台頭

　伊賀と国境を接する近江・山城・大和・伊勢の四か国のうちで、信長が最初に侵出を図ったのは伊勢、時に永禄十年（一五六七）四月のことであった。美濃攻略の最中、突如として矛先を変え、北伊勢へ出兵したのである。

　この頃、足利義秋（後の義昭）を奉じて上洛を果たすべく、一刻も早い美濃攻略が課題となっていた信長は、美濃を周辺国から分断し、同時に来たるべき上洛戦に備えての軍道を確保しようと図ったのだ。

　当時伊勢一国の守護は、名目上「国司」北畠氏だが、北半国は神戸氏・長野氏・関氏らの国人衆が台頭し、北畠氏との均衡を保ちながらも独立した支配圏を確立していた。信長はその北伊勢のうち、まず尾張・美濃両国との国境付近を制圧すると、八月になって再出兵、今度は桑名から高岡付近まで支配圏を拡大した。そして同年九月に美濃の併合を果たした後、翌十一年二月になって、再々度北伊勢へ兵を出す。

　ここで高岡から安濃津まで進み、終始優位に戦いを進めた信長は、北伊勢の有力国衆である神戸・長野両氏と姻戚を結んで北伊勢の大半を手中に収めた。この時、神戸氏の養嗣子としたのが自らの三男三七（後の信孝）であり、長野氏の新当主に送り込んだのが弟信良（後の信包）である。



伊賀を中心とした近畿要図と永禄3年(1560)頃の近畿主要勢力

伊賀は、山間の小国であったが周辺諸国を繋ぐ交通結節点としての価値が存在した。また永禄三年当時、伊賀の国人衆は北部が六角氏の、南部が北畠氏の影響下にあったが、三好氏配下の松永氏が進出する気配を見せ、この年、伊賀惣国一揆が結ばれる。

　北伊勢の主要地域はこうして信長の軍門に降った。そして同十一年九月、信長は満を持して上洛戦を開始する。南近江を抜けて山城に進み、畿内隣国を掌握するその行程は、見方を変えれば伊賀の隣国を根こそぎ支配下に置く戦いであったと言える。苦戦も充分予想された。

　だが緒戦の相手となった南近江の六角氏は雌雄を決することなく居城を捨てて逃亡。兵力を温存したまま山城に進んだ織田軍に対し、これを迎え撃つ立場の三好氏、及びその与党が完全に足並みを乱していたこともあって、畿内の戦いもまた織田軍優勢のうちに展開した。勢いに乗って敵勢を一掃した信長はこうして首尾よく上洛戦を制し、足利幕府の後見人たる立場を天下に知らしめたのである。

　さて、畿内を掌中に収めた信長は、翌永禄十二年八月になって再び伊勢へ出兵する。今度は北伊勢を拠点とし、北畠領である南伊勢への侵攻を開始したのだ。天下統一戦を開始するにあたり、まずは本国尾張・美濃の備えを万全にすべく、隣国伊勢の完全掌握を図ったのだろう。

　八万とも一〇万とも言われる大軍を率いて出陣した信長は、北畠氏の拠点阿坂城を即日のうちに陥落させると、残る支城には目もくれず、一気に本城大河内を包囲。瞬く間に孤立した大河内城はこの後ひと月あまりの籠城を経て遂に開城した。名族北畠氏もまた、信長の次男茶筅（後の信雄）を養嗣子として迎える事を条件に、実質的に軍門に降る事になったのである。

　「天下」に打って出てわずか一年余、攻めの姿勢を維持し続ける限りにおいて、信長は無敵と言えた。

対峙

　こうして、新興大名にすぎなかった信長は、天下に踊り出るやいなや短期間で伊賀の四つの隣国のうちの三か国を支配下、または影響下に置いた。残る一国・大和についても、松永久秀に命じて攻略を進めている。その信長が、次なる侵略目標として伊賀を意識したとしても何ら不思議ではない。伊賀は、大和・山城・伊勢・近江を結ぶ交通の要所でもあったからだ。

　一方、次々と隣国を侵略されていった伊賀の国衆にしても、信長の急成長は対岸の火事ではなかった。現実にこれまでの戦いで、彼らの一部は既に六角氏または北畠氏に従って、対織田勢の一翼として参戦していた。信長は信長で伊賀侵攻の大義名分を得ており、伊賀の国衆もまた、旗幟を鮮明にする局面に近づきつつあったのだ。

　だが両者は示し合わせたかのように、この時点で全面抗争に踏み切ろうとはしなかった。一触即発の緊張状態にすら入っていない。

　理由はいくつか考えられる。

　第一に、この直後信長は将軍義昭と不仲になり、続く朝倉氏攻めの大敗を機に反信長連合の攻撃に晒される窮地に陥ったことだ。一方的に受け身に回らざるを得ない状況下で、自ら新たな敵を増やすのは命取りであったし、現実的にその余裕があったとも思えない。

　第二に、差し迫って伊賀を掌握する必要がなかったのもまた事実である。四面楚歌の信長にとって最優先事項とは、敵勢を効率よくあしらいつつ、その連繋を分断し個別撃破する隙を作ることであって、良くも悪くもこの事態の打開に関わっていない伊賀は、放置するのが得策ですらあったはずだ。

　無論、これは信長の都合にすぎず、伊賀側の去就如何では全く別の展開を見せる可能性もあった。だが永きにわたり独立を貫いてきた伊賀は、自ら積極的に国外へ侵攻することはおろか、国家間の紛争に介入した歴史を持っていない。それどころか「国を挙げて」戦闘に携わったことすらないのである。

　事実この状況にあっても、伊賀国衆の去就は個々の判断に任されていたらしい。反信長陣営に協力した者がいた反面、信長への臣従を申し出た者もあるなどまちまちだったのだ。

　意志が未統一のうえ集団野戦の経験もない彼らが、それでも「国を挙げる」可能性が残されていたとすれば、一国の存亡に関わる侵略に直面した時くらいのものだっただろう。だがそれは最終手段であって、この時点においては信長同様、「非戦」が現実的な選択だったに違いない。

　そんな信長と伊賀国衆の思惑を後押しするかのように、伊勢攻めの段階で多くの国人衆に混じり、名目上伊賀守護であった仁木長政（義視）が信長への帰属を申し出ていた。

　名目上とはいえ、まがりなりにも守護である仁木氏の織田家帰属は、両陣営にとって絶好の「方便」として使えたに違いない。信長からすれば「放置

する」ことへの、そして伊賀の国衆からすれば「静観する」ことへの――。

こうして両者は、背を向け合ったまま時を過ごした。互いに「当座は」という但し書きを呑み込んだままで。

第一次 天正伊賀の乱

元亀の争乱の最中、信長と伊賀衆の関係は膠着したままであるかのように見えた。いや、事実膠着したままだったのだ。だが、北畠氏の養嗣子に入った信長の次男・茶筅（信雄）によって、遂に戦端は開かれる事となる。

茶筅は元亀二年（一五七一）に北畠具教の娘と婚姻を果たし、翌三年または翌々年の天正元年に元服している。この時点ではまだ北畠家の当主は具房で、家中にはその父具教が後見人を務める「北畠氏主導体制」が布かれていたが、同三年（一五七五）六月に信雄への家督譲渡が行われると、ほどなく北畠家中の粛清が断行された。

翌四年、信雄は岳父の具教・その次男長野具藤・三男北畠親成を三瀬城で、一族衆の大河内具良・坂内具義らは田丸城でそれぞれ殺害し、義兄にあたる具房についても身柄を拘束して幽閉。北畠の血統を実力行使によって排除し、家中の全権を掌握したのである。もちろん実父信長の命によるものであることは疑いない。

信雄の家督継承が行われた天正三年、六月という時期に着目すれば、この時既に信長は浅井・朝倉・六角・長島一向一揆・三好氏を屠り、五月には長篠の合戦で武田軍にも完勝を収めていた。彼らの影で蠢動していた足利義昭も京から放逐している。

周囲に敵影がなくなった信長は、まず圧力をかけて家督を譲渡させ、しかるのち旧勢力の完全排除に着手したと考えてよいのだろう。一族の謀殺を受け、具教の弟で出家していた具親が還俗、伊勢を中心とした旧臣団を糾合して挙兵に及んだが、信雄はこれも逐って、より強固な体制を構築している。

こうして北畠氏の影響を排除した信雄は、国内の諸政務をはじめとして活発な行動を見せるようになってゆく。実父信長も兄信忠に家督を譲り、この頃から戦いの第一線から退くようになっていた。自分達の時代が訪れたという意識が働いたのかもしれない。

ところが信雄の視線は、父信長があえて放置していた伊賀に対しても向かってしまった。天正七年（一五七九）九月、突如として一万余の兵を率い、伊賀に出兵したのである。伊賀の国衆のひとり下山甲斐守の内通を受け、信長の許可を得ず独断で兵を動かしたものであった。これが「第一次天正伊賀の乱」と呼ばれるものだ。

名張口、鬼瘤峠、馬野口の三手から伊賀に侵入した信雄軍であったが、間もなく狭隘な地形に行き詰まり撤収を開始することとなる。

ところがその信雄軍に対し、伊賀の国衆が反撃に転じた。背後をとられた信雄軍は総崩れになり、信雄自身はどうにか生還したものの、重臣柘植三郎左衛門を失うなど甚大な損害を受けて敗北を喫する。

独断専行による大敗――。

信長は書状を送って信雄を激しく叱責し、「親子の縁を切る」とまで厳しい言葉を浴びせている。家中の規律を乱したことも、そして伊賀に手を出し、敗北したことも、信長の子として許されざる失態であったに違いない。

この一件が、現在に至る信雄の評価を決定付けたと言ってよい。すなわち、軽率であると。だが以上はほぼ確実な裏付けのとれる史料に拠った記述であって、実際には出陣に至る前に、若干の段階を経ていた可能性もある。

例えば天正四年または五年に北畠具親が還俗して挙兵に及んだ時、拠点としたのは伊賀であって、吉原氏を中心とする伊賀の国衆が全面的に具親を支援していたとされ、これを受けて信雄が伊賀国内に楔を打つべく、廃城となっていた丸山城の修復を試みると、同六年、伊賀国衆が改築中の同城に攻撃を仕掛け、信雄方を撃退したという史料も残されている。

つまり信雄の伊賀攻めは信雄方が一方的に仕掛けた戦いではなく、伊賀方が仕掛けた小競り合いが起因となったというのである。

無論、これらが事実であったにせよ、信長が即座に伊賀攻めを命じることはなかっただろう。だが、あまりにも唐突すぎる信雄の伊賀侵攻には、これに近しい経緯があったのかもしれない。

開戦以前に何らかの衝突があったとすれば、これらを含む互いの動向に順当な筋道がつくのだが、あくまでも可能性の域を出てはいない。

いずれにせよ、伊賀では時を同じくして「守護」仁木長政が在地小領主連合によって国を逐われている。彼らは＊「惣国一揆」と呼ばれる、言わば伊賀

＊「惣国一揆」＝伊賀惣国一揆の」成立年には諸説ある。



丸山城址。第1次天正伊賀の乱の端緒となったともされる城であるが、現存遺構は、伊賀平定後に伊賀一国を領した滝川雄利による築城である。

一国を小領主の連合体で自ら治める体制を、はじめて対外的な軍事面で稼動させたのだ。事の顛末にかかわらず、少なくとも「方便」仁木氏を放逐した段階で、彼ら伊賀の国衆は信長に対して明確に宣戦布告したと言ってよい。

この頃までに近江・山城はもちろん、伊勢が、次いで大和が信長によって完全掌握されており、紀伊への侵攻も始まっていた。近い将来、伊賀に対し何らかの軍事行動が起こる事態は充分予測出来たはずだからである。

信雄が虎の尾を踏んだのは事実だとしても、虎は虎で牙を研ぎ、獲物を待ち構えていたということなのだろう。

第二次 天正伊賀の乱

ここで、彼らが組織した惣国一揆とは如何なるものであったかについても触れておこうと思う。

端的に言えば「国主を置かず、合議制による一国の自治を目指した組織で、独自の掟を定め、必要に応じて回文を回したり、連判状や起請文を設けるなどの取り決めを持つ体制」とでも定義づけられるだろうか。

ただし「惣国一揆」と呼ばれる組織そのものは他の地域で既に見られており、伊賀でも永禄三年（一五六〇）頃にその雛型は結成されていた。だがこれが具体的に稼動した形跡はなく、また「惣（＝総）国」とは言え、実際にどこまで影響力があったかについても詳らかではない。国境付近の国衆の中には旧六角・旧北畠の臣を経て、或いは独自の判断によって、早くから信長に降った者もいたのである。

とは言え、その特異な国情から、伊賀には元来、惣国一揆に近しい結束力は見られていた。それが信長という「外敵」を迎えたことで、一気に具現化したのであろう。

その伊賀惣国一揆の代表格が、東湯舟郷の藤林氏、南部城山と東部友生村喰代郷の百地氏、そして中央部予野の服部氏であった。伊賀が「忍びの里」として語られる時、俗に「上忍」として名が挙がる三家である。

さて、信雄の屈辱的な敗北に接してもなお、信長は伊賀を放置した。そして諸方面で継続中の戦いを黙々と片付けている。天正七年（一五七九）末から九年にかけて摂津の混乱を鎮圧し、播磨の戦いも制した信長は、遂に宿敵本願寺をも屈服させ、畿内及び周辺国から一切の敵影を消し去った。そして



織田信長の伊勢攻略は、圧倒的兵力による侵攻と婚姻政策を混ぜ合わせ、かつ段階的に侵攻を進め、各戦役を短期に終結させるというものであった。このためわずか3年で伊勢を平定することができた。それに対し、信雄の伊賀侵攻は拙劣で、準備不足のためか、狭隘な地形に進撃を阻害され、兵力の優位を活かせず、各個に撃破されて敗北した。

ここに至り、ようやく伊賀への攻撃を命じるのである。

或いは、信長は伊賀を放置していたのではなく、その伊賀への軍事行動を効果的に行うための「環境整備」を着着と進めていたと捉えるべきなのかもしれない。

伊賀はその地理的性格によって橋頭堡の構築は現実的でなく、組織的性格によって婚姻策も効果的でない。つまりは常識的な戦略が通用しないという特性を持っていた。だが一方、その地理的特性から彼らを封じ込めておくことは可能であり、時がたてばたつほど有利になることはあっても、不利になる可能性はなかった。

加えて狭隘な地形、並列的な組織、強い結束力、ゲリラ戦に長じた集団——これら全てを叩くための作戦はひとつしかなく、それは周囲の平定が済んではじめて行使可能だったと言える。

圧倒的な大軍勢による、短期集中型の包囲殲滅戦である。

天正九年（一五八一）九月、伊賀四大将とも呼ばれる大身の国衆である福地氏、及び河合郷の地頭耳須氏の内応を受けた信長は、遂に伊賀への侵攻を命じる。「第二次天正伊賀の乱」である。

総大将に任命されたのは、惨敗を喫した次男北畠信雄。雪辱戦である。信雄にはその配下の伊勢衆のみならず、近江衆・大和衆・若狭衆に加え、この時点までで信長に服属していた甲賀の国衆を加えた四万二〇〇〇もの兵が貸与され、文字通り伊賀へ通じる四方の峠から進撃が開始された。

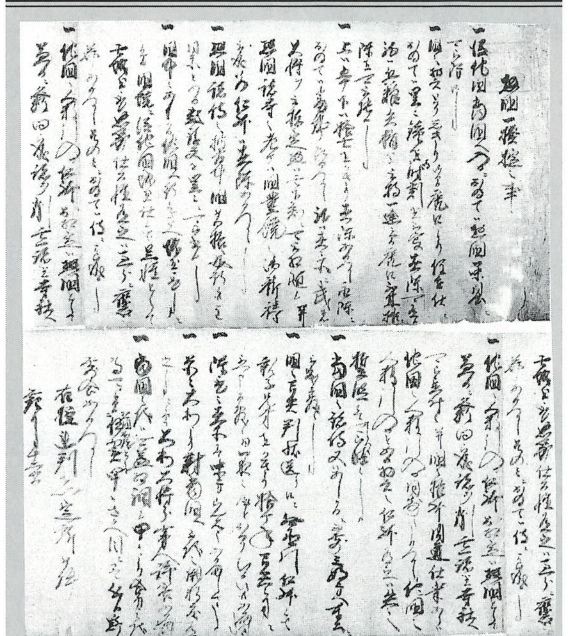
*甲賀口からは大将信雄と共に滝川一益・丹羽長秀らが率いる近江衆中心の一軍が侵入。信楽口からは堀秀政が率いる近江衆が進み、加太口からは織田信包・滝川雄利率いる伊勢衆、大和口からは筒井順慶率いる大和衆がそれぞれ進んでゆく。

軍勢を移動する利便性と山間部での行軍の安全面を考えれば四方からの侵入は妥当だが、これにはもうひとつ重要な意味が含まれていたはずだ。則ち、伊賀からの脱出を封じる狙いである。

四方から侵入した織田軍のうち、二手に別れていた近江衆は合流し、まず国内の拠点と目される壬生野城・佐那具城への攻撃を開始する。

逃げ場を失った伊賀衆の中には、即座に投降する者もあったらしい。だが全体的には徹底抗戦の構えを崩さず、激しい抵抗を見せたという。

『伊賀惣国一揆掟書』（山中文書）



写真は永禄3年頃に成立したとされる伊賀惣国一揆の掟書である。三好・松永勢の侵攻が予測される状況で書かれたこの掟には、他国から伊賀が攻められた場合は直ちに戦闘体制をとること、17歳〜50歳の者は戦陣に出ること、指揮官を定めることなどが記されている。織田軍の侵攻を前に、惣国一揆はより強固な体制になっていたと思われる。（神宮文庫蔵）

しかし、織田軍の攻撃もそれを上回る苛烈なものであった。国内の寺という寺、一の宮である敢国社をはじめとする神社には悉く火をかけ、壬生野・佐那具の両城を陥した後は、間髪を入れず各地に散在する数多くの城にも漏らさず攻撃を加えたのである。

さらに信長は、

伊賀（阿我）郡／織田信雄
阿拝郡／滝川一益・堀秀政ら
山田郡／織田信包
名張郡／丹羽長秀・筒井順慶ら

と、伊賀四郡それぞれに担当者を割り当て、戦闘員は無論のこと、山中に逃げ込んだ伊賀の住民についても老若男女、僧・俗人の区別なく、発見次第例外なく首を刎ねさせた。その数は一部隊につき日に数百単位というから皆殺しと言ってよい。一旦は帰順を赦された者までが斬首されたという。

信長は諸将に書状を送り、追及の手を緩めぬよう、こと細かく指示を与えている。どこから情報を得たものか、筒井順慶などは攻撃に手加減を加えたのが発覚し、叱責状すら受けていた。

執拗、という表現が妥当だろう。

*織田軍の伊賀への侵入経路と武将名は史料によって差異がある。記述は『信長公記』に基づく。

信長が、これに近い戦いを展開したのは過去に三例ある。元亀二年（一五七一）の比叡山焼き討ち、天正二年（一五七四）伊勢長島の一向一揆殲滅戦、そして同三年の越前一向一揆攻めであった。ただし、それは何れも宗教勢力に対するものであったし、何よりも一国規模を標的にしたのは前例がない。

信長はつまり、叡山焼き討ちを再現しようと試みたのだ。一網打尽の徹底攻撃が叶った叡山では以降何の問題も生じなかったが、それが叶わなかった一向一揆との戦いには十年もの歳月を浪費した。伊賀の持つ特異な国情と戦法に、信長は宗教的武装集団に近い危険性を感じとっていたのかもしれない。

伊賀は統率者を持たなかったがために、国を挙げて信長に牙を剥く危険性が少ないと見なされ、ゆえにこれまで攻撃目標にされることを回避出来ていた。だが中世の全てを破壊し尽してきた信長が、中世権力の矛盾から生まれ、中世的な自由を掲げる彼らを看過し続けることはありえず、何れかの段階で掌握に乗り出すのは当然であった。

そして——統率者を持たない並列的な組織であったことが最後には災いし、無差別攻撃という容赦ない作戦が選択されてしまったのである。

多勢に無勢、戦いそのものは一方的だった。主だった国衆は討たれ、残った城郭も全て破却された。文字通り伊賀一国は灰燼に帰したのである。

戦いの収束を受けて、同年十月に伊賀に入った信長は、四日にわたって国内を検分し、伊賀四郡のうち山田郡を長野（織田）信包に、残る三郡を北畠信雄に与えると発表して、この戦いを終結させている。

こうして、伊賀一国は信長の掌中に陥ちた。信長の思惑通り、以降伊賀衆の残党が、彼の覇道を妨げることもなかった。

伊賀の国衆は消滅したのだろうか。

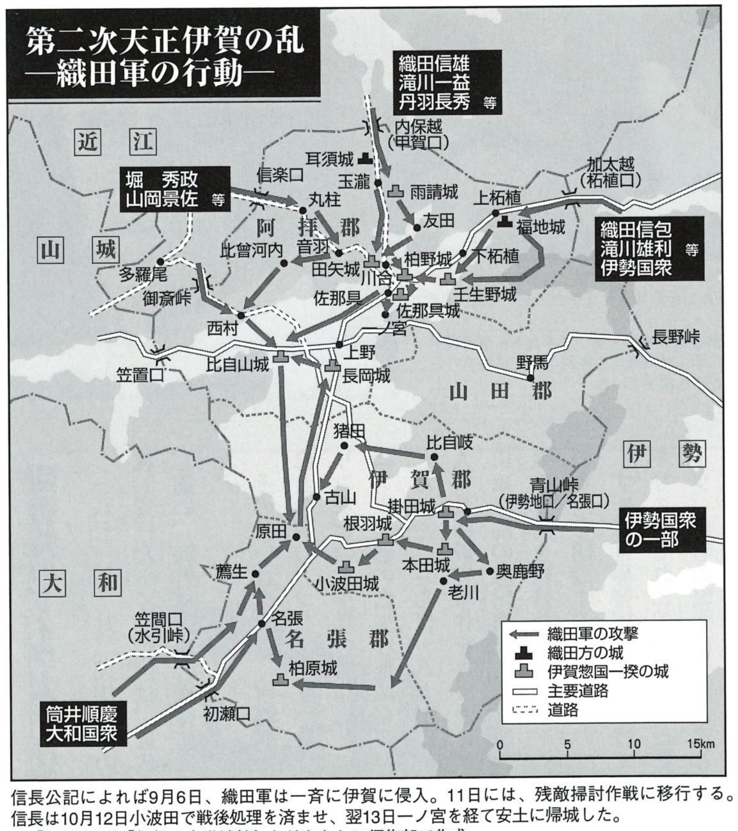
否。

天正十年六月二日早暁——。

信長が本能寺で討たれると、隣国伊賀にもその変報は届いた。すると各地に潜んでいた伊賀衆の残党は武装蜂起におよび、何れも小規模ながら諸地域で紛争を繰り広げている。信長に通じて仲間を裏切った福地氏らの居城もまた襲撃の目標となった。

「伊賀国一揆蜂起」

『勢州軍記』はそう記している。



信長公記によれば9月6日、織田軍は一斉に伊賀に侵入。11日には、残敵掃討作戦に移行する。
信長は10月12日小波田で戦後処理を済ませ、翌13日一ノ宮を経て安土に帰城した。
※『信長公記』『伊賀の中世城館』などをもとに編集部で作成。

信長の横死と政権の混乱に乗じたこの武装蜂起に対し、国主信雄は鎮圧のための兵を派遣した。彼にとっては実に三度目の派兵ということになる。

大きな混乱に発展する事態こそどうにか封じられたものの、より小規模な活動単位となった彼らを一網打尽にすることは「信長の怖れた通り」叶わず、断続的に発生した「第三次天正伊賀の乱」は翌年になっても治まることはなかった。固有の領土を失ってもなお、伊賀衆は伊賀衆として存在し続けたのである。

彼らが完全に武家政権の枠組みに収まるのは秀吉政権を経て徳川の世を迎えるまで——つまりは中世という時代が終わりを告げるまで——実現されてはいない。

〈主要参考文献〉『群書類従20　勢州四家記』（群書類従完成会）／神戸良政『続群書類従21上　勢州軍記』（続群書類従完成会）／百地織之助『校正伊乱記』／『大日本地誌大系21　三国地誌』（雄山閣）／太田牛一著、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』角川書店／多聞院秀俊著、辻善之助編『多聞院日記』（角川書店）／高木昭作監修、谷口克広著『織田信長家臣人名辞典』（吉川弘文館）／竹内理三『伊賀国黒田荘史料』（吉川弘文館）

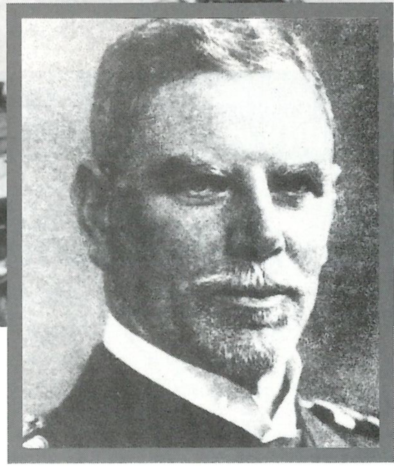
一次大戦の劈頭を飾った英独大海戦

死闘 ドイツ太平洋艦隊

第一次大戦時、世界第二の戦力を誇ったドイツ海軍
その中で最大の武勇を発揮したのは本国の艦隊ではなく
遠くアジアに派遣されていた巡洋艦部隊であった——

文＝伊吹秀明





1914年11月末、フォークランド諸島に向け、チリ・バルパライソ港を出撃するドイツ太平洋艦隊。写真奥左から右へ、煙をたなびかせる旗艦『シャルンホルスト』、『グナイゼナウ』、軽巡洋艦が後に続く。手前はそれを見送るチリ海軍艦艇。
右は同艦隊を率いて、中国青島から太平洋を横断、通商破壊戦を勝ち抜いてきたドイツ海軍中将マクシミリアン・フォン・シュペー。11月1日のコロネル沖海戦でも勝利の栄光に包まれたが、その前途には巡洋戦艦を含む強力なイギリス艦隊が待ち構えていた。

開戦時のドイツ太平洋艦隊

一八七一年一月、民族国家の統一を成し遂げたドイツ帝国は、近代化を推し進め、海外植民地の獲得に乗りだした。

その勢いは凄まじく、わずか三〇年ほどの間に、マリアナ、パラオ、カロリンなどの太平洋の各諸島とニューギニア東北部の広大な地域を領有するほどだった。さらに一八九七年、ドイツ人宣教師殺害事件をきっかけに、中国山東半島の膠州湾を占領。翌年には同地の青島を租借地とし、太平洋艦隊用の軍港を建設するに至ったのである。

すでに世界帝国を築き上げていたイギリスとそれに迫ろうとする新興国ドイツ。両者の緊張は極限に達し、ついに一九一四年八月、未曾有の大戦が勃発する。戦火は西欧だけではなく、列強の植民地となっていたアジア太平洋地域にも飛び火した。

もっとも、遠く離れたアジアでは、戦争準備が整っていたわけではない。開戦の時点で、ドイツ太平洋艦隊のマクシミリアン・フォン・シュペー中将の指揮下にあった六隻の巡洋艦は、各地に分散したままだった。

伯爵の称号を持つシュペーが将旗を掲げる装甲巡洋艦『シャルンホルスト』と姉妹艦『グナイゼナウ』は、東カロリン諸島のポナペ島にあった。

軽巡洋艦『エムデン』は、対馬海峡を青島に向けて航行中。

軽巡『ニュルンベルク』は、メキシコ派遣の任務を同『ライプチヒ』に引き継いで青島に帰航中だったが、シュペーから合同命令を受け取り、ポナペ島に針路を変えた。

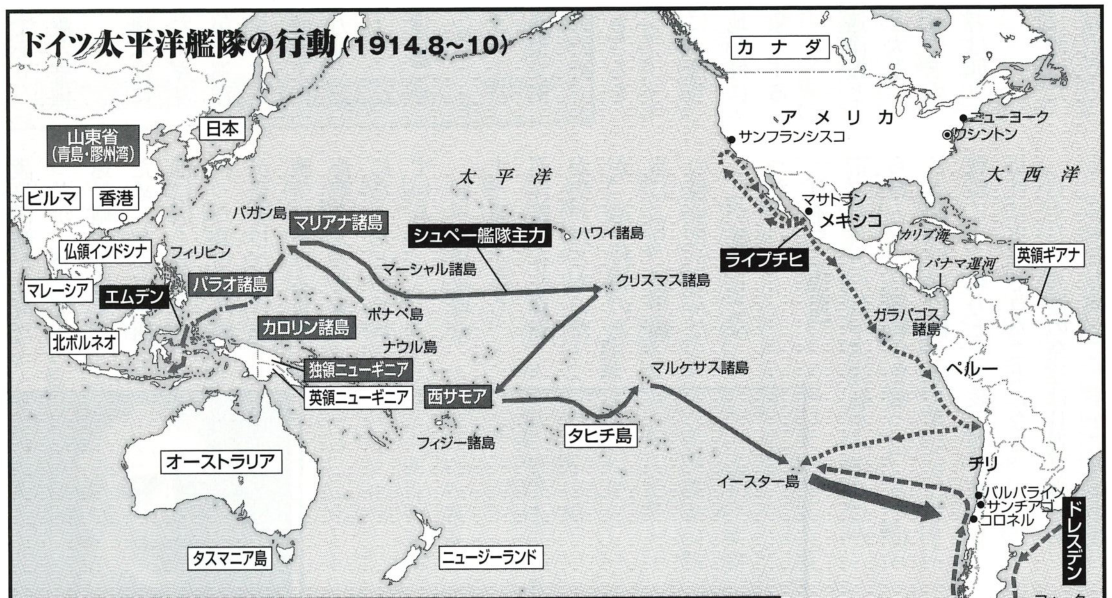
シュペー提督は、青島への帰港を選択肢から真っ先に消していた。イギリスが東洋艦隊の基地としている香港は近くであり、それと連携する連合国軍艦艇も付近にいる。また、イギリスと同盟を結んでいる日本も参戦してくる可能性は高かった。青島に帰港すれば、まわりを囲まれたまま身動きができなくなってしまう。

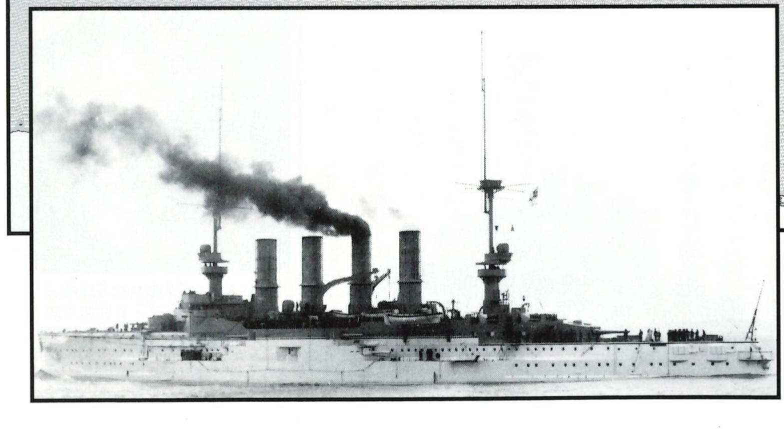
事実、数隻の砲艦とともに青島に留まっていた艦齢二一年の旧式巡洋艦『コルモラン』は、九月八日、自沈に追いこまれるのである。

八月六日、ポナペ島で『ニュルンベルク』と合同を果たしたシュペーは、ただちにマリアナ諸島北部のパガン島に向かった。十二日、パガン島には、青島を脱出してきた『エムデン』、石炭補給船八隻その他も到着し、太平洋艦隊は同地で臨戦準備を完了させた。

シュペーが率いる艦隊は、ドイツ大海艦隊の中でも優秀な射撃成績を誇り、とくに『シャルンホルスト』の砲術スタッフは皇帝から賞を賜るほどの腕前だった。とはいえ、彼我の兵力差は明らかで、正面きって連合国軍相手に殲滅戦を挑むわけにはいかない。

取るべき作戦は通商破壊戦しかなく、シュペーは目的地を南アメリカに決定したのである。南米の太平洋・大西洋沿岸は船舶の交通量が多く、シーレーン（海上交通路）攻撃にはうってつけであること。メキシコ沖に派遣している『ライプチヒ』と協同できること。そして、比較的ドイツ本国と





シュペー提督座乗の装甲巡洋艦『シャルンホルスト』。シャルンホルスト級一番艦で、1907年竣工。姉妹艦『グナイゼナウ』ともども、本級の完成をもって、ドイツ装甲巡洋艦は世界水準に達したといわれる。

＊シュペー提督の肖像写真は William Koenig『EPIC SEA BATTLES』(Octopus Books)より。

の連絡が取りやすいことが理由だ。
ただ、インド洋方面でも作戦すべし、という『エムデン』艦長カール・フォン・ミュラー中佐の主張は受け容れられ、同艦は石炭補給船一隻とともに南方に向かったのである。それが彼らにとって、最後の別れとなった（『エムデン』は、十一月八日に敵と交戦の末、ココス島付近に座礁するまで神出鬼没の活躍を続け、連合国軍を大混乱に陥れている）。
南太平洋に進出したシュペー艦隊は、九月二十二日、フランス領タヒチ島を砲撃。パペーテ港にあった砲艦『ゼレ』を撃沈した。
十月十二日には、艦隊はモアイの石像遺跡で有名なイースター島に到着。同地にはすでに軽巡『ドレスデン』が入港していた。同艦はカリブ海に配置されていたが、本国への帰還が不可能となり、シュペーの指揮下に入るように命令されて来たのである。
さらに十四日、メキシコ沖からガラパゴス諸島にかけて通商破壊戦を展開してきた『ライプチヒ』もイースター島に入港した。
これでシュペー提督の兵力は、装甲巡洋艦二隻、軽巡洋艦三隻となった。
イースター島は中立国チリ領であり、艦隊は一週間の停泊の間、休養と整備を行うことができた。
一方、ドイツ太平洋艦隊が南米沖に向かっていることを突き止めたイギリス海軍は、南大西洋にあった第4巡洋艦戦隊──クリストファー・ジョージ・フランシス・クラドック少将麾下の艦隊を捜索に向かわせた。兵力は、装甲巡洋艦『グッド・ホープ』『マンマス』、軽巡洋艦『グラスゴー』、仮装巡洋艦『オトラント』である。
イギリス海軍省は、戦艦『カノーパス』も派遣していたが、前弩級型で旧式の同艦は一八ノットの低速のため、クラドックとは別行動をとらさざるを得なかった。
シュペー、クラドックともに手持ちの武器は巡洋艦である。植民地警備に役立つ巡洋艦は、帝国主義を象徴する存在ともいえる。
近代軍艦史の中で息の長い巡洋艦という艦種は、大きく分類すると大型、小型の二系統で発達した。前者に求められたのは強力な戦闘力、後者は低コストによる量産性である。
十九世紀末までは、水線下に設けた防護甲板と積載する石炭で防御する防護巡洋艦が主流だったが、発達する速射砲に対抗するため、やがて水線部に広く装甲帯を持った装甲巡洋艦が登場した。日清戦争における黄海海戦が大きな契機になったといわれている。
装甲面積を増やすと速力が落ち、巡洋艦の存在意義が失われるものだが、冶金技術の進歩により、装甲鈑の軽量化が進んだことが後押しとなった。
日本も『浅間』『出雲』などの装甲巡洋艦をイギリスから輸入し、日露戦争を戦った。とくに日本海海戦での働きは大きなもので、戦艦に次ぐ戦力として装甲巡洋艦の有用性は実証されたことになる。
しかし、兵器の発達は日進月歩である。日本海海戦からわずかに九年半後──一九一四年の海戦はどうなるか？

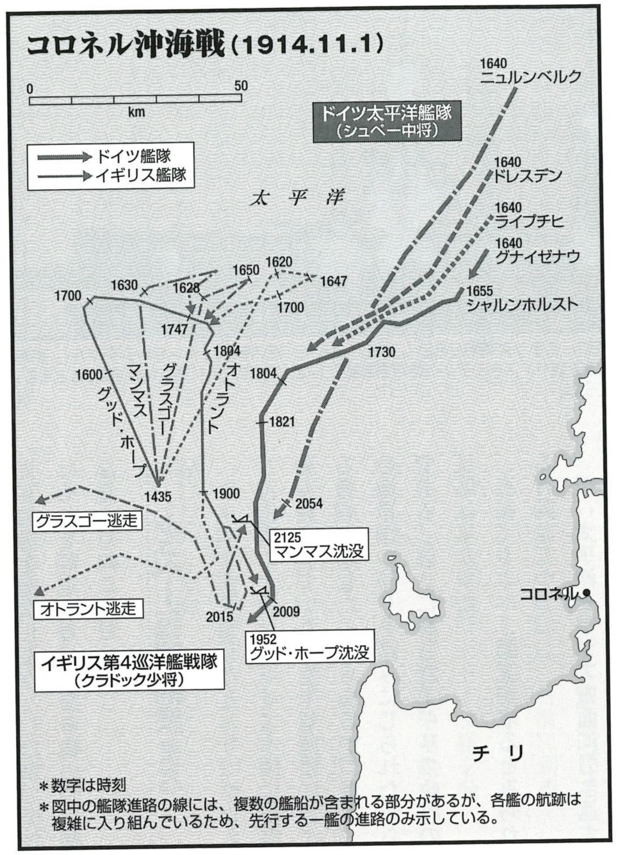
英独艦隊、コロネル沖に激突

十月二十七日、南米沖を北上するクラドックは、偵察のために『グラスゴー』をチリの小さな港コロネルに派遣した。





イギリス第4巡洋艦戦隊の旗艦『グッド・ホープ』。高速・重武装を誇るドレイク級装甲巡洋艦の一艦で、1902年竣工。舷側下段の砲が荒天時に使用できなくなる難点があった。
上は艦隊司令官クラドック少将。

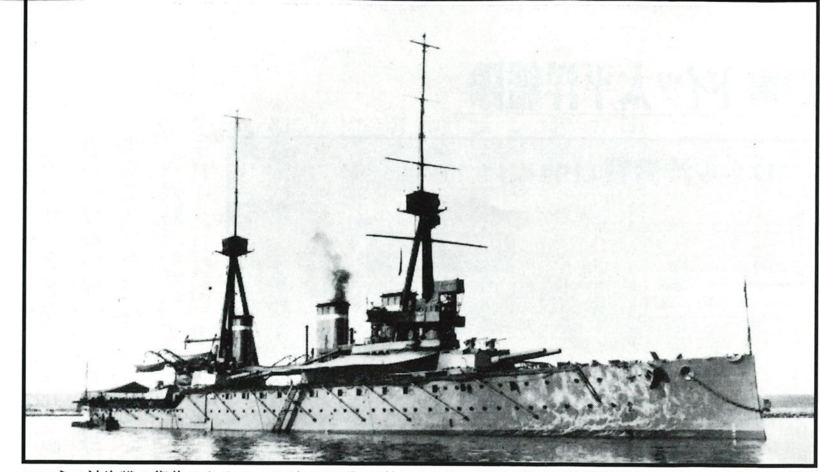


シュペーは、イギリス軽巡一隻がコロネルにあるとの情報を得て、サンチャゴ近くのフェエラ島から出撃する。
クラドックの方は、『グラスゴー』からドイツ軽巡『ライプチヒ』がコロネル付近にいると報告を受け、進撃スピードを上げた。両軍とも、互いに相手の一艦のみを攻撃しようとしたのである。
十一月一日夕方、こうして両艦隊は思いがけない形で、コロネル沖で激突することになった。
一六時一七分、まず『シャルンホルスト』の見張員が洋上に立ち上る煙を発見した。それをイギリス艦隊であることを認めたシュペーは、『シャルンホルスト』『グナイゼナウ』『ライプチヒ』『ドレスデン』の縦陣で南下し、敵とチリ陸岸の間に割りこんで、風上に占位した。『ニュルンベルク』は偵察用に分派されていたため、やや遅れて戦場に到着することになる。
対するクラドック艦隊は、索敵用の横陣から戦闘態勢の単縦陣に組み替え、『グッド・ホープ』『マンマス』『グラスゴー』『オトラント』の順に同航戦態勢を作った。最大の火力を有する『カノーパス』はこの時点で三〇〇海里も離れていて、とても間に合わない。
戦場となった海は波が高く、太陽は西に大きく傾いていた。イギリス側は太陽を背にしているうちに戦端を開こうとしたが、ドイツ側はそれに応ぜず、距離をとって時間を稼いだ。
やがて陽が沈むと、シュペーの思惑どおり状況は一変する。水平線上の残照にイギリス艦隊はくっきりと浮かび上がり、ドイツ艦隊は背景となっている陸地の中に溶けこんだ。月は出ているものの、ドイツ軍を照らすだけの光量はない。
一八時四〇分、ついに戦いの火蓋が切られた。それまで敵との間合いを維持することに集中していたシュペーが攻撃を下令。距離一万一〇〇〇メートルから『シャルンホルスト』と『グナイゼナウ』が射撃を開始した。
両軍ともに主力は装甲巡洋艦二隻である。ドイツ側の姉妹艦二隻はそれぞれ二一センチ砲八門、一五センチ砲六門。イギリス側の『グッド・ホープ』は二三・四センチ砲二門、一五・二センチ砲一六門。『マンマス』は一五・二センチ砲一四門を搭載していた。
ただし、イギリスの装甲巡には中甲板に配備した舷側下段の砲が荒天時に使用不可能になるという欠点があった。まさにこのときがそうで、一五・二センチ砲の半数は荒波を被って使い物にならなかった。
対するドイツ側は火砲の門数だけではなく、射撃精度も上である。『シャルンホルスト』は第三斉射にして『グッド・ホープ』の前部砲塔を破壊し、『グナイゼナウ』も『マンマス』の前甲板に火災を発生させていた。
イギリス側は反撃しようにも、ドイツ艦隊を視認できない。わずかに発砲時の閃光が見えるだけである。戦いは一方的な展開となった。
一九時五二分、『グッド・ホープ』は大爆発を起こし、クラドックとともに海面から消えた。『マンマス』は後退したものの、船体を包む炎があってはいい目標である。遅れて突入してきた『ニュルンベルク』に砲撃され、二一時二五分、同艦は横転して沈没した。
『グラスゴー』は数発の命中弾を受けたものの快速を発揮して逃れ、火力と速力の劣る仮装巡『オトラント』は最初から積極的に戦闘には加わらず、す

でに闇にまぎれて遁走していた。

シュペー艦隊の被害は『グナイゼナウ』が小破した程度である。

コロネル沖海戦は、敵装甲巡二隻を撃沈したドイツ側の完勝に終わった。チリのバルパライソに入港したシュペー中将に対して、ドイツ系住民たちは祝宴の場を提供しようとしたが、提督はそれを辞退する。次なる戦いの予感を覚えてのことだった。


コロネル沖海戦の復仇のために、イギリスが切り札として送り込んだ、巡洋戦艦『インヴィンシブル』。戦艦並みの火力と巡洋艦並みの高速を誇り、スターディー中将の旗艦として、同級の『インフレキシブル』とともに、シュペー艦隊迎撃の先頭に立った。

シュペー包囲網狭まる

シュペーが予想したとおり、コロネル沖海戦の大敗はイギリス本国に衝撃をもたらしていた。南米通商路に対する脅威が増したこともあるが、世界一の海軍国の誇りを踏みにじられたからである。怒りに満ちたイギリス政府の反応は早かった。

今後、シュペー艦隊が取るとみられる行動は三つ。

一、太平洋をアジア方面に引き返す。
二、パナマ運河を通ってカリブ海・大西洋に出る。
三、南米ホーン岬をまわって大西洋に出る。

第一の可能性に対しては、対独参戦した日本海軍がすでに二つの艦隊を展開させていた。フィジー諸島のスバ港には第1南遣艦隊の巡洋戦艦『鞍馬』『筑波』『生駒』などが、東カロリン諸島のトラック環礁には第2南遣艦隊の戦艦『薩摩』、巡洋戦艦『伊吹』などが集結していた。

第二の可能性については、メキシコ沖に派遣されていた巡洋戦艦『オーストラリア』、日本の戦艦『肥前』、装甲巡洋艦『出雲』『浅間』などが連合して対処することになった。

すでにパナマ運河を通過していた場合、そして第三の可能性については、イギリス海軍が自ら動きだした。軍令部長のジョン・アーバスノット・フィッシャー元帥が本国艦隊第2巡洋戦艦戦隊から巡戦『インヴィンシブル』と『インフレキシブル』を引き抜き、秘密裏に南大西洋に派遣したのだ。指揮官は海軍省参謀部長だったダブトン・スターディー中将である。

ドイツも巡洋戦艦を派遣するらしいとの不確かな情報もあり、イギリス軍は作業を急がせた。

さて、イギリス海軍が刺客として繰り出し、また世界的に見ても、他にはドイツと日本海軍のみが建造した巡洋戦艦とは何か？

それは一九〇四年、イギリス海軍第一軍事委員に就任したフィッシャー提督の「速度は装甲に勝る」という着想から始まった。日本海軍が同年に起工した装甲巡洋艦『筑波』の影響を受けたものとも言われている。

『筑波』は戦艦並みの三〇・五センチ砲四門を搭載していたが、フィッシャーが計画した大型装甲巡洋艦は一万七二九〇トンの船体に倍の八門を搭載し、二五・五ノットの高速を発揮。戦艦『ドレッドノート』とともに世界の海軍に衝撃を与えた。

『インヴィンシブル』級と命名されたこのクラスは、装甲巡洋艦にしてはあまりにも強力ということで、巡洋戦艦という新しい艦種名も付けられた（『筑波』も大正元年に艦種変更された）。

『インヴィンシブル』が竣工した一九〇八年三月には、『グナイゼナウ』も竣工しているが、ドイツの装甲巡洋艦は完成と同時にその価値を減じられたことになった。何やら因縁めいたものが感じられる。

一九一四年十一月十一日、スターディーは『インヴィンシブル』に将旗を揚げて出撃し、途中の二十六日、スタッダート少将が率いる装甲巡『カーナヴォン』『コーンウォール』『ケント』、軽巡『ブリストル』、そしてコロネル沖から戻った『グラスゴー』と合流しつつ、十二月七日にフォークランド諸島スタンレー港に到着した。

日本海軍の協力を得て、イギリス軍のシュペー艦隊包囲網は完成しつつあ

った。一方、追われる立場のシュペーは、コロネル沖海戦から約一か月もの間、通商破壊などの行動を起こさなかった。チリ沿岸やフェエラ島に留まり、物資の補給をした程度である。

行動を控えた理由は不明だが、ドイツ本国が巡洋戦艦を派遣するという風評を耳にし、待っていた可能性もある。しかし、巡戦派遣の事実はなかった。

シュペー自身は次の作戦地をアフリカ沿岸と考えていたが、幕僚たちの提言によってアルゼンチン沖のフォークランド諸島に変更した。同地には、コロネル沖海戦の敗残艦艇しか在泊していないと思われたからである。

両艦隊、予期せぬ遭遇

十一月末、シュペーは運命の判断を下して出撃した。十二月一日、五隻のドイツ太平洋艦隊はホーン岬経由で大西洋に入る。

八日の朝、いよいよフォークランドに接近したシュペーは、『グナイゼナウ』と『ニュルンベルク』を分派し、同地の強行偵察を命じた。敵情を探るとともに、島の無線電信所を破壊させるためだ。

ところが、予想もしていなかった事態が待っていた。突如、『グナイゼナウ』の近くに水柱が上がった。フォークランド島警備のために停泊していた戦艦『カノーパス』の砲撃である。

敵の旧式戦艦一隻が在泊していることはまだ予測の範囲内だが、『グナイゼナウ』の見張員は、湾内に他の大型艦二隻のマストを発見して驚いた。天敵といえる巡洋戦艦だ！

奇襲の失敗を悟ったドイツ艦二隻は、砲撃を中止して反転。事態を知ったシュペー中将は艦隊をまとめて、離脱にかかる。

驚いたのはイギリス側も同じである。スターディー艦隊は一日前に到着したばかりで、七時五〇分、サパーズヒルの見張所がドイツ艦を発見したときは、まだ石炭の補給中だった。

八時三〇分、スターディーは戦闘準備を発令する。まずは装甲巡『カーナヴォン』と『ケント』が急いで出港した。『カノーパス』が発砲したのは九時一五分のことである。

『インヴィンシブル』と『インフレキシブル』は給炭作業を中止。一〇時にフル回転で準備を進め、故障した軽巡『ブリストル』以外の艦がスタンレー港から出撃した。

コロネル沖海戦のときとはうって変わり、十二月八日の天候は晴れだった。海面は穏やかで、見晴らしも良い。追跡する方が有利な気象条件だ。

『シャルンホルスト』級装甲巡の最大速度二三・五ノットに対し、『インヴィンシブル』級巡戦は二五・五ノットを発揮する。加えてシュペー艦隊は長期間の航海により機関が疲れ、艦底にも貝類などの付着物が溜まっているため、性能どおりの速度は出せない。

距離はぐんぐん縮まり、やがてスターディーは南東方面にシュペー艦隊五隻のマストを視認した。

一二時五五分、『インフレキシブル』がまず距離一万三七〇〇メートルから初弾を放った。巨弾は、ドイツ艦隊最後尾の『ライプチヒ』の付近に落下。続いて『インヴィンシブル』もまた砲撃を開始する。思うように速度の出ない軽巡は早くも落伍しかけていた。

このとき、艦隊の全滅を悟ったシュペー中将は悲壮な決断を下す。今後、通商破壊戦に役立つであろう軽巡三隻を逃がすため、自らを楯とすることを決意したのである。


運命のフォークランド諸島に向け、南アメリカ大陸南端のホーン岬を廻るべく、チリ沖の荒海を行くドイツ太平洋艦隊。

一三時二〇分、シュペーは「本職は最後まで奮戦す。南米沿岸に向かいたし」と、『ライプチヒ』『ドレスデン』『ニュルンベルク』に戦場からの離脱を下令した。

五分後、三隻が解列して艦首を南に向けたのを確認したシュペーは、敵を牽制すべく『シャルンホルスト』と『グナイゼナウ』を再反転させた。

だが、イギリス軍も一筋縄ではいかない。そうしたドイツ側の行動は戦策に織り込み済みで、スタッダート少将麾下の装甲巡『コーンウォール』『ケント』、軽巡『グラスゴー』は命令を待つことなく、ドイツの三軽巡を追った。

スターディー自身は巡戦二隻を率いて、シュペーの装甲巡二隻の前に立ちふさがる。隻数こそ二対二であるが、装甲巡洋艦とそこから大きく発達した巡洋戦艦では能力に大きな差があった。

ドイツ側の備砲は二隻合わせて、二一センチ砲一六門、一五センチ砲一二門、八・八センチ砲三六門。イギリス側はやはり二隻合わせて、三〇・五センチ砲一六門、一〇・二センチ砲三二門。

二一センチ砲の有効射程一万二四〇〇メートルに対し、三〇・五センチ砲は一万六〇〇〇メートル以上の射程があり、破壊力も上。遠距離からアウトレンジすることが可能だ。

ドイツ軍に活路があるとすれば、多数の副砲を活かせる接近戦だった。『インヴィンシブル』級の装甲鈑の厚さは、装甲巡洋艦と大差ないのだから。

死闘！ フォークランド沖

一三時三〇分、両軍主隊同士の砲撃戦が始まった。最初は同航戦の態勢だったが、スターディーは距離を取ろうとし、シュペーは間合いを縮めようと、両軍とも細かく変針する。コロネル沖海戦とは正反対の構図である。

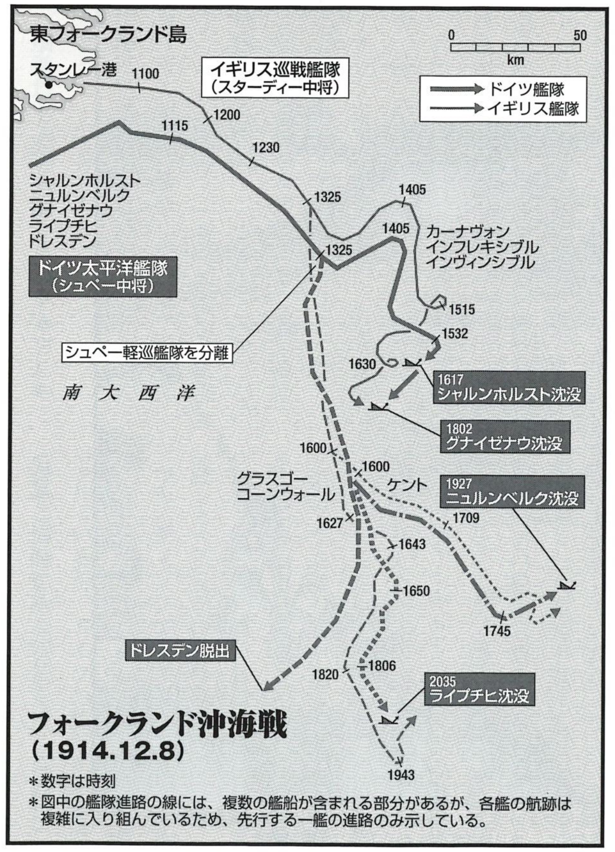
一四時五九分、九〇〇〇メートルまで近づいたドイツ装甲巡は副砲の一五センチ、八・八センチ速射砲を発射。さらに接近を試みるが、優速を誇るイギリス巡戦二隻はそれを許さない。大口径砲でドイツ艦を打ちつけ、距離を開く。巡洋戦艦はボクサーに例えると、ヘビー級のパンチ力と軽量級のフットワークを合わせ持った存在だった。

安全圏を維持するイギリス艦は被弾数も少なく、損害は軽微だ。一方、『シャルンホルスト』は数か所から火災が発生し、『グナイゼナウ』は船体の傾斜が始まっていた。いかにシュペーに知勇があり、射撃術が優れていようと、この性能差は覆しようがなかった。

この戦いは、イギリス海軍省が巡戦の派遣を決定したときから結果が決まっていた。本国から主力艦を引き抜いてまでシュペー艦隊を仕留めようとした執念の勝利であり、それを読めなかったドイツ側の敗北である。

一六時、優勢なイギリス軍主隊に、さらに追いついてきた装甲巡『カーナヴォン』が加勢する。三隻がかりの攻撃は、『シャルンホルスト』に致命傷を与えるに充分だった。

四本あった煙突もマストも倒れ、全艦火煙に包まれたシュペーの旗艦に最期のときが訪れる。傾斜を深めていった『シャルンホルスト』は、一六時一七分、ついに横転。沈没する直前、シュペーは僚艦『グナイゼナウ』に救助よりも脱出に努めるよう信号を送っている。シュペー中将は戦死し、同艦の乗組員は一人たりとも生き残らなかった。



フォークランド沖海戦
(1914.12.8)

＊数字は時刻
＊図中の艦隊進路の線には、複数の艦船が含まれる部分があるが、各艦の航跡は複雑に入り組んでいるため、先行する一艦の進路のみ示している。

残った『グナイゼナウ』は懸命に離脱を試みるが、優速の三隻を相手に結果は火を見るよりも明らかだった。反撃するも、自ら発する火災の煙により、弾着観測さえもままならぬ状況である。

主砲弾を撃ち尽くしたあと、艦長は自沈命令を下した。軍艦旗を掲げたまま『グナイゼナウ』が波間に没したのは一八時〇二分のことだった。敵艦の最期を見届けた英艦が現場に急行し、約二〇〇名が救助された。



漂流するドイツ巡洋艦『グナイゼナウ』の生存者。背景はイギリス巡洋戦艦『インフレキシブル』で、救助用のボートが下ろされている。第一次大戦劈頭、連合国の心胆を寒からしめたシュペー艦隊はフォークランド沖に事実上壊滅した。

シュペーが命がけで逃がそうとした軽巡三隻はどうなっただろうか。

残念ながら、提督の願いは叶えられなかった。イギリス側の追撃が速く、そしてやはり機関の疲労でその能力をフルに発揮できなかったからだ。

一六時一五分、『ライプチヒ』は、『コーンウォール』と『グラスゴー』に捕捉され、一対二の砲戦となった。四時間以上も抗戦したのち、弾薬を撃ち尽くした『ライプチヒ』は艦長命令で海水弁を開いて自沈した。コロネル沖海戦の生き残りである『グラスゴー』にとっては、僚艦の仇を討ったといえるだろう。

『ニュルンベルク』は、追撃してきた『ケント』と激しく砲火を交えた。補給を完了しないまま出撃してきた『ケント』は途中で石炭を切らしたが、士官室にあったオルガンなどあらゆる可燃物をくべる執念を発揮し、ドイツ軽巡を追いつめた。軍艦旗を下ろした『ニュルンベルク』が横転後に沈没したのは一九時二七分のことである。

唯一、『ドレスデン』のみが戦場からの離脱に成功した。しかし、孤立無援の状態には変わりなく、三か月後の一九一五年三月十四日、ファン・フェルナンデス諸島近辺で『ケント』『グラスゴー』と交戦して沈没した。ここにドイツ太平洋艦隊は壊滅したのである。

シュペー提督の勇名残る

フォークランド沖海戦は、装甲巡洋艦という艦種の最期を意味するものであった。

ドイツ海軍は『シャルンホルスト』級の次に大型装甲巡『ブリュッヒャー』を建造したが、一九一五年一月のドッガー・バンク沖海戦で呆気なく沈んでいる。装甲巡としては最強といえるものではあったが、英独の巡洋戦艦同士の戦いの中ではまったくの無力だったのだ。

だが、巡洋戦艦がそのまま戦艦と並ぶ王座に就いたというわけでもない。一九一六年五月のジュトランド沖海戦において、シュペー艦隊を壊滅させた『インヴィンシブル』を含む三隻が立て続けに轟沈した。薄い装甲が致命傷となり、巡洋戦艦という艦種もたちまち斜陽化してしまったのである。

技術の発展と戦場での評価の前に、兵器の栄枯盛衰は激しい。だが、武人の魂は人々の記憶に残る。

第一次大戦中、世界第二位の戦力を有しながら、ほとんど動くことのなかった本国の大海艦隊に対し、短い期間ではあるが太平洋艦隊の活躍はめざましかった。四か月もの間、イギリス、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、そして日本の商船や軍艦が、ほんの数隻のドイツ巡洋艦のために活動を制約され、被害も受けたのである。

コロネル沖海戦ではイギリス艦隊を撃破し、フォークランド沖海戦では友軍を逃がすために自ら犠牲となったシュペー提督の戦いぶりは敵味方に大きな感銘を与えるものだった。

シュペーの名は、のちにドイツが建造した装甲艦『アドミラル・グラフ・シュペー』に付けられ、彼が指揮した『シャルンホルスト』と『グナイゼナウ』もまた後の巡洋戦艦の名に引き継がれたのであった。

〈図版参考〉P171の地図は、Arthur Banks『A Military Atlas of the First World War』(Leo Cooper)／P173とP176の図は、Richard Natkiel『Atlas of 20th Century Warfare』(Gallery Books)を、主に参照しました。

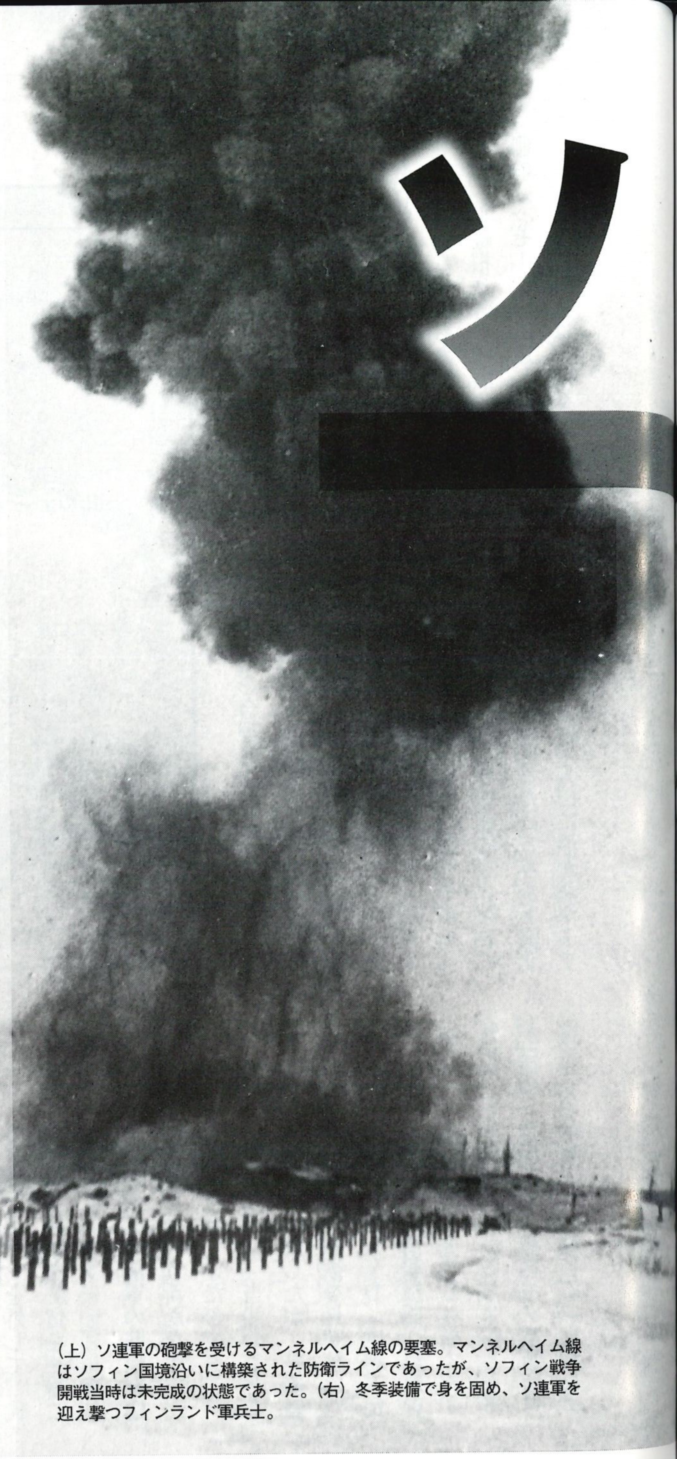
〈参考文献〉三野正洋・古清水政夫『死闘の海』(光人社NF文庫)／野村實『海戦史に学ぶ』(文春文庫)／世界の艦船増刊『イギリス巡洋艦史』『ドイツ巡洋艦史』(海人社)

The Winter War

ソフィン戦争

スターリンの強圧をはねつけた小国の矜持





（上）ソ連軍の砲撃を受けるマンネルヘイム線の要塞。マンネルヘイム線はソフィン国境沿いに構築された防衛ラインであったが、ソフィン戦争開戦当時は未完成の状態であった。（右）冬季装備で身を固め、ソ連軍を迎え撃つフィンランド軍兵士。

文＝山崎雅弘

第二次大戦初期、北欧の小国フィンランドは
強大な隣国・ソ連の軍事侵攻を、その少ない戦力で受け止めた
地形と自然環境を巧みに利用した、フィンランド軍の果敢な戦闘！

世界を驚嘆させた小国の抵抗

一九三九年十一月三十日から、計一〇五日間にわたって繰り広げられたソ連＝フィンランド戦争（ソフィン戦争）は、巨大な軍隊を持つ大国ソ連が、あたかも旧約聖書に登場するダビデとゴリアテのごとく、北欧の小国フィンランドに苦しめられた戦いだった。

第二次大戦の本格化を目前に控えたこの時期に、ソ連が隣国フィンランドを攻撃した背景には、近い将来に予想されるドイツとの開戦に際して、北部の重要都市レニングラードとムルマンスク鉄道の安全を確保しておきたいという思惑が存在していた。そして、ソ連側が提示した、彼らの目から見れば「控えめな」領土交換要求がフィンランド政府に拒否されると、ソ連の独裁者スターリンはただちに軍事力の行使を命令、陸軍力では当時世界最大規模を誇ったソ連赤軍が国境を越えてフィンランド領内へと侵入した。

だが、兵力面で圧倒的な優位に立つはずのソ連軍は、侵攻開始から数日のうちに前進の足を止めることを強いられ、森と雪に覆われた酷寒の戦場を幽霊（ゴースト）のように徘徊するフィンランド軍小部隊のゲリラ戦術に翻弄された挙げ句、膨大な人員と兵器を失って防勢に転じることを余儀なくされてしまう。最終的には、ソ連側が有利な条件で講和が成立したとはいえ、国際社会での面目が丸つぶれとなったスターリンと赤軍首脳部にとっては、決して内容を誇示できるような戦勝ではなかったのである。

当時、ヨーロッパに駐在していた各国武官の誰もがソ連軍の圧勝を予想したこの戦争において、ソ連軍はなぜ苦戦を強いられたのか。充分な兵器と弾薬を持たないフィンランド軍は、いかなる戦術を駆使して巨大なソ連赤軍に立ち向かったのか。そして、この戦争の推移は、第二次世界大戦の行方にどのような影響をもたらしたのだろうか。

ソフィン開戦までの経緯

水面下で始まった領土交換交渉

ドイツ軍のポーランド侵攻から一年半前に当たる一九三八年の四月十四日、フィンランドの首都ヘルシンキにあるソ連大使館に勤務する二等書記官が、フィンランド外相ルドルフ・ホルスティに非公式な面会を申し入れた。ホルスティは、大使ではなく二等書記官による秘密裡の面会要請という事態に戸惑ったものの、その背後にソ連側の重要な政治的意図が隠されていることを素早く察知して、面会を承諾することにした。

面会場に現れたソ連の二等書記官ボリス・ヤルチェフは、モスクワ（スターリン）からの密命をホルスティに伝えた。

「私は、次のことをお聞きしたい。ドイツがソ連に対して戦争を仕掛けた場合、貴国はどのような態度をとられるか。もし、ドイツが貴国をソ連攻撃の足場として利用するのであれば、わが国は躊躇なく貴国を攻撃するでしょう。しかしながら、貴国がドイツに抵抗するなら、わが国は軍事的・経済的なあらゆる援助を貴国に提供し、戦争終結後には全ての軍隊を貴国から撤収させるつもりです」

ソ連政府が「ソ連に対してドイツが戦争を仕掛けた場合」という仮定の問題を外交交渉の席で持ち出したのには、理由があった。当時のフィンランドとソ連の国境線は、レニングラード市の外縁と最も近い場所でわずか三〇キロしか離れておらず、要港ムルマンスクに通じる重要な鉄道線も、フィンランド領から八〇キロほどの場所を走っていた。

もし万が一、フィンランドがドイツと軍事同盟を締結し、ドイツ軍が同国領内に進駐する事態が発生すれば、レニングラードとムルマンスク鉄道の安全は風前の灯火となることは確実だった。フィンランドの現政権がヒトラーと手を結ぶ可能性は決して高くないと

はいえ、国家の急所を危機に晒すリスクを放置することはスターリンの流儀ではなかった。
　この面会の席では、具体的な決定は何も行われなかったが、ヤルチェフ二等書記官はこの後もカヤンデル首相やタンネル蔵相と密かに面会して、ソ連側のメッセージを伝達した。フィンランド政府の首脳部は、最初のうちソ連側の懸念を合理的なものと受け止め、同年八月に「フィンランドは、ドイツがソ連を攻撃する際に出撃拠点を提供しないことを宣言し、ソ連はフィンランドの現領土を尊重することを約束する」という主旨の条約草案をヤルチェフに提示した。この草案には、対ドイツの中立を維持するため、バルト海北部のボスニア湾の入口に浮かぶオーランド諸島をフィンランドとスウェーデンが共同で防衛し、ソ連はそれに対して承認を与えるという条項も含まれていた。

大戦前のフィンランド周辺



フィンランドはスカンジナビア半島の付け根に位置する国家で、ソ連と長い国境線で接している。ソ連の主要港ムルマンスクとレニングラードを結ぶムルマンスク鉄道はソフィン国境に沿って走っており、フィンランドが反ソ勢力となった場合、この動脈が寸断されることをスターリンは恐れた。ルイバチー半島やカレリア地峡といった要衝を得る代わりに、ソフィン国境沿いの不毛な土地をフィンランドに譲渡するというソ連の提案は、理不尽なものであった。

　だが、この草案に対するソ連側の対応は、フィンランド政府が予想もしなかったほど高飛車なものだった。一週間後にソ連側から提示された条件には、対ドイツの中立に加えて、フィンランド領であるオーランド諸島の共同防衛からスウェーデンを外して、代わりにソ連軍を駐留させること、およびフィンランド湾内にも別のソ連海軍の基地を建設させるという新たな要求が盛り込まれていたのである。
　フィンランド政府は、当然のことながらこの逆提案を拒否したが、ソ連側はなおも交渉継続の意欲を見せ続けた。ヘルシンキ駐在のNKVD*（内務人民委員部：ソ連の秘密情報機関）現地責任者でもあるヤルチェフとホルスティ外相の非公式な接触からちょうど一年が経過した一九三九年春、ソ連側は外務省の公式ルートを通じて「レニングラードに近いフィンランド湾内のいくつかの島の租借」と引き換えに、ソ連とフィンランドの国境に接する内陸部の（人家も疎(まば)らな）地域をフィンランド側に割譲するという新しい提案を披露した。
　この手前勝手な領土交換要求を知ったフィンランド政府のほとんどの閣僚は、過去のソ連側提案と同様、フィンランドの国民感情から考えて到底受け容れられない条件であると判断していた。だが、有力者の一部には、長期にわたる国益を考えれば、ソ連に対して一定の譲歩を与えることは決してマイナスではないと考える人々も存在していた。
　国防会議議長（国防相とは別の政府顧問的な役職）としてフィンランド軍の頂点に君臨するマンネルヘイム元帥もまた、そのような対ソ宥和(ゆうわ)派の一人だった。

マンネルヘイム元帥の懸念

　スウェーデン系貴族の家庭に生まれたカール・グスタフ・マンネルヘイムは、当時フィンランドを領有していた帝政ロシアの騎兵学校に入校し、ロシア軍の騎兵将校として日露戦争と第一

＊NKVD現地責任者＝ソ連の外交官は、通常NKVDなどの諜報機関の人間が兼務している。

次大戦にも従軍していた。ロシア革命直後の一九一八年、ロシアからの独立を宣言したフィンランドの国内で、民族主義者と親ソ派の内戦が勃発すると、マンネルヘイムは民族派の軍勢を率いて活躍し、一九三一年には国防会議の議長に就任した。
　こうした輝かしい経歴を持つマンネルヘイムが、こともあろうにソ連側の提示した実質的な領土割譲要求に理解を示すそぶりを見せたことに対し、周囲の人間は大いに驚き、訝(いぶか)ったが、マンネルヘイムの信念は揺るがなかった。ロシアという国家を熟知する彼は、フィンランドとソ連の間に厳然と存在する軍事力や国力の差を冷徹に認識しており、ソ連軍との直接対決が長期化すれば、フィンランド側に勝ち目がないことを充分に理解していた。
　しかし、フィンランド政府は結局、ソ連側の提案を拒絶する道を選ぶことになる。「ソ連の要求を呑めば、内閣は総辞職を免れなくなる」という高官の弁明を聞いたマンネルヘイムは、こう嘆いたという。「民族の存亡という問題を鑑(かんが)みれば、一内閣の人気など取るに足らないことではないのか」
　だが、フィンランド国民の関心は、一九四〇年にヘルシンキでの開催を予定しているオリンピック大会に向けられており、東の隣国ソ連が繰り出すであろう次の一手に注目する人間は、マンネルヘイムを含め、ごく少数しかいなかった。
　フィンランド政府がソ連側の提案を拒絶してから、わずか四か月後の一九三九年八月二十三日、モスクワで独ソ両国による相互不可侵条約が締結され、ヨーロッパの政治情勢は一挙に緊迫の度を深めていった。九日後の九月一日、ドイツ軍の三七個師団が国境を越えてポーランドへの電撃的な侵攻を開始し、九月十七日には東からソ連軍がポーランド領内へと入った。この年の三月二十六日に、ドイツによるダンツィヒ回廊の割譲要求を拒絶していたポーランドは、戦争開始からわずか二七日で首都ワルシャワを失い、その領土はドイツとソ連によって東西に分割併合された。
　分け前としてポーランド東部を手中に収めたソ連は、すぐにその北部に隣接するバルト三国（ラトビア、リトアニア、エストニア）へも触手を伸ばした。ドイツとの間で取り交わされた不可侵条約に付帯する秘密追加議定書において、バルト三国とフィンランドはソ連の勢力圏内に入るとの確認事項があり、スターリンはヒトラーの干渉を全く気にすることなく、これらの国々に対して強圧的な態度で「相互援助条約」の締結を要求した。
　九月二十八日、まずエストニアがソ連との条約に調印し、十月二日にはラトビアとリトアニアもそれに続いた。バルト三国の各国には、すぐさま三万人規模のソ連軍が「満足な軍備を持たない友邦国を保護するため」に駐屯を開始した。

ソ連外相モロトフの最後通牒

　この一連の流れを見れば、スターリンのソ連がヒトラー率いるドイツに倣って、周辺諸国への実質的な支配権の獲得に乗り出し始めたことは明白だったが、それでもなおフィンランド政府はソ連に対して強気の姿勢を崩そうとはしなかった。
　十月十二日、ユーホ・パーシキヴィを団長とする交渉団がモスクワに招かれ、そこでスターリン本人から次のような内容のメッセージを受け取った。


カール・グスタフ・マンネルヘイム元帥。帝政ロシアの騎兵学校で教育を受け、日露戦争では騎兵将校として参戦した。ソフィン戦争当時、国民や政府の信頼が厚かった彼は、意外にも対ソ宥和を唱えたが、それはロシアを理解した上での冷静な判断に基づいたものだった。

「レニングラードを敵国の海軍力から守り、また陸上での安全を確保するため、わが国はフィンランド湾内の島と同湾岸の陸地の大幅な割譲、およびそれに伴う領土調整を早急に必要としています。よって我々は、ハンコ岬（ヘルシンキ南西）の三〇年間の租借と、レニングラード北方のカレリア地峡の割譲、北極圏のルイバチー半島周辺の割譲を貴国に求めます。その代償として、我々はこれら二七〇〇平方キロの割譲・租借地の二倍以上に当たる五五〇〇平方キロのソフィン国境沿いの地域を、貴国に譲渡します」

一見すると、この交換条件はフィンランド側に有利であるかに見えたが、実体はその正反対だった。ソ連側が手に入れようとするカレリア地峡部には、フィンランド第二の都市ヴィープリ（現ヴィボルグ）をはじめとする都市や街がいくつも存在したのに対し、ソ連側からの譲渡地は人家も道路もほとんどない森と湖だけの未開拓地だったからである。

十月二十一日にヘルシンキの国会で討議を行った後、パーシキヴィの交渉団は二十三日に再びモスクワを訪れたが、彼らの出した答えはスターリンが望んでいたものではなかった。

「われわれは、そのような領土交換を行うことは望んでおりません」

交渉は完全に行き詰まり、スターリンとモロトフ外相は次第に苛立ちを募らせていった。十一月三日、三度目の交渉も不発に終わると、モロトフは帰国するフィンランド代表団に対して、不気味な言葉を口にした。

「もはや、我々文官では対処できそうにない。次は軍人たちの出番だ」

それから一週間後の十一月十日、ソ連赤軍内部でフィンランド軍の戦闘能力に関する報告書が作成され、十五日には国防相ヴォロシーロフの命令でレニングラード軍管区に第9軍と第14軍司令部が創設された。そして、翌十一月十六日、フィンランド国境に展開する第7、第8、第9、第14の各軍に所属する、個々の狙撃兵師団の作戦目標を規定した作戦命令書第０２０５号が、ヴォロシーロフの手で作成された。

一方、ヘルシンキのカヤンデル政権が対ソ交渉でとり続けている強硬姿勢に失望したマンネルヘイムは、国防会議議長を辞任したいという意向を内閣に提出していた。だが、風雲急を告げる事態の推移は、彼の進退伺いに対する政府の回答を待つことなく、フィンランド全土を戦争の渦へと巻き込もうとしていた。

十一月二十六日の午後、国境のソ連側にあるマイニラという村に、激しい爆発音が轟き渡った。その直後、ソ連外相モロトフは「フィンランド軍の越境砲撃により、ソ連兵四人が殺害され、九人が負傷した」との声明を行い、ソ連政府は二日後の二十八日、フィンランドとの外交関係を断絶すると発表した。そして十一月三十日午前六時五〇分、ソ連四個軍が南北一二〇〇キロにわたる国境を越えて、フィンランド領内への侵攻を開始した。

その数時間後、ソ連空軍のＳＢ爆撃機がヘルシンキ上空に飛来し、市内の主要地点に爆弾と焼夷弾を投下した。



1939年11月30日、ソフィン国境突破の攻撃に出る直前のソ連軍部隊。この写真からもわかるように、冬季迷彩の戦闘服ではないソ連兵士は、フィンランド軍兵士にとって、雪中における格好の標的となってしまった。

戦争回避に失敗したカヤンデル内閣は間もなく総辞職し、銀行家から転進したリュティ新首相の下で、マンネルヘイムはフィンランド軍の総司令官に任命され、戦争指導の第一線へと返り咲いた。

後に「冬戦争（フィンランド語でタルビ・ソタ、ロシア語ではズィームネイ・ヴァイヌイ）」と呼ばれることになる、ソフィン戦争の始まりである。

頓挫したソ連軍の初期攻勢

ソフィン両軍の対峙兵力

総兵力六〇万に上るソ連軍のフィンランド侵攻軍（第7、第8、第9、第14軍）を統括するのは、レニングラード軍管区の司令官メレツコフ二等軍指揮官*だった。最も重要なレニングラード正面（カレリア地峡）に布陣する、ヤコブレフ二等軍指揮官率いる第7軍には、第19と第50の二個狙撃兵軍団司令部の下、九個狙撃兵師団と三個戦車旅団、二〇個砲兵連隊が配属されていた。

ラドガ湖の北部では、ハバロフ師団指揮官の第8軍が、第1および第56狙撃兵軍団に所属する六個狙撃兵師団と一個独立砲兵連隊を展開させていた。その北隣の、ソフィン国境の中央部には、ドゥハノフ軍団指揮官を長とする第9軍の三個狙撃兵師団が配置され、最北部のムルマンスク正面では、フロロフ師団指揮官の第14軍に所属する二個狙撃兵師団と一個独立砲兵連隊が、フィンランドの港ペツァモに向けて進撃する手筈を整えていた。

ソ連軍の侵攻作戦は、一五〇〇両の戦車と三〇〇〇機の航空機に支援される計画だったが、必要な弾薬の集積は一〇～一二日分の交戦を想定したものに留まっていた。先に提出されたフィンランド軍の戦闘能力に関する報告書によると、同国の軍人は予備役を含めても総勢二六万人に過ぎず、陸軍は九～一〇個の歩兵師団と若干の旅団だけで、戦車は五〇両、重砲は四八門、航空機も二〇〇ないし二五〇機しか保有していないため、ヴォロシーロフは「フィンランドとの戦争は四日ほどで片がつくだろう」と大見得を切っていた。

この報告書に記された敵兵力の算定は、フィンランド軍の実状をほぼ正確に反映していた。開戦時のフィンランド軍は歩兵師団九個と歩兵旅団五個、可動戦車は六〇両で、航空機は一〇四機しかなかったものの、総兵力は正規軍一二万八〇〇〇人と予備役一〇万人、それに開戦直前に動員された民兵が一〇万人の計三三万人だった。弾薬の備蓄量は、小火器用銃弾が二か月分、八一ミリ迫撃砲弾が二二日分、他の火砲の砲弾が一九～二一日分で、航空燃料は一か月分、銃器用潤滑油は二か月分のみが備蓄されていた。

以上のように、ソ連側は正規軍の兵員数で五倍、戦車台数と航空戦力では実に三〇倍という圧倒的な数的優位を確保していた。だが、フィンランド戦線に投入されたソ連軍の将兵は間もなく、戦争の勝敗を決めるのは兵員数や戦車台数などの数値化できる要素だけではないという古来からの戦理を、身をもって知ることになる。

マンネルヘイム陣地線

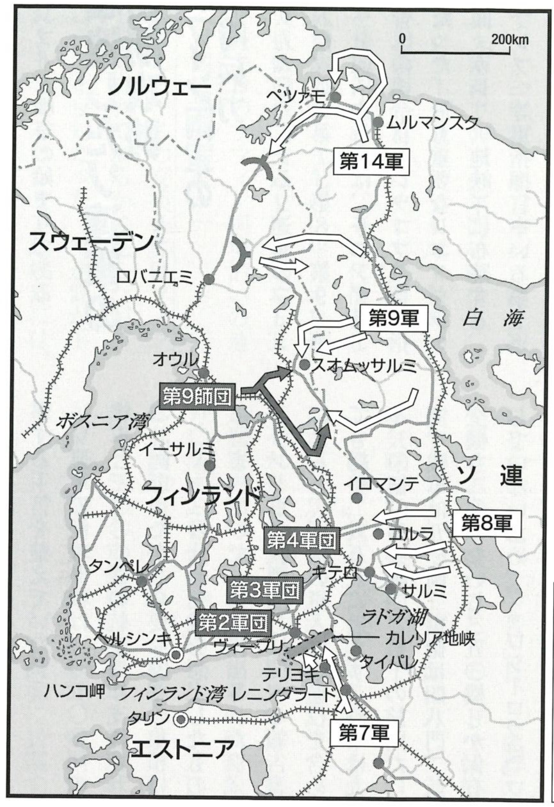
ソ連軍の攻勢主力である第7軍は、七個狙撃兵師団と戦車一〇〇〇両を第一線に配置し、フィンランド湾に面するテリヨキと、ラドガ湖畔のタイパレを結ぶ幅六〇キロの正面に向けて攻勢を開始した。



トナカイに橇を引かせて進むフィンランド兵。スキーを履き、白色の冬季迷彩が施された戦闘服を着込んだフィンランド軍兵士たちは、森林地帯で神出鬼没の戦いを展開し、ソ連軍に大損害を与えた。

*二等軍指揮官＝ソフィン戦争の期間中、ソ連軍は一般的な将・佐ではなく、独特の階級呼称を使用していた。「一等軍指揮官」は上級大将、「二等軍指揮官」は大将、「軍団指揮官（コムコール）」は中将、「師団指揮官（コムディヴ）」は少将に相当する。

ソフィン戦争（1939年11月30日～1940年1月）



圧倒的な戦力差という現実に、ソ連軍は短期間での勝利を確信したが、実際にはほとんど戦果らしきものを挙げることができなかった。侵攻はソフィン国境全域で行われ、北方ではそれなりの前進を達成したが、カレリア地峡は要衝であることから激戦地となった。この狭い地域に、ソ連軍は2個軍を投入したが、部隊運用のミスや幹線道路の少なさといった要因で、マンネルヘイム線を突破することができなかった。

この地区の防衛を担当するフィンランド軍は、エステルマン中将を長とするカレリア軍で、第2軍団（歩兵三個師団）と第3軍団（歩兵二個師団）、騎兵四個旅団と警備四個大隊、それに予備の歩兵一個師団で構成されていた。だが、ソ連軍の攻撃が始まると、これらの部隊は国境に近い拠点を捨て、包囲を避けて遅滞戦術をとりながら、国境から一五～五〇キロ後方に築かれた陣地線「マンネルヘイム線」へと撤収していった。

マンネルヘイム線とは、ロシア／ソ連からの独立後間もない一九二〇年に建設が開始された、全長一四〇キロ、縦深約九〇キロの対ソ防衛を主眼とする陣地の複合設備だった。その大部分は、材木と土盛り、塹壕による掩体壕で、一部には鉄筋コンクリートの構造物や花崗岩で補強された火点も存在していた。だが、陣地線全体としてはいまだ完成には至っておらず、機関銃用掩体壕六六か所のうちの四四か所は、二〇年代に作られた時代遅れの代物であり、戦車や航空機などの新型兵器に対応する能力は備えていなかった。

国境地帯を難なく突破したソ連軍の大兵力は、かねてからの計画通りに地峡部を北西に向かって前進し、作戦開始五日目の十二月四日には道路と鉄道の重要な橋が架かるキヴィニエミの街を占領した。そして、翌十二月五日までには、マンネルヘイム線よりレニングラード側にあるほぼ全ての地域からフィンランド軍の守備隊は一掃され、カレリア地峡の戦いは第二段階、すなわち「マンネルヘイム線の突破作戦」へと移行した。

ところが、ソ連側はここで予想もしなかった苦戦を強いられることになる。

第7軍の作戦目標ヴィープリとレニングラードを結ぶ、最も重要な街道沿いにあるスンマという村では、フィンランド第5歩兵師団の兵士が、十二月十二日から数度にわたって実施されたソ連第19狙撃兵軍団の波状攻撃を、ことごとく撃退することに成功していた。

ソ連側は、多砲塔中戦車Ｔ－28をはじめ、いまだレニングラードの戦車工場で開発途上にあったＳＭＫ（セルゲイ・Ｍ・キーロフ）やＴ－100という新型多砲塔重戦車の試作品を実戦に投入して、敵防衛線の強行突破を図った。

しかし、フィンランド側は非力なボフォース37ミリ砲と「カサパノス」と呼ばれる投擲式の対戦車爆薬、そしてスペイン内戦で使用され「モロトフのカクテル」と渾名されていた火炎瓶を駆使してソ連軍の戦車に反撃し、第5歩兵師団は十二月十七日からの六日間だけで五二両のソ連軍戦車を撃破した。

有効な対戦車兵器を持たないフィンランド軍は、その弱点を補うために国立酒造協会の酒造工場をフル稼働させ、計五万本もの火炎瓶を製造して前線に供給した。この火炎瓶の製造は、前線部隊でも盛んに行われ、二万本近い「モロトフのカクテル」が、ソ連軍の戦車に情け容赦なく投げつけられた。これらの安価な対戦車兵器が、恐れを知らない勇敢な前線兵士の手で活用された結果もあって、カレリア地峡を巡る攻防戦の全期間を通じて、計二三九両のソ連戦車が破壊され、さらに一二両が

可動状態でフィンランド軍に捕獲された。

フィンランド軍の包囲（モッティ）戦術

ソ連軍の戦車部隊が、カレリア地峡で大損害を被った背景には、随伴歩兵との進撃速度の違いから戦車と歩兵が分離したために、歩兵の追随を待たずに戦車を単独で敵陣に突入させるという戦術上の大きな不手際が存在していた。だが、意気揚々とフィンランドに足を踏み入れたソ連軍将兵にとっての本当の苦難は、まだ始まったばかりだった。

撤退するフィンランド軍が全ての木造建築物を焼き払ったため、ソ連軍の各部隊は夜間に暖をとって休息できる宿舎が得られず、仕方なく野営して焚き火を起こした。しかし、この明かりはフィンランド軍にとっては格好の攻撃目標となり、小規模な襲撃班と数少ない航空機による夜間空襲で、ソ連兵は肉体的にも精神的にも少しずつ消耗していった。

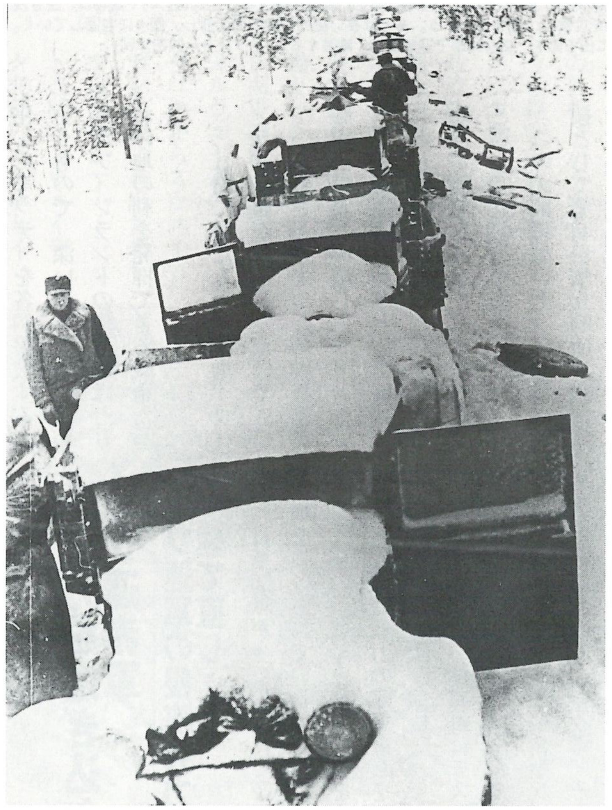
また、ラドガ湖以北の戦線では、利用可能な道路が極端に少なかったため、ソ連軍の侵攻部隊は一本の道路に沿った行軍隊形での進撃を余儀なくされたが、補給段列も含めると一個師団あたりの総延長は一〇〇キロにも達していた。フィンランド側は当然のことながら、側面の防御を欠いたこれら敵部隊に対して神出鬼没の奇襲攻撃を繰り返し、あたかも相手選手だけに目隠しをしたボクシングのように、敵の弱点にボディブローを打ち込み続けた。

こうした一方的な戦いの典型例が、フィンランド中部のスオムッサルミ周辺で繰り広げられた激戦だった。フィンランドの国土がくびれた箇所の東端に位置するスオムッサルミの背後には、南北を結ぶ街道がただ一本しかなく、ボスニア湾岸の街オウルでこの街道を遮断されたなら、国土の北半分は文字通り「窒息」状態に陥ってしまう可能性が高かった。しかも、スオムッサルミの正面にはフィンランド軍の一個国境警備大隊しか布陣しておらず、いったん戦線を突破されたら敵の進撃を阻む術は存在しないものと思われた。

このためマンネルヘイムは十二月七日、シーラスヴォ大佐を長とする第9歩兵師団の新設を決定し、隣接地域の師団から抽出した歩兵二個連隊をスオムッサルミへと向かわせた。

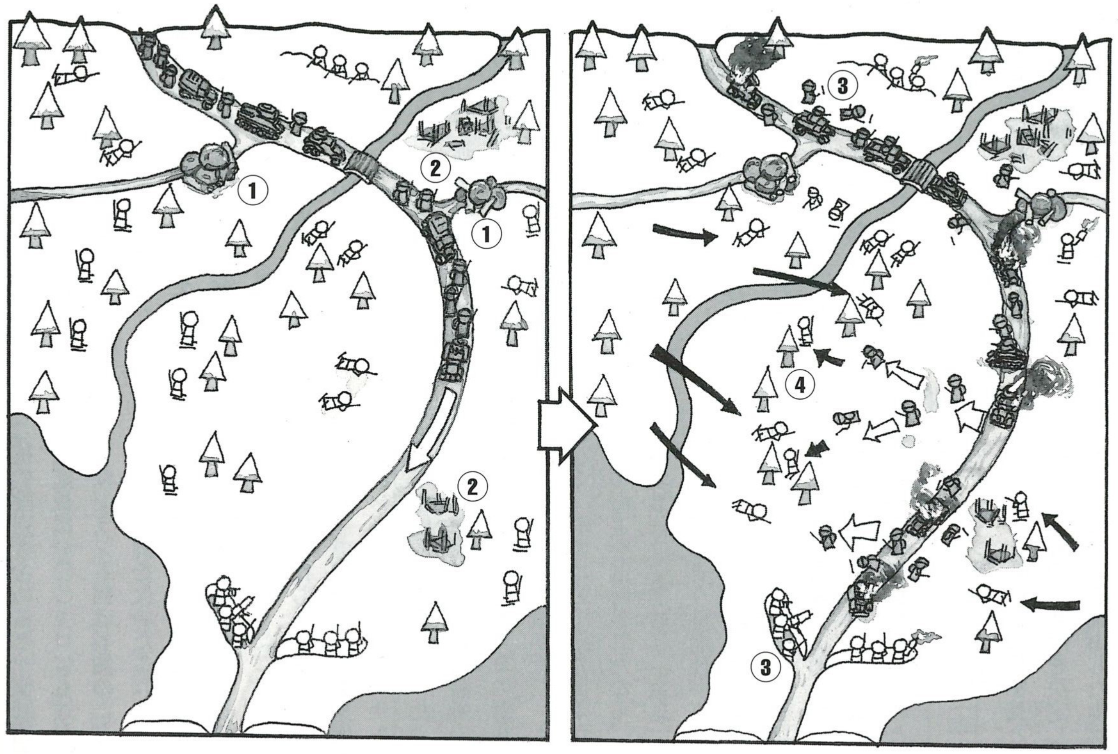
十二月九日に戦場付近へと到着した同師団の歩兵第27連隊は、スオムッサルミと国境の村ラーテを結ぶ三六キロの街道に標的を絞り、十一日からソ連軍に対する牽制攻撃を行って、敵の進撃を停止させることに成功した。この地域を担当するソ連軍の第163狙撃兵師団は、支援戦車を使ってフィンランド軍の襲撃に対抗しようとしたが、ヘビのように細長い隊形で道路沿いに布陣している状況下では、スキーや橇（そり）を駆使して側面からゲリラ攻撃を敢行する敵に対し、有効な反撃を行えるはずもなかった。

そして十二月二十七日、フィンランド第9師団の第27連隊は「モッティ戦術」として世界中に知られることになる戦法で、ソ連第163狙撃兵師団に襲いかかった。モッティ戦術とは、脆弱な縦列隊形で展開する敵軍を両側から奇襲攻撃して、いくつもの小さな包囲環（モッティ）に封じ込め、孤立して弱体



スオムッサルミの戦いで撃破されたソ連軍のトラック部隊。道路を縦列で移動していたのがわかる。こうしたソ連軍の縦列に対し、フィンランド軍は「モッティ」と呼ばれる戦術で次々と撃破していった。スオムッサルミの戦闘は、モッティ戦術の典型例であった。

フィンランド軍のモッティ戦術



モッティ戦術の基本は、敵の長い縦列を寸断し、各々を小さな包囲（モッティ）に置いて殲滅することであった。だが、それ以外にも、作戦を成功させ、逃げたソ連軍を不利な状況に置くための工夫がされていた。①主要道路の脇道を、岩や樹木で塞ぎ、敵の行動を制約する。②周辺の村や建物は、生き残ったソ連兵に利用されないように焼いておく。③縦列の最後部と先頭を攻撃し、動きを止める。あとは長い縦列を随所で切断し、個々に包囲していく。特に敵が持っているテントや夜具、寝具などを優先的に狙う。④反撃に出る敵を、森林地帯で迎え撃ち、殲滅する。（イラスト＝熊田洋司）

化したモッティを各個撃破するというもので、深い森林と雪に覆われたフィンランドの地形ではとりわけ地の利を発揮できる戦術だった。

三日間にわたる激戦の末、フィンランド側が確認しただけで五〇〇〇人の兵士を失った第163狙撃兵師団は事実上壊滅し、フィンランド第9師団は戦利品として戦車一一両と野砲二五門、そして貴重な輸送手段であるトラック一五〇両と馬四二五〇頭を獲得した。

この大敗に驚いたソ連側は、増援として第44狙撃兵師団を同地区に送り込んだが、フィンランド軍はスオムッサルミ周辺に巧妙な罠を仕掛けてこの追加兵力を迎え撃ち、一九四〇年一月五日にまたしてもモッティ戦術で大反攻を開始。第44狙撃兵師団は到着から数日のうちに壊滅的な損害を被って国境へと敗走していった。

「四日ほどで片がつく」はずだったソ連軍のフィンランド侵攻は、物量面での劣勢を創意工夫で補うフィンランド側の巧みな対応により、完全な泥沼状態へと陥ったのである。

全力を注ぎ込む ソ連赤軍の侵攻兵力建て直し

自軍部隊が全ての戦線で予想外の苦戦を強いられているのを見たスターリンは、いったん攻勢の中止を命令し、敗因分析と戦力の建て直しを図るよう赤軍の上層部に命令した。

一九四〇年一月初頭にモスクワで開かれた中央軍事会議において、現地部隊の指揮系統刷新と、新型兵器の投入、冬季戦の戦術面での改善、そして重砲支援の強化が決定され、一月七日付で「北西方面軍司令部」と呼ばれる野戦司令部が創設された。

これは、カレリア地峡の突破部隊である第7軍と、同地に増援として送り込まれた第13軍（グレンダリ二等軍指揮官）の両軍を統括する上級司令部で、司令官にはティモシェンコ一等軍指揮官が任命され、それまで統括指揮をとってきたメレツコフは第7軍司令官に格下げされた。

また、ラドガ湖北方の第9軍司令官ドゥハノフが更迭され、後にスターリ

ングラード防衛の英雄となるチュイコフ軍団指揮官と交替したのをはじめ、作戦失敗の責任を問われた何人もの師団長が解任され、より実戦指揮の能力に長けた新たな指揮官が登用された。そうした新進指揮官の中には、翌年六月の独ソ開戦時にキエフ特別軍管区の司令官を務めることになるキルポノス師団指揮官（第70狙撃兵師団長）の姿もあった。

北西方面軍配下の第7軍と第13軍は、それぞれ狙撃兵師団数を一二個と一三個に増強され、両軍を併せた兵力数は約六〇万人、戦車台数は約二〇〇〇両（装甲車含む）で、これにはメレツコフからの要請でマンネルヘイム線突破用に設計された、一五二ミリ榴弾砲搭載型の重戦車KV－II型も四両含まれていた。

また、支援砲兵の数も大幅に増強され、計二五個砲兵連隊の四〇〇〇門が狭い地峡部に集結し、車輪が接するほどの密度で前線背後に展開した。さらに、航空支援の空軍力も七五〇機近くが用意されたが、一部の機体にはこれも開発されたばかりの八二ミリ対地ロケット弾が搭載されていた。

戦術面では、白い雪原で兵士たちを暗緑色の外套姿で戦わせたそれまでの方針を反省し、雪上での偽装や戦車に牽引させる橇（搭乗した狙撃兵を戦車に随伴させる）の活用法についての研究が行われた。銃火器用の凍結防止剤もそれまでより大量に配布され、前年末の一か月間の戦いで露呈したソ連軍の弱点は、ほぼ完全に解消されることとなった。

英仏両国の介入計画

このように、スターリンが対フィンランド戦争の早期終結に向けて赤軍組織の改善を急がせた背景には、北欧諸国を巡る国際情勢の急変という政治的な理由も存在していた。彼が潜在敵国であると見なして警戒する英仏両国が、ノルウェーとスウェーデン経由で、フィンランドへの救援部隊を派兵しようと画策していることが判明したのである。

ソフィン戦争が勃発した三九年十一月当時、英仏両国はフィンランドに対して冷淡な態度を示しており、十二月十四日付でソ連が国際連盟から除名された後も、英仏合わせて四二機の航空機をはじめとする若干の武器弾薬を提供しただけで、正規軍の投入を前提とする積極的なフィンランド救援策をとろうというそぶりは見せなかった。当時の英仏両国は、直接の敵であるドイツの一挙手一投足を注視しており、自国の国益と直接の関わりがないフィンランド情勢には、さほどの関心を抱いていなかったからである。

ところが、イギリスのチェンバレン内閣で海軍相を務めていたチャーチル（後の首相）が、次のような提案を行ったことにより、英仏両国政府の態度は大きく揺らいだ。

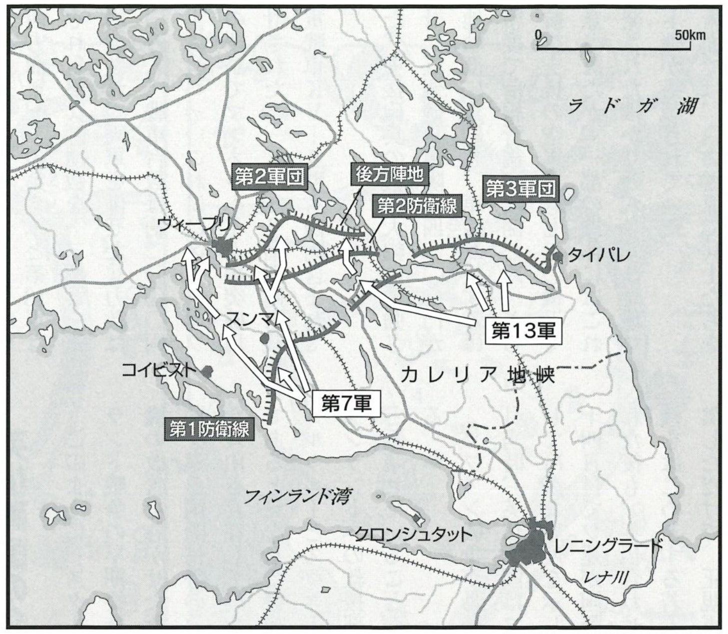
「フィンランドを支援する軍隊の領内通過という名目で、英仏両軍の地上部隊をノルウェー領のナルヴィクからスウェーデン北部に進出させてはどうか」

当時、スウェーデン北部のキルナとイ



第２次の攻撃において、砲撃で粉砕されたフィンランド軍の防御ラインを突破するソ連軍兵士。第１次攻撃で露呈した自軍の欠陥を速やかに是正したソ連軍は、満を持して再攻撃を行った。

第2段階(1940年2月)



再開された攻撃において、ソ連軍はフィンランド軍の遅滞戦術をものともせず圧倒的な物量でひた押しした。ソ連第7軍はマンネルヘイム線を突破し、重要都市ヴィープリに到達、戦いを決定づけた。カレリア地峡は突破されたものの、依然として首都ヘルシンキは健在で、他の地域も多くがフィンランドの手にあった。だが、余力をすり潰すことを恐れ、フィンランドは停戦を選択した。

エリバレの鉄鉱山では、年間一五二〇万トンの鉄鉱石が産出されており、英経済戦争省による見積もりでは、うち九〇〇万トンがドイツに、二五〇万トンがイギリスに輸出されていた。もしイギリスが、これらの鉱山と、搬出港であるノルウェーのナルヴィクを制圧すれば、ドイツの軍需経済は生命線である鉄鉱石の輸入ルートを断たれて大打撃を被ることになる。

二月五日に開かれたフランスとの首脳会議の席上、北欧三国への派兵方針を固めたイギリス政府は、二日後の二月七日に具体的な侵攻計画を立案するよう統合幕僚会議に命じた。英仏両軍が合同で作成した計画案によれば、総兵力は一〇万人で、ノルウェー全域とスウェーデン北部の鉄鉱山、そしてフィンランド北部が作戦地域に含まれていた。

英仏両国による北欧三国への派兵が実現すれば、ドイツもこの戦争に参戦してくることは確実だった。小国への領土割譲要求が大国間の全面戦争へと発展することを危惧したスターリンは、マンネルヘイム線に対する総攻撃の開始をティモシェンコに急がせた。

マンネルヘイム線の突破

一九四〇年二月一日、マンネルヘイム線に対する総攻撃に先立ち、ソ連軍爆撃機による大規模な空爆が開始された。五日後の二月六日には砲兵による集中的な弾幕射撃が始まり、二月十日までの五日間にわたって昼夜を問わず砲撃を繰り返した。一日の投弾量は最大で三〇万発に達し、五〇〇機近い爆撃機がマンネルヘイム線の上空に飛来していた。

連日の猛爆と並行して、地上部隊による限定的な攻撃が数か所で実施されたが、これらは敵情の調査を目的とする威力偵察であり、総攻撃の開始は二月十一日と定められた。二月三日、ティモシェンコは第7軍と第13軍に詳細な攻撃作戦の計画書を下達し、それぞれ地峡部の西と東を並列で進撃する手筈となっていた。

二月十一日の午前八時四〇分、二万二〇〇〇発の砲撃支援と共に、ソ連軍による総攻撃の火蓋が切られた。地峡部を守るフィンランド第2および第3軍団の防御態勢は依然として頑強で、ソ連軍の攻撃部隊は前年と同様に戦力を磨り減らしながらの前進を余儀なくされたが、ティモシェンコは損害を被った師団をすぐに後方で待機する別の師団と交替させ、兵員の損害と引き替えに、フィンランド軍の防御陣地に対する圧力を加え続けた。

損害比率では勝っているとはいえ、人的資源で圧倒的な優位に立つソ連軍が意図的な戦術として消耗戦を挑んできたことにより、小国フィンランドは次第に断崖へと追い詰められていった。

二月十三日から十四日にかけて、マンネルヘイム線に近いヴィープリでは高校生による学徒大隊が編成されたが、ヴィープリ南方の激戦地スンマではすでに予備兵力が底を尽いており、街道を守る拠点の維持は絶望的な状況となった。

二月二十七日、マンネルヘイムは前線部隊を最終防衛線へと退却させるよう、配下の軍団長に命令を下した。翌二十八日、彼はフィンランド軍首脳を集めて会議を開き、和平の必要性を将軍たちに説明した。

「和平交渉というものは、戦える戦力がまだ残っているうちに行ってこそ意味がある。英仏両軍が到着するのは、早くても四月五日とのことだが、わが軍がそれまで現状を維持することはきわめて難しい。全ての戦力を失ってからでは、もう遅い。その時には、相手に対する全面的な屈服しか道は残されていないからだ」

二月二十八日、ティモシェンコは最後の大攻勢を前線部隊に命じた。パヴロフ軍団指揮官率いる北西方面軍の予備機動集団が、凍結したヴィープリ湾を渡ってマンネルヘイム線を迂回し、敵防衛線の背後への進出に成功すると、要衝ヴィープリの陥落は時間の問題となった。三月三日、ソ連軍がヴィープリの包囲戦を開始したのとほぼ時を同じくして、三月八日からソ連とフィンランドの両国政府による停戦交渉が始まった。

前線での苦境を知ったフィンランド政府の閣僚たちは、マンネルヘイムが提唱する「国家存続のための和平受諾」の要請を渋々ながら了承し、ソ連側の要求をおおむね受け容れる形での事態収拾に動き出した。そして三月十二日、フィンランドのカリオ大統領がモスクワで和平条約の文書に署名し、翌三月十三日の午前十一時をもって両軍部隊が停戦するとの取り決めが成立した。

ソフィン戦争は、多大な血の代償を支払ったソ連側の実質的勝利と共に、その幕を閉じたのである。

ソフィン戦争がもたらしたもの

赤軍首脳部が得た苦い戦訓

フィンランドは、この戦争で二万四九二三人の戦死者と四万三五五七人の負傷者を出し、和平条約の議定書に基づいてカレリア地峡とラドガ湖北西部、ムルマンスク鉄道に近いクオラヤルヴィ地区、そしてバレンツ海沿岸の半島地域をソ連に割譲した上、フィンランド湾に突出するハンコ岬の三〇年間にわたるソ連への租借協定にも調印させられた。

国土の一部を失ったフィンランドは、翌年六月に実施されるドイツ軍の対ソ攻撃開始とタイミングを合わせて、失地回復のための「継続戦争」を開始することになるが、マンネルヘイムはフィンランド軍をドイツ軍と共闘させることは最後まで拒絶し続けた。

一方のソ連側では、戦死者と負傷者を合わせて四万八〇〇〇人という数字が外務省から発表されたが、現地に特派員を派遣して戦場の実相を見ていた西側諸国はこの数字を全く信用せず、ソ連軍の死傷者は二〇万人に達するだろうと推測していた。そして、ソ連邦崩壊後の一九九三年、ソ連軍の各戦役における損害の実状を記した資料集が公刊され、ソフィン戦争の全期間中におけるソ連軍の戦死者と病死者の合計は八万四九九四人、負傷者は二四万八〇九〇人、合計すると三三万三〇八四人とい



停戦協議に赴いたフィンランド軍の軍使（右）とソ連軍軍使（左）。巧みな防衛戦を展開したフィンランド軍だったが、最終的にはマンネルヘイムの危惧していたソ連の物量の前に膝を屈した。だが、ソフィン戦争の結末は、以後のヨーロッパ大戦の推移に少なからぬ影響を与えることになった。

う恐るべき数字が提示された。

世界有数の軍事大国であるはずのソ連が、小国フィンランドを相手とする限定戦争において、これほど凄まじい損害を被った最大の要因は、一九三〇年代の後半にスターリンが断行した赤軍幹部の大粛清にあった。元帥や将官はもちろん、師団長や連隊長レベルでも深刻な人材不足に陥ったソ連軍は、実戦経験のない肩書きだけの「師団指揮官」や「軍団指揮官」に部隊の指揮を委ねたが、戦車と歩兵の効果的な連携や、地形に応じた前線部隊の展開法、冬季戦における戦術上の要点などを知らない彼らは、無造作に配下の小部隊を戦場に投入し、人的損害と兵器の損失を鰻登りに上昇させてしまった。

戦争終結から一か月後の四月十四日から十七日にかけて、クレムリンの一室に赤軍の全首脳部が召集され、ソフィン戦争で露呈した自軍の戦術面および兵器面での弱点についての徹底的な検証と、それに基づく改善提案が行われた。とりわけ重視されたのは、フィンランド軍の戦術を手本とする冬季戦の戦訓で、スキーや橇を使った機動的な部隊運用や、冬季迷彩の効果、軽快な短機関銃や対戦車ライフルの有効性などが議論され、また既存戦車の弱点を踏まえた新型戦車の開発構想や、砲撃支援の改善案なども論じられた。

ドイツと英仏両国への影響

ソフィン戦争の顛末は、当事国のソ連とフィンランドはもちろん、当事国でないドイツとイギリス、フランスの国家戦略にも大きな影響を及ぼすこととなった。

この戦争の期間中、ドイツは一貫してソ連側に立つ姿勢をとり続けた。一九三九年十二月十日、ヒトラーは先に締結した不可侵条約を尊重し、バルト海で活動するソ連海軍の潜水艦に対して、燃料や食糧の供与を行う許可をドイツの商船に与えていた。また、イタリアがドイツ経由でフィンランドに送ろうとした援助物資を、ドイツ当局が国内で差し押さえて留置したため、独伊関係が一時的に緊張するという事態も引き起こされていた。

このような独ソの協調関係を見た英仏両国は、フィンランド救援の名目でスウェーデンの鉄鉱石を押さえる道が断たれた今、ドイツの戦争経済に打撃を与えるには、重要な石油供給源であるソ連のバクー油田を爆撃すべきだとする構想を練り始めていた。三月二十六日以降、国籍マークを消した英空軍機がバクーとその周辺に対する偵察飛行を行い、四〇年四月頃からはフランスの中東軍司令官マキシム・ウェイガンの下で、具体的なバクー爆撃計画の立案作業が進められた。ウェイガンの計算では、バクーとコーカサスの石油施設に対する爆撃作戦は六月下旬から七月下旬には決行できるはずだった。

一方、英仏両国の北欧派兵構想が明るみに出たことで、ヒトラーはスウェーデンの鉄鉱石という自国のアキレス腱を敵に教えられる形となり、この弱点を解消するための軍事作戦計画がただちに立案された。ソフィン戦争の停戦から二六日後の四月九日、ドイツ軍はノルウェー全土に対する電撃的な侵攻作戦を開始し、スウェーデンの鉄鉱山への「勝手口」に当たるナルヴィク港を支配下に置いた。

先手を取られた英仏軍は、四月十四日から十八日にかけて、ノルウェーへの派兵を実行したが、彼らに与えられた時間はわずかしかなかった。ノルウェー侵攻から一か月後の五月十日、ドイツ軍は西部戦線で大攻勢を開始してベネルクス三国を席巻した後、六月十四日にはパリへの入城を果たし、フランス政府は六月二十二日にドイツとの休戦条約に調印した。五月十日にイギリスの新首相に就任したチャーチルは、バクー爆撃計画を放棄し、ドイツとの戦争に全ての軍事力を投入する方針へと国家戦略を切り換えていった。

こうした一連の出来事を振り返ると、スターリンが些細な理由で始めたソフィン戦争は、ドイツと英仏両国の間で辛うじて均衡していた軍事力の天秤を大きく傾かせ、西部戦線での新たな大規模戦争を早める結果をもたらしたと見ることも可能である。

だが、ソフィン戦争がドイツに与えた影響はこれだけではなかった。対フィンランド戦争における赤軍部隊の無様な戦いぶりを見たヒトラーとドイツ軍首脳部は、彼らの戦闘能力が予想以上に低いことに驚き、ソ連軍に対する失望と能力軽視の印象を脳裏に強く刻み込んでしまう。

そして、一年後の六月二十二日に開始される対ソ侵攻「バルバロッサ作戦」において、ドイツ軍の将兵は、ソフィン戦争では見られなかった「ソ連赤軍の底力」を、広大な戦場で目の当たりにすることになるのである。

〈参考文献〉廣瀬榮一、高井三郎、ヴィルホ・トバルスマキ「ソ芬戦争」(陸戦研究)／小林康男「ソ連側から見たソ芬戦争」(陸戦研究)／武田龍夫「戦う北欧」(高木書房)／梅本弘「雪中の奇蹟」(大日本絵画)／ニコライ・トルストイ(新井康三郎訳)「スターリン　その謀略の内幕」(読売新聞社)／Richard W.Condon「The Winter War」(Ballantine)／「Tainy i Uroki Zimnei voiny 1939-1940」(Poligon/Sankt-Peterburg)／Sami Korhonen「The Battles of the Winter War」(〈http://www.winterwar.com〉 http://www.winterwar.com)

歴史群像 2月号は 1月6日(金)発売です

特別定価1000円(税込)

※編集の都合により、
記事は一部変更になることがあります。



▲米護衛空母に攻撃をかけ、撃墜された第5基地航空隊の陸上爆撃機銀河。

戦略分析

幻となった海軍迎撃作戦

マリアナ航空決戦

●機動部隊最後の決戦とされるマリアナ沖海戦で、帝国海軍は完敗を喫して壊滅した。しかし――、真に海軍が欲していた戦い、それは艦載機によるアウトレンジなどではなく、空母部隊と連携した陸上機の大量投入による米空母部隊の殲滅であったのだ。ではなぜ海軍のその構想は崩壊し、作戦の変更を余儀なくされたのか、そしてもし目論見通りの展開をみせていたならば……。マリアナ沖海戦の裏面に隠されたもう一つの敗因を探る!

戦史分析　太閤秀吉、大いなる誤算

文禄大乱

●文禄元年、16万もの大軍が海峡を渡った。以後二度にわたって繰り広げられることになる、秀吉の朝鮮侵攻作戦の始まりである。秀吉の戦略は李氏朝鮮の王を捕らえることで、短期間のうちに朝鮮全土を占領、その後大明帝国へ雪崩れ込むという壮大なものだった。しかし王の捕捉に失敗したことで当初の戦略は破綻、代替案を持たなかった日本軍は泥沼の戦いへと引きずり込まれることとなる……。

戦史検証

草原の覇者 ティムール

●一介の盗賊から身を興し、わずか一代で西アジアの覇者となった男、ティムール。「鉄」を意味するその名に違わぬ強固な意志と冷徹なる戦略眼でイラン、アフガニスタン、インドを席巻、オスマン帝国軍をも撃破し、ついには中国へとその矛先を向けることになる。「モンゴル帝国」を受け継ぎ、生涯負けなしといわれた軍事の天才、そのドラマチックな生涯に迫る!

新年号特別付録

戦艦から潜水艦まで完全網羅

日本海軍艦艇ガイド

航空エンジン発達史 **夢の発動機「誉」への道**

将軍家、影の親衛部隊 **八王子千人同心**

国連軍vs.イスラム武装勢力 **レバノン内戦**

小林源文
Motofumi Kobayashi presents
アフリカ軍団
Act.5

Gakken

歴史群像 12月号 No.74

2005年12月1日発行　定価930円（消費税5%込み）
第14巻6号
発行所　株式会社　学習研究社
〒145-8502　東京都大田区上池台4-40-5

〈発行人〉
工藤徳治

〈編集人〉
長谷川晋

〈編　集〉
福岡直良　岡野孝次　池内宏昭　内田恵三

〈編集協力〉
河村啓之　菊地のぶお　小林直樹　時實雅信　治田武士　樋口隆晴
細田浩（スタジオとき）　松木時彦（VANGUARD）

〈写真協力〉
アートボックス　石川県教育委員会　今治市村上水軍博物館　英国政府観光庁　遠藤啓輔　尾道の詩　川喜多記念映画文化財団　桐野作人　呉市海事歴史科学館　酒田市立光丘文庫　佐山二郎　下関市史編修室　白石光　神宮文庫　『世界の艦船』編集部　蔦屋　東映株式会社　特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会　八戸市博物館　廣田厚司　三野正洋　文殊社　ユニフォトプレス
IWM　U.S.Army　Mary Evans Picture Library　Naval historical center
The Bridgeman Art Library

〈取材協力〉
北九州市教育委員会文化財課　下関市教育委員会文化財保護課
大和ロケセット公開推進委員会

〈アートディレクション〉
土田省三

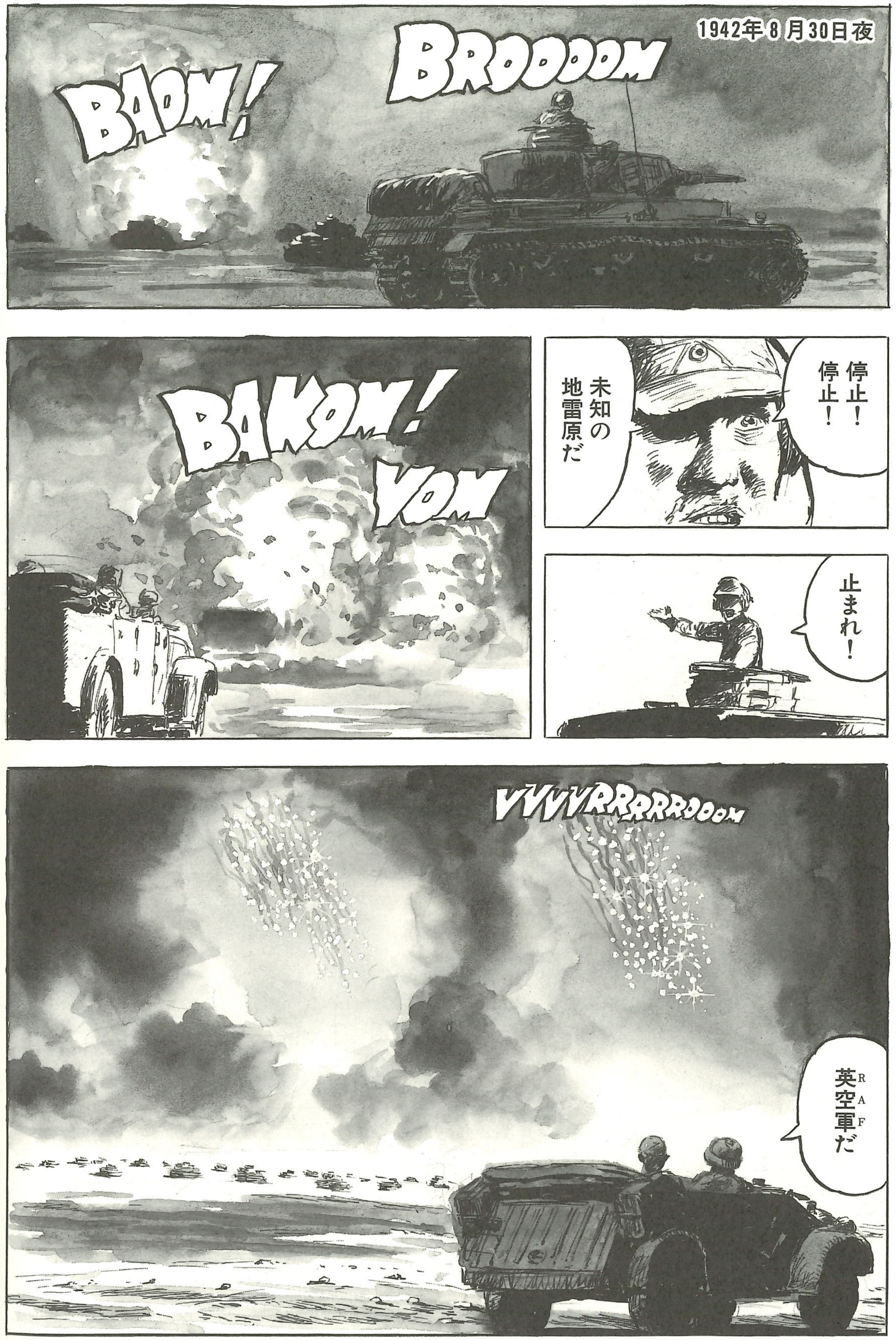
〈デザイン〉
Little Elephant Co.　高山静美　篠 宏行
加藤浩行（ファントムグラフィックス）

〈印刷所〉
凸版印刷㈱

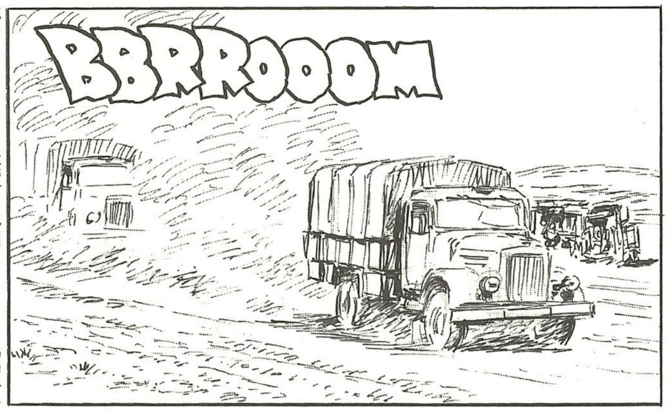
〈お問い合わせ〉
この本に関するお問い合わせは、次の所へお願いします。
●編集内容について:03-5447-2314（編集部直通）
●不良品（落丁・乱丁）:03-5496-0637（雑誌営業室）
●それ以外のこの本に関することは……お客様センターへ
文書は　〒146-8502　東京都大田区仲池上1-17-15
電話は　03-3726-8124
●ご購入・ご注文:お近くの書店様にお願いします。
●広告のお問い合わせ
03-5447-2314（編集部直通）または03-5434-1072（広告部）

歴史群像8月号・No73 プレゼント当選者発表

●ブックレビュー
①諜報員たちの戦後
東京都　高堀　克彦
東京都　吉田　正一
宮崎県　中沢　靖宗
②大東亜戦争の真実
千葉県　平賀　和也
東京都　堤　猛史
東京都　矢部　晃也
③なぜ日本はアメリカに勝てないか
東京都　倉橋　裕幸
大阪府　蔭山　工士郎
福岡県　加藤　真
④反米の世界史
宮城県　渡辺　昇
神奈川県　西嶋　隆史
愛媛県　西浦　啓之
⑤象徴天皇制の起源
東京都　広森　竜一
神奈川県　松永　幸彦
静岡県　東　悠一
⑥ドキュメント沖縄
埼玉県　正木　薫
長野県　櫻井　晋
京都府　松元　真哉
⑦イラク戦争とアメリカ占領軍
東京都　堀田　秀成
大阪府　有村　弘
兵庫県　杉本　拓
●新着情報
⑧真・三國無双4
北海道　道本　孝一
大阪府　池田　和弘
広島県　植田　一樹
⑨メダル オブ オナー
神奈川県　田中　浩幸
広島県　三谷　修
広島県　福井　泰弘
⑩信長の野望
埼玉県　鍋島　貴明
東京都　青山　豊
長崎県　畑中　茂
⑪必殺裏稼業
静岡県　中村　清
香川県　西山　正広
福岡県　内西　茂
⑫NINJA GAIDEN
新潟県　笠原　昇
長野県　林　英孝
高知県　岡田　栄治
⑬戦争と人間
千葉県　小山田　守
兵庫県　田中　穣
岡山県　水田　英子
山口県　世良　秀喜
熊本県　山田　慎二
●プレゼント
⑭4×4パリダカ
東京都　西川　守
神奈川県　森島　隆二
大阪府　柳原　克明
⑮4×4ガンメタ
埼玉県　佐野　慶一
山梨県　長瀬　勝也
愛知県　野村　裕二
⑯4×4ハマーイエロー
千葉県　野口　孝司
東京都　秋田　真二
大阪府　村田　謙三
⑰4×4ハマーレッド
千葉県　上野　陽三
静岡県　田代　英太郎
三重県　松岡　貞夫
⑱テレカセット
青森県　大里　大
⑲日露戦争百年
東京都　大島　健太郎
静岡県　谷川　文哉
佐賀県　赤坂　敏則
⑳三笠絵ハガキ
北海道　四方　達基
滋賀県　水木　優
㉑日本海海戦ストラップ
富山県　田坂　悟
鳥取県　池田　祐介
宮崎県　江河　淳一
㉒神奈川お台場の歴史
静岡県　山村　大蔵
愛知県　河村　哲
鹿児島県　村上　龍二
㉓アオシマセットA
福島県　田村　潤二
岐阜県　森田　英輔
福岡県　丸山　慎太郎
㉔アオシマセットB
青森県　三上　拓也
山形県　奥山　賢治
福岡県　井手口　雅美

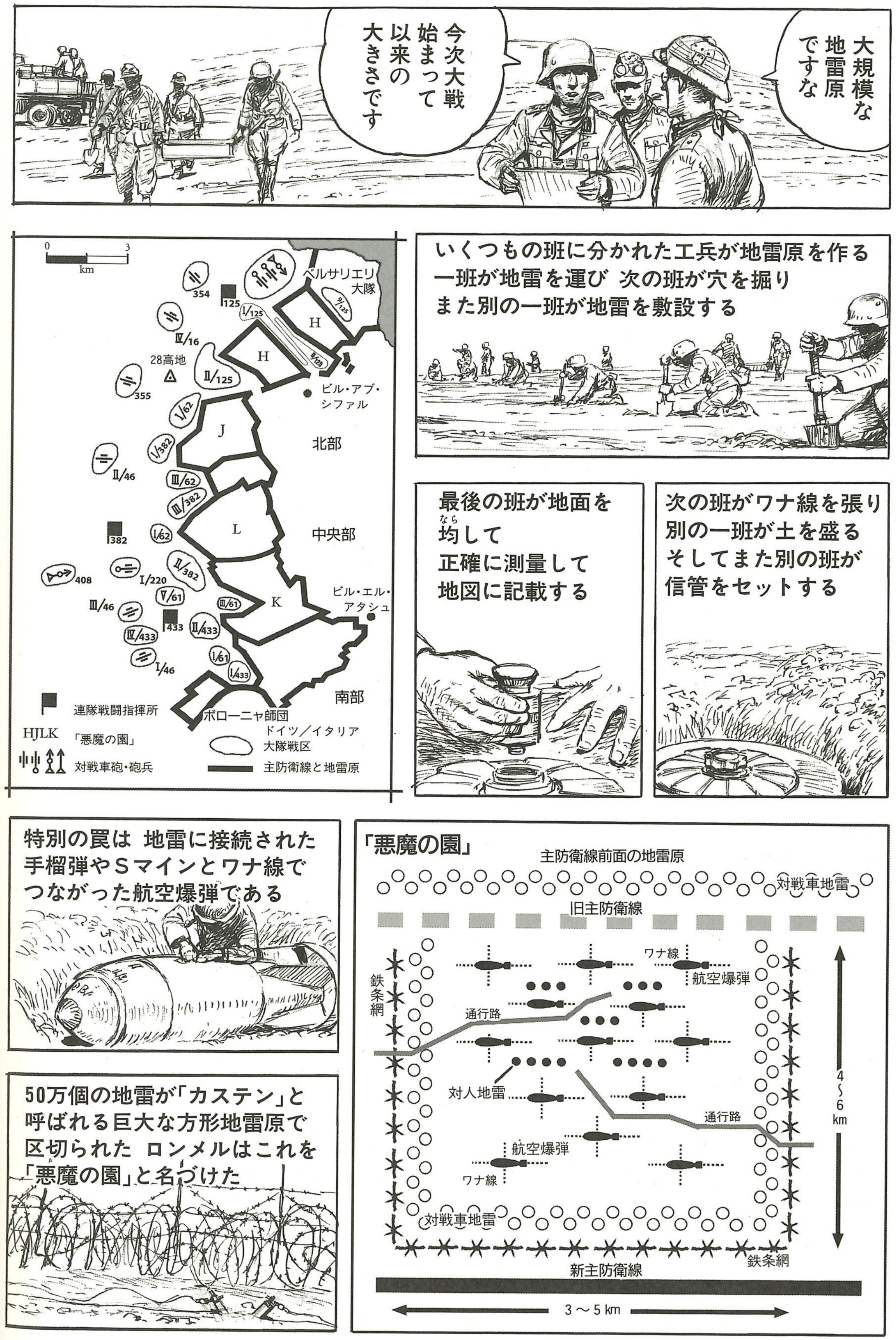






パウル・カレルは※この戦闘を
「ロンメルの六日戦争」と表現
している……
約束された燃料は届かず
アフリカ軍団は敵の物量の壁に
圧倒され 戦争に負けつつあった
英軍モントゴメリー将軍が
戦場に登場したのだ
モントゴメリーは物量戦を信奉し
安全第一の堅実な指揮官である
ロンメルは防衛戦を命じた

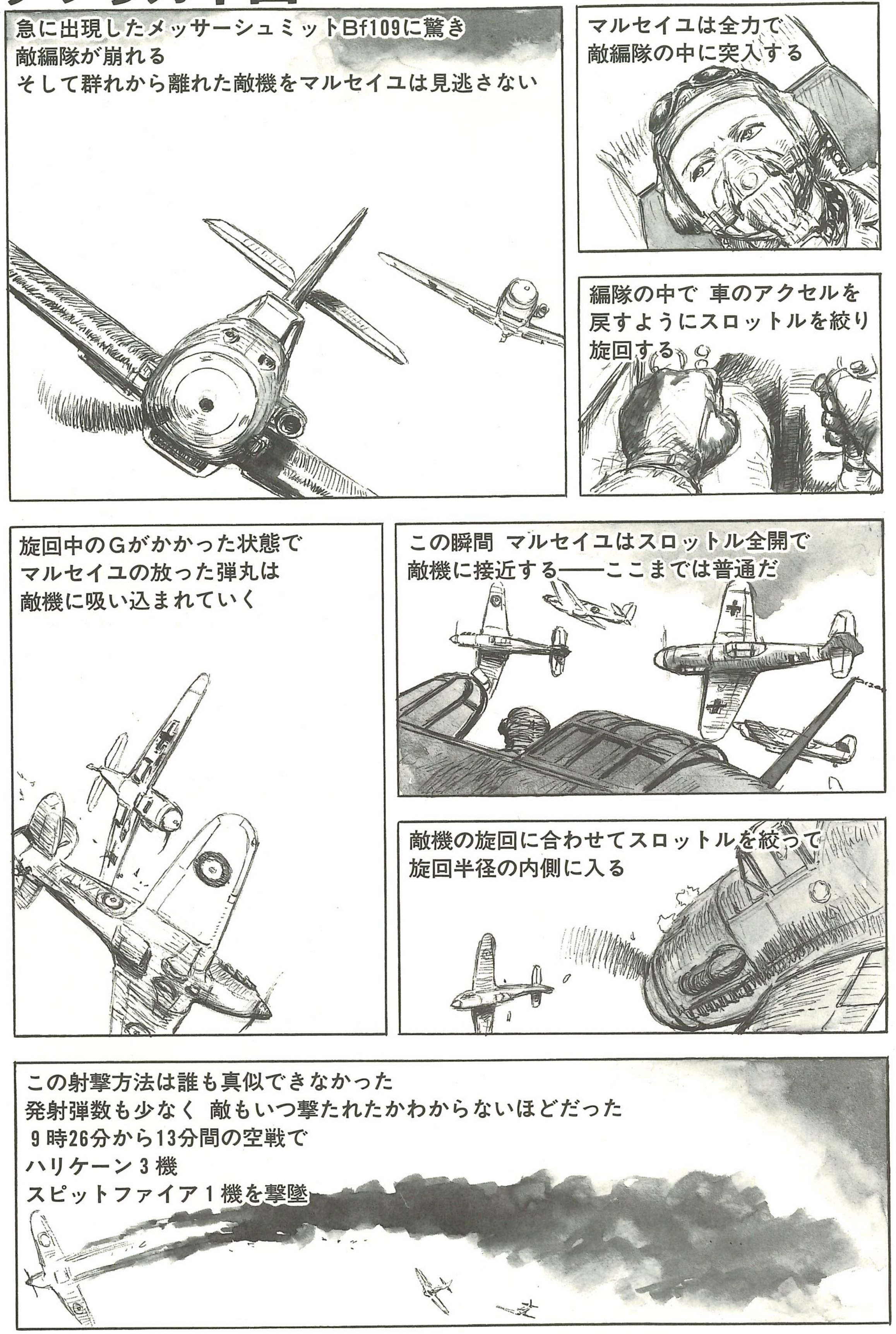
※作戦のもととなった英軍の地図はオトリの偽物で、これは英軍情報部による工作だった。

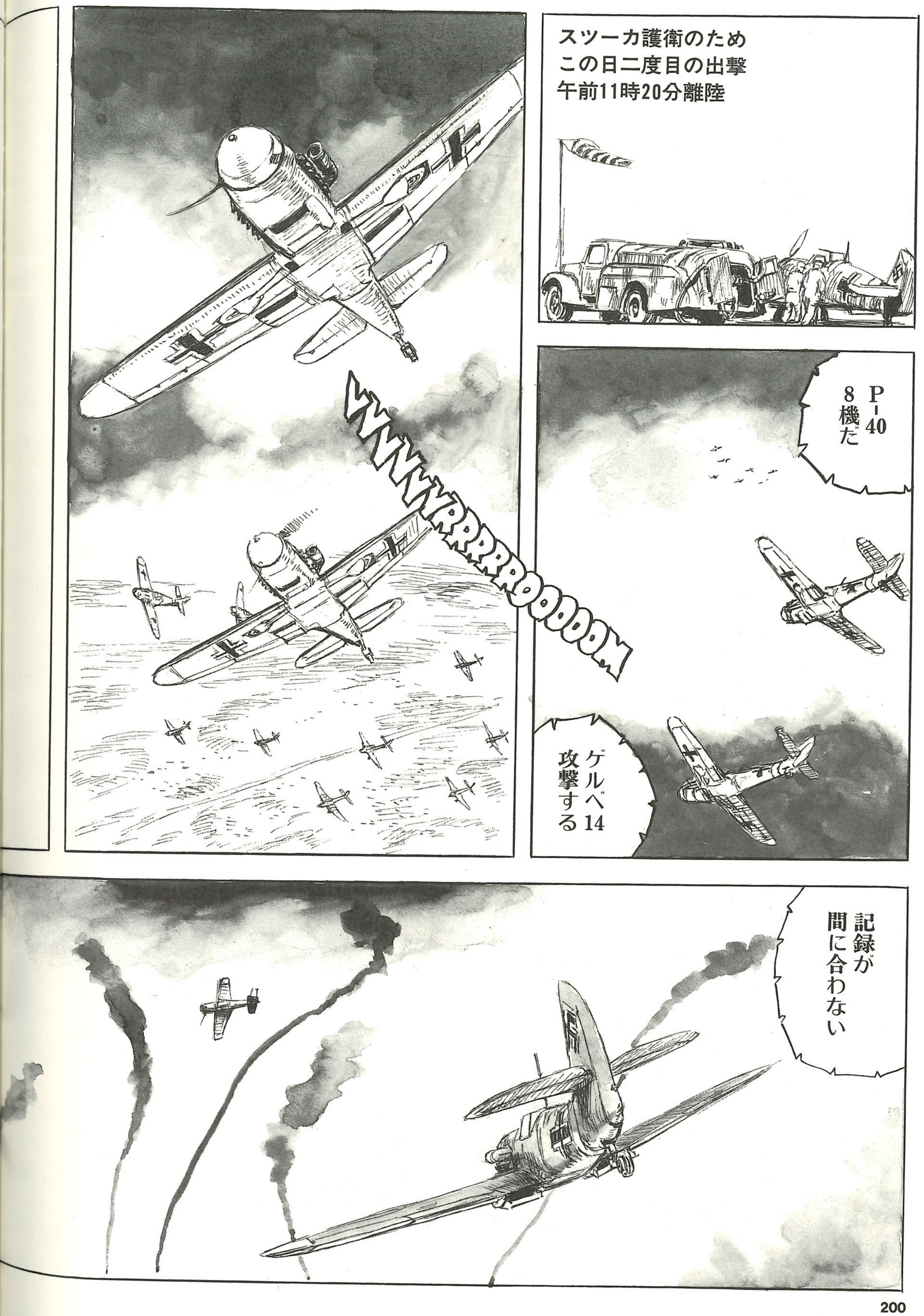

大規模な地雷原ですな
今次大戦始まって以来の大きさです
ベルサリエリ大隊
28高地
ビル・アブ・シファル
北部
中央部
ビル・エル・アタシュ
南部
ボローニャ師団
0 3 km
連隊戦闘指揮所
HJLK 「悪魔の園」
対戦車砲・砲兵
ドイツ／イタリア大隊戦区
主防衛線と地雷原
いくつもの班に分かれた工兵が地雷原を作る 一班が地雷を運び 次の班が穴を掘り また別の一班が地雷を敷設する
次の班がワナ線を張り 別の一班が土を盛る そしてまた別の班が信管をセットする
最後の班が地面を均(なら)して 正確に測量して 地図に記載する
「悪魔の園」
主防衛線前面の地雷原
対戦車地雷
旧主防衛線
ワナ線
航空爆弾
鉄条網
通行路
対人地雷
4〜6km
新主防衛線
3〜5km
特別の罠は 地雷に接続された手榴弾やSマインとワナ線でつながった航空爆弾である
50万個の地雷が「カステン」と呼ばれる巨大な方形地雷原で区切られた ロンメルはこれを「悪魔の園」と名づけた


空襲！
RAFだ退避！
VVVROOOM
メッサーが来たぞ
オッすごい撃墜した！
ルフトヴァッフェの基地は近いかね？
マルセイユの基地なら…行きますか？
それなら基地司令部へ申告してください
VVVRRROOOOOM

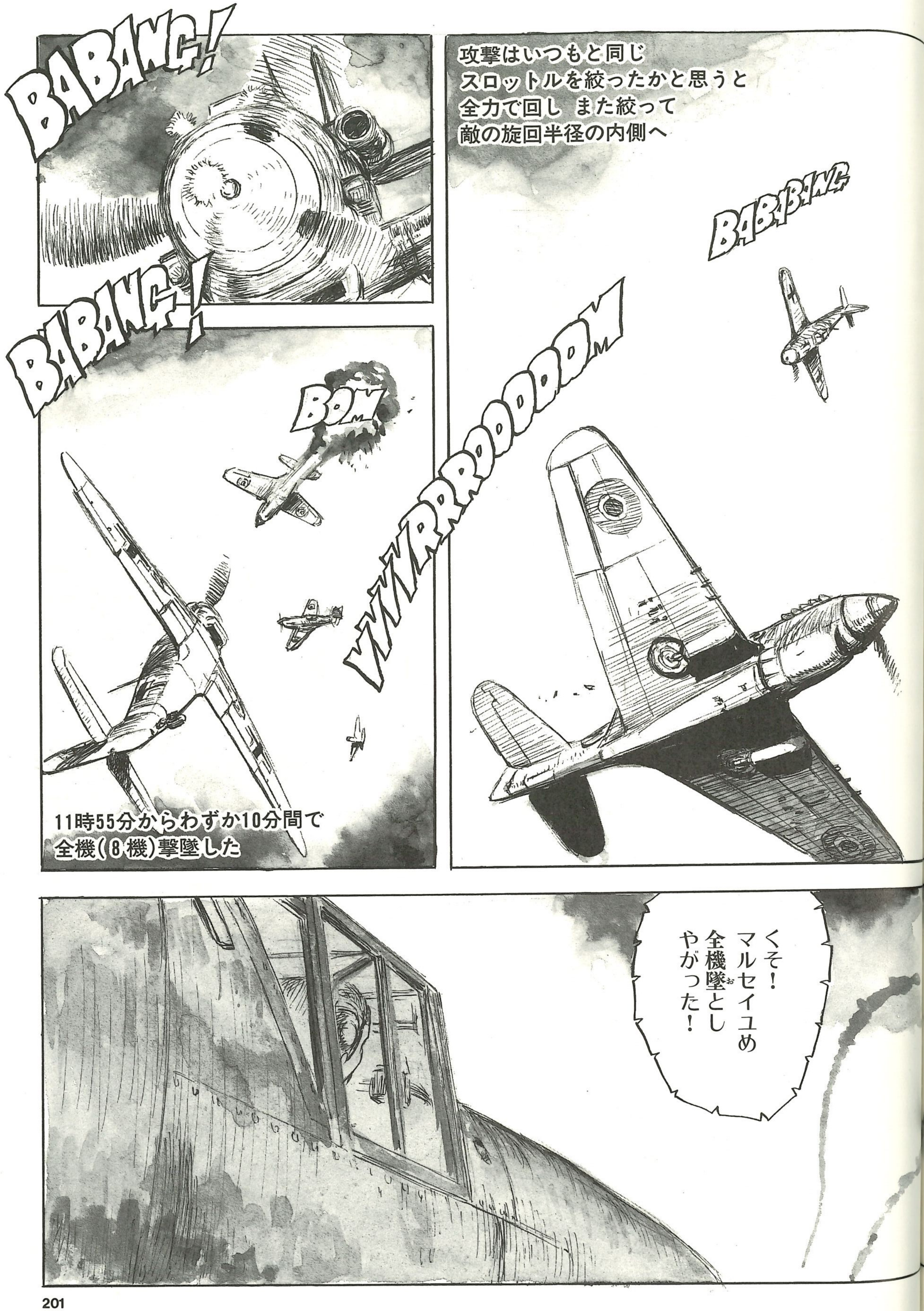

空軍最年長の少尉(軍規違反で昇進が遅れた)だったマルセイユは今では空軍最年少の大尉であった
ハンス・ヨアヒム・マルセイユ……
快活なベルリン生まれの青年で このとき22歳
たった半年間で騎士十字章から柏葉～剣付き柏葉～ダイヤモンド剣付き柏葉騎士十字章受章まで登りつめた
端正で彫りの深い繊細な美貌をもつマルセイユはとりわけ本国のドイツ女性を熱狂させた
〝アフリカの星〟宛てで アフリカの前線にまでファンレターが届いた
彼のテントの中にはミニ・バーがあり
黒人の召使いまでいて およそ戦時下とは思えない雰囲気だった
9月1日 出撃命令
午前8時30分離陸
こちらゲルベ14 12時下方に敵機確認 攻撃す
ゲルベ14 承認した

アフリカ軍団


急に出現したメッサーシュミットBf109に驚き
敵編隊が崩れる
そして群れから離れた敵機をマルセイユは見逃さない
マルセイユは全力で敵編隊の中に突入する
編隊の中で 車のアクセルを戻すようにスロットルを絞り旋回する
この瞬間 マルセイユはスロットル全開で敵機に接近する――ここまでは普通だ
敵機の旋回に合わせてスロットルを絞って旋回半径の内側に入る
旋回中のGがかかった状態で
マルセイユの放った弾丸は
敵機に吸い込まれていく
この射撃方法は誰も真似できなかった
発射弾数も少なく 敵もいつ撃たれたかわからないほどだった
9時26分から13分間の空戦で
ハリケーン3機
スピットファイア1機を撃墜

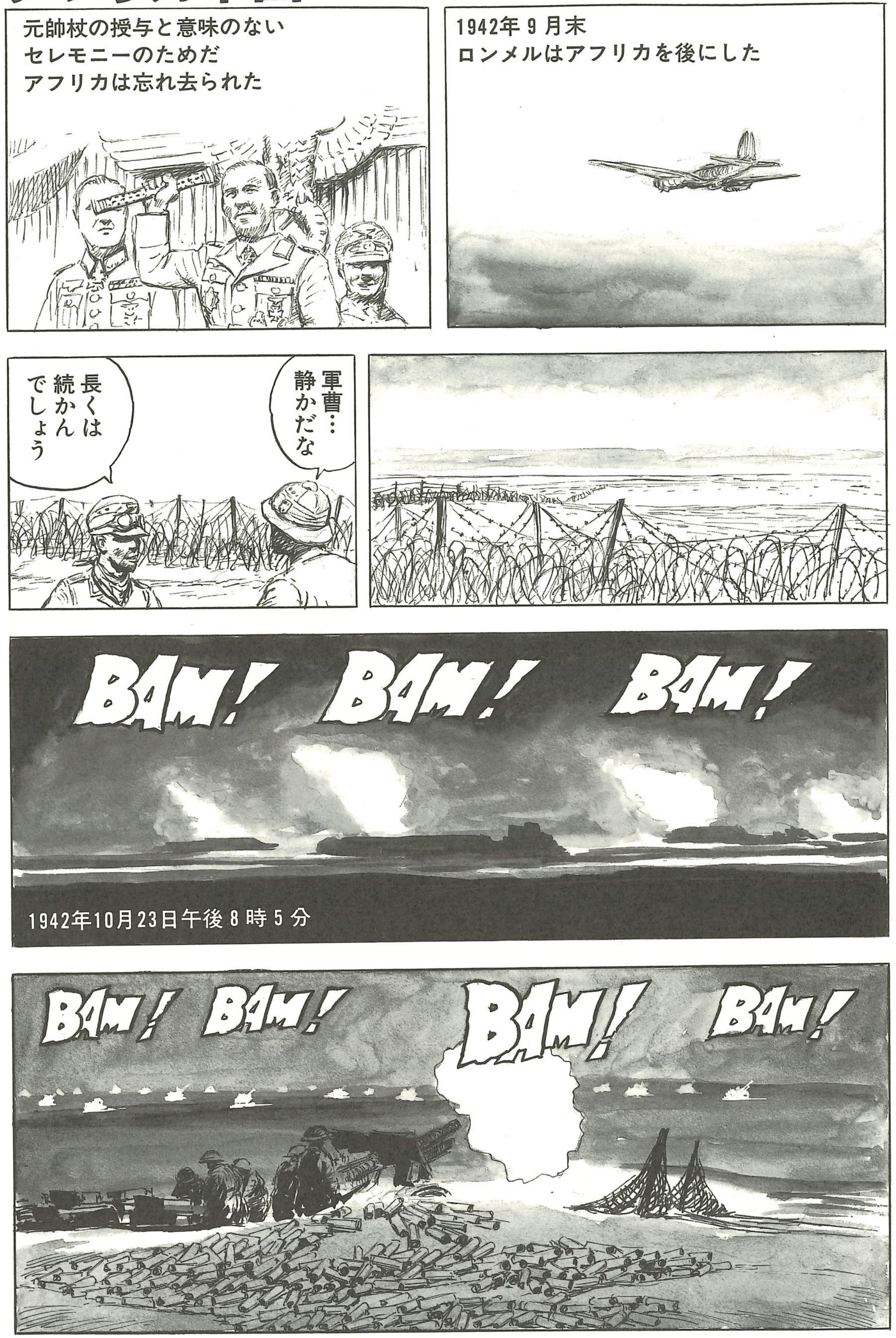


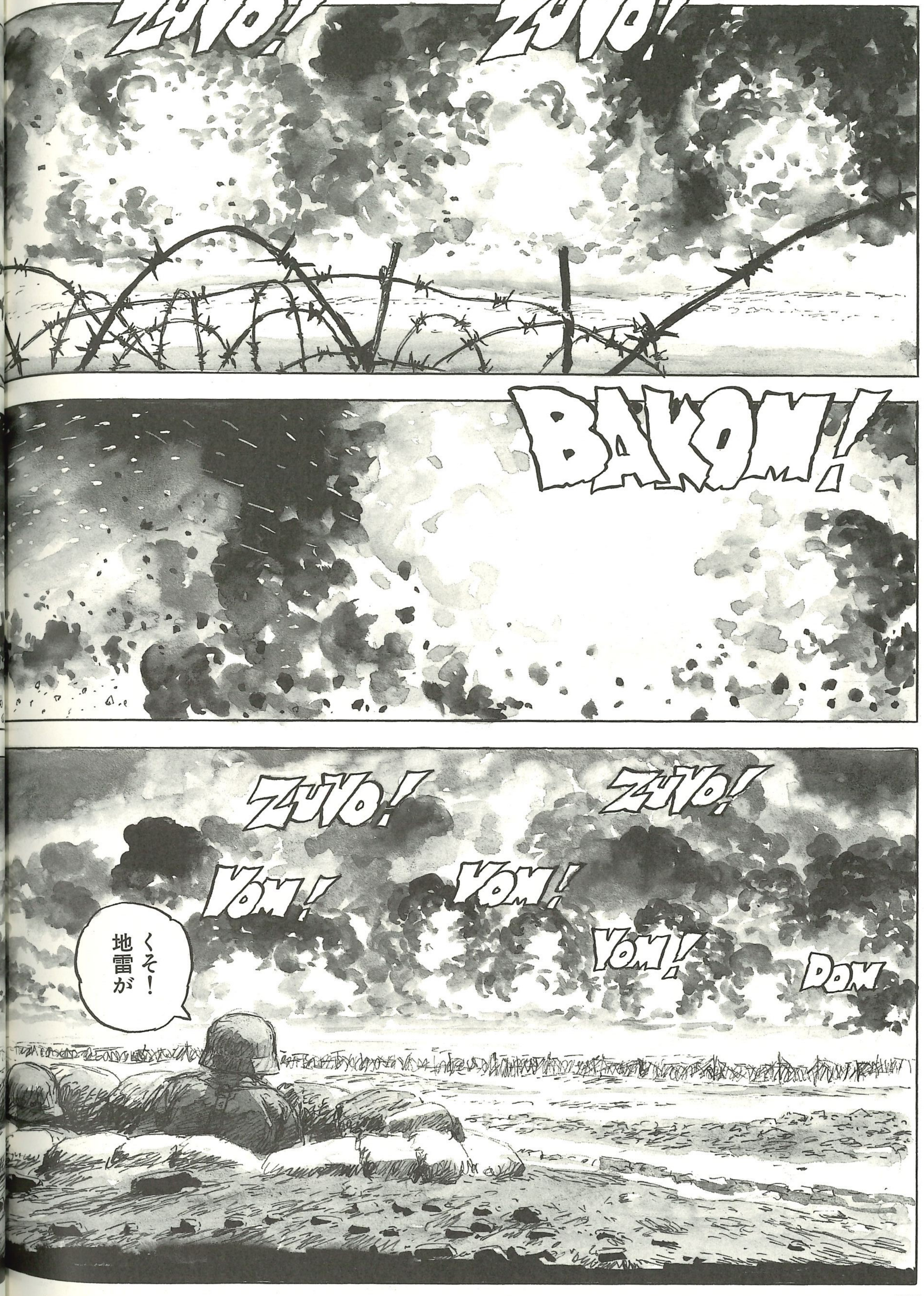
スツーカ護衛のため
この日二度目の出撃
午前11時20分離陸
P-40 8機だ
ゲルベ14 攻撃する
記録が 間に合わない



攻撃はいつもと同じ
スロットルを絞ったかと思うと
全力で回し また絞って
敵の旋回半径の内側へ
BABANG!
BABANG!
BABABANG
BOM
11時55分からわずか10分間で
全機(8機)撃墜した
くそ! マルセイユめ 全機墜とし やがった!

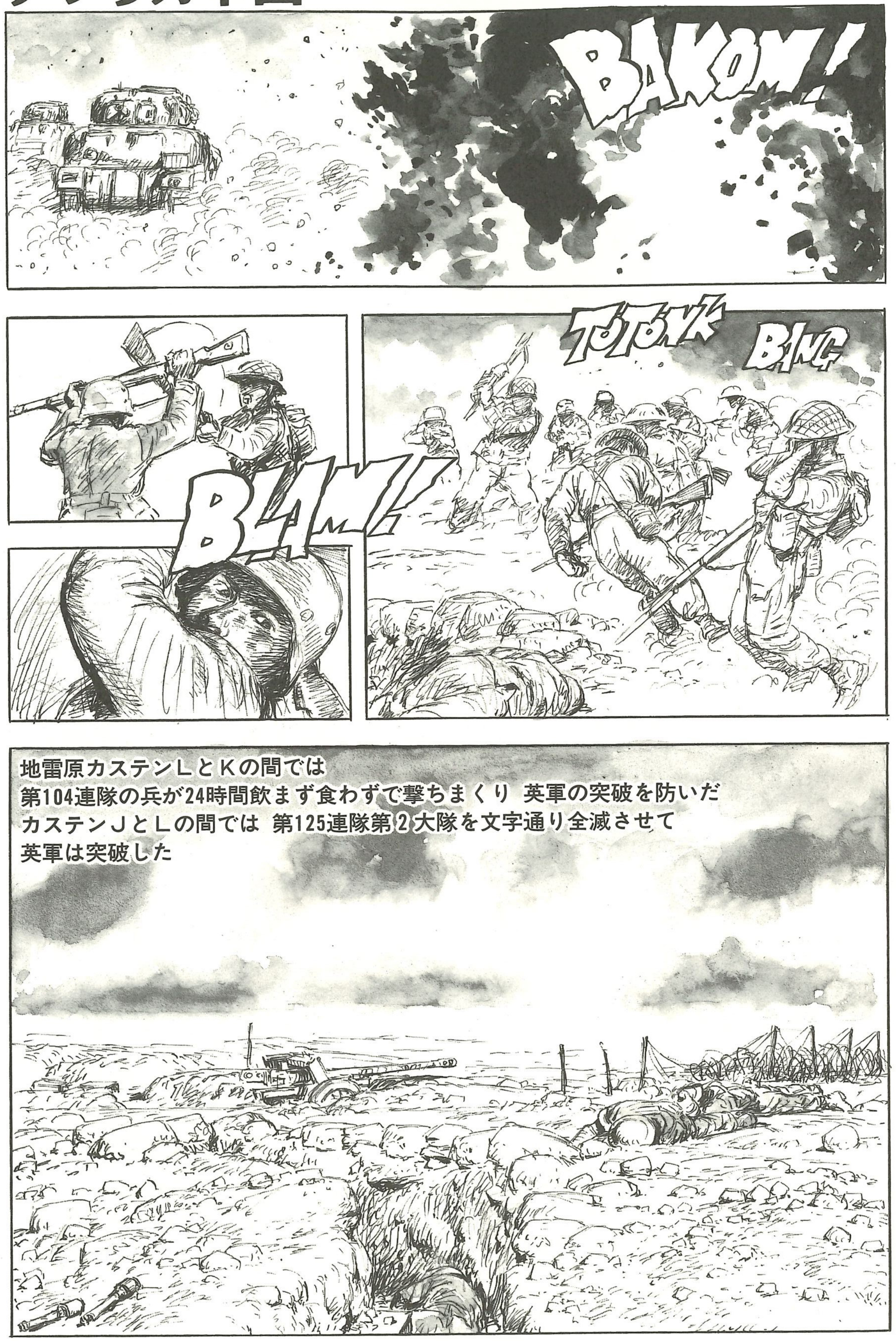

午後６時頃に三度目の出撃 イマード上空で６時47分から６分間の空戦で
ハリケーン５機を撃墜した
たった一日で17機撃墜
マルセイユにとって通算126機の撃墜だった
この快挙が本国に打電され
翌日には ドイツ軍人最高
の殊勲賞のダイヤモンド剣
付き柏葉騎士十字章の
授与が通達された
剣付き柏葉騎士十字章の時
には本国に呼ばれ総統から
直接授与されたが
緊迫した戦況のため殊勲賞
授与は先送りされた
９月30日 第27戦闘航空団第３部隊の
通信司令所が慌しかった
OTTO
どうした？
マルセイユが落ちた
英雄のあまりにも呆気（あっけ）ない死…
彼の白い墓標はシディ・アブド・
エル・ラーマンの南７キロにある
ハンス・ヨアヒム・マルセイユ
1919年12月 ベルリン生まれ
1940年８月 英本土航空戦に参加
1941年７月 第27戦闘航空団
第１連隊所属で北アフリカ戦線へ
1942年２月21日 50機撃墜により
騎士十字章受章
同年６月３日 75機撃墜により
柏葉騎士十字章受章
６月17日 101機撃墜により
剣付き柏葉騎士十字章受章
同年９月２日 126機撃墜により
ダイヤモンド剣付き
柏葉騎士十字章受章
９月30日 エンジン故障のため死亡
1939


1942年９月末
ロンメルはアフリカを後にした
元帥杖の授与と意味のない
セレモニーのためだ
アフリカは忘れ去られた
軍曹…静かだな
長くは続かんでしょう
BAM! BAM! BAM!
1942年10月23日午後８時５分
BAM! BAM! BAM! BAM!


ZUNO!
ZUNO!
BAKOM!
ZUNO!
ZUNO!
VOM!
VOM!
VOM!
DOM
くそ!地雷が


DOM!
ZUNO!
ZUNO!
ZUNO!
VOMM!
とうとう始まった
ロンメルに緊急連絡だ
DOM
南部からだと思ってたぞ
戦術原則を無視するのはロンメルだけではなかった モントゴメリーも原則を無視して最も防御の堅い「悪魔の園」の北部で英軍の攻勢を開始した
「悪魔の園」は5時間にわたる砲撃で掘り返され恐慌に陥ったイタリア軍が戦列から脱落した


翌24日朝——
カステンには警戒用の残置部隊がおかれていた
彼らは露骨な兵隊言葉でいえば"餌(エサ)"である
エンジン音…来たぞ!
BROOOOOM
ZIP ZIP ZIP
CHUEEENK
KTOWKTOWKTOWKTOW
KTOWKTOWKTOWKTOW
KTOWKTOWKTOW


BAKOM!
TOTONK
BANG
BLAM!
地雷原カステンLとKの間では
第104連隊の兵が24時間飲まず食わずで撃ちまくり 英軍の突破を防いだ
カステンJとLの間では 第125連隊第２大隊を文字通り全滅させて
英軍は突破した

1 本誌の記事の中で、おもしろかったもの、つまらなかったものをそれぞれ順に下記の記事一覧から番号でお答えください。

<おもしろかった記事>

1		2		3		4		5	

<つまらなかった記事>（なければお書きいただかなくても結構です）

1		2		3		4		5	

(1)岡ミサンザイ古墳城郭 (2)海防艦丙型 丁型 (3)下関要塞 (4)バズーカvs.パンツァーファウスト (5)ポワティエの戦い (6)真珠湾復旧作業 (7)第1次ソロモン海戦 (8)村上水軍興亡史 (9)ナポレオン帝国の崩壊 (10)鋼鉄の虎を狩れ! (11)パンジャンドラム (12)装甲巡洋艦『筑波』への道 (13)突撃銃開発史 (14)Battle of Underwater (15)WAR MOVIE (16)大和を体感せよ (17)南部根城 (18)戦場のミステリー (19)西村初夫インタビュー (20)二〇三高地の真実 (21)天正伊賀の乱 (22)死闘 ドイツ太平洋艦隊 (23)ソフィン戦争 (24)アフリカ軍団

2 最近ご覧になった歴史や戦争を題材にした映画・テレビドラマで、おもしろかった、または感銘を受けた作品はありましたか?

1.ある（作品名:　　　　　　　　　　　　　　　）　2.ない

3.その他(　　　　　　　　　　　　　　　　　　)

3 第二次大戦後の世界の戦史について、読んでみたいのはどの地域の戦争・紛争に関する記事ですか?

1.朝鮮半島　2.ベトナム・南アジア　3.中東諸国　4.東ヨーロッパ

5.アフリカ諸国　6.その他(　　　　　　　　　　　　)

4 本誌の内容についてのご意見・ご感想や「歴群フォーラム」への投稿など、ご自由にお書きください。記事に引用させていただく場合がございますので、ペンネームご希望の方は、その旨ご記入ください。

なお、ご要望、投稿は電子メールでも受け付けています。アドレスはrekishigunzo@gakken.co.jpです。どうぞご利用ください。

―――ご回答いただきありがとうございました。

切り取り線

郵便はがき

料金受取人払

千鳥局承認

1019

差出有効期間
平成19年1月
5日まで

(切手をはらずに
お出しください)

146-8755

東京都千鳥郵便局私書箱

学研「歴史群像」編集部
2005. 12月号 係

切り取り線

ご住所（〒　　　　　） 都道府県		電話番号
お名前	年齢 (1)18歳以下 (2)19〜22 (3)23〜29 (4)30〜39 (5)40〜49 (6)50〜59 (7)60〜69 (8)70歳以上	
性別 1.男 2.女	ご職業 1.小中学生 2.高校生 3.大学・専門学校生 4.会社員 5.公務員 6.自営業 7.無職 8.その他（　　　）	

1 歴史群像の定価についてどうお考えですか？
1.高い　2.適正な価格　3.安い

2 歴史群像の発売をどのようにして知りましたか？
1.前号予告　2.新聞広告　3.雑誌広告(雑誌名:　　　　　) 4.知人の紹介　5.その他

3 いつも歴史群像をお買い上げいただいていますか？
1.いつも買う　2.テーマによって買う　3.今回はじめて買った

4 テーマによってご購読されている方におうかがいします。今回ご購読のきっかけとなった記事はなんですか。裏面の番号でお答えください。

プレゼント希望番号	❶	❷	❸

プレゼント応募の締め切りは平成17年12月6日（当日消印有効）です。

●ご記入いただいた個人情報（住所や名前など）は商品・サービスのご案内、企画開発のため、などに使用致します。
本アンケートの内容に関するお問い合わせおよびご記入いただいた個人情報の削除・変更は（株）学習研究社 歴史群像編集部（電話03-5447-2314）までお願い致します。

英軍の大反攻作戦「スーパーチャージ」発動！ DAKに反撃策はあるのか!?



◆つづく◆